
over again

れもすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

over again

【Nコード】

N4615K

【作者名】

れもすけ

【あらすじ】

つらい生活のため周囲に心を閉ざしていた弥生は、両親を亡くしたことで自らも死を選ぶ。だが断崖から飛び降りたはずの弥生が目覚めたのは、見知らぬ世界で――。

1（前書き）

初めての投稿です。 至らない点は多々あると思いますが……よろしくお願ひします。

夜明けとともに出発した。

アルバイト先の先輩がくれたお古のiPodをポケットに、枕がわりにしていたボディバッグを背中にしよって。

線路沿いをひたすら歩く。

お父さんが商店街の夏祭りでもらったシャツを着て、五年間履き続けたスニーカーを履いて。

前だけを見て、ただひたすら歩く。

日が昇り、真上に来て、斜めに落ちていく。

午後三時を過ぎて最初に行き着いた駅から電車に乗った。目的地に着くのは、早過ぎても遅過ぎてもいけない。夏の日暮れ時を計算して、明るいうちに電車を下りるのだ。

夏休みを間近に控えた平日、乗り合わせた客は数人。大きな紙袋を足元に置いたおばさん、居眠りをするおじいさん、ガムを噛みながら携帯電話をいじるおにいさん……みんな、どこに行くのだろう。

電車を下りてホームに立つと、少しだけ緊張した。

できるだけ自然に、さりげなく振る舞わなくてはいけない。

怪しまれないよう、イヤホンを耳に入れ、ずっとiPodを操作する振りをして歩いた。音の出ないプレーヤー、電池はとくに切れていた。

目的の場所は駅前の地図で確認した。

バスやタクシーは使えない。

まだ時間はあるけれど、あまり日が暮れてから徒歩で向かえば不審に思われるかもしれない。

閑散とした駅前通りを行くときも、iPodに触れ続けた。
幸い、警察官やボランティアに声をかけられたりもしないまま、
最初の目的地である公園にたどり着く。

波の音が聞こえる。

風が強い。

ゆっくりと、何気ないふうを装ってあたりを見回し、公衆トイレ
に飛び込んだ。

思いのほかきれいに掃除され、明るいことに驚いた。誤算だ。で
もここはれっきとした観光地なのだから、あたりまえなのかもしれ
ない。

とにかくここで、夜がくるまで待機。

虫の音がにぎやかで、なのに自分の心臓の音と呼吸が騒がしい。
あたりに人の気配がないことを確認して、公衆トイレから出た。
公園の中から、そこへ行けるはずだ。

でも見つかつてはいけない。ボランティアが巡回しているとい
うから、ここが正念場だ。

波の音が大きくなるほうへ、ゆっくりと進む。

草を踏みしめる音が響かないよう、でも発見されないよう、急ぎ
ながらも細心の注意をはらった。

そこに立つと、身体が浮き上がりそうな高揚感を覚えた。

雲に覆われた空は真っ黒で、ずっとずっと続いているはずの海も
真っ黒で、吹きつける風に混じる潮のにおいだけが迫ってくる。

足元に——足元の、ずっとずっと下に打ちつける波。暗闇の中で
白く砕けて散っていく。

ポディバッグを下ろす。イヤホンをiPodに巻きつけ、バッグ
の外ポケットにはさんだ。

全財産がここに入っている。なんの誇張もない。
すべてがここにある。

紙幣が一枚もない財布。

たまたま持っていた地理の教科書。

ハンドタオル。

そして高校の学生証。『佐々木弥生』。入学式の日、お母さんが書いてくれた。

自分が確かにここへ来たとわかるように、できるだけ目立つ場所に置き、風で飛ばされないよう大きめの石を積み、固定する。

砂防林が絶えず風に鳴り続け、人がすぐ後ろに立っても気づかないかもしれない。

もう一度そこに立ち、ひとつ深呼吸をする。吐き出したのは、ため息だったかもしれない。

ジャンプするほうがいいのかな。

前向きに倒れるべきかも。

少しだけ悩んで――両脚で、地面を蹴った。

2（前書き）

プログラムの2～4をまとめました。
長くなっていますが、内容は同じです。

だれか、洋画を観てる。

ヤヨイは覚醒前のぼんやりした頭でそう思った。

両親の仕事がうまくいっていたころは、日曜日の午後九時といえ
ば親子三人でテレビの洋画を観た。二年前にテレビを売ってから
は、家の中は静かだ。

ゆっくりと瞼を開ける。

壁だ。木の。木目。横向きで寝ていたせいか、下敷きにした右肩
が痛い。枕を使っていないから、首もぎしぎしする。

仰向けになると、焦げ茶に塗った木で白い漆喰の地に格子を描く
天井が目に入った。随分とおしゃれな寝室だ。

——だれの？

硬直した。即座に起き上がるだけの勇氣はなかった。

ただ息を殺し、心臓が嫌な音を立てるのを聞きながら、目玉だけ
動かして部屋の様子を探る。

漆喰の壁は下半分が焦げ茶の木材、床も同じ。半開きになった窓
は小さめで、パッチワークのカーテンが揺れている。

ベッドのすぐ横に置かれたテーブルの上には、陶器の水差しとカ
ップ。黄色い花が活けられた白い一輪挿し。かじりかけの青リンゴ。
ドアの横には背の低いタンスが置かれ、見覚えのある服が置かれ
ている。置いてあるというより、広げて干してあるようだ。

おそるおそる、布団の中で手を動かした。あちこちが筋肉痛のよ
うな痛みをうったえるが、気にしている場合ではない。

案の定、一系まとわぬ全裸だった。

「――」
思考が停止する。窓の外からは緑の匂いを含んだぬるい風がゆったりと入り込んで頬をなで、小鳥の鳴き声が聞こえている。テレビの洋画だと思ったのは、人の話し声だ。

（ど、どうして……なに？　なんで？）

ヤヨイは必死で記憶をたぐった。

昨日は公園の茂みで目を覚まし、すぐあそこへ向かった。補導や自殺防止のボランティアに捕まらないよう、十分気をつけて、無事に――無事にといいのもおかしいが、とにかく計画を実行したはずだ。

暗闇の向こうに浮かび上がる海を、この目で確かに見た。真っ黒な海の上を、とぎれとぎれのミシンの縫い目のように波が寄せてくるのを、万感の思いで見つめた。かぎ慣れない潮の匂いや、松林のざわめきもはつきりと覚えている。

自殺の名所として有名なところだった。その崖から飛び降りると、滅多に遺体は上がらないと。

悲惨な死体を見つける人も気の毒だし、身寄りのない自分の葬式を出したり火葬にする行政にも迷惑だ、と思つて選んだ場所だった。

（――失敗、した……？）

全身を覆う痛みは、海面に叩きつけられた衝撃によるものか。しかしあの高さから落ちて、果たして打ち身程度ですむものだろうか。混乱する頭を抱え、ヤヨイはそつと身体を起こした。もそもそと手足を動かしてみるが、やはり骨折などの重傷を負っている様子はない。布団だと思つたものはパッチワークのベッドカバーで、今日の気温に素肌でまとうのは悪くない気分だった。

慎重にそれを身体に巻きつけ、ベッドを下りる。

細く開いたドアから部屋の外をうかがうと、狭い廊下が伸びていた。その先の部屋で、数人の男女がなにか話している。だが聞き取

れない。日本語ではないのだ。夢うつつで洋画だと思い込んだのは、だからか。

声をかけるべきだろうか。でもなんと言って？

「すみません、起きました」。……なにかちがう。

「おはようございます、ここはどこですか？」。……いや、そもそも言葉が通じないのだから、声をかけても意味がないのではないか。

なにを考えるべきかわからず真っ白になったとき、不意に窓の外から大きな声が聞こえた。

驚いて振り返ると、金髪の若い男性がニコニコしながらなにか話しかけてきた。窓の縁に上半身を乗り上げ、麦藁帽子のつばを押して笑っている。

英語でないことはわかった。

とりあえず敵意もなさそうだ。

だが全裸に布を巻いただけの若い女に、遠慮なくしゃべり続けている彼の意図がわからなかった。時折やけに大声を出すのが、不気味で仕方ない。

どん、と背中にドアがあたり、悲鳴が上がった。それが自分の口から出たと気づくのに、数秒かかった。

「あ、ごめん。そこにいると思わなくて」

「い、いえ、すみません」

頭を下げながら後じさり、固まった。——日本語だ。

あわててドアの陰から出ると、黒髪で安心感のある日本人顔の男性が立っていた。少し困ったような顔で、ヤヨイを見下ろしている。「大丈夫？　つていうのもヘンか。えっと、どこか痛い？」

「あ、身体中が筋肉痛みたいで。……あの……？」

落ちそうになるベッドカバーを胸元でおさえ、部屋の中を見回すと、彼は大きく息をついてうなずいた。

「とにかく服を着て、お茶でも飲もう。俺は田中幸弘、ここの家主」

「田中、さん……。あ、佐々木弥生です」

やっぱり失敗したのだ。ヤヨイは胃のあたりが重くなるのを感じた。きつと彼はあのあたりを巡回しているボランティアで、この後は警察に連れて行かれる。事情を聞かれ、家に帰れと諭されるだろう。

田中は窓の外の青年と、なにか言葉を交わしている。ヤヨイを見ながら微笑んだりうなずいたりしているのは、気を失っていた若い女が、無事に目を覚ましたことを喜んでいるふうだ。

他人事のように二人を見つめているうちに、なんだか自分が滑稽に思えてくる。

あんなに注意して決行した自殺に失敗し、見知らぬ人の家で素っ裸になっている。たまらなく惨めで、いますぐ電車に乗って家に帰りたくなった。

帰る家など、もうないというのに。

うつむいたヤヨイの肩に、遠慮がちな指先が触れた。

目に涙がにじみ、ふるえる唇をかんで見上げると、田中はひどく悲しげな顔で微笑んでいた。

「うん、わかってる。……君、あそこから飛び降りたんだろう？俺もだよ」

ああ、この人も生き残った口なのか。

ヤヨイは嗚咽がもれそうになるのを必死でこらえ、細く息を吐き出した。

着替えを用意する、と言って部屋を出た田中は、金髪の女性を伴って戻ってきた。

透き通った薄青い目をしたその女性は、とてもクラシカルな服を着ていた。ボタンのない白いパフスリーブのブラウスに臙脂色のスカート。白いエプロン。よく見るとスカートの裾はチロリアンテープのようなもので飾られている。

さっぱり意味のわからない言葉で、それでもにこやかに言ってく彼女が差し出したのも、同じデザインの色だった。スカートの色は明るい緑だ。下着がないということを身振り手振りで訴えると、タンスの上からヤヨイのスポーツブラとショーツを持ってきた。

生乾きで気持ち悪かったが、他人の前でいつまでも裸ではられない。当然のように着替えを見守る彼女に辟易としながら、仕方なくそれを身につけた。

洗ってくれたのだろうか。正直、下着を見ず知らずの人に洗われていい気はしない。

そう思ったところで、洗濯物が乾ききらないだけの時間、気を失っていたのだと気づいた。外の陽気を考えたら、それほど長い時間ではなかっただろう。

服にはボタンどころかホックやファスナーもついてはいなかった。ブラウスの襟もスカートも、紐でとめるようにできている。ヤヨイがスカートを履いていると、女性は歌うようになにか言いつつ、ブラウスの紐を結んでくれた。

ヒロ、と彼女が大声で呼ぶと、すぐに田中がドアを開けた。廊下で待っていたようだ。

ジャジャーン、とでも言いそうな仕草で彼女がヤヨイを披露すると、彼はにっこり笑って大きくうなずいた。

「うん、似合う」

それはお世辞だったのだろうか、男性にほめられたのは初めてだ。ヤヨイはなんとなく気恥ずかしくて、口の中でもごごとお礼を言った。

「なにから話せばいいのかな」

女性が仕度してくれたお茶のカップを手に、田中はためらうようにつぶやいた。

テーブルにあつた青リンゴは彼のもので、ヤヨイに付き添っているときに食べていたのだそうだ。いまは一輪挿しとともに、テーブルの端に寄せられている。

「ヤヨイ、って呼んでいいかな。ここの連中は、敬称なんて高尚なもの知らないから」

浮かべた苦笑いには、ここの連中、という人たちへの親しみが込められていた。自分のこともヒロと呼んでほしいという申し出に、ヤヨイはぎこちなくうなずいた。

沈黙を紛らわすために、お茶に口をつけた。黄緑色で草の匂いがある。

カップの縁からヒロの顔を盗み見た。少年上……二十代後半くらいだろうか。そう思つて尋ねると、彼は首を振つて笑った。

「今年、三十二になるよ」

驚いた。ヤヨイより十五歳も年上だ。

思わずそう口にする、ヒロははにかんだ笑みを見せた。

「健康的な生活してるからかな、あんまり老けないのかも。そうかあ、ヤヨイは十七歳かあ」

なぜか感心したように首を振り、それからそつと、小さく尋ねた。「事情、聞いてもいいかな」

きた――。

覚悟はしていた。ヤヨイは観念して目を閉じ、カップをテーブル

に戻して、ため息とともに語った。

「……もう何年も、あの、お金のことで……両親はたいへんな思いをしてたんです。お父さんが不動産関係の会社をやっていて、お母さんは事務を……」

という理由で借金を背負ったのかはわからない。

家にテレビや新聞がなくとも、世間が不況であることは知っていた。そのせいで仕事がつまづいかなかったのかもしれないし、大きなお金の動く業界だから、どこかで失敗したのかもしれない。

とにかくヤヨイが中学に上がると同時に家計は苦しくなり、住んでいた大きな一軒家も車も手放した。

高校には父方の祖母が行かせてくれた。随分と仕事の援助もしてくれたようだが、その祖母も亡くなり、遺産はすべて借金の返済にあてたらしい。

「わたしもバイトしたり……してたんですけど、全然助けにはならなくて」

そうだ、助けになんかちつともなれなかった。高校生が稼げる額などたかが知れていたし、せいぜい光熱費と、少しの食費にあてられる程度だ。テレビもストーブもないアパートの一室はいつも静まり返って、時折来訪者が鳴らすベルを、両親はひどく恐れていた。最後まで、恐れていた。

いつか大人になってたくさん稼いで、暖かい部屋で美味しいものを食べさせてあげよう。そう思っていたのに。

「……四日、前に……火事で、アパートが全焼したんです。全部燃えて、ほんとになんにも、なくなっちゃって……」

アルバイト先で知らせを聞いたヤヨイは、ドラッグストアのエプロンをつけたまま駆け出した。家が近づくにつれ大きくなる消防車のサイレン、野次馬の無責任なしゃぎ声。携帯で動画を撮る学生は、ご丁寧にナレーションまで入れていた。

両親は救急車の陰から、呆然と火を見つめていた。それからなに

を話したのか、ヤヨイはよく覚えていない。

気がついたら夜が明けていて、火の消えたアパートの駐車場の隅に座り込んでいて、両親の姿はなかった。

それから三十分もしないうちに、警察官がやって来て――。

「……始発に、飛び込んだんです」
顎がふるえた。

「ふ、二人で一緒に、手をつないでたって――」

失火だった。電気代を節約するために、両親は二人だけでいるとき蝋燭を使った。そのまま居眠りをしたと、消防の事情聴取で話したらしい。

「なにも言ってくれなかった、わたしどうすればいいかわからなくて！ お、お葬式ってどうやって出すのか、そんなお金あるのか、アパートは弁償するのか、今日はどこで眠ればいいのか、学校は行けるのか、借金はどうなるのかって――悲しいって思うより先に、お金の心配ばかりしてた……！」

だれかになにか言われる前に、逃げ出した。

隣町まで歩いて、公園で寝起きた。

死のうと思っただのは、一昨日の朝。公民館のパソコンであの崖へのルートを調べ、そして――。

「……将来のことでも不安だったけど、自分はもうダメだと思って両親が死んだのに、い、遺体は見せられないってお巡りさんに言われて、ほっとするような娘は生きる価値なんかないでしょう？ だから、だから……」

涙は少し、ほろっとだけこぼれた。みつともなく大泣きすると思ってたのに。

黙って聞いていたヒロは、なにも言わずに頭をなでてくれた。慰めも、同情もない。でも非難もしなかった。まだ死にたいか、とも聞かなかった。

ヒロは無言のまま頭をなで続けてくれて、ヤヨイも声を殺して、ほろほろと涙を流し続けた。

泣くだけ泣いたら、眠くなった。

ヒロに促されるままベッドに入ると、墜落するように眠った。そして気がついたら翌日の昼過ぎだという、このあきれるほどの暢気さはなんだろう。状況はなにもかわらないのに、肩の荷を下ろしたような気になっていた。

言葉の通じない人がひっきりなしに訪れては、にこやかに話しかけて去って行く。

中にはカタコトの日本語で「おはよう」や「元気ですか」と言ってくれる人や、「可愛いです」などとお愛想を言う人もいた。外国からの出稼ぎ労働者だろうか。

童話の挿絵のような服装や外の景色は現実感がなくて、自分が自殺に失敗した人間だということを忘れてしまいそうだ。電線のない空は広くて、観光地にありがちな異国風のテーマパークにでもいるのかもしれないと思った。

死のうとしていたのに。そのためにすべきことは、ちゃんとやり遂げたはずなのに。

ここ数日のことが、本当に起きたことなのかどうかよくわからない。現実感がなくて、家に帰れば両親が出迎えてくれる気さえする。ただそこに至る道のりがどうしても想像できなかった。

三日目の朝、用意された食事に手をつけながらぼんやりと茶色く透き通ったスープを見つめた。ニンジンとジャガイモ、ソーセージ

のスープはとても美味しい。薄い味噌汁と梅干おにぎりに慣れた口には、少々味が濃いくらいだ。

「ヤヨイ、食べ終わったら少し話そうか」

テーブルの向こうでパンをちぎりつつ、ヒロがうかがうような調子で尋ねた。ヤヨイはうなずき、首をかしげる。

「ジェナも一緒に？」

あの金髪の女性は、ジェナといってヒロの奥さんだそうだ。国際結婚、すごい、とわけもなく興奮したのは昨日の夜。

「いや、彼女はちょっと外に出てるから。大丈夫、怖いことはないよ」

気遣う笑顔。ヒロは最初から一度も、ヤヨイになにか強要したりプレッシャーを与えるようなことはしなかった。すぐさま警察か保護施設にでも引き渡されると思っていたのに、そんな素振りもないとても意外で、少しうれしかった。

食事のすんだ食器を下げに立った後、ヒロは二冊のノートを持って食卓に戻ってきた。

厚みのあるものと、薄いもの。並べられた表紙には、アルファベットの似た文字でいくつかの単語が書かれていた。ロシア語とか、ギリシャ語だろうか。ヤヨイは無意識に、そこから意味のある言葉を読み取るうとしていた。

「なんて説明しようか、いっぱい考えたんだけどね……」

表紙の単語を指でなぞり、ヒロは小さくつぶやいた。

「ありのまま話すしかないのかな、と思うんだ。それで、君だけじゃないってことを、少しでもわかってもらえたら」

泣き出しそうな目をするヒロに、ヤヨイは戸惑うばかりだ。大人の男性がそんな顔をするのを見たのは初めてだし、彼はいつも快活で、楽しそうにしていたから。

死ぬことに失敗して、それを乗り越えて、新しい人生を屈託なく

歩んでいる。そう見えたのは、表面だけのことだったのだろうか。

「これから話すことを、よく聞いてほしい。そしてできれば、それを受け入れ、ここでの暮らしを楽しんでほしいと思う」

なんと返事をしてよいかわからず、息を飲んだ。

ヒロはヤヨイの内心を見透かすようにうなずき、ゆっくりと語り出した。

俺がここへ来たのは十二年前。大学生で、自殺の理由は失恋、笑っちゃうだろ？ いまはなんであんなに思い詰めたのか、我ながら不思議だよ。

自分が割りと簡単にここになじんだせいかな。リセットしたんだから、もう戻る資格なんかないって思ったせいかな……俺は、ここで生きる意味を、こうして後から来た人間をいたわって……希望、つていうのかな。そういうものを与えてあげること、見出そうって決めたわけよ。

元の生活とここでは大きなギャップがあつて、なじむのはたいへんだと思う。言葉も通じないし、生活習慣や食事もちがうし。

なにより——自分を、信じきれなくなってしまうんだ。

夢を見てるんじゃないか、頭がおかしくなったんじゃないか、やっぱり自分は死んだんじゃないか……そういう、晴らしきれない疑いみたいなものを、ずっと抱えていかなくちゃならない。

どこで折り合いをつけるかは、自分で決めるしかないんだよ。

この家は、保護された人を研究する機関が用意したものだ。右も左もわからない人の、受け皿っていうのかね。そういうところ。俺が管理人になったのは六年前で、それ以前は日本語が話せる人はい

なかったんだ。

いまは研究者の中に日本語が達者な奴もいるけど、遠慮してもらってる。やっぱあからさまなガイジンにいきなり来られたら、緊張するかなって思っで。へんな先入観とか与えられたくないし。

もちろん、別の場所で暮らしてる日本人はいるよ。少ないけど……。

こっちの暮らしに適応するために、まず俺が窓口になっでさ。言葉やいろんなこと、教えてあげられたらっで思っで。辺鄙なところだ、なんにもない田舎暮らしなんだけど。ジエナはそれを理解してくれて、結婚したんだ。

ヤヨイもたくさんの人と触れ合っで、いい人を見つけるといいよ。だれかの存在は、生きていくためには不可欠なんだっで思っでから。これ、俺の経験談ね。

そのために、まず言葉を勉強しなくちゃならない。めんどくさいかもしれないけど、頑張っでほしい。すべての土台だからさ。

言葉。英語じゃないの、わかった？

フランス語でもドイツ語でもない。

オージェルム公用語、っでいうんだ。聞いたことないだろ。大丈夫、それ普通。テストには出ないよ。……うん、わかる。質問は後でまとめて答えるよ。

この国の一般的な言葉で、これだけ覚えてれば国中どこに行っでも通じる。地方によっで訛りがあったり、下町の言い回しなんかもあるけど……耳が慣れればわかるから。

このノートは辞書。厚いほうは、ずっと昔にやって来た人たちがら伝わっでるもの。薄いほうは、俺たちみたいな現代っ子が新しく作っでたもの。『ちょー』とか『。』とか、オトナが嫌がりそっうな言葉が満載だ。やっぱ微妙なニュアンスっで大事じゃん？ あ、『ビミョー』も書いたな、俺。

ルーズリーフみたい、に、どんどんページを増やせるようにしたん

だ。初めのうちは、付箋が欲しいって悶絶した。紙は粗悪だけど、ペンはいいよ。だれかが万年筆の仕組みを伝えたらしく、ちよっと出せば買える。

ヤヨイにあげるから、役立ててほしい。

よかつたら今日の午後にも、研究所の連中に会ってくれないかな。いや、何人かは窓から覗いたりお見舞いにも来たけど、ちゃんとな。俺たちのことを崇拜しちゃって、ちよっとノリはおかしいけど、無害だから。

話を聞かせてやって、新しいことを教えてやると喜ぶよ。なんでもいいんだ、コギヤル用語とか、流行のファッションとか。——え、コギヤルってもういないの？ ヤマンバは？ え、絶滅？ うわー……いまマジで時の流れを感じた……。ね、おやまゆうえんちってまだある？ あ、知らない……。そっか……。

……ああそうね。落ち込んでる場合じゃないよね。

えっと……これ先に言くと憂鬱かなって思ったんだけど、やっぱり言っておかないとな。

研究所に行った後、その……王様にも会ってほしいんだけど、大丈夫？ いやいや、かまえることないから。俺たちが特殊な状況だってちゃんとわかってるし、なんかやらかしても無礼者ーツとかって怒ったりもしない。逆に喜ばれるかもよ。うん、王様。頭おかしいんじゃないくて。

ここではさ、俺たち、ほんと好意的に見られてるから。中には……まあ、嫌なやつもいるけど。それは常識の範囲内だよ。絶滅危惧種を見るような、っていうか、そういう感じ。

手放して大事にされてる、とは言いがたいけど、都合よく解釈してさ、自分で快適な環境にしていくな。

ここには、君を縛るものはない。
すべて、君の自由にしていいんだ。

ここはオージェルム王国。

——俺たちが住んでいた場所とは、ちがう世界なんだ。

走った。

とにかくなにかを探して走った。

国道の標識や町の名前を記した青看板。コンビニの明かり、信号機、いやアスファルトの道路でもいい。せめて一本の電線だけでも見つけたかった。

ヒロの家を飛び出して、なにかに急ぎ立てられるようにして走った。けれど探し物はなに一つ見つからず、追いかけてきたヒロが馬に乗っているのを見て、ヤヨイの中でなにかが終わった。

北海道だ。理由などないけれど、ここは北海道だと信じようとしていた。緑の丘と小さな森だけが目の前に広がる風景に、ハリウッドの歴史ものやファンタジー映画の撮影に使われる場所だとも。

でも不自然だ。ヤヨイが目指した崖は確かに住宅地や歓楽街からは離れていたけれど、そこで発見された自分が北海道にいるはずがない。

右手で馬の口から伸びる革紐を持ち、左手でヤヨイの手を握るヒロは、ゆっくりと歩きながらも沈黙を守った。小さな石を踏んだとき、自分が裸足だったことに気づいた。痛いと思うよりも、動物の糞でも踏んだらショックが大きすぎる、と青ざめる自分がおかしかった。

ヒロの家は、離れて見ると人形の家のようにだった。焦げ茶色の屋根、白い壁、色とりどりの花。その前に数人の男性が立っていて、みんな無言のままヤヨイを出迎えた。不安そうに、でも親しみを込めた笑顔を浮かべて。

一人がおかしな発音で「おかえり」と言ったとき、ヤヨイの膝から力が抜けた。

草の上に突っ伏して、大声を上げて泣いた。

1

グレイヴはちょっと悩んで、近衛の制服を脱いだ。

腿まで丈のある上着は紺の地に銀系の縫い取り、銀のボタン。それを狙つての意匠であるとはいえ、少し気恥ずかしいくらい派手だ。それから腰に佩いた飾り気のない剣も、革製の剣帯ごとはずした。大振りの刃物など目にしたことがないだろう、と聞いたから。怖がらせたくなかった。彼の周囲はいい顔をしないだろうが、あの娘から忌避の眼を向けられることを想像するだけで心が冷える。

万が一にもこんな物騒なものを突きつけるはずなどないのに、無条件の信頼を得るに足る関係でないことが悔しかった。だが仕方ない、当然だ、彼女はまだ自分を知らない。存在を認知されてすらないのだから。

「……………」

自分で考えて、軽く泣きそうになった。

気を取り直して気持ちが明るくなることを、そう、彼女と晴れて対面を果たした瞬間のことを考える。

場所はヒロの家か。あの小ぢんまりとして、花とレースで飾られた家。彼女はドアから現れた自分を見て、きょとんとした顔をするにちがいない。もしかしたら見知らぬ人間の出現に、全身を警戒で

緊張させて涙ぐむかも。

いや――。

数日前に届いた手紙の文面を思い返し、憂鬱になる。彼女はいまだに国王への謁見を拒んでいるという。元いた場所ではごく普通の庶民生活をしていたというから、王なぞと得体の知れない人物に目通りすることを恐れているのだろう。だとしたら、自分にもそう簡単に心を開いてくれないことは予測できる。

まして今日、例の件とともに王からの催促も伝えなくてはならない。娘がいたなら同じくらいか、いや孫であつてもおかしくない、と浮かれる親父殿は、そろそろ待ちくたびれてじりじりしている。とばっちりを食う彼はその苛立ちを身をもって知っていた。

ちつとも気など晴れない。そもそも、彼女に関してはすべてが憶測だ。なにひとつ確実なことなどない。そうだ、なにひとつとして知らず、ため息をついていた。

不意に、開け放した窓から細く風が入り込む。上着を脱いでシャツ一枚になった彼には、少し肌寒い。下層は人でごった返し、地面からの照り返しもあるためむしろ暑いくらいだというのに、上層を渡る風は実際の季節よりも先をいつているかのようだ。

「グレイヴ？ 入るよ」

こんな真昼間にここで――自分の私室で聞くには珍しい人の声。彼は片眉を上げ、開いたドアの隙間から顔を覗かせた人を見やった。淡い金髪は結わずに腰まで流れ、深い湖のような青緑色の瞳が笑っている。

「……なんの用だ、ジェイル」

手にしていた剣帯から剣を抜き取り、半分ほど刀身をすべらせる。左手で仕える人のかばいながらの室内における戦闘を想定した近衛の剣は、幅広だがやや刀身が短く鰐は小さい。右手の人差し指を

刃の根元に引っかけるため、幅広の指輪をはめなくてはならない。細かな傷が表面を曇らせているが、刃は鋭く研いである。

鞘の内側に張った羊の毛皮の状態を確認し、放り込むようにして剣を納めた。

「つれないね。他のだれでもなく君のために動いてあげたのに。ついに業を煮やして姫君を略奪に行くって聞いたからさ、激励に来たんだよ」

あからさまな揶揄を浮かべた瞳。二番目の兄ジェイルが、白いシヤツとズボンの上にまとった、黒い膝丈のベストの裾を払うようにして音もなく歩み寄ってきた。

「可愛い子なんだって？」

ジェイルが首を傾けると、美しい金の髪がさらりと流れる。彼の濃褐色の髪と異なり、正しく愛される王家の色。美の条件。

自分の顔の美醜を気にするほど軟弱ではないが、生まれ持った髪だけは気に入らなかった。二人の兄と父、彼らと同じ金髪ならばよかったのにと、幼い頃はよく泣いたものだ。

「可愛いかなど知らん」

嘘だ。

青い静謐の中、どこか遠くを見つめる横顔を思い出し、かっと頬が熱くなった。

「わ、若い娘だということは確かだな」

それを誤魔化すためにわざと愛想なく言い捨てたが、成功したとはいえないだろう。証拠にジェイルはおもしろそうににやにやと笑い、腰を折って下から顔を覗き込んでくる。

「ふうん？ 一目惚れだったんでしょ？ あの話、ヒロが承諾しないで君、ぶち切れたって聞いたよ。仕方ないじゃない、常識で考えればあたりまえだもん。安心しなつて、僕がちゃんと責任持つて面倒みてあげるからさ」

「なにしに来た！」

ばん、と鞘ごと剣を机に叩きつけると、ジェイルはひよいと肩をすくめた。

「ジェナが待つてるよ、中庭で。すぐ出るって言ってるのに、君がなかなか来ないって怒ってた。時間つぶしに職場見学を勧めておいたけど」

すっかり忘れていた。

落下事象研究所の前の所長の娘は、奔放で豪快な気性だ。確か自分より三つ四つ年上のはずだが、いつでもくるくると動いてせわしない。今日も夜明けに家を出て城へ来ていたらしい。ここにいる父親に会いに来たようだが、自分で馬車を操ってきたというのだから大層な男勝りである。

だがそれも、あんな辺鄙な場所に暮らす男に惚れた彼女には、どうしても必要なことだったのだろう。

「……いまから行くところだ。おまえも仕事に戻ったらどうだ」

「おおお、怖い顔。心配しなくても、ちゃんと彼女の席は空けておくよ。でもこれだけ教えて。君さ、本気で彼女を娶りたいってヒロに言ったの？　いますぐに？　ありえないでしょ？　ねえ？」

「出て行けっ！！」

腹の底から怒鳴りつつ、自分から部屋を出た。扉の横にかけてあった外套を引っ手繰り、乱暴に頭からかぶって。

背後から、兄の楽しげな笑い声が聞こえてくる。

グレイヴは盛大に舌打ちをした。

御者台のジェナは黄色っぽい髪を風になびかせ、器用に手綱を繰っている。大分前に街道をはずれ、道の状態はお世辞にも良好とはいえないのに大したものだ。グレイヴは愛馬の鞍の上から、横目で彼女の手元を見つめた。

「でもよかった、考え直して下さって。ヒロがハゲちゃうところでした」

向かい風に対抗して声を張り上げ、微笑むジェナは美しかった。精神と肉体の健全、愛する人に愛される幸福な瞳の輝き。自分も彼女の目にはそう映りたい、と黒い瞳を思い浮かべて胸を熱くした。

「ジェイル殿下のところなら安心だわあ。乱暴な人もいないし、『外』に理解もあるし、私の父も近くにいますし！」

兄の名前に上向きだった機嫌が急降下する。

ついいままでの沈黙と別種の気配を感じ取ったか、ジェナはあわてて首を振った。

「あ、いえ、グレイヴ殿下にお預けするのが不安ってわけじゃないですよ！ただ、本人の意思もあることだし、いますぐはちょっと……」

「わかってる」

むっと顔をしかめたままうなずいた。

次兄のジェイルは文官の長だ。だが直接政務に関わらず、父と長兄のための下準備に己の職分を終始させる。不用意に玉座に近づきすぎるのは危険だからだ。いずれ長兄が王位を継げば、臣籍に下っ

て正式に王族でなくなる。長兄の近衛騎士であるグレイヴも。

顔を上げ、進行方向を見つめた。緩やかな起伏が続く丘陵地帯を抜けると、豊かな緑が広がる平原に出る。そろそろ行程の半分は来ただろう。

もう少しで、彼女に会える。扉の隙間から覗き見るのでなく、きちんと彼女にも自分を見てもらえる。愛馬に一蹴り入れて全力で駆けさせたくなる衝動を、ジエナの操る馬車のためだと言い聞かせてなだめた。

六年ぶりに『外』から仲間がやってきた、とヒロが知らせてきたのは、四ヶ月ほど前のことだった。叔父からの私信を装って送られてくる彼の手紙は、いつも彼の心を浮き立たせる。

グレイヴはオージェルムの王族の多くがそうであったように、『外』に対して好意的だ。しかし特に父王の『外』趣味といったら、歴代の王の中でも群を抜く。

逸話を上げればキリがないが、自分たち三人兄弟の名を聞いたときのヒロの表情から察するに……やはり相当なものなのだろう。

しかしグレイヴには、『外』に対する好意や興味を公にできない事情がある。

二人の兄は父王の手元で育てられたが、グレイヴだけは王弟である叔父によって騎士団の中で教育を受けて育った。父王から見事な金色の髪を受け継がず、家族の中で浮いた存在であり孤立していた彼を、叔父が救い出してくれたのだ。金髪でない直系もいるのさ、そう言って笑う叔父に慰めの色はなかったが、年相応の無邪気さは既にグレイヴの中から失われていた。

他者からの愛情に対して隙だらけの王子はまた、危険な存在でも

ある。長く戦乱に翻弄されたオージェルム王家は、王位の篡奪に対する警戒心が強い。叔父の一手はグレイヴのみならず、父王と兄、そして玉座に向ける牙を隠し持った家臣をも護った。

騎士団に属する者の多くは『外』を受け入れ、優遇することに否定的で過敏な反応を見せる。それは彼らがこの地へ『落ちて』くるそもそのきっかけが、自らの生命を己の手で絶つという行為によるためだ。

忠誠と正義、そして己の矜持のために死ぬことは厭わない騎士たちだが、それゆえに自己を慰撫し不幸に陶醉した拳句の自死に激しい嫌悪を抱く。

王家が『外』を受容すればその意向には従う。が、それと本心、そして忠義は別の場所にあるものだ。そんな彼らに囲まれて、朗らかな心を取り戻しつつあったグレイヴには、『外』に触れたいという欲求を口にすることができなかった。

それでもたまに父の膝に載せられて聞く『外』の人々の話はたまに魅力だったし、実際ヒロと知り合って直接語る機会を得ると、『外』への想いは日々膨らむばかりで。

六年前、ヒロは『落下地点』で暮らすと言い出して周囲を驚かせた。快活で陽気でよく気のつく彼は、だから愛される男だ。当然彼を知るランドボルグ城のだれもが惜しんだが、ヒロの意思はかわらなかった。

直前、彼にとって痛ましい事件が起きたことが原因だろう。当時の落胆と憔悴を知る者は、寂しくなるとは口にしても、彼の決意を翻そうとはしなかった。だが、グレイヴは彼に会えなくなることが、『外』の話を聞けなくなることが我慢できなかった。だから定期的に手紙を遣り取りし、たびたび顔を見に『落下地点』に彼を訪ねた。

ヤヨイを初めて見たのは、『落下』から数日後のことだったと思う。喜びを隠し切れない文面に、ヒロの故郷への思いを垣間見た。今度こそ失敗しない、必ずその娘に生きる意欲を取り戻させてみせると、滲む筆跡で記されたのは自身への決意に他ならなかっただろう。

静かに、そつとね、とヒロから釘を刺されつつ盗み見た少女は、すぐさま駆け寄って抱きしめたくなるほど小さく、揺れる瞳は世界で一番哀れな生き物に見えた。どこかに心を飛ばし、孤独と寂寥に支配される空間でぽつんと取り残されていた。

肩の下で切りそろえられた黒髪、服の裾から覗く白い脚、細い腕。オージェルム美人の基準からははずれるが、『外』趣味の人間の目にはひどく魅力的に映った。

——あの娘が欲しい。

どんな気性か、気が合うかどうかも知れないのに、胸に湧き上がった欲求に狼狽した。だが高鳴る鼓動と震えるほどの激情に突き動かされ、戸惑うヒロに詰め寄った。

そして彼は、少女が現実を受け入れ、この国で生きると決めたならば、少しだけ手を貸すと約束してくれた。

本当はすぐにでも妻に迎え、臣籍に下ってどこか辺境の領地にでも彼女を攫ってしまうつもりだった。だが自分はまだ若く、長兄には庶出の女兒しかない。太子が正式に妃を娶り、男児をもつけるまでは、ランドボルクから遠く離れるわけにいかないのだ。

第一、謁見も済んでいない『外』の娘、ヒロより先に父王が許すはずもない。わかつているから次兄の協力を仰いだし、同じ城にいてくれるならそれだけでいいと思う。

けれど、もしかしたら、という淡い願いを捨てきれずに今日まできてしまった。

愚かなことだ。もつと早く現実を受け入れていれば、ヤヨイはいまごろ城での暮らしになじんでいたかもしれないのに。

自分を知り、言葉を交わすことに慣れ、微笑みかけてくれていたかもしれないのに――。

「あのコ、きつと喜びます。働きに出たがっていたから」
うきうきとした声に、はつと我に返った。

いつの間にか丘を超え、あたりは背の低い草に覆われた平地だ。
見渡した世界の端に、細い小川が流れている。『落下地点』の中心にある湖から流れ出る川。

グレイヴは無言で一つうなずき、胸の真ん中で疼く痛みに切ない息をついた。

「針を打てる鍛冶屋がさあ、いやいることはいるんだけど、上手な奴は城まで行かないといけないんだよね」

着ているシャツの裾を引っ張ったまま、ヒロは途方に暮れた顔でうなった。

——針を打てる？

ヤヨイの頭に浮かんだのは、もちろん半袖の白衣のようなものを着た鍼灸師だ。鍛冶屋とか城といった単語とそれは、いかにもそぐわない。

「糸の在庫はあるんだけどなあ……ジエナに怒られる前に、仕入れに行くかあ」

シャツの身頃を真つ二つにする見事な鉤裂きを見下ろして、ヒロは大きなため息をついた。馬小屋で古釘に引っかけたのだそうだ。

ひどく落ち込んだその横顔を見ながら、ヤヨイは目玉焼きを口に運ぶ。ハーブソルトをかけただけのそれは、「目玉焼きは醤油」派のヤヨイをもうならせる逸品だ。シブいおやつだね、とヒロをひきつらせたがかまわない。

「針って鍛冶屋さんが作るんだ？」

なにかコメントする必要を感じて、なんとなくそう言った。針も糸も百円ショップで買うものであって、機械がない時代にだれがどう作るかなんて考えたこともなかった。

「もちろんだよ、針も釘も鍋も、みんな鍛冶屋に頼んで作るんだ。折れたら継いでもらう。でも小さな針穴を開けたり窓の掛け金とかを作るのが苦手でさ、ここの鍛冶屋」

ここ、というのは『落下地点』を中心とした小さな集落のことだ。ヤヨイやヒロのようにしてやってきた人は、必ずこの先の小さな森にある湖に『落ちて』くる。実際現場を見た人はいないそうだが

ら、最後に崖から飛び降りたということで便宜上そう呼んでいるだけだが。

湖の畔に研究所がある。といってもこの家より少し大きな建物が数軒建っていて、そこで十人余りの人間が本の山に囲まれているだけだ。

このあたりの土地は国王の持ち物で、資金も王様の財布から出ているらしい。つまりヤヨイがいま着ている服も履いている靴も、王様からもらったものということになる。

「お城つて王様が住んでるんじゃないの？　王様の鍛冶屋さんが針を売ってくれるの？」

目玉焼きが姿を消したフライパンを手に席を立つ。洗い物一つするにしても、井戸から釣瓶で水を汲むところからなので、皿に移すなどの贅沢はしない。

「ああ……ランドボルグの話はまだだっけ」

若干気のない様子で、ヒロはヤヨイが座っていた椅子に腰を下ろした。ちよつと引くくらい愛妻家である彼は、同時に恐妻家でもある。ジェナに叱られることよりも、彼女の不興を買うことを恐れている風だ。

もつとも、多少の言い合いは日常茶飯事だし、その後熱烈なキスで仲直りをするから、ヤヨイにしてみれば勝手にしてくれ、というところだ。それよりも他人の目につかないところでやってほしい。

調理用ストーブの上にフライパンを載せて、ヤヨイはヒロが話し出すのを待った。空焼きして汚れを焦がし、水につけてはがすのだ。「王様が住んでるのはランドボルグ城っていつて、ここから馬車に乗って四時間くらいかなあ。けど俺らがイメージするような城じゃなくて、いわゆる城塞都市ってやつよね」

「いわゆるって言われても。シンデレラ城みたいなお城じゃないの

？」

「ヤヨイの発想は実に貧困だ。西洋風ならシンデレラ城、日本風なら名古屋城くらいしか思いつかない。しかも前者はテーマパークのシンボルだ。」

「いやさあ、石垣とか壁で囲まれてて大きな建物が建ってる、って普通は思っただろ。けどそれって結構後の時代の話なわけよ。俺も詳しくはないんだけど。ランドボルクは築城から三百年強でもうちよい昔の、街ごと城壁の中に抱え込んでる町そのものを指すんだな」

「……よくわかんない。ていうか全然わかんない」
「だからさあ」

はずみをつけて立ち上がったヒロが、棚の引き出しを開けてノートとペンを取り出した。それを横目に、ヤヨイはフライパンの柄に布巾を巻きつける。煙が立ち上り始めたそれを、台所の隅にある水の張った木桶に突っ込んだ。

「こういうこと」

手招きするヒロに近寄ってノートを覗き込むと、意外と上手な絵が描かれていた。

「真ん中に城があつてさあ、坂の上に。足元に町があるのよ。住んでる人もいるし店もある。畑とかは城壁の外だけど、馬は城の中。んで、城の下層は兵士とか役人とか、下手するとガキンちょが遊び場にしてて普通にウロウロしてたりするわけ」

大きな楕円の中央に、ブロックで組んだような建物。矢印で城と書かれている。その周囲に小さな四角がたくさんあって、それは民家と注釈があった。

「王様が住んでるのに危なくないの？　なんかほら、警備っていうのかな」

「王様とか補佐する人とか、エライ人は上層にいるよ。専属のボディガードもいっぱいいるし、そもそも王様っていつでもヤンチャで

さあ。自分で剣とかブンブン振り回してる。盗賊なんか出ると大喜びで退治に行くような人だよ」

「……何歳なの？」

ヤヨイがイメージする王様とは、随分ちがう雰囲気のような。少なくとも金ピカの椅子に座って赤いマントを着てはいなさそう。

ヒロは天井を見上げるようにして、少し考えた。

「一番上のロード王子が俺と同じ年だから……五十は過ぎてんじゃない？」

「ふうん」

「あれ、興味なし？ 王子にも？」

目を丸くするヒロに、ヤヨイは曖昧にうなずいた。

興味がないというより、想像力が不足していて崩されたイメージを固めなおせない感じだ。王子と聞いても、心踊るより先にヒロと同年というあたりでがっかりだ。

童話のようにスマートで凛々しい若者ばかりでない、という現実に幻滅。ヒロにはたいへん失礼だけれども。

よく考えれば、王様が元気で長生きなら王子様はいつまでも王子様だ。チャールズ皇太子だって、あれで王子様なわけだし。と、ヤヨイは図書室の新聞で見た顔を思い浮かべた。パッと見はおばあちゃんくらいの女性と再婚したとか、するのだとか報道されていた時期のものだ。

「そっかあ……興味なしかあ……」

タワシでこすったフライパンを壁にかけていると、ヒロは机に頬杖をついてなにやらうなづいていた。女の子はみんな王子様に憧れるものとも思っているのか。

「あつたほうがいいの？」

なにを期待していたのか、ひどく落ち込むヒロが少し気の毒にな

った。慰めるつもりで尋ねると、彼は机に頬をつけてヤヨイを斜めに見上げる。

「だってさ、玉の輿よ？ オージサマよ？ そりゃあさ、なんていうか、王族っていつても『パンがないならケーキを食べればいいじゃない』とか『文句があったらベルサイユまでいらっしゃーい』って感じじゃないけど……なんていうか、玉の輿よ？」

（繰り返したよこの人。しかもたとえがわかんない、当時の流行語？）

だがそれを口にとするとまたヒ口が地の底まで落ち込みそうだから、黙っておいた。

先日、「テレホに入ってたからパソコンをインターネットにつないだことはない」という発言の意味が理解できず、一騒動あったのだ。

パケホの間違いかと思って尋ねると、どうも彼の時代は二十三時以降、電話回線を定額で使えるサービスがあったらしい。そして当時、インターネットの接続は電話をかけるのと同じことだったというのだ。パソコンの本体に、電話機から引っこ抜いたモジュラージャックを挿したというから驚く。もちろん、その間は電話のほうの使用不可能。

ヤヨイの時代もあったかもしれないが、少なくとも高校のコンピュータ室も市役所のロビーにあったパソコンも、電話のモジュラーケーブルはつながっていなかった。水色や緑色のLANケーブルなら見かけたが……。

しかも携帯メールの話題に及ぶと、公衆電話の早打ちでメッセージがどうのという意味不明なことを口走る彼が、少々不気味だったほど。公衆電話はほとんど見かけないし、少なくとも知る限り高校生以上で携帯を持っていないのはヤヨイだけだった、と話すと、呆然としてしまって話にならなかった。

「公衆電話が消えてるなんて……どうやってポケベル鳴らすのよ……」

そつつぶやく彼の背中には哀愁が漂い、「未来だ……」とこぼして鼻をすすっていた。意思の疎通が図れなかったことだけは確かである。

「そつかあ、興味ないかあ」

いつの間にか逆の頬を机につけたヒロは、ヤヨイに後頭部を向けていた。まだ言ってる。食器棚に寄りかかり、ヤヨイは腕組みして息をついた。

「興味はあるよ。でもめんどくさそうで正直お近づきになりたくはない」

大体、典型的な日本人であるヤヨイにとって、よく知らない外国人は親愛の対象ではない。

黒でも茶でもない瞳はなんとなく感情がなさそうに見えるし、きつと太陽は黄色だと言い張るにちがいないと思う。もっとも、カラーコンタクトを入れている同級生にも同じ感想を抱いたものだが。

まして王族。別種の生き物とまでは言わないが、あらゆるシーンで感情の行き違いが起きる予感がした。

ジェナのように百日以上寝食をとみにしたって、やはりどこかで「合わない」と思う瞬間があるのだ。文化も歴史も異なる背景を持つ同士なのだから、偏見を別にしてもそれは当然のことだった。

研究所の学者たちとは、言葉が通じるようになってようやく少し仲良くなったが、知らない人はやはり構えてしまう。大抵は「外」の人間であるというだけで親しくしてくれるが、とりあえず友好的に、という日本人の基本姿勢が懐かしい。

「お近づきになりたくないって……一応俺たち、国王の庇護下にあるんだけど」

困ったようにうめくヒロに、口の端を曲げてみせる。

もしかして、と、ヤヨイは上体を起こしたヒロの横顔を注意深く見つめた。

のびのびになっていた王様との謁見、とやらが近いのだろうか。ヒロと二人でいるときも使う努力をしてきたためか、ヤヨイのオージャエルム公用語もだいぶまともになってきた。精神状態も安定しているし、そろそろと言いつつも出されてもおかしくはない。

王様に会う。すごい、なんてロマンチックでファンタスティックで——面倒くさいことだろう。

考えただけでヤヨイは憂鬱になる。よくわからないけど、政治家に会うようなもの？

全校集会や入学式のように、ありがたいお話をかしこまって聞かなければならないのだろうか。

偉い人の前に引き出されて、そのために小奇麗な格好をさせられて。お辞儀の角度から視線の場所、はては一步の幅まで注意されそうで鬱陶しいことこの上ない。

「……ちよつと出かけてくる」

あえて聞き取れるかどうかかわらないほど小さな声でつぶやいて、ヤヨイはそつと勝手口から外へ出た。秋風が滑り込む時季だが、開け放したドアからはまだほんのりとした暖かい空気が流れ込んでいた。

（うーん、いい天気）

軽く伸びをして、深呼吸をする。

乾いた緑と土のにおい、それから煮炊きをする煙のにおい。眼前には野の草に覆われた平原と、針葉樹が枝を伸ばす森。放たれた数頭の馬と牛。かすかな歌声と笑い声。

のどかだ。

朝から鍋と桶を磨いて凝った肩をもみほぐしながら、ヤヨイは森へと足を向ける。

言葉を学習する時間が減るにつれ、ヤヨイの自由になる時間は増えた。そうすると身に染みついた労働への強迫観念が、ヤヨイを苛むようになってくる。

働かなければ。働いて、お金を稼がなくては。

高校生になって堂々とアルバイトができるようになったとはいえ、大学生や主婦のパートとちがい、勤務時間には制限があった。だから早朝と夜は母が受け取ってくる内職に勤しんだ。

アニメや子どもブランドのキャラクターが印刷されたファイルに台紙をはさんだり、印章シールを貼ったり、カードやシールを枚数ごとに袋に差し込む作業。

一度に千セット、二千セットと片づけるうちに、キャラクターに詳しくなってしまった。テレビもないのに。

三時間ほどの作業で千円になればいい。それでも版權モノを扱う分、他の内職よりは割がよかった。場所や時間を考えなくてもいいし、頑張れば頑張っただけ儲かるところも素晴らしい。

（ああ……カードを数えたい）

両手の指先をわきわきと動かしながら、ヤヨイは空を仰いだ。

内職が切れたらカジノでディーラーでもやるか、と母と笑いあったことを思い出す。

ジャンボシールとかいう下敷きほどもある台紙が振り分けられたときは、父も手伝ってくれた。数を数え、カラフルな封筒に入れ、テープでとめて……どうでもいい話をして楽しかった。

両親はもういない。そしてヤヨイも、もういない人間と同じ。

森の中へと続く踏み固められた小道を歩くと、木漏れ日の中から小鳥の声が聞こえる。高く硬質なそれに混じってコンコンコンと響くのは、キツツキに似た鳥が立てる音だ。

わずかも行かぬうちに、数軒のログハウスのような佇まいの建物が見えてくる。そのすぐそばに大きな湖が横たわっていて、そこが『落下地点』の中心。ヤヨイもそこに浮いているのを発見されたそうだ。

こんな辺鄙な場所にヒロが住んでいるのは、朝晩二回、欠かさず湖面をチェックするため。湖畔の研究所にも同じ役割がある。

このところ毎日、ヤヨイはその湖を訪れていた。自分と元の場所を繋ぐ唯一の接点だったからだ。

人間が落ちてくることは稀だが、物に限ればよくあることだと聞いた。

空のペットボトル、帽子、鍵がついたままのキーホルダー、携帯電話、ゴミが詰まったビニール袋、あの崖の観光ガイド。

研究所で大切に保管されていたそれらを見て、ヤヨイは確信した。崖から落としたものがここへやってくる。けれど品物が製造された年代と回収された時期を鑑みて、それほどの頻度でもない。

（来ることができたなら、帰ることだって――）

だがそれが難しいことを、ヤヨイは薄々勘づいていた。

もしもそれが可能なら、ヒロがここにいるはずない。元税務課職員のアサヌマさんも、オージェルムの下着文化を飛躍的に発展させたというナガヤマさんも、この地で生きることを選びはしなかっただろう。

たとえここへたどり着いた全員が、かつて自ら死を選んだ人ばかりだったとしても。

「……………」

本当にそうかな、と唇をかむ。他人の気持ちなんてわからない。

生きることにつわる一切を捨てた場所。

いまここに、帰るための扉が用意されたとして――ヤヨイはそれを開けることができるのだろうか。そもそも帰りたいと思っているのだろうか。

頭が重い気がした。不意に自分の頭がひどく膨らんで、その中に泥が詰まってしまったような気がした。

ここにいてこと自体が奇跡なのだ。

いや、おかしいな体験をしたことが、ではない。ぴんぴんして『落下地点』に現れることがだ。

のろのろと脚を動かしながら目をやれば、湖の縁が見えてくる。うつすらと日が差し、青い水面が輝いている。

地方都市の市役所で税務課に勤務していたアサヌマさんは、三十年前にこの場所で発見された。左脚が太ももから失われ、失血のた

めかなり危ない状態だった。

七年前に現れた、小さな下着メーカーでデザイナーをしていたナガヤマさんは、右肘の下を失くしていた。利き手がないから自分でデザイン画を描けず、とてももどかしい思いをしたようだと言った。ヒロは両脛と左腕を骨折しており、完治したいまでも長くは歩けない。

頭部を失っていた人。右胸から腕がなかった人。湖にうつ伏せで浮かんでいた人。みんな、発見されたときには亡くなっていたという。

ここに至る過程でなにが起きているのか、落下の際に骨折を負ったり身体の一部からそれ以上を欠損している人は珍しくなかった。そうでなくても、溺死していた人も多い。ヤヨイのように打ち身だけでは無傷というのは過去にも数例しかない。

その事実をどう受け止めればいいのか、ヤヨイにはわからなかった。

ここがどういふところなのか、どういう現象に見舞われたのか、生きていていいのか、やはり死ぬべきなのか。

それは考えるのをやめた。

ヤヨイにはもうなにもない。苦しくても辛くても頑張れたのは――頑張らざるをえなかったのは、両親のためだ。元の場合に未練はなかった。ただ、自分の意思に関係なくここにいることが、少し不満というだけ。

ログハウスの壁を伝うように湖の縁を歩き、小さな船着場へと進む。ボートが一艘つながれて、かすかな波に揺れている。

木の板の端に座って底に沈んだ古木の死骸を透かし見ながら、やわらかな革の靴を脱いで湖に脚をつけた。

鳥の羽ばたき。獣の鳴き声。木々のざわめき。生命に満ちた森の

中で、そこはあまりに静かだった。

ほ、と短く息を吐いたとき、うかがうようにそつと後ろから声をかけられた。

「ヤヨイ……？ 大丈夫？」

オージェルム公用語だ。少し低めの女性の声。

肩越しに振り返ると、長い金髪をゆったりとうなじでまとめたジエナが立っていた。どんな顔をしていたのやら、ヤヨイを見て安心したように微笑む。

「これから帰るところだったのよ。ランドボルクからお客様をおつれたの、紹介したいから一緒にお茶にしない？」

今日覚えたばかりの場所の名だ。城塞都市？ で、町の名前で、お城の名前。

ジエナは研究所の前の所長の娘だ。スポンサーである王様が、お城で働いている学者に会いに行ったのかもしれない。

ヤヨイは水から脚を引き上げ、スカートの裾で雫をぬぐった。靴を履きながら、王様のお使いだったらちよつと困る、と唇をすばめた。

ヒロの様子といいジエナのお客様といい、嫌な予感がする。

「家には戻るけど、お茶はいらない。読みかけの本を片づけたいし」
本は口実だが、本音でもある。研究所で借りた子供向けの絵本、いつまでも返さないと、学者連中に笑われる。

「でも——そう、わかった」

少しためらった後、ジエナは大きくうなずいた。しかし安堵する間もあらばこそ、彼女はひどく優しげに笑って言った。

「じゃあ読みながらでもいいわ、お客様のお相手をお願い。私は先に戻ってヒロに色々報告しがてら、ゆっくりしてるわね」

言っが早い、ジエナは身を翻して歩き出し、その言葉を飲み込

むまでに時間がかかったヤヨイを置いてログハウスへ入って行ってしまった。

「……え？」

読みながらつて一体、と呆氣にとられるヤヨイの目線の先で、再び開いたログハウスのドアから出てきたのは、茶色い髪の青年だった。

チョコレートだ。

ヤヨイは一瞬、彼が本当にチョコレートを浴びてきたのかと思った。

溶かしたてのチョコレートみたいな色の髪が木漏れ日を受けてツヤツヤと輝き、甘いにおいまで香った気がした。

湖に張り出した橋の上をゆっくりと歩いて、彼はヤヨイの前に立った。靴を履いた時と同じ格好で座り込んでいたから、もしかしたらパンツが見えていたかもしれない。

ドーベルマンかなにか、とにかく大型の犬みたいな印象の男だった。チョコレートのブラウンの髪はまっすぐに腰まで流れ、首筋で一つに束ねられている。ざっくりとした前髪は時折湖からの風に巻き上げられ、思いつめたように寄る形よい眉を露にした。ヤヨイをひたと見据える強い意志のこもった瞳は紺色。肩から足首まですっぽりとかぶった濃紺の外套よりわずかに薄い色調。

（は……イケメン外国人）

ぽかんと彼を見上げ、ヤヨイはひそかに感心した。

でもこれで、きっと大して美形とは思われていないのだ、この国では。

テレビのない家で暮らしていたとはいえ、それはここ二年ほどの話。それまではむしろ、外国のドラマや映画を観るのはヤヨイにと

って唯一に等しい娯楽だった。

絵に描いたようなグラマラス美女は、俳優の胸毛や割れ顎をなでては「セクシー」だとうつとりし、ムキムキに鍛え上げた上腕筋をつついて「まるで神ね」と称えていた。

その感覚がヤヨイには理解できない。ドキドキするような甘いシーンでも、そういうセリフを口にされた途端、高鳴りかけた乙女心があっさりしぼんだ。

マツチヨは、まあ嫌いではないけれど。

ジェナの言動を間近に見てきたこの数ヶ月で、ここも男性に対する美的感覚がヤヨイとかけ離れていることを知っている。ヒ口は別腹だと彼女は言うが、愛でて楽しむのはやはりむさくるしいマツチヨである。

ということとは、日本人の十代女子にウケそうな顔立ちのこの青年は——こちらでの評価はいまひとつだろう。

価値観の相違というのは残酷だ、わたしは綺麗だと思うから氣を落とさないように。そんなことを考えている間中、彼の顔をジロジロと眺めていたことに、ヤヨイは気づかなかった。

「……ヤヨイ？」

うつすらと目元を染めた青年が、居心地悪そうに身じろぎする。

その声にはっとして、ヤヨイはあわてて立ち上がった。やっぱりパンツが見えていたのか。

スカートの裾を払って顔を上げると、彼がひどく背の高い人だと気づく。春の身体測定で、昨年度の十七歳女性の平均身長ジャストであったヤヨイが、ちよつとした角度まで首をそらさなければならぬ。

アパートのドアと同じくらいか……もう少し高い。手を伸ばしてよければ正確にわかるのに、ドアの拭き掃除はヤヨイの仕事だったから。

「えーっと、こんにちは。ヤヨイです。あなたはだれですか？」

取り繕うように口走ったオージェルム公用語は、なぜかカタコトだった。

必死で勉強したのは、まさにこういう瞬間のためだったはずなのに、と臍を噛む。見知らぬ人とも不自由なく会話ができるようになったら、町で仕事をさせてやるとヒロは約束してくれたのだ。

もしかしてそのテストのための客だったのだろうか。ヤヨイは自分のミスに舌打ちした。

しかしヤヨイの心中などあずかり知らぬ彼は、それが自分という存在に向けられたものと受け取ったらしい。

やや怯んだように眉を上げ、小さく咳払いをした。

「……俺の名はグレイヴだ。——は、はじめまして」

「はあ、どうも。はじめまして」

湖面を渡る風が水面を揺らし、梢をざわざわと鳴らす。

ヤヨイは乱された髪を耳元でおさえ、グレイヴという青年が次の言葉を吐き出すのを待った。

紺色の瞳はヤヨイを見つめている。二十歳ぐらいだろうか。でも外国人は老けて見えるから、もっと若いのもかもしれない。

「……あの？」

なかなか話し出さない彼に、ヤヨイは焦れた。用があるなら早くしてくれないか、と促そうとしたところで、ジェナがお客様の相手をしてくれと言い残していったことを思い出す。

ということはあるだ、ここで気の利いた話題を提供するのはヤヨイの役目ということか。そしてそれこそが、語学検定の最終試験なのかもしれない。

ヤヨイはあわてて話題を探した。せわしくあたりを見回し、とりあえず定番中の定番、お天気の話でも、と思ったとき、グレイヴが動いた。

濃紺の外套を翻し——まだ初秋だというのに暑苦しいことだ——木の板でブーツの踵を鳴らす。

「ここに用はない。ぐずぐずしないで、さっさとヒロの家に案内しろ」

ハジメマシテと言った時と大違いのぶっきらぼうでえらそうな口調に、ヤヨイは思わず彼の澄ました横顔をまじまじと見た。

この数ヶ月間、だからかも知れほど上からもものを言われたことがない。明らかな命令形だ。見ず知らずの他人にそういう態度を許すほど、ヤヨイはできた人間ではなかった。

「……ヒロの家なら、その道をまっすぐ行けばわかるよ。森を出て一軒目だから」

気分を害し、言い捨ててその場にしゃがんだ。

先ほどと同じように靴を脱ぎ、グレイヴに背を向けて水に足を入れる。絶えず吹きつける風に身体は冷え、つま先に感じる水の冷たさに身がすくんだが、後悔先に立たず。

奴がどこかへ行くまではこうしていよう、と水を蹴り上げた。

そもそもヒロの客なら、そのままジェナと一緒に連れて行けばよかったのだ。紹介もせずに押しつけるなんて、彼女らしからぬ無作法だ。

オトナとしてどうなのよ？　ってそれは愛想笑いの一つもできない自分もか、と唇をとがらせていると、背後で衣擦れの音がした。

グレイヴが立ち去るところだろう、と振り返ったヤヨイの視界が、真っ白に染まった。

花のような甘い香り。人肌のぬくもり。ゆるやかな締めつけ――。頬にあたるシャツに皺が寄る感触で、ヤヨイは我に返った。

閉じ込められている。広げた外套の、グレイヴの腕の中に。

「ちょ、ちよつと――やめてよ！」

ヤヨイは肘を曲げ渾身の力で白いシャツの胸を押した。ほんのわずかも揺らぐことはなかったが、彼はそつと腕をほどいてヤヨイの顔を覗き込んだ。

「……冷たくなってる」

低い声でつぶやくグレイヴの顔が近い。紺色に見えた瞳は紫がかっていて、虹彩が斑だと気づいた。

生まれてこの方、これほど間近でだれかの目を見たことはない。いやある、お医者さんとか。

「な、なななに――」

軽くパニックに陥りながら顔を前に向けると、あらためて後ろから抱きしめられてさらに動転した。じゃぼん、と音がしたのは、つま先だけ漬けていたはずの足が水に深くもぐったためだ。その冷たさにぎよつとする一方、背中と腕が心地よく温まる。

「風邪でもひかせたらヒ口に殺される」

耳に直接吹き込まれた囁きは甘ったるく、背筋を正体不明の痺れが走った。

「はな、はなしてよ！ 帰るから、もう帰るから！」

外国人恐るべし――ヤヨイの脳裏にクレイマー・クレイマーのワンシーンが甦る。友人同士である男女が、臆面もなく公園のベンチ

で抱擁し頬に額にキスをする。彼らのそれが親愛の表現であることは疑うべくもなかったが、初対面から五分とたたぬ自分と彼に適用してよいものなのか。

滅茶苦茶に暴れて腹に回された腕を振りほどきたいのに、ヤヨイの身体は脳からの指令を一切受け付けていなかった。尻に根が生え背中に棒切れを突っ込まれたように硬直し、指先一つ動かせない。

「かえ、る、帰るから……帰るから……」

舌が根元から蟬になっていくみたいだ。馬鹿の一つ覚えのごとく繰り返すと、ゆっくりと腕が離れていく。全身にどつと血が通い始めたのを感じ、ヤヨイは急いで脚を上げ、スカートの裾でくるんだ。羞恥と怒りで泣きそうになりながら振り返れば、まだそこにしゃがみこんだグレイヴがいた。

なぜか真っ赤になって、握った拳を口元にあてて。

まるで襲われたのは自分だとしても言いたげな様子に啞然とする。
なんだその乙女な反応は！

「——あなた、なに？ ヒロの友だち？」

だとしたらヒロにも文句を言わなければならない。ジェナも並べてお説教だ、セクハラ野郎を放置した罰だ。

いくらイケメンだからって、断りもなく若い娘さんに抱きついていわけがない。それともこれが世にいう「ハグ」か？ 力いっぱいだった気がするけどそうなのか？ いまがそのタイミングだったのか？

じつと睨むヤヨイの前で、グレイヴはいきなり立ち上がった。そしてふつと息をついて背筋を伸ばすと、まだ赤い顔をそらした。

「そうだ。おまえの今後を話し合うために来た」

「え、今後——わたしの？」

それはどうということだろう。ヤヨイはきれいなカーブを描くグレイヴの顎のあたりに視線を固定し、考えた。

いつまでもヒロの家にはいられない、ということはわかっている。彼はこの地で学者たちと『外』との関わりについて研究するかたわら、後からやってくる同胞のための活動をしている。そしてヤヨイは、それを手伝うことに吝かではないが同じ目標を掲げているわけではない。

今すぐでないにせよ、いずれは町に出て——それがランドボルグなのか他のどこかなのか、とにかく仕事をして一人で生活していくつもりだ。

そしてその希望をヒロは心得ている。ということは、ランドボルグから来たこの青年は、雇い主になる可能性があるのではないか。

ヤヨイはもう一つの可能性を失念し、目の前が開けるような明るい展望を胸に抱いた。

「そう——わかった、すぐ案内する。ヒロの家だね！」

お愛想いっぱいに笑いかけ、大急ぎで靴を履く。

子羊の革で作られたそれはやわらかくて履き心地がよく、湖への散歩の時にしか使わないお気に入りだ。家の周りや集落を歩くと、動物の落し物を踏むことがあるから、家畜が入り込まない小道限定。

足首の紐を結び終えると、見計らったように手を差し伸べられる。目の前にゆつと突き出たそれは大きく、掌は硬そうだった。指の付け根に胼胝があり、そこだけ変色している。人差し指に幅が広く素っ気ないデザインの指輪をしていた。

自分で立てるから、と断ろうとしてやめる。我の強い小娘だと思われるのはよろしくない、そう、今後のためにも。

本来ヤヨイは腰が低く雇い主に従順だ。

指示された以上の仕事を自分で見つけてこなし、使える従業員であると認識される努力を怠らない。居心地のいい職場でリストラ候

補に拳がらないための処世術だ。

「ありがとう」

小さく礼を言って手を載せると、きゅっと握ってから引つ張られた。その力強く確かな安定感に、こんな顔して意外にガテン系の職業かしらと首をかしげる。店番ならいいけど帳簿付けでもさせられたらどうしようと、少々不安になった。日常会話と読みはともかく、書くのはまだ覚束ないのだ。

無言のまま歩き出したグレイヴは、ヤヨイの手を握ったままはなそうとしなかった。さりげなく引っこ抜こうと試みるも、そのたびに手の力が強くなる。土の地面に着くころには、ヤヨイはあきらめていた。

（なに屋だか知らないけど……店主の息子、ってところかなあ。今後とかいつてただの従業員じゃなかったらどうしよう）

愛人とか。いやまさか。ではこの手はなんだ、さっきのアレだつて。でもヒロがそんなこと許すはずない。わからないけど。

グルグルと考えているうちに、仮初めの我が家が見えてきた。開け放った窓から、いつの間に戻ったのかジェナが身を乗り出して手を振っている。

「遅かったじゃない！ お茶が冷めちゃったわ」

すねたような物言いだ、なんだか喜んでいる様子だ。その満面の笑みの原因がつかれた手だということに気づいて、ヤヨイはそれを力いっぱい振りほどいた。

「ジェナ！ 話があるよ、そこで待ってて！」

気恥ずかしさを誤魔化すために大声を出すと、ジェナは大げさに眉を上げて肩をすくめた。わかってる、あれは全部わかってる顔だ。確信犯だ。

せかせかとドアに歩み寄り、乱暴に開けて家へ入る。

よく考えたらヤヨイの手を引いてきたのだから、グレイヴはここを知っていたのだ、友だちだと言っていたし。いや一本道だと教えたからかもしれない。

「ジェナ！」

居間のドアを開けて怒鳴りつけると、テーブルにいるのはヒロだけだった。カップを両手で包み、そのまま肘をつく彼は、どこか途方に暮れたような表情をしていた。

「おかえり、ヤヨイ。……そこに座って」

「う、うん」

ジェナはどこだろう、お客はほったらかしでいいのだろうか、とちらりとドアに目をやるが、ヒロは無言だ。なんとなくいつもの席――彼の左隣ではなく、正面の椅子に腰を下ろした。

「急にいなくなるから心配した」

「あ、ごめん」

そういえば黙って家を出たのだった。

あわてて謝るが、ヒロは苦笑を浮かべただけで怒ってはいないようだ。

「すぐジェナが教えてくれたから、いいよ。……彼のことは？」

「グレイヴって人？ ランドボルクからのお客だって聞いたけど。」

あ、わたしの今後を話し合いに来たって言ってた」

「うん」

うなずいたきり、ヒロは黙り込んだ。不安定に視線をさまよわせ、なにか考え事をしているようだった。

その常の彼にない沈鬱な様子に、ヤヨイは苛立った。ジェナもグレイヴもわけがわからなくてイライラするし、他のことならいざ知らず、自分のことで隠し事をされるのは腹立たしい。本当は不安だ。

台風の空を舞うビニール袋のように翻弄されるのは、もうごめん

だ。

現実感のないここでの生活を受け入れるとき、わけもわからず従うことだけは嫌だとヒロに伝えた。

両親を亡くし、すべてのしがらみから——それがたとえどれだけ無責任な行いであろうとも——解き放たれたはずのヤヨイをもう一度生かそうとするのなら、必ず自分の意思で道を決めたいと。

働くことも頭を下げることも厭わない、けれどそこにはヤヨイの納得する理由がなくてはならないのだ。そうでなければ、捨てた命を再び拾う意味がない。

「ヒロ、なんかあるならはつきり言って」

抗議を含んだ口調に気づいたのか、ヒロがヤヨイを見た。だが悪びれる様子もなく微笑んで、手にしていたカップをテーブルに置く。「約束してただろ、言葉に不自由しなくなったら仕事を見つけてあげるって」

やはりそのことか。ヤヨイはテーブルに身を乗り出し、大きくうなずいた。

「いいの？ 仕事、あつたの？」

「考えつく限り、一番条件のいいやつがね。まあ細かいところはじつくりしっかり詰めないといけないけど——」

と、ヒロがドアのほうに顔を向けた。つられてそちらを見ると、細く開いた隙間からジェナがこちらを覗いているではないか。

「なにしてるの？」

あきれて問えば、ジェナは小さく舌を出してからドアを開けて部屋へ入ってくる。心なしかほっとした表情だ。やはりヒロと同じ理由で何事か思い悩んでいたのだろう。それが解消されたおかげで安心したということか。……なんだったのだろうか。

「ちょうどよかった、君も座って。殿下も」

ヒロに促されて席に着いたのは二人。ヤヨイの右側にジェナ。左

側にグレイヴ。

紺色の外套を脱いだ彼は、白いシャツとズボン姿だ。焦げ茶色の編み上げブーツは、脛の半ばで折り返されている。胸に落ちかかるチョコレートブラウンの髪を背中に払い、気だるげに静かに背もたれに寄りかかった。

「……なにか聞き違えたみたい。ヒロ、もう一度ゆっくり」

声をひそめて請うが、両隣の二人に聞こえないはずがない。グレイヴは目線だけヤヨイに、ジェナはヒロに向かって投げかけた。

「ごめんな、ヤヨイ。ちよつと色々と事情があつて……ちゃんと話がまとまるまで、仕事の件は内緒にしておこうと思つてたのよ」

居住まいを正したヒロの言葉に、ヤヨイも背筋を伸ばす。その間も視線はグレイヴからはずせなかった。彼は完璧な無表情を保ち、だがどこもなくむくれているようでもあった。

「この人は国王の三番目の息子で、グレイヴ王子殿下。今回君を預けるに十分な職場を提供してくれた人だよ。まあ、実際は第二王子のジェイル殿下の下で働くんだけど、それを見つけてくれたのが」
「待った。……殿下？ 王子って、プリンス？ ロイヤル・ハイネス？」

思わず日本語を——いや英語を——口走ってヒロに睨まれる。だがそれどころではない。

ここにきてようやく、ヤヨイはもう一つの可能性に気づいた。彼が雇い主ではなく、スポンサーのお使いであるかもしれないということ。それはとりもなおさず、国王との謁見を急かすための使者がやってきたことを意味する。

（マジ……？ さっきめっちゃタメ口きいたし、エルボーくれたような気もする——）

青ざめて口を閉ざすと、ヒロはヤヨイがろくな役に立たない頭の

中でなにを考えたのか察したようだ。

「緊張しなくてだいじょぶだって。王様は意地悪な人じゃないし、若い娘を迎えるのは初めてだって大喜びしてるだけだから」

さりげなくプレッシャーだ。

もしかしてお姫様のように着飾らせて楽しむつもりなのだろうか。だとしたらたいへんな期待はずれだ。いまから一目見るなりがっかりする姿が目に見えがぶ。

だがヒロはちゃんとヤヨイの心情を汲み取っていた。十二年前までとはいえ、現代日本に生きていた彼には、突然ドレスとハイヒールを与えられても迷惑だということがわかつている。

「なにも心配しなくていいって、俺いつも言ってるよね。大丈夫、ただちよつと顔を見せてこれからヨロシクって挨拶するだけだから。ヤヨイが嫌ならドレスは勘弁してもらってさ、お茶も夕食もまたの機会にしておこう」

（って、やっぱりドレスで晩餐会だったんじゃないか——）

ドレスなんて、小学生のときピアノの発表会で着たのが最後だ。しかも膝丈のAライン。こちらのドレスがどんなデザインか知らないけど、きつと膝丈のAラインではない。

別にお姫様願望などありやしないヤヨイは、オシャレもダンスも注目を浴びて食事をする趣味もない。興味を持てるような生活もしていないかった。はつきりいつて絶望的な気分だった。

「……国王といっても、ただのおっさんだ」

ぼそつとつぶやかれた言葉に、うつむけていた顔を上げる。テーブルに頬杖をついたグレイヴが、皮肉っぽく片眉を上げていた。

「構える必要はない。ただ」

姿勢はそのままに、グレイヴは顔をヤヨイに向けた。

「おまえたちがこれからもなに不自由なく暮らしていくためには、

機嫌を損ねるべき相手ではない。あの人の一言で、『外』の人間は裸に剥かれて石を投げられる存在にもなりうる」

わがままも大概にしろ、とその紺色の双眸が語っているような気がした。

立場をわきまえ、身に余る厚遇に対する相応の礼を見せろと。

——死に損ないのくせに、と。

血が冷えた気がした。

同時に、思い違いをしていた自分が恥ずかしくて顔から火が出そうだった。

「ご、ごめ……」

言葉は途切れ、グレイヴの目を見続けることができずにうつむいた。鼻の奥がつんとして、瞼が熱くなる。

「王子！」

ヒロが上げた非難の声は、とても小さかった。彼も同じことを考えていたのだ、と悟る。ただ言い出せなかっただけで。

顎がふるえ、ぎゅっと眉間に力を入れても涙があふれた。もともと涙腺は壊れ気味だという自覚があるだけに、これはまずい。

ぼたり、と涙が一粒スカートに落ちたとき、不意に身体が揺れるほどの勢いで頭をなでられた。

ぎよっとして顔を上げると、頬杖をついた手で口元を覆い、そっぽを向いたグレイヴだった。

「こちらが勝手におまえたちを気に入って世話してるんだ、好きなように利用すればいい。にっこり笑って礼でも言つときゃそれでいいんだ」

わしわしと髪をかき混ぜていた手がとまる。少しふるえているような気がした。

「……殿下もさあ」

あきれたようにヒロが言いかけた言葉を、椅子を蹴立てて立ち上がったグレイヴが遮った。

「と、とにかく！ 明日午後までに城へ来い、心配ならおまえらも

「一緒にいい」

そのままドアのほうへズカズカと歩いていく背に、ヒロが「どちらへ？」と問えば「帰る！」と簡潔な返事があった。

……彼は話し合い、に來たのではなかったろうか。

啞然とするヤヨイの手を、ジェナがそつと握った。

「優しい方でしょ？」

目頭にたまっていた涙が、瞬きした拍子に頬へとすべり落ちる。

ヤヨイは居間を飛び出し、閉まりかけた玄関のドアを開けた。

「待って！」

だがそこに彼の姿はなかった。馬のいななきとなだめる声に気づき、家を右手に回ると林檎の木の下で濃紺の外套が風にはためいているのを見つけた。

「お、王子！」

なんと呼ぶべきが一瞬迷い、口をついたものが正解かどうかわからない。だがとにかく彼を呼び止めることには成功した。

鞍に手を置き、肩越しに視線だけこちらに向けるグレイヴに、ヤヨイはためらってしまう前に言い放った。

「ありがとうございました、あの、はつきり言ってくれて。」

——ヒロたちはわたしに厳しいことを言いづらかったんだと思います……また自殺するんじゃないかって、いまでも疑ってるから……」

事実だ。

ヒロやジェナだけではない、研究所の連中も。みんながヤヨイに気を遣い、甘やかすのは死なれては困るからだ。数少ない同胞を、貴重な生き証人を失くすわけにいかないから。

自分の主張や意見を守ることと、礼儀を忘れること、わがままを

通すことはまったく別の話だ。

いつから混同していたのか、ヤヨイはヒロやジェナ、学者たちや集落の人々に向ける顔がなかった。理由があるなら頭だって下げてやる、などと思いがついていた大ばか者だ。

「わかってたんだけど……もう平気なんだけど、もう少し、もう少し甘えてるうちに、わがままになつてみたいですよ。王様に挨拶するのだって、本当はもっと早くしなきゃいけなかったのに。礼儀知らずですよ、王子が気分を悪くしてもあたりまえでした。ごめんなさい」

あまり考えずにがばつと頭を下げ、こういうとき母国語じゃないっていうのは便利だな、などと思う。心情を吐露するというのは日本人にとって苦手な部類に入る行為だが、外国語だと案外簡単にできてしまう。

「愛してる」とは言えなくても、「アイラブユー」ならすんなり言えそうではないか。どちらも実際に口にしたらサムすぎて凍死しそうだが。

「……俺はべつに、おまえが死んでもかまわないとは思ってない」どこか責めるように、早口で告げられた言葉に身体を起こす。グレイヴは眉をひそめ、腕組みをして立っていた。

「ただこれ以上あのおっさんを焦らすと、強硬手段に出かねないと思っただけだ。衛兵に引ッ立てられておっさん趣味を押しつけられた拳句、膝の上で手ずから飯を食わされたくはないだろうが」

よくわからなかった。

オージェルム公用語を日本語に変換し、さらに必死で映像化して脳裏に描く。

ある日突然兵隊さんがやってきて、無理やりお城に連れて行かれて。おっさん趣味……というのは、やはりフリフリドレスなのだろうか。ピンク色の？　そして見ず知らずの中年男性の膝に乗せられ

て、お口をぁーん――。

「――本当にありがとうございます、いますぐ支度します」

おざなりなお辞儀をして回れ右しようとするヤヨイを、グレイヴの咳払いが引き止めた。わざとらしいそれに振り向くと、彼は馬の首筋をせわしなくなでさすっていた。

「ヤヨイ、その……無理に敬語を使わなくてもいい。最初のように……おまえが話したいようにしていいんだ」

一瞬きよんとしたヤヨイは、彼の言わんとするところを察してにつこり笑った。確かにオージェルム公用語の敬語は難しい。

「あ、大丈夫です。では、お氣をつけてお帰り下さい」

もう一度頭を下げ、本当に親切な王子の綺麗な顔を眺める。彼はぼかんとしているが、そんな表情もまたよし。

親しくもない人に、まして生活を支えてくれるスポンサーの一族であるとわかったからには、タメ口などもってのほかだ。さっきはなんて失礼な男だと思ったから、それ相応の言葉遣いをしたただけのこと。

見送ろうと思ったのになかなか立ち去らないグレイヴ王子に焦れ、ヤヨイはそわそわと足踏みした。そして最後にもう一度だけ微笑みかけてから、玄関へと向かって踵を返したのだった。

6（後書き）

第一章、終わりです。

こうしてみると、修正したいところがいっぱいです。

書きあがってるところまで一気にいこうと思うので、よろしければおつきあい下さいませ。

優しくて緩慢な足音が二つ、静かに遠ざかっていく。

見知らぬ人のものだった部屋は他人行儀で、それでもこれからここで生きてよいのだと、ヤヨイを懐深く受け入れてくれたことを感じる。

きしむベッドに寝転んで、目を閉じた。

最近になってようやく、最後に見た両親の顔を思い出すことができるようになった。それは次第にもっと以前のものになり、やがて笑顔ばかりにとってかわる。

あの場に留まっていたなら、いつかは乗り越えることができたのだろうか。あせりと恐れに支配された胸が、穏やかになる日はもしかしたら遠いことではなかったのかもしれない。

なにもない世界に逃げ出したはずだった。

痛みも苦しみも、喜びもない世界。

ヤヨイは耳を澄まして、階下の気配をうかがった。かちゃん、と陶器の触れ合う音。椅子を引く音。かすかな笑い声。ヤヨイ、と自分の名を呼ぶ親しみのこもった声。

不意に熱いものが込み上げて、ヤヨイは涙をこぼした。

取り戻そう。思いがけず再び得た暖かい場所で、心からの安らぎを差し出してくれた人たちのために。

だれかを愛し、誠実に生きることができたはずの自分を。

けたたましい騒音、後、静まり返る室内。
舞い上がる埃。

倒れた脚立。

散乱した本。本。本。

「……おまえな」

すぐ鼻先の本の下から、押し殺した低いうなり声。

ついた両の掌には、ゆっくりと上下する胸の感触。

ばさ、と間の抜けた音を立てて、仰向けになった彼の顔から落ちる本。

「ご、ごご、ごごめんなさい！ 大丈夫ですか！？」

距離の近さに驚いて思わずのけぞった瞬間——自分の頭に載っていた本が落ちた。

すこーん、と痛快な音を立てて、彼の額に。

「……おおまあええなあ！！」

「うわわわ、ごめんなさい！！」

オージェルム王国にて就職、記念すべきその初日。

王子の顔に本の雪崩を見舞い、彼をクッションにして床に倒れるという大失態。

ヤヨイは絶体絶命のピンチを迎えていた。

王家が『外』の人間を保護し、好意的に接することで国民も違和感なく自分たちを受け入れてくれるのだとヒロは言った。そして好意や敬意の証として、日本人の名前を子どもにつけることがよくあるのだと。

実際、現在の国王の名はキヨシで、三人の王子は上からタロウ、ジロウ、サブロウだそうだ。……ミドルネームではあるが、いいのか、それで。そのときそばにいた人は、どうしてとめなかったのだと、しばし悶絶した。

ヤヨイやヒロのように、『外』から来た者は生活するに必要なだけの金銭が王家から支給される。三十年ほど前にやって来たアサヌマさんが確立した制度で、彼は別名「インフラの鬼」と呼ばれている。

「こつちの連中が『生活道路！』とか『下水道完備！』とか叫んでるのはアサヌマさんの影響よ。一応はランドボルグ城が拠点になってるけど、一年のうち何ヶ月もいやしない。国中を放浪して、灌漑工事したりトイレの設置に勤しんでるから」

とはヒロの言だ。

それはともかくアサヌマ以前の『外』の人間は、城の客室に住み、配膳されるものを食べ、渡された服を黙って着ていたという。そこに選択の余地はなかった。

遠慮が美徳である日本人の哀しさか、小遣いをくれとはだれも言わなかったらしい。

先立つものがない『外』の人間は、心身ともに貧しくもないが豊かでもない生活を余儀なくされていた。

貧しさゆえとはいえ労働に従事し、正当な対価としての賃金を得る喜びを知っていたヤヨイには考えられない話だ。

だから当然、ある程度の生活能力が身についた時点で、働く場所

をくれとヒロに訴えた。

給付金だけでもやっていけるし、住宅手当もあるというので、それは純粹に暇つぶし——いや、この国にとけこむための手段としての労働だ。なによりヤヨイにとって、仕事をするのは呼吸をするのと同じくらい重要なことなのだ。

秋の声を聞く頃、あのよくわからない王子がやってきた翌日。

ヤヨイはランドボルグ城へ向かう馬車の中で仕事について説明を受けた。

城の書記室に所属し、書庫の清掃、蔵書の目録の作成、分類、整頓などの業務を請け負うこと。

それだけのことを決めるまでに、陰では様々な方面との調整の場がもたれ、あの日王子が「話し合い」に来たことでヒロは許可することにしたらしい。詳しくは話してくれなかったが、あの王子がヤヨイの就職に関して尽力してくれたことだけはわかった。

書庫、というのがどれだけ規模でどういった役割を有するものかは知らないが、悪くなさそうだと思う。ヤヨイは週三日ドラッグストアで、残りの四日は本屋でアルバイトをしていたからだ。本は好きだし、『外』をリスペクトしている学者に囲まれていたおかげで、古い本特有の黴臭さにも慣れた。

大した理由もなく思い込みだけで王族アレルギーを起こしていたものの、会ってみると王様は素敵なおじ様だった。びっくりするほど大柄で筋肉モリモリだったけど。

シンプルでも仕立てのいい服に着替え、緊張でガチガチになったヤヨイが謁見の間とやという部屋に入ると、待ちかねたように上座の椅子から飛び降りて、両腕を広げて抱きついてきた。

お日様のおいとちよっぴり加齢臭のする真紅の上着に鼻を埋めながら、ヤヨイは少し涙が出た。お父さん、というつぶやきは、王

様の耳にも届いてしまったのかもしれない。

ヤヨイの肩をつかんで身体をはなした王様は、ヤヨイの目を強く見つめてがっちりした口元を緩め、たどたどしい日本語で「よくきた、わたしのむすめ」と言ったから。

大好きになった。ジョージ・クルーニーに似た雰囲気で、白髪混じりの金髪で、エメラルド・グリーンの瞳をキラキラさせて。太い腕でヤヨイを軽々と抱き上げ、大きな音を立てて頬にキスをした。どこかで「じじい！」と叫ぶ声が聞こえたけど、王様は聞いちゃいなかった。

職場見学をしてから決めれば、とヒロに勧められたけれど、即決しておいたことはいうまでもない。

もちろん、城という響きに惹かれたこともある。非日常の気配、新しい自分が生まれる予感、せつかなら想像もしなかった経験をしてみたいという願望。

実際、ランドボルグ城の威容は圧巻だった。

高い城壁に囲まれた町、その中心に荘厳な佇まいの大きな城がある……うつとりと見とれた。

ベルサイユ宮殿をオーランド・ブルームに例えるなら、ランドボルグ城は渡辺謙だ。大人の魅力だ。暗い灰色の石壁がそびえ立ち、ドーンという効果音すら背負っていきそうだった。

学者の一人が実家の部屋を提供すると申し出てくれたことも、決定を後押しした。王宮からほど近い場所にあり、通勤にも便利。比較的治安のよい地区で、街路も清潔だという。

ただ、彼の両親と三人で暮らすことに、ヒロは最後まで難色を示した。

ここに来た経緯を知つての懸念だろうが、ヤヨイ自身に不安はない。むしろ『外』でできなかった親孝行とやらを、やってみようとする思つていた。

そう、初日のヤヨイはとても清々しい気持ちで新生活の第一歩を踏み出し、まだ見ぬ職場への妄想をたくましくしていたのだ。

「動くな。——いいから、動くな」

片手をヤヨイの背中に回し、あいた手で自分の額をおさえる王子は、強い口調でそうヤヨイに申しつけた。

内心ならだと冷や汗をかきながら、ヤヨイは心の中で自分を呪う言葉を唱え続ける。

倒れた際に彼が後頭部を痛打したのはわかった。なんとなく、鼻のあたりに頭突きを食らわしたような気もする。続いて数冊の本が——しかも豪華な装丁の分厚いやつが——顔に降ってきたのだ。立ち直るのには時間がかかるだろう。

こんなに異性と密着したのは初めてで——いや初対面のあの日もあったが正面からに限定すれば——、どこを見ていいかわからない。不自然にそらした首筋が痛むけれど、重力にまかせたら唇が触れてしまいそうだ。どこにつて、鼻とか頬とか唇とか、とにかく彼の顔のどこかに。

かすかなうめき声とともに、王子の手が動く。

ヤヨイの背中に載った本を払いのけ、そのままヤヨイごとむくつと身体を起こした。唐突な動作に驚いてしがみつけば、彼の膝に座つて抱き合うような格好になっていた。

「……怪我はないか」

むすつとした声で尋ねられ、ヤヨイは顔を上げた。そして目の前にある美貌に見入った。

底光りするような紺色の瞳。とかしたばかりのチョコレートのようにつややかな髪。でもその造作には甘さより鋭さのほうに勝っている。

（うむ、イケメンだ……。知ってたけど）

王様に会ったとき、三人の王子も——太郎・次郎・三郎。……なにも言うまい——そろっていた。

だが緊張で真っ白になっていたし、周囲を見渡す暇もなく王様に抱きしめられ、抱き上げられてそれどころではなかった。「ああ、ハグってやっぱり力いっぱいなのか……」と酸欠で死にそうだったのも一因。

もちろん彼の顔は覚えている。初対面でジロジロ観賞したし、なんとという無礼者だと睨みもした。なにより金髪の王様とあまりにかけ離れた濃い茶色の髪をしている。だから彼の上に倒れこんだとき、すぐにグレイヴだと気づいたのだ。が、至近距離で見ても文句のつけようがない美形だった。

形のよい眉がきゅっと寄り、問いかける視線が強さを増したところで我に返った。

「す、す——すみません！ ちょっとあの、どきます！」

わざとではない。

彼の肩にしがみついていたから、ついそこを支えに勢いよく立ち上がっただけだ。

だから彼が突き飛ばされたと感じて、決してヤヨイに悪意はなかった。そう、再び仰向けに倒れて後頭部を強打した王子が、目を閉じて額に青筋を浮かべていても、それはヤヨイの意図したところ

ではないのだから――。

あ、と言ったまま硬直したヤヨイは、必死に言い訳をしていた。ただそれが言葉となつて口から出てくることはなく、書庫には怖いほどの沈黙が降り続けた。

何十年も放置された書庫は、埃が降り積もってあちこち白く染まっていた。無論、フローリングの床も例外ではない。木目が曖昧になった足元を見つめて、塵も積もればとはよく言ったものだと感じる。

ぎし、と椅子のきしむ音に、ヤヨイの身体がふるえた。視界の隅で焦げ茶色のブーツのつま先が上がり、目の前の人が脚を組み替えたのだと気づいた。

少しずつ視線を上げていく。

編み上げブーツは脛の半ばほどで折り返され——流行っているのだろうか——靴紐の先を飾る水晶のような石がキラキラと揺れる。白いズボンに包まれた長い脚。チョコレートブラウンの長い髪が落ちかかる白いシャツ。肘掛けに置かれた紺色の上着。

横目で大惨事の現場を盗み見ると、そこだけ綺麗に埃がぬぐわれている。

紺色……よりによって。

布団叩きで力いっぱい叩いても、きっと汚れは落ちないだろう。弁償の二文字が頭をよぎり、ヤヨイは深くため息をついた。

「なぜおまえがうんざりする」

その権利は自分にこそある、そう主張したいのがありありとうかがえる声。

「べつに、うんざりってわけじゃ……」

いや、本音は少しうんざりしている。金銭問題で苦しむ運命なのかもしれない、という自分に。

黙りこんだヤヨイに苛立ったのか、彼は――グレイヴ・サブロウ・オージェルム王子は腕組みをして背もたれに寄りかかった。

「俺はずっと、『外』から来た奴らは憤み深く所作が丁寧だと思っていた」

まるでヤヨイが図々しくて大ざっぱみたいない方だ。

「いやそれは、日本人が遠慮する国民性で注目されるのを嫌うからじゃないかと……すみません、なんでもありません」

紺色の目で一睨みされ、反論する気力も奪われる。ため息をつきたいのを必死でこらえ、窓辺で風と戯れるカーテンを見やった。

カーテン。

思えばこんなことになったのは、すべてあの布キレのせいだ。視聴覚室の暗幕もかくやというどっしり感。すべての静物が埃に埋没するこの部屋にあつて、例外なく真つ白に染まっていたカーテン。

ヤヨイは同い年の先輩係官に案内されてここへ来たとき、もちろんまずは絶句した。オバケ屋敷の大道具かと思うほどの汚れっぷりに。

（なるほど、掃除……ッ！）

道理で書記室で挨拶をした後、ヤヨイの視線を釘付けにしたシブい室長が「咽喉は丈夫か」と重低音で尋ねたはずだ。これでは丈夫だったとしても、埃でやられてしまっただろう。

両の拳をぐつと握り、覚悟を決め、バケツと雑巾を調達する前にとりあえず窓を開けようとした。だが立ちはだかるカーテンが吐き散らす埃を想像して、先にはずしてしまうべきだと思い至った。そつと、静かに作業をすれば大丈夫。

書架の前にあつた木製の脚立を広げて上り、カーテンレールから布をはずそうとして――。

「おい。……おい！」

――この声に驚かされたのだ。すまん、カーテン。犯人は君では

なかった。

顔を窓に向けたまま、横目で不機嫌そうに歪む王子の眉間を見やる。

びつくりしてあわててつかんだのは棚の天板ではなく、横積みにされた本だった。不幸な事故であって決して故意に起こしたことはない。

呼んだわりに用事があつたわけでもなさそうだ。三郎王子は無言でヤヨイを睨んでいる。

大体この人は、ここへなにをしに来たのだろうか。椅子に座つたと思つたらこちらを見るばかりで、居心地が悪いことこの上ない。

圧力のある視線に曝され続け、頬がかゆいような気がしてきた。無意識に爪の先でかいていると、不意に身を乗り出した王子がその手をつかんだ。

「痛むのか？ 怪我を？」

「あ、いえ、ちがいます。……あの、離れてくれませんか」

肌の手入れに興味があるわけでもないから、至近距離でジロジロ見られるのは不愉快だった。環境がかわつたせいかわ元には二キビはできたし、水が合わないのか頬も力サカサしている。相手が美々しい王子様でなくたって、他人に見せたい美肌ではないのだ。

しかし可愛い乙女心を理解したふうもなく、王子はむつと口の端を下げ、屈めた上体を戻した。

「……手、も……はなしてくれと、その」

なんなのだろう、この展開は。軽く絶望した。

ヤヨイ自身は間違いなく初めて体験する状況だ。それなのにひどく既視感を覚える。

薄暗い書庫。

若い男女。

崩れる本の山。

転倒の危機から身を挺して救ってくれた青年ともつれあって、どさくさまぎれの抱擁。

そしてその青年はいま、親指の腹でヤヨイの手の甲をなでている。

（――少女マンガだ。小学生のころみんなで回し読みした、あれだ）

確かマンガではこの後、度を過ぎたスキンシップへと発展していったはず。

男子と同じ教室で体操服に着替えるような年齢の女子が、ページをめくるたびにキヤーキヤー言いながら喜んでいるのは絵的にすさまじかった覚えがある。

いま思えば、あれは果たして小学生が熟読してよい類の雑誌だったのだろうか。

しかし本屋の店頭では「小学六年生」などの傍らに陳列してあったような気もする。顔面の半分が目玉のような主人公が、突如現れたハンサムと、なぜか唐突に親密になっっていく物語。

（そういえばマンガなんて、もう長いこと読んでない……）

本屋でアルバイトをしていたから、触れる機会は毎日あった。それと中身を楽しむことはまた別である。昔読んでいた話の続きはどくなったろう、もう完結したのかな。

そんなことをつらつらと考えていると、ドン、と大きな音を立てて床が鳴った。

びくつと肩を揺らしてその発生源を探せば、組まれていたはずの脚が両の靴底を落とし、すでに不機嫌を通り越して怒りの形相にかわった王子の顔が――。

「……おまえは俺をなめているのか？ それとも『外』では他人の存在を無視するのが礼儀なのか？」

美形の怒り顔は死ぬほど怖い。

背中に嫌な寒気が走るのを感じながら、ヤヨイはぶんぶんと首を振った。なんとかしてその不気味に渦巻くオーラを霧散させねばと必死で考え、王子の手をぎゅっと握り返した。

「あ、あのあの、上着汚しちゃってごめんなさい！」

とりあえず目に入ったので上着の件を取り上げてみたのだが、案外彼の不機嫌の原因はこれなのかもしれない、とヤヨイは思った。派手な装飾はないが、ヒロの家にあった服とは素材も仕立てもまったくちがう。ボタンなんか、もしかしたら純銀ではなかるうか。……もしかなくても、とても高いお洋服なのではなかるうか。

弁償——甦った不吉な単語に、ヤヨイの顔から血の気が引いた。

おそろおそろ王子の顔色をうかがうと、握り合う形になった互いの手を凝視している。そこに怒りや苛立ちの気配はない。ヤヨイは知らず彼の手を握る手に力をこめ、訴えた。

「わたしの不注意でした、二度と同じことを繰り返さないとお約束します！」

クレームの対応は、一に謝罪二に謝罪、三・四に謝罪、五に謝罪。相手がドン引きするくらい平身低頭謝ると、たいていは毒気を抜かれて引き上げてくれるのだ。こちらから弁償する、などと言ってはいけない。その場しのぎで応じていると、クレーマーと化して何度でもいちゃもんをつけられるからだ。

「すみません……ごめんなさい……」

ヤヨイは椅子から下りて床にひざまずき、握った手を額にあてて小さく繰り返した。我ながら過剰な演出に笑いが出そうだが、必死でもある。

まだこの職場ではなんの仕事もしていない。初日でクビになったらヒロに申し訳ないし、一日分の賃金すら期待できなくては上着の弁償など不可能だ。

給付金から捻出するのは本末転倒だし、それ以前によく考えたらこの人は王族である。

怪我の有無を確認するのは、むしろこちらのほうだった。もしもなにかあつたら――。

「……………」

急に首筋が冷えたような気がして、ヤヨイは先ほどとは別の寒気を感じた。

もはや両手で包むようにした彼の手にすぎり、ゆっくりと顔を上げる。

三郎王子は手品でも見たように目を睜り、ヤヨイを見つめていた。「あの……お怪我はないですか？ 頭、大丈夫ですか？」

その瞬間、王子はまたしても不愉快そうに口の端を下げた。

「まるで俺の頭がイカれているような言い草だな」

しまった、表現を間違えた。

ヤヨイはあわてて手をはなし、顔の前で振り回した。

「あの、ちがいますっ！！ そうじゃなくて、ゴンってすごい音がしたからコブでもできてたら間抜けだなんて！ いえその、たいへん、だな……って」

言い募るほどに、紺色の瞳が冷気を増していく。

振りほどかれて宙に浮いた手もそのままに、王子はただヤヨイを見つめる。

くそう、だれかなんとかしてくれ。

職員室でお説教される中学生のごとく正座のままうなだれ、バレないようにそつと息をつく。

椅子に座る前、王子が開けた窓から風が入り込んでくる。そのたびにカーテンが揺れて埃をまき散らし、鼻の奥がむずがゆかった。一刻も早く掃除にとりかけたい。精神衛生のためにも。

ヤヨイは掃除が嫌いではない。が、別に好きなわけでもない。書庫での作業は、目録作りから分類、仕分け、陳列と続くのだ。最初の一步で躓いている場合ではないのだ。

（バケツと雑巾……どこで借りればいいのか。紙とかペンとかインクとか、そういうのは書記の部屋かな……）

案内してくれたのは、書記室の係官だった。赤毛の少年で名前をルーヴェンという。頑張ってねと言ってくれた。

そういえば、仕分けはともくなぜ分類まで作業の中に入っているのだろう。こちらには図書館学という学問はないのだろうか。ヤヨイが知る限り、役場の支所にくっついた小さな図書館でさえ規定の分類法に則って書架が分けられていた。

そのへんも確認しなくてはいけない。ルーヴェンは暇だろうか。いや、暇ではなかるうな、机の上に書類が山積みだった。

などと意識を飛ばして現実逃避をしていたことは、バレバレだった。

「おまえは、懲りるということを知らんのか」

その声音、絶対零度。——って摂氏何度のことだっけ。

言われるそばから別なことを考えようとする自分を叱咤し、ヤヨイは頑張っつて王子に注意を向けた。前髪の間から顔を見ると、目をそらされた。

ふん、と鼻を鳴らしてそっぽを向いた王子の髪が、乱れている。

仰向けに倒れたからだろう、首筋で髪を束ねたりボンが歪んでいた。「……王子、髪をなおしてもいいですか」

なぜそんなことを言ったのか、自分でもわからなかった。ただシヤンプーの広告みたいにつやつやしたチョコレートブラウンの髪に、触れてみたかっただけかもしれない。

訝しげな顔をしつつもうなずいた王子にほっとして、ヤヨイは立

ち上がった。

埃を舞い上げないよう静かに背後にまわり、瞳と同じ紺色のリボンをほどく。

「……ヘンな奴だな」

うれしくない評価は無視。

櫛など持っていないから、指のあとがつかないよう、掌でそつとこするようにして髪をなでる。つるつるしていて、時々同級生がおすそ分けしてくれたアーモンドチョコのように輝いている。

「おいしそう……」

とつぶやいた瞬間、ものすごい勢いで王子が振り返った。悪魔でも見るような目だ。

「おい、『外』の人間に食人の習慣があるとは聞いてないぞ」

「ありませんよ、そんなもの！……いや、ないとは言えないのかな」

王子の顔色がかわった。

子どものころ、上野の科学博物館で頭蓋骨を抜いて塩漬けにして干した首、というものを見たことがある。梅干と同じ原理か、とげんなりしたものだ。アレは確か、どこかジャングルに住む部族の腰飾りだった。敵方の戦士を討ち取った証で、己の武勇を誇るのだと——考えているうちに気分が悪くなってきた。しかもそれは人間を食べるという話とは別物だ。

「顔色が悪いぞ、大丈夫か？」

心配そうに眉間をくもらせる王子の髪色にも腹が立つ。さっきまで思い出し笑いがもれそうだったチヨコレートの記憶にさえ、吐き気がしてきた。

「……前、向いてて下さい」

不遜とか不敬とか、そういう考えも頭になかった。後ろから王子

の両頬を手ではさみ、強引に前を向かせる。すべすべした肌だった。できるだけ食べ物のことを思考から排除しつつ、細いテグスにも似た感触に集中した。

クラスの女の子たちは、休み時間になるとポケットから櫛を取り出しては毛先を梳いていた。小さくて、キラキラしていて、色とりどりの飾りを施した櫛。手入れを怠ったことがなさそうな髪は茶色く染められ、クルンとカールしていて。

仲間に入りたい、と、手の届かない光景に焦がれたこともあった。

ヤヨイの髪は、束ねるのに足るだけ長く、特別手をかける必要がないだけ短い。いつも商店街の美容院が店先でチラシと一緒に配っていた、目の粗いプラスチックのブラシで梳かすだけ。毛先をそろえてくれるときも、お母さんはそのブラシを使った。

「……様子を、見に来た。不自由はないか、とか」

王子の言葉に、そうですか、とだけ答える。

心が暗いものに囚われそうで、上の空だった。

「頼みたいことも……」

ぼそぼそしゃべる王子の声が遠い。ヤヨイは意識を空にして、ひたすら手を動かした。

取り分けた束を右へ、受け取って左へ、左から右へ。きゅ、と音が鳴りそうな髪。

お母さんの髪も長かった。いつもこうして、ヤヨイが結ってあげた。

いつの間にか白髪が増えて、年齢より老けて見えると笑いながら嘆いてた。綺麗な人だったのに、数百円のヘアカラーを買い求めるお金も惜しんで――。

「――も、悪くないだろう？」

問いかけを示す語尾に、ヤヨイははつと現実に戻された。いつの間にか手元でリボンが蝶々結びになっている。

「は、はい、そうですね……？ あ、の、できました」

ああ、とうなずいて頭に手をあてた王子の動きがとまる。

確かめるように上下する手が、長い毛束をつかんで顔の前に引っ張った。

「……なんだこれは」

「三つ編です」

「それはわかつている！ 俺はいままで一度だつてこんな——」

背もたれを抱えるようにして振り返った王子が、ぎよつとしたように目を剥いた。その顔を見てヤヨイもぎよつとした。

「な、なんですか？ もしかして王族の髪を三つ編にすると死刑ですか！？」

「いや、そんなバカな法はない、が……」

王子の美貌が、困惑に染まる。えらい人でも表情は豊かなんだな、と新発見でもした気分だ。

はたと、助けてくれたお礼を言っていなかったことに気がつく。そもその原因はさておき、彼がかばってくれたことは確かだし、しきりに怪我はないかとヤヨイに尋ねるのもお礼の催促かもしれない。——それはないか。

どうも、とか、すみません、という便利な言葉ですませることを、両親はよく思わなかった。謝るときはごめんなさい、お礼を言うならありがとう。大きな家に住んでいたときも、六畳二間のアパートに住んでいるときも、その方針はかわることがなかった。

ヤヨイは照れくささに少し唇をかみ、努力して笑顔をつくった。

「さつき……助けて下さって、ありがとうございました。怪我もせずですんだし、この書庫が一日も早く機能するよう、頑張って働き

ます」

「……ヤヨイ」

静かな目をした王子に低く名前を呼ばれ、心臓がとくと鳴った。よく知らない人から敬称抜きで呼ばれるのは、やはり違和感があった。緊張する。

どこか痛ましげにヤヨイを見つめていた王子が、すっと立ち上がってヤヨイの前にやって来た。そしてためらいがちに手を伸ばし、そつと頬に掌をすべらせる。

その仕草で、ヤヨイは自分が涙を流していたことを知った。

頬をなでる手が頭に回され、ぐつと胸に引き寄せられた。バランスを崩して倒れそうになったヤヨイは、あわてて一歩踏み出して王子のシャツにつかまった。

額を王子の胸に押しつけ、不自然に身体を離れた体勢は、横から見たら直角三角形のようだろう。間抜けだ、どうしよう、でも今さら抱きつけない、じゃなくてむしろなんなんだこれは――。

頭のとっぺんに頬ずりされる気配。

長い指が頭の輪郭を確かめるように下りてきて、顎から頬、そして耳へと形をたどる。横顔を覆う髪がさらりと耳にかけられ、急に開かれた視界に心もとない心地になった。

「――ヤヨイ……っ！」

囁きは押し殺され、なにかに耐えるようにかすれていた。そこに隠された彼の望みを本能的に察知して、ヤヨイの身体に漣が走る。

だが王子は詰めた息を大きく吐き出し、一拍の間において身体を離れた。

そしてその顔に浮かぶ色を確かめようと目を凝らすヤヨイから逃げるように、上着をつかんで部屋を出て行った。

「……なに……？」

自分のつぶやきで緊張の糸が切れる。

ヤヨイはぺたんと床に座り込み、熱くなった耳に触れた。

カラン、カラン、と高く軽い音が響き渡る。

書庫の真下にどっしりと生えた木の間にロープを張り、苦心してカーテンを干し終えたヤヨイは、その音の出所を探してキョロキョロとあたりを見回した。

鐘だろうか、だが目に入る限りの建物からはなさそうだ。

とくに行動範囲を制限されたわけではないが、敷地の中を勝手にうろつくのはためらわれる。ヤヨイは少しウロウロして、すぐにあきらめた。

控えめな性格ゆえではない、時折通りがかる警備兵や女官らしき人たちがこちらに気づくと、遠慮のない視線を送ってくるからだ。敵意はないが、友好的でもない。しいていうなら、芸能人を見つけた女子高生のような……近寄らず遠巻きに、だが興味津々といった目つき。

広げて干したカーテンの陰にしゃがんで、ふつと息をつく。

この大物をやつつける作業に、かなりの時間を費やした。突っ張り棒のようなものに通された輪を一つ一つはずし、埃を舞い上げないよう注意してたたんで、という行程を四度。書記室で教えてもらった水場へ運び、端から丁寧に踏み洗いをして。

書庫のある二階のつきあたりには小さめだがドアがあり、そこから外へと階段で下りられる。それがなかったら、カーテンを干すのはおそらくカーテンレールの仕事になっていただろう。紙の束を累積した室内では、それは回避したい事態だ。

地面に盛り上がった木の根に腰を下ろして、脚を伸ばす。スカートの裾を膝の上までたくし上げて日向の暖かな光にあてると、水仕事でかじかんだつま先までじわりと熱が通うのがわかった。初秋とはいえ、さすがに四畳半はありそうなカーテンを四枚も洗えば、身体が冷える。

（あったかい……眠くなっちゃう）

どっしりとヤヨイを受け止めてくれる太い幹にもたれ、目を閉じる。秋の風も太陽の温かさでぬるみ、ふわりと頬をなでていく。

——グレイヴ王子の指先のように。

「つぎやあああああつ!!」

がばつと起き上がって奇声を発する。遠くで草刈鎌を持ったおじさんが振り返った。

「ダメだダメだダメだ! 思い出したらダメだつ!!」

頭を抱えてダメダメダメと繰り返す。おじさんはこの世の終わりのみたいな顔で小さくふるふると首を振った。

（平常心、ヘーじょーしん! ヘーじょーしんヘーじょーしん……
っ）

あんまりしつこく繰り返したものだから、ヤヨイの中で「平常心」がゲシュタルト崩壊だ。

いけない、こんなことではこの先不安だ。自分を立て直さなくては!

ヤヨイは鼻で深呼吸をし、意識を人間からそらすために食べ物を感じ浮かべた。

（そうだ、お弁当! 中身なにない!? ……水筒は甘いハーブテ

イだって言ってたな)

驚くほど落ち着いた。食いしん坊万歳!

あらためて幹に寄りかかって目を閉じ、下宿先のおばあちゃんが持たせてくれたバスケットを思い浮かべる。

あわただしく越してきたヤヨイを笑顔で迎え、引越しの翌日には初出勤というせわしなさにも関わらず、朝からちゃんとしたご飯を作って食べさせてくれた。昨日の夕食も、ほっぺが落ちるかと思うおいしさで。

年齢的な理由でか、ジエナの料理よりも薄味だった。それがまたヤヨイの味覚にばっちりだから泣けてくる。出勤前にも、調理用ストープには煮込みの鍋がかかっていた。ほんのり塩味の野菜スープか、はたまた胡椒を利かせたソーセージとジャガイモか……くつくつと、そうこんなふうに煮込まれる鍋の音が聞こえ――。

いやちがう、笑い声だ。

「――っ」

ぱちつと目を開け、いつの間にかすぐそこに立っていた人影に驚いて声を失う。

だが逆光になった影の中に見知った顔を見つけ、ヤヨイはほっと息を吐き出した。

「なんだ、ルーヴェンかあ! 声かけてよ!」

安堵と気恥ずかしさで乱暴な物言いになってしまふ。それほど親しくはないのに。

だがルーヴェンは気にした風もなく、むしろヤヨイがくだけた態度をとったことをよい方向に受け取ったようだった。

「ごめん。眠ってるのかな、と思ったんだ。あんまり幸せそうな顔してるから、つい」

彼の言葉も、堅苦しい敬語でなくなっている。互いが歩み寄った

ことに気づき、ヤヨイは微笑んだ。

警備兵に案内されて所属する書記室へ通された後、書庫に向かうまでの面倒を見てくれたのがルーヴェンだった。

サラサラとした紅茶色の赤毛と若葉色の瞳、腰丈の臙脂色のベストを着たひよろりとした身体。ヤヨイと同じ年だ。眉を上げて笑うのが癖のようで、その笑顔は悪くない。どっかの王子とちがって啞然とするほどの美形でもなく、さりとして不細工でもない。少し吊り目気味なところがチャームポイントという程度だ。

「ヤヨイ、昼食は？ 休憩時間を昼寝して過ごすの？」

もちろんご飯を食べる。

差し出された手をとって立ち上がり、スカートの汚れを払った。

「休憩時間になったの？ さっきの鐘が合図かな」

隣に並んだルーヴェンを見やる。どっかの王子とちがって顔を見るのに首を痛める不安はなく、身長は『外』の平均的な男子高校生程度だ。

「そそ。王宮内で日に三度鳴るんだ。始業と終業、それから昼休憩の合図」

内庭のはずれに鐘楼が建ってるよ、とルーヴェンはそちらに顔を向ける。建物に阻まれて見えないが、まだヤヨイが足を踏み入れたことのない方角だ。

まるで学校だな、とヤヨイは思った。

周辺諸国に比べ、オージェルムは時間の感覚がきっちりしている、と『落下地点』にいた頃、学者に教わった。二十年ほど前に腕時計をして落ちてきた人がいて、それを分解して解析したらしい。

だがセイコーのまさしく精巧なアナログ時計を再現できるはずもなく、『外』の知識とこちらの頭脳を結集して、こちらに合った時計を作り上げた。

文字盤のはまった四角い箱から、錘のついた二本の鎖が垂れ下がり、交互に上下して一秒を刻む。要するに少し昔の壁時計のようなものだ。ただ、一日の長さが正確に二十四時間ではないようで、その調整には現地の暦法を応用して云々という説明があったのだが、そこは忘れた。

それにしても依然時計は高価で特別な器具である。

王宮にも大小あわせて三つしかないとルーヴェンは言った。一般庶民に普及させる必要性も、特になさそうだとヤヨイも思う。電気もガスも蒸気機関もないこの国で、だれもかれもが時間に追われて暮らす必要はない。あえて様々な文明の利器を広めない王様と研究所の意図が、ヤヨイはなんとなく理解できた。

だからせいぜい、遅刻防止のために始業の、サービス残業防止のために終業の、そして昼飯食いはぐれ防止のために昼休憩の鐘を鳴らせばそれでいいのだ。

と思ったのだが、終業の鐘には別の意味があるそうだ。

「王宮警備隊や近衛騎士が、夜の配置につくための合図だよ。ところで、さーびすざんぎょうってなに？」

若葉色の瞳をキラキラさせるルーヴェンは、隠れ『外』信者だった。

書庫に寄ってバスケットを持ち出し、ルーヴェンの先導で食堂へ向かう。その道すがら朝のことを話すと――三つ編から先のくたりはカットだ、もちろん――、彼は眉をぐっと寄せて声を上げた。

「ええ？ グレイヴ殿下が？」

「う、うん。……なんか、まずかった？」

「ううん、ヤヨイはなにも悪くないよ。……あのね、あの方は女嫌いで通ってるけど、十分注意してね。男なんてなんのきっかけで宗旨替えするかわからないんだから」

厳しい顔で言い聞かせてくるルーヴェンに、ヤヨイは声を立てて笑った。まるでお母さんだ、と思ったから。

位の低い文官が使う食堂は、二階に書記室を擁する西棟の一階、書庫とは逆のはずれにあった。

様々な職種によって使い分ける食堂は四つあるが、それぞれが抱える複雑な関係の象徴と呼ぶべき施設だ。たとえば庭師や厩務員のような裏方は、侍女や地位の高い文官とは相容れることがない。また楽師や絵師といった芸術家と軍人の相性は最悪だ。

彼らがバツティングして不可視の火花を散らし、うっかり大火事にまで発展しないようにという配慮である。

実際にそういう事例があったか否かはともかく、ヤヨイにとってはありがたいことだった。

というのも、近衛を初めとした王家に属する騎士たちを刺激しないよう、日ごろから一層の注意が必要だとヒ口からよくよく言い聞かされていたからだ。

「近衛は警備隊と同じ練兵場の食堂だから、安心してくつろいでね」
高校の体育館を縦に二つつなげたくらいの巨大な空間、そしてそ

れに恥じない長大なテーブル。その端に陣取ったルーヴェンは、モスグリーンの布に包まれた弁当を広げながらこっそり囁いた。

さすが隠れ『外』信者、ヤヨイの懸念を言い当てて、先のような事情を説明してくれたというわけだ。

ルーヴェンのランチは、耳がついたままのパンに野菜とハムをはさんだサンドイッチである。独身者用の官舎に住んでいるという割りに、彩りも鮮やかで形もいい。自分で作ったのかと聞けば、官舎は三食つきで、こうして日替わりで弁当も作ってくれるとのこと。

家賃や食費は給料から天引きされているというが、なかなか出来たシステムである。

「そついうの、アサヌマが導入した仕組みなんだよ」

声を低めて教えてくれるルーヴェンの瞳は、相変わらず輝いていた。

「なるほど……元市役所勤務のアサヌマさんか」

つぶやきながら、ヤヨイもようやくおばあちゃんの手作り弁当が詰まったバスケットの蓋を開けた。細長い陶器の器に木の蓋がついた入れ物と、紙にくるんだ丸いパン。

器の中には、ゆでたブロッコリーとニンジンのサラダ、レーズンとソーセージの炒め物、オムレツが綺麗に並んでいた。

「お、い、し、そ、う……っ」

中学校を卒業して給食制度とお別れした後、ヤヨイの弁当といえはおにぎりに塩をまぶした単色でまとめられていた。時折たくあんや煎りゴマが参加することもあったが、基本的に炭水化物過多の傾向にあった。

感動にふるえる手を伸ばしてフォークをつかみ、ブロッコリーを突き刺す。小房に分けられたそれはヤヨイの口にもちょうどいい大きさで、ほんのりした塩気と絶妙な酢加減、そして味わったことのないハーブの風味がした。

「お、い、し、い……っ」

おばあちゃん、おいしいよーっ！！ と叫びだしたい気持ちをブロッコリーとともに飲み下していると、小さく笑い声がした。

「幸せそうだね、ヤヨイ。そんなふうに出て食べてもらえるなら、僕もヤヨイになにか作ってあげたいな」

優しい言葉と表情に、ヤヨイは「えへへ」とだらしく笑った。

家がすさまじいまでの貧乏だったので、食料をもらうチャンスをついにしたことは一度もない。

落ちぶれた当初は常に空腹を抱えているのが惨めで、恥ずかしくて、悔しくてならなかった。けれどそんな境遇に慣れ———により両親にそういう自分を見せるのはひどく残酷なことなのだと気がついた。

さすがに大つぴらに貧乏娘をアピールすることはなかったけれど、同級生が差し出すお菓子や、アパートの隣人がくれるお裾分けは笑顔で受け取った。

努力して自然体でいようとするうちは、決してすべてを受け入れられてはいないのだと知ったのは、ここへ落ちた後のこと。

「好き嫌いはあるの？」

サンドイッチを口に運びながら尋ねるルーヴェンは、どうやら本気でなにか作ってくれるつもりのようなのだ。ヤヨイはレーズンを——レーズンもブロッコリーも、味も形も似ているだけで本当はちがう名前のちがう食べ物なのだけど——フォークに載せて、首を振った。

「なんでも食べるよ。多分、なんでも」

「多分？」

眉を上げて笑うルーヴェンに、ヤヨイも笑い返した。

「この国の料理を食べ尽くしてみないと、わかんないでしょ？ たいていの調味料は味見したと思うんだけどね」

ジェナは料理が上手だし様々なメニューを食べさせてくれたけれ

ど、現におばあちゃんのサラダには初めての風味を感じた。こちら
も各家庭オリジナルがあり、奥が深そうである。

「心意気はわかったけど傾向がつかめないよ、ヤヨイ。本当になん
でも食べてくれる？」

「食べる食べる。――あ、しいて言うなら甘いものが少し苦手かな
？　たくさんは食べられないかも」

受験勉強をしていたころ、アパートの大家さんが法事に使うドラ
焼きの数を間違って注文し、店子に配ってくれたことがある。一軒
あたり十個ほどだったが、ヤヨイは一回で一個を食べきれなかった。
同級生がくれるお菓子は一口サイズだし、大量に回ってくるもの
でもない。ヤヨイにはそれくらいがちょうどいいのかもしれない。

ふんふんとうなずくルーヴェンが、不意に真顔になってこちらを
向いた。

「そういえば、書庫のほうはどう？　片づきそう？」

「ん？　うーむ。まあ、なんとか」

そういえばカーテンは夕方までに乾くかな、と思いつつ、ヤヨイ
は天井を仰いだ。

畳でいうなら二十畳ほどの広さの書庫は、堆積した埃さえなんと
かすれば掃除そのものは終了なのだ。平積みの本の山があちこちに
ありはするが、乱雑に散らかっているわけでもない。

「本の虫干しまでやってたら一週間以上はかかりそうだけど、掃除
は今日中に終わると思うんだ。バケツはともかく、雑巾は何枚か借
りたいな」

汚れた水を捨てられる水場は、書庫から少し離れている。いい運
動になるわい、となかば自棄気味に思った。

「目録を作って整理まですると、一ヶ月くらいかかるのかなあ。も
つとかも」

「そう……。早く終わらせて、書記室においで。本当はそんな仕事、

書記官の業務じゃないんだから」

やけに暗い顔つきで、ルーヴェンはテーブルに視線を落とした。彼のあまりに深刻そうな様子に、ヤヨイは口をモグモグと動かすのをやめた。

「あんなところにこもって一人で作業するなんて、寂しいでしょ？」
質問の形の、それは断定だった。

発言の意図は不明だが、その意見には若干の異議を申し立てたい。

ヤヨイには他人と行動をとみにしたい、という願望が基本的にあまりない。

生活レベルが著しく低い女子高生は、なかなか群れに入ることができないのだ。話題もテンションもかみあわないことこの上ない。孤立感や人恋しさを乗り越えてしまえば、一人は気楽だ。まして仕事というのは、和気藹々と取り組むものではない気がする。険悪でない程度の無関心を保ち、結果として同僚とうまくやっていければ十分ではないか。

（それ以前に……）

オムレツの欠片をつつきながら、ヤヨイはヒロに提示された内容を思い出す。

城の書記室に所属し、書庫の清掃、蔵書の目録の作成、分類、整頓などの業務を請け負うこと。

ヤヨイに与えられた仕事は、とりあえずそこまでだ。書記室に所属して経理もそこを通るかもしれないが、決して書記官になったつもりはない。政治経済に関わる公式な文書を扱えるほど、語学力も高くない。

「寂しくはないから、大丈夫。ありがとう、ルーヴェン」

重くなってしまった空気を払うように、ヤヨイは努めて明るく言った。だが彼は険しい面持ちのままヤヨイを見て、そして——固ま

った。

目を瞠るヤヨイの隣、ルーヴェンと反対の椅子に着席する人の気配。とともに、かすかにタバコのようなにおいがした。

「そこまでだ、小僧」

ものすごい低音のシブい声に、ヤヨイは目を瞠ったまま振り返った。

「宮仕えを満喫してるか」

からかうような眼差しを向けるその人は、チヨイ悪系美中年にして書記室のトップ、ガルム室長だった。

「カーテン相手に悪戦苦闘していたようだが、勝敗が決してなによりだ」

我に返り、窓の下に干した布が脳裏をよぎる。あれを抱えて右往左往していたところを見られたのか、とヤヨイはいたたまれない気持ちでうつむいた。

おそらく三十代後半であろうガルム室長は、シャツの袖を肘までまくってたくましい腕をさらし、臍脂色の膝丈ベストを着ている。所属先で色の異なる文官の上着やベストの長さは地位の高さで決まる、と教えてくれたのはルーヴェンだ。

ライオンのたてがみのような金茶色の髪、金緑色の瞳、きりりとした眉、高い鼻梁、一文字に結ばれた厚めの唇、引き締まった顎。刻まれた眉間の皺まで、しびれるほど魅力的な大人の男性。

きつとオージェルの美的水準を満たす、がっちり系だ。価値観がちがうはずのヤヨイすら眩暈を覚える、におうような色気。

フェロモンだ。きつとこれがフェロモンの効果だ。目に見えずにおいもないそれにやられたにちがいない。ああ自分もちゃんとメスだった。

ヤヨイは緊張と羞恥で顔が熱くなるのを感じた。さっきまでおばあちゃんのお弁当に奪われていた心が、方位磁石が北を示すように室長に向かっている。

初対面は少し離れたところで正面から向き合って、しかも短時間の挨拶と質問で済んでしまった。忙しい室長は面倒をルーヴェンに押しつけて、さっさと自分の机に向かってしまったのである。

ちよっぴり残念、と後ろ髪引かれる思いで書庫へ向かい、なんだか人騒がせなどっかの王子のせいで室長のことを忘れていた。

いまこうして肘が触れ合うほど間近に、しかも耳に直接流れ込むような位置取りで重低音の声を聞かされていると――あらぬことを口走ってしまいそうだった。

「室長が食堂にいらっしやるなんて、めずらしいですね」

動揺しまくるヤヨイの頭越しに、気を取り直したルーヴェンがいたって暢気にそう言った。おそろおそろ顔を上げると、室長は小さな布包みをテーブルに置き、つまらなそうに指先で広げている。

「たまにはな。出歩く姿も見せておかんと、書記室に根を張っていると陰口を叩かれる」

「そんなの、お気になさらないくせに」

肩をすくめるルーヴェンに、ガラム室長は片頬を上げて流し目を与える。そしてその壮絶な色気の射程距離内にいたヤヨイの全身が粟立った。ついで身体の中から熱くなり、呼吸まで苦しくなっていく。

（に、逃げたい……っ！）

もはやガラム室長の存在は高温の圧力だった。真冬のスーパーで頭から浴びるエアカーテンの熱風のようにだ。

小さく縮こまって真っ赤になったヤヨイの顔を、ルーヴェンが覗き込んでくる。

「ヤヨイ、具合が悪いの？ 大丈夫？」

ろくな返事もできず硬直していると、ルーヴェンは非難がましい声で室長に文句を言った。

「室長のおいで気分が悪くなったんじゃないですか？」

ヤヨイはぎょつとして彼を振り仰いだ。三十代後半の男性に向かって、なんとデリカシーのないことを！

お父さんはことあるごとに枕や帽子、上着など自分が身につけるもののおいを確認しては肩を落とした。そしてヤヨイに「お父さん、臭い……？」とそれはそれは哀れを誘う潤んだ目をして尋ねたものだ。

しかしヤヨイには、いまここで「それじゃまるで加齢臭がするって言ってるようなものでしょう」とルーヴェンを咎める勇気がない。ただまったくの濡れ衣である、というか見当違いの冤罪であると無言のまま必死で訴えた。

が、ルーヴェンは眉を寄せ、困ったように首をかしげた。

「そうなの、ヤヨイ？ おいで酔った？ 室長、煙草くさいもんね？」

熱かった顔が冷えていく。血の気が引いていくのがはつきりわかった。たたみかけられる言葉はなんだか説得力があつて、まるでヤヨイ自身が過去にもらした悪口を再現でもしているようだ。

否定しなくては、と室長を振り返った瞬間、目が合った彼はふつと笑った。

「結局それかよ。ヤヨイをダシにすんな、言いたいことは自分の責任で言え」

名前を呼んでくれた。

低音で紡がれた自分の名前に、こんなに美しい響きだったのかと陶然となる。

「くさく、ないです……」

気づいたら、ヤヨイはガルム室長を見上げて口を開いていた。組んだ両手を胸の前に、祈るような姿で。

「タバコのおい、嫌いじゃありません……お似合いです」

「や、ヤヨイ……？」

背後からそつと肩に手を置かれる。だが探るようなルーヴェンの声は無視して、ヤヨイはなおも言い募った。

「なんだか安心します、ずつとかい得太いくらいです」

自分でもなにを言っているのかよくわからなかった。いつの間にか騒がしかった周囲が固唾を吞んで三人を見守っていることにも、気づく余裕など一切ない。

頭のどこか深い場所で思い出すのは、ジャニーズより石原軍団、と口を滑らせたときの同級生の引いた顔。あれがいわゆるドン引きだったのだと、ガルム室長に見とれながら内心でポンと手を打った。虚を衝かれた表情も一瞬、室長はおもむろにヤヨイの肩をその広い胸に抱き寄せた。

「残念だったな、ルーヴェン。思惑が両方はずれて」

——書記室長が『外』の娘に手を出した。

目撃者がこの目で見たと唾を飛ばして振り撒いた噂は、その日のうちに城中を駆け巡ったのだった。

日向を一人で歩いていると、崖の上に置いてきたiPodを思い出す。

レモンのような黄色で、透明なプラシックのカバーとピンク色のイヤホンがついていた。アルバイト先で仲良くなった女子大生がくれた。イヤホンを挿すところの接触が悪くなったから買い換える、そう言っ

て、それが嘘だったことを、ヤヨイは知っている。

どこも不調なんかなかったし、日本のポップスから洋楽まで、百を超える楽曲が入ったままだった。プラスチックのカバーもケアベアのイヤホンも、あると便利だからと差し出した、コンセントで充電できるアダプターも新品だった。

なんの脈絡もなく「だいじょぶ？」と声をひそめて尋ねてきた同級生がいた。エクステでバサバサにした睫毛をパチパチさせて、グロスでつやつやの唇をすばめて。

なんのことかわからずにきょとんとするヤヨイを見て、彼女はばつが悪そうに目をそらす。そしてちよつとだけためらってから、ポケットに隠していたビール券を取り出して、スカートの陰でヤヨイの手に押しつけた。

冷蔵庫に貼ってあったの、長いことそのままだったからさ、使用期限きれても仕方ないしさ、多分ママ忘れちゃってるんだよね。

驚きのあまり黙っているヤヨイに、彼女はごめんね、と囁いてそそくさと離れて行った。屈辱は感じなかった。

ただ理由のわからない涙が、ほんの少し目尻に滲んだ。

ヤヨイの下宿先は、王宮の門から歩いて二十分ほどの住宅街にある。

坂道の途中にあつて、間口の狭い二階建ての家がぎっしり立ち並んでいる一画。道からすぐ玄関で、庭には勝手口から出るようになっていた。横幅はないが奥行きのある家だ。

自分の実家を提供してくれた研究所の学者は、ゼロンという四十年代のおじさん。無精ひげがトレードマークで、いつも眠そうな顔をしていた。

こちらの平均的な初婚年齢は二十歳前というから、ゼロンの両親は六十歳前後だと勝手に思い込んでいたのだが、引越しに付き添ってくれたゼロンから紹介された彼の両親は、どうみても立派なおじいちゃんとおばあちゃんだった。

ヤヨイの両親は高校の同級生で、大学卒業とともに結婚してすぐヤヨイが生まれた。自分の親よりは上、くらいのつもりでいたので、なんだか裏切られた気分だ。

「俺、四人兄弟の末っ子でさあ」

少してれくさそうにゼロンは頭をかき、父のイゼ、母のロマとヤヨイを引き合わせてくれた。

三人の兄妹はとくに所帯を持って遠くの町に住んでおり、研究所のゼロンを通じて両親に仕送りをしているらしい。もちろんゼロンも、少なくとも給料の中から相応の額を出している。なので二人

は悠々自適の老後生活を満喫しているというわけで。

今朝もヤヨイは、裏庭から聞こえてくるカサカサした歓声に起こされて目を開けた。

「んう……おじいちゃん……」

かすれた声でつぶやいたのは、イゼじいさまへのほのかな非難。
ヤヨイは仰向けのまま両手で顔を覆い、ぱつとはなして一気に身体を起こした。目が覚めれば活動開始。寝起きのよさには自信があった。

ヤヨイにあてがわれた二階の部屋は、もともとゼロンの姉のものだった。結婚と同時に家を出たきりなので、三十年ぶりに主を得た日はまだ空き家のおいがしていた。ヤヨイが寝起きし始めて五日、ようやく隅々にまで人の気配が染み渡り始めたところだ。

薄いカーテンを開け、きしむ蝶番がはずれないようそつと窓を開ける。朝のにおいに混じって部屋へ吹き込んだのは、じいさまの元気な笑い声だった。

思いのほか広い裏庭を見下ろすと、勝手口から出てすぐのあたりに黒と白のタイルで飾ったテーブルが出され、その上に同じ色合いの盤が置かれている。それをはさんで向かい合う二人のおじいさん、そして二人を見守るおばあさん。

二人が興じているのは、『外』でいうチェスのようなものだ。実際チェスそのものかもしれない。この家の息子は、『外』の研究の専門家なのだから。

「おじいちゃん、おばあちゃん、おはよう」

ヤヨイが声をかけると、三人は顔を上げて微笑んだ。ここに住み始めてから、毎朝の儀式のようなものだった。

「おはよう、ヤヨイ。ポットにお茶があるから、飲みなさい」

口マおばあちゃんが口元に手をあててそう言い、おじいちゃんた

ちは自分のカップを掲げてみせた。

イゼおじいちゃんはチェス好きで、朝から晩までああしてゲームを楽しんでいる。相手は近所の仲間だったり、おばあちゃんだったり、色々。

ヤヨイも誘われたけれど、ああいうゲームは苦手なので断った。でもそのうちルールを覚えて、おじいちゃんを喜ばせてあげられたい、とも思う。

タンスから服を取り出し、ベッドの上に広げる。給付金で買ったものやジェナのおさがりも持ってきていたが、今日はおばあちゃんお手製のワンピースを身につけるつもりなのだ。が、これがまたコーデイナーに悩む代物で。

ランドボルグ城の流行など知らないヤヨイにもわかる。時代遅れのデザインだ。うちの居間に集まってお茶をするおばあちゃんたちが着ているような、小花模様のストンとした形のワンピース。

城内で見かける若い女性は、丈の長いチュニツクにもんぺを合わせていることが多い。

もんぺ。そう、あれはまさしくもんぺ。まるでもんぺだ、とゼロンに言ったら、「アサヌマ推奨女性用活動着、略してモンペ」と教えてくれた。まったく略してはいないけれど、アサヌマさんの偉大さだけは思い知った。男性用のいわゆるズボンと形がちがうので、あまり抵抗なく着られるのだそう。

もっとも、田舎でおばあさんたちが着ているようなものより少しスタイリッシュだ。幅も狭く細身で、裾をリボンで絞るようになっている。白や生成りのチュニツクと同系色のもんぺスタイルは、アラビアンナイトに出てくる子どものものでとても可愛かった。

この改良版を世に広めたのが、元下着メーカー勤務のナガヤマさ

んだ。ジェナいわく、たった一年でオージェルム女性の意識改革を行った歴史的人物、らしい。ナガヤマさんについて語るジェナはなぜか本意そうだったけれど、やはり尊敬の念を隠してはいなかった。

ヤヨイも面識はないものの、ナガヤマさんには感謝している。

こちらで最も不安だった、生理用品の仕様を近代的に確立してくれた功績は大きい。

昨今流行のエコスタイルで同級生も話題にしていた、布ナプキンを開発しておいてくれたのだ。防水布にあたるものがないので厚手の革をベースに代用しているが、それでも様々な不安と不快感を軽減してくれる。

これができるまではボ口布をはさんでおとなしくしていたそうだから、ぞつとしない。

閑話休題。

ジェナが用意してくれた服は、ほとんどブラウスとスカートのツープースだ。無地が多く、裾や袖先にぐると模様を入れたものが目立つ。それにあわせる靴はペタンとしたパンプスのような形で、このワンピースには……はまりすぎて少し苦しい。

「うーむ」

ベッドのうえにあぐらをかき、腕を組んでうなる。

ヤヨイははつきり言って、ファッションに詳しくない。

塩おにぎりだけのお弁当を見られたくなくて、昼休みはいつも一人で過ごした。同級生が雑誌をめくるのはたいていその時間だったし、授業の合間の休み時間もできるだけその輪に近づかないようにしていた。

きれいな小物や、可愛い服は嫌いじゃない。けれど、それを手にすることはかなわない。

いつか自分が大人になって就職して、自分のことに回せるお金ができてから。

そう思っただ我慢しているうちに流行にうとくなり、そのうちおしやれへの探究心もしぼんでしまった。きれいな小物も可愛い服も、素敵だと思っただ感覚はあつてもほしくはないのだ。たとえ手にする機会があつたとしても、それをどう扱っただいいのかわからない。

だからいま、おばあちゃんのワンピースを、ちょっと……そう、アレだなと思っただいても、どうしたらアレじゃなくすることができなのか。途方に暮れそうだった。

「うーむ……」

今度は腹の底からうなり声をしぼり出し、ヤヨイは鼻から息をついた。ふと思っただ立ち、ジェナがくれた小物をワンピースの横に並べてみた。

ピンクのリボンを巻きつけた麦わら帽子、つばの広い白い帽子。葡萄を象つた銀のブローチ。不ぞろいの色水晶をつなげた革紐のペンダント。トンボ玉のペンダント。

黒い薄手の地にビーズを縫いこんだショール。ひざ掛けにもなる大判で、董色の毛織のショール。

敵の大將は、白地にベージュとピンクの小花を散らした膝丈。スタンドカラーの縁にはフリル、咽喉元から胸までボタンでとめるようになっている。秋口にぴったりの、薄手だけど長袖で手触りのいい布だ。しかし扱っただづらい。

ヤヨイは袖に縫いつけられた共布のくるみボタンをいじりながら、じつとワンピースを見つめた。

悩んでも困つてもこれを着よう、と思っただことには理由がある。

この服の縫い目はバラバラで、上手なところと下手なところがある。一枚の服を、大勢のおばあちゃんたちが縫っただくれたからだ。

袖をつけたのはだれそれで、襟のフリルは自分のウェディングドレスからはずして、くるみボタンはだれだれのアイデアで……夕食後のお茶の時間、服を差し出しながら、なかなか渡してくれない口マおばあちゃんは、嬉しそうだった。ヤヨイは一つ一つ示される箇所を一緒に眺め、解説を聞いて一緒に笑った。

この地区には若い人がいない。みんなイゼじいさまと同世代で、子どもたちは別の場所に住んでいるという。だから『外』からの人間を迎えること以上に、ヤヨイがここで暮らすことを喜んでくれた。たった三日で、暗くなったらよく見えない目をシヨボシヨボさせながら、ヤヨイのために縫ってくれたワンピース。自分たちと同じデザインの服。最高に素敵だと信じて疑わないデザイン。縫い目が不ぞろいだろうと古臭かろうと、ヤヨイは心から幸せだった。

「……よし」

ぱん、と手を打ち合わせ、立ち上がる。

ウェンディが着ていそうな寝巻きを脱ぎ捨て、自前のスニーカーを身につける。それからワンピースをかぶり、胸のボタンをとめようとしてやめた。少し開き気味にし、そこから見えるように水晶のペンダントをかけ、革紐を二重に巻いてチョーカーにする。

黒のシヨールは腰に巻いた。高すぎず低すぎないように注意して、右の腰で結ぶ。

ちよつと考えて、靴は『落下地点』の野歩き用にヒロがくれたシヨートブーツを選んだ。

「どうよー、いいんじゃない？」

これでジージャンとかテングロンハットでもあつたら、ファッション雑誌のモデルみたいじゃなかるうか。ちがうか。たとえ中身がどうであれ、参考イメージにかなり近づいた気がしてヤヨイは嬉しくなった。

(おしゃねするって、こういうこと)

常にならない高揚感を味わいながら、ヤヨイは自分の部屋を出た。

石畳で舗装された王宮までの道のりはアップダウンの連続だ。

朝食でぱんぱんに張ったおなかをこなすにはちょうどいい。ヤヨイはお散歩の定番を口ずさみながら、お弁当のバスケットを振って歩いた。この坂道は二十分ほどで終わりを告げる。

王宮の正面にある大きな門の前には、門番が立っていた。ヤヨイはおばあちゃんが持たせてくれたクッキーの包みを、門番のおにいさんに差し出した。

「ご苦労様です。今日のはお酒が入ってるから、勤務中に食べちゃダメよっておばあちゃんが」

長い槍を脇に抱え、革鎧を着たプロレスラーみたいな体格のおにいさんはニカッと笑った。

「ありがとう、ヤヨイ。ロマばあさんによろしく」

イゼじいさまが警備隊に勤めていた頃から、おばあちゃんは門番に差し入れをしていたそうだ。

その日のシフトは当日の朝にならないとわからない。でも毎日持っていけばおじいちゃんに食べてもらえることもあるでしょ？ おばあちゃんが微笑む横で鼻を鳴らしたおじいちゃんの様子からして、結婚前、へたすると交際前からの習慣だったのかもしれない。

健気で気が長くて、すごく可愛い。

ヤヨイは足取りも軽く、通用口へと向かった。

警備隊の詰所に顔を出すと、顔見知りになった兵隊さんたちが笑顔で迎えてくれた。ヤヨイの立場は普通の使用人や勤め人とちがうので、朝晩必ずここに立ち寄るようになるといわれているのだ。危害を

加えられていないか、などの確認だろう。

「おはようございます！ では仕事に行ってきます」

額に立てた掌をあてて敬礼をすると、何人かがおもしろがってそれを真似した。王宮にいる兵隊さんは、右手を左肩にあてて敬礼をする。ヤヨイの敬礼だってこの国のどんな軍隊のものかわからない適当さだが、親近感のようなものを覚えるらしい。

薄暗い石壁の廊下を歩くと、ブーツの踵がゴツゴツと音を立てた。ヤヨイのイメージでは、お城といえば王様が暮らしているところだった。しかしここはちょっとちがう。町をぐるりと囲んだ城壁の中を全部指して城、と呼ぶのだ。だからルーヴェンに「自分は城内育ちだ」とあっさり言われたときは、猛烈な違和感を感じた。

ヤヨイが思うお城にあたるのが王宮と呼ばれる建物。無骨な石造りで、銀色の鎧兜を身につけた騎士が剣を振り回して出てきそう。一番高い部分で八階相当になるらしい。いくつかの建物があって、渡り廊下でつながっている。全体を見渡すと怖ろしい広さだ。

ものすごく大ざっぱにいつて、コの字を四十五度回転させたような形か。

正門前の建物が一番大きく、ヤヨイの勤務先である書記室は、西の小さな建物の二階にある。書庫はそのはじっこだ。

書記室には、原則関係者以外立入禁止になっている。

王宮に届いた手紙の内容を検めたり、お役人が王様たちに提出する書類の清書などもするし、王宮見取り図のコピーを保管してもいるからだそう。とにかく機密文書を扱う部署、と考えて間違いないだろう。

なのでヤヨイは、いつも入り口で挨拶をしたらさっさと書庫へこもることにしている。部屋に入っても怒られはしないだろうが、ここでも正社員とバイトの間に横たわる溝のようなものを感じていた。

ところが今朝は、挨拶をする間もなく室長に呼びとめられた。

「少しいいか」

親指で廊下の先を示され、そんな粗野な仕草にもヤヨイはときめきを隠せない。

その広い胸に飛び込んでしまいたい、という欲求は自分でもうろたえるほど強烈で。書記官たちがこちらをうかがっていることには気づいていたが、もうあきらめた。

あの食堂の一件からこちら、こつという視線にさらされ続けて耐性がついたのかもしれない。

ヤヨイが任された書庫は、書記室から百メートルほど離れている。そこまで行つて足を止めた室長は、おもむろに振り返って高みからヤヨイを見下ろした。

「ルーヴェンに聞いたが、書庫でグレイヴ殿下に会っているのか」
脳髓に染みこむ低音の、だが縁起の悪い名前にはっと息を飲んだ。

会ったもなにも。

張り切つて出勤した初日の朝っぱらに見舞われた不運は、忘れたくても忘れられない。

（そつえばあの王子、どさくさにまぎれてセクハラを）

無断で人を抱きしめて、あまつさえ頭に頬ずりなぞしおつた。思い返せば初対面、湖の畔でも同じような真似をされた気がする。

「ヤヨイ？」

返事を促す問いかけに、王子の首を絞める妄想を打ち切る。

「いやあの、会っているというのは語弊があるというか、勝手に来たというか……」

決して示し合わせてのことではない、と主張すると、室長は舌打ちした。

「あのガキ……色気づきやがって、案外手の早い」

聞き違いかと思つて室長を見上げるが、不穏当な発言に関してはなんの説明も釈明もない。

「あの中でも、別に表立って騒ぐほどなにかされたわけでも……」

自分が責められているような気分になって、ヤヨイはなんとなく言い訳を試みた。しかしヤヨイに向き直ったガルム室長は、厳しい眼でその試みをあつさり無視した。

「ヒロから聞いているだろう、近衛の奴らに近づいてはいけないと」

「あの、はい……。色々な事情を自分できちんと理解できるまでは、接触をもたないように」

それはなにも、近衛騎士だけに限った話ではなかった。極論すれば警備隊の面々と書記室の係官以外、口を利くなという忠告だった。『外』の人間がなぜ優遇され、あるいは疎まれるのか。本当のところはまだよくわからない。騎士でないルーヴェンが堂々と『外』を好きだと言わない、そのわけも。ただ色々と複雑なのだろうし、説明されてもきつと頭も心も追いつかないと思うのだ。

だからヒロの言いつけはちゃんと守っている。……はず。

ヤヨイは怪訝な面持ちで、文官とは思えないほどたくましい腕を組み、目を眇めて自分を見下ろす室長を見つめた。鼻血が出そうになつてすぐにそらしたが。

そらした視線の先——廊下をはさんで書庫と反対側の窓を見やると、内庭の木立の合間に背の低い建物が見えた。オレンジ色の瓦を載せた屋根。そのあたりに運動場もあるらしく、時々風に乗って大勢の野太いかけ声が聞こえてくることがある。ギインというかゴインというか、ガチーンというか、そういう耳慣れない物音も。

運動会で見せ場を作るほどではないが、身体を動かすことは好きだ。スポーツ観戦も。覗きに行きたいと思うものの、なかなかそうする機会もない。

室長はまだ同じ姿勢でヤヨイを見ている。なにか考えごとでもしているのかも。王子にそうされるのは息が詰まるが、ガルム室長なら許せてしまう。胸がドキドキして落ち着かないけれど、決して嫌ではなかった。

ふとオレンジ色の屋根の下から、団体さんが歩み出てくるのが見えた。

紺色の上着と白いズボン。揃いの制服に身を包み、三々五々散っていく。

——あの上着、見覚えがありはしまいか。

「……もしかして近衛騎士の上着は紺色ですか？ ボタンが銀色で、少し大振りで……」

おそろおそろ尋ねれば、果たして室長は小さくうなずいた。

「通用口から警備隊の詰所を通って来ると、奴らに出くわすことはない。ここに奴らが現れることもない。……原則としてな」

だがヤヨイは、もしかしたら例外を知っている。

「——まさか、王子って」

不吉な予感にふるえながらつぶやくと、ガルム室長は片眉を上げ、首をわずかに傾けた。

「グレイヴ殿下は王太子殿下の近衛隊長の任に就いている。そして奴らの活動拠点は、すぐそこだ」

おとなしく警護されてりゃいいものを、と小声で吐き捨て、室長は顎を上げた。

「あの書庫をおまえの私室がわりにしていい。一度味を占めたからには、今後は頻繁に殿下が訪ねてくることになるからな。ただし、他の場所で会うことは許さない」

ヤヨイにとってそれは、死刑宣告にも等しい言葉だった。
それだけ告げると、ガルム室長は書記室へと戻って行った。

「うっそ……」

どうしよう、ヒロに怒られる！ と青ざめた瞬間、ヒロが王子の所属を知らないはずがないことに思い至る。そして王族は大体が『外』趣味だ、最も近場のヤヨイに接触を持っても不思議はない。

なにより室長は王子と会うことを認めた。——でも、近衛騎士に接触することにいい顔はしなかった。

「……？」

軽いパニックに陥る。背後で外階段へ通じる扉が開いたことにも気づかなかった。

不意に立ち尽くす肩を叩かれて、ヤヨイは「ひい！！」と悲鳴を上げた。

銀の四角いお盆に敷かれた白い紙。

その上に散らばった、茶色くてつややかで、小さな塊。

ヤヨイは本の山の横に置かれたそれを、じっと凝視した。

「……なんですか？」

「おまえたちが言うところのチョコレートだ」

突然現れてお盆を机に置いた人は、心持ちのけぞりながらそうのたまった。まさかガルム室長に死刑宣告を受けた直後に来やがるとは。

おはよう、でもなければ差し入れだよ、でもない。無言で肩を叩き、書庫に引きずり込まれ。四日前のあれきりだったのに、それに触れるわけでもない。

「いえ、それは見ればなんとなく……。なぜですか？」

振り上げた眼差しに若干の非難を込めて見つめると、紺色の瞳と目が合った。三郎王子はたじろいだように口をすばめ、そっぽを向いた。

ぱた、と風に揺れたカーテンが鳴った。

(……なんなのよ)

ヤヨイが城に着いて三十分とたっていない。時計がないから正確にはわからないが、とにかく昼食にも、ましておやつの間にもまだ遠い。ガテン系のように十時のお茶をする習慣などないはずだから、するとこれはどんな大義名分を背負ったスイーツになるのだろう。

王子は立つたまま横目でヤヨイを見つめているが、熱心に味見を勧める素振りもない。

本当に、どうしたらいいのだろう。わたしにどうしろというのか。ヤヨイは肩を落としてため息をついた。

お客様にはお茶を出す、というのはこちらにも共通の習慣だ。

だがこの部屋にお茶の用意などないし、さりとてお弁当と一緒に持ってきた水筒を差し出すわけにもいかない。そもそも彼が長居をするのか、謎の差し入れを置いてすぐ帰るのかもわからない。

憂鬱の元である人物を上目に睨むと、彼は目が合うなりさっと踵を返した。出て行くのかと思えば、わざわざ机を回り込んでヤヨイの隣に腰を下ろしてしまった。

机に向かっているヤヨイの脚に、窮屈そうに折り曲げた膝があたる。

余裕をもって椅子を並べたって十人は座れそうな机である。なぜこんなにも距離を詰められているのか。王子の意図がわからず、ヤヨイは椅子の座面を持って腰を浮かせ、十センチほど横に移動した。

「……食べないのか」

地を這うように恐怖の声音に、ヤヨイはびくつと肩を揺らした。

隣を見やると、据わった目をした王子がヤヨイを睨んでいる。それが仮にも国王の庇護下にある人間を見る目か、と指をつきつけたい衝動をこらえ、こくりとつばを飲む。

しばしの沈黙をはさんで、王子はくいつと顎先でチョコレートの並んだ盆を示した。

食べる、と。

「あの、断る権利というか……好きか嫌いかを表明する権利は――」

ないですね、はいしません」

おそるおそるうかがった王子の眉尻が鋭角に上がった。

口金から搾り出した生クリームのような形。焼く前のクッキーにも似ている。ぱつと見て十五個はありそうだ。

王子は無言。これ以上一言でも口を利けば容赦しない、という空気が漂っている気がして、ヤヨイは胃が痛くなつた。

ルーヴェンにも言ったとおり、甘いものはあまり得意ではないのだ。ジュースやお菓子というものは文字通りの贅沢品、嗜好品なので、口に入らないことのほうが多かった。あればつまむこともあるが、積極的に求めようとは思わない。

もしもすぐに、この場でそのチョコレートをすべて食べると言うのであれば、それはヤヨイにとって嫌がらせの域を超えている。

ロマおばあちゃんに会って最初に聞かれたことも、食べ物が好き嫌いはあるかということだった。選べるほど豊かな食生活を送っていなかったたので、そのときもやはり特にないと答えた。しかしその日の夕食で後悔したのだ。巨大パンケーキの山盛りジャム添えを饗されて。もちろん頑張つて食べたけれど、涙目だったことはバレていた。

だからおばあちゃんはお菓子作りが上手だけれど、無理にゴージャスなものを食べさせようとはしない。せいぜい門番に差し入れるのと同じクッキーを数枚、お茶に添えるくらいだ。

もっとも、オージェルムでチョコレートといえは高価なお菓子。原材料の入手を南方からの輸入に頼らざるをえないからだろう。ゆえに幸いにも、うんざりするほど食べさせられるということはなかったのだが……それも今日までのことが。

胃が痛い。そして重い。

と、泣きそうな思いで見つめていた盆が、ずずいと机をすべってヤヨイの正面にやってきた。縁にかかる幅広の指輪をはめた長い指その先を目でたどることは、怖ろしくてできなかった。

ヤヨイは静かに、ふるえる手を持ち上げた。得意ではない、少し苦手なだけだったはずの甘味の塊が、この瞬間から恐怖の対象に二階級特進だ。

優に五百円玉を超える直径のそれをつまみ、思い切って口元へ運ぶ。チョコレート特有の香りが鼻を刺激し、バレンタインシーズンのスーパ―を思い起こさせた。

「い……いただき、ます」

中世ヨーロッパ、女性が主人から死を賜るときにはたびたび毒が用いられたという。ワインやジュースに溶けたそれをあおるとき、彼女たちはきつとこんな気持ちになっただろう。

悲壮な覚悟を決め、ヤヨイはチョコレートを口に放り込んだ。即座に融けて舌にまとわりつく食感は、やや脂肪分が多いようでありとしつこく、飲み下すのがためらわれた。久しぶりに食べたせいか、記憶の味よりさらに七割り増しくらいで甘い気がする。

持参した水筒の場所を頭の中で確認しながら、ヤヨイは王子を恨みがましい目で見た。一体王族というだけで、こんな横暴が許されるものなのか！

——許されるのだろう。

鼻から抜ける甘い匂いを感じないよう、呼吸をとめて唾液と一緒に咽喉の奥へ流し込んだ。

無理。もう無理。なんといわれても無理。

「じ、ごちそうさまでしたっ」

もう一個、と強要される前に。ヤヨイは振り返りざま机の上にあつた王子の肘をつかみ、もうやめてと精一杯目で訴えた。にじんだ涙で視界がぼやける。

王子の目元がうつすら赤い。

「あ、ああ」

せわしなく瞬きしながら、泳ぐ視線。やがてヤヨイの上でとまつたそれが、まっすぐに目を見つめてくる。

先ほどまでの威圧的な態度はどうしたことが、ひどく頼りない表情だ。ヤヨイはチョコレートが融けながら体内を滑り落ちていく感覚を味わいながら、呆氣にとられて見つめ返した。

ばたばた、とカーテンがかすかに鳴る。

遠くでドアが閉まる音。遠ざかるだれかの足音。

引き合うようにからまる視線。

（——なんだこれ）

王子の緊張につられるように、ヤヨイの心拍数も上がっていった。どのタイミングで目をそらせばいいのか、皆目見当もつかない。

長い睫毛が、ゆっくりと上下する。風を起こしそうなそれを観察しながら、ヤヨイはふと、彼は女嫌いではなく女性と接する機会がなかったせいで免疫がないのでは、などと考え始めていた。

毎日食堂と一緒に昼食をとるルーヴェンは、三郎王子について様々な情報を与えてくれる。

いわく、乳母や侍女の手に負えないほどヤンチャだったために、国王の近衛騎士隊に預けられ、むくつけき男たちに育てられた。十三歳で従騎士になるころには立派な女嫌いで、香水のにおいをさせたり高い声でしゃべる女性がいると斬り殺したくなるらしい。などな

ど。

香水や高い声が我慢ならん、というのは周囲の仲間に対するポーズであり、どう扱ってよいかわからない女性に対する強がりだったのではなからうか。王家の男性はみな金髪で、それがモテる男の基準でもあるとルーヴェンは言っていたから、コンプレックスもあったのかもしれない。

そう考えれば合点がいく。

おしゃれにうといヤヨイは化粧品や香水など使わないし、一人であることが常態化していたからおしゃべりも得意ではない。彼の髪など、たとえ七色のアフロでも気にしない。

ヤヨイのことを少し女っぽい少年、と思って接すれば、なんとかならないレベルではないと判断したのかもしれない。

（だけどそれすごい迷惑——いやいや荷が重い）

ヤヨイで苦手を克服しようというのはいい。新しい一步を踏み出すことにはひどく勇気が必要だし、精神力も要求される。

ただ、その作戦を実行に移す前には是非、ヤヨイの意向を打診してみてほしかった。

「あの……」

小さく声を上げると、王子の目に生氣が戻った。

ヤヨイの手から肘を引き抜き、横を向いてなにかつぶやいている。ヤヨイも背筋を伸ばして椅子に座りなおして、拳動不審な王子から机に向き直った。と、目の前の盆にぎょっとし、いまのうちに王子の死角まで押し戻しておく。

やがて自分を取り戻したのか、ひとつ息をついて髪をかき上げた王子が突然話し始めた。

「……夕食を用意させるから、終業後、ここで待っている」
言って立ち上がった王子の声に、険しいものはなかった。しかし再び不愉快にさせてしまうとしても、その命令は聞き入れることができない。

「あの、無理です！」

立ち去りかけた背中に叫ぶと、振り返った王子は案の定不快げに眉を寄せていた。

「なんだと？」

低められた声。だがヤヨイは決然と言い放った。

「今夜はおばあちゃんと一緒にお夕飯を作るって約束してるんです。だから、無理です」

王子は幽霊でも見たような顔をした。

3（後書き）

別の視点から見たお話を、別枠でご用意しました。

だれもかれもウダウダと悩んで考え込んでいる話ですが、本編を補うようになっていきます。

「along the way to her」というタイトルですので、

お暇なときにもぜひ・・・。

他人と関わるのは面倒くさい。

話を合わせるところから始める必要があるのに、情報収集の手段はない。宿題への不満と先生の悪口だけでは、真の友情は築けない。顔をうかがってまでトモダチになっていたのだきいたとも思わない。

朝起きてから夜眠るまで、自分が貧しい家の子だと感じながら生きていた。同情も侮蔑も受け流せるほど人間ができていなかったの、様々な感情を持て余して疲れてしまった。一人でいるのが楽だった。

必死で働く両親の所得は決して低くなかったはずだが、家賃や学費などの必要経費を除き、ギリギリまで借金の返済に回していた。自己破産すればいいのに、と言ったら、悲しそうな顔をさせてしまった。

アルバイトの給料は好きにしなさい、とお母さんは言うけれど、だからって好きにできるほど神経が図太いわけもなく。家計に入れると言いつけて、申し訳なさそうな顔をさせてしまった。

学校だけでなく家にいてさえ、人と関わるのが億劫になってしまっていた。

だからどうしたかというつまり、事なかれ主義を貫いてきたヤヨイの人生において、これほど傍若無人に振る舞われた経験はかつてないということだ。

書庫以外では絶対会えない、という訴えだけは聞き入れてくれた。だからって、書庫でなら食事をとにする、と言ったわけではなか

ったはずだ。終業の鐘を待ちかねたように雪崩れ込んで来た三郎王子の使用人たちには度肝を抜かれた。

この人はなにがしたいのだろう。

ヤヨイはとつくに食事を終え、悠然とグラスを傾ける人を半目で睨んだ。数個の蝋燭が放つ明かりの中、うつそりと聳え立つ書棚を背負っているあたり、ものすごい違和感だ。

ヤヨイをかばってひっくり返ったり、チョコレートを食べさせたり、よくわからないタイミングで勝手に触れてきたりはしたけれど、これといって中身のある話をしたわけではない。ただ怖い顔で睨み、時折会話ともいえない言葉を投げてくるだけだ。

なんの目的があつて、ヤヨイの前に現れるのだろうか。意味がわからない。

将来に備えて女嫌いを克服したいというのなら、その姿勢からまず改めるべきだ。いい線いつてはいると思う、泣いてる女の子を慰めてみたりしたわけだし。

ただ、そこで上がった好感度をゼロにしてさらにマイナスするほど、勝手なだけで。

こうして強引に夕食に誘ったくせに、場を盛り上げようという素振りもない。

電話がほしい。しかも携帯電話が。持ったことはないけれど。

王子が不可解なことをするたびに、ヒロにかけて問いたただすのだ。これはこちらの常識ですか、と。……ヒロは大学でなにを学んでいたのだろう、もしかして電話くらいちゃちゃっと作れたりしないだろうか。無理か。

しんと静まり返った室内に、場違いなほど繊細な装飾の銀器と皿

が触れ合う音だけが響く。侍女や給仕は追い出され、ヤヨイがこぼしたため息が、やけに大きく聞こえた。

「……憂鬱そうだな」

テーブルの向こうから指摘されても、もう否定する気にもならない。ただ黙々と手を動かし、調理されて美しく盛りつけられたなにかの肉を切り刻む。

「こちらの食事は口に合わないか」

抑揚のない問いには、小さく首を振って答えた。

ヒロと一緒に仕事をしているジェナは、共働きのお母さんのようなスケジュールで一日を過ごした。必然的に腕をふるうのは夕食で、時間のかかる煮込みなどはあまり出されなかったけれど、そのかわり炒め物やサラダのレパートリーは多かった。

逆に近所のおばあちゃんたちとおしゃべりをする以外に仕事のないう口マおばあちゃんは、調理用ストープにお鍋をかけない日がない。野菜や肉を煮込まない日は、作り置きするためのソースを煮詰めていた。

醤油が恋しい。でもそれだけだ、食事で困ったことはない。食べられるだけで幸せだ。

ヤヨイは皿の上の肉をすべて一口大以下に刻んだ後、つけあわせの野菜にナイフを入れた。賽の目になっていくニンジンに、なんとなく給食のミックスベジタブルを思い出した。

「……『外』の人間は、こういうとき礼儀正しく愛想よく振る舞うものだと思っていた」

偏見だ。きつと心細くて萎縮する自分を奮い立たせて、精一杯その場を乗り越えようとしただけだ。

肉もニンジンも原形を失ってしまうと、ヤヨイはナイフを皿の隅

に置いた。のろのろとフォークを右手で持ち直し、肉を一かけら刺して口に運ぶ。きつとマナー違反だろうが、知ったことかという気分だった。

食欲などほとんどなくても、食べ終われば帰れると自分を励まして機械的に料理を片づけた。二種類のワインと三種類のジュースには、まったく手をつけなかった。

最後のニンジンサイコロを口に入れたとき、ちょうど給仕が食事の進行具合をうかがいに来た。十代半ばと思しき少年は、二人の皿が空になっているのを見て引込み、すぐにデザートを持って戻ってきた。

ヤヨイの前にだけ置かれた皿の上には、カットされた果物と大人の拳大のババロア。勘弁してくれ、と内心号泣したいところを飲み込んで、やたらと大きなデザートスプーンを取り上げる。

だがこれで終わりだ、拷問のようなひと時から解放されるのだ、と思ってもなかなかスプーンが進まなかった。

——もう食べられない、と言って席を立とうか。

食べ物が無駄にしたことのないヤヨイがそこまで思い詰めたとき、コトリと音をたてて王子のグラスがテーブルに置かれた。

「……ヤヨイ」

それはどこか戸惑いと、気遣いを含んだ声音だった。

「なにが不満だ。家には使いを出したし、『外』の人間が好みそうなものを用意した。あとどうすれば、そんな顔をさせずにすむんだ」

脈拍ゼロの心電図のようだった感情が、一気に跳ね上がった。

思わず顔を上げて王子を見つめると、彼はテーブルに身を乗り出し、困惑した面持ちでヤヨイを見ていた。

本気だ。本気でわかってない。

「……わたし、あなたを知りません」

訝しげに眉を寄せる王子は、だが口を挟まずヤヨイの話を聞こうとしていた。

「ヒロに紹介されたから、王子だってことはわかります。ガルム室長から近衛の偉い人だってことも聞きました。でも、それだけです」
「……………」

「あなたはわたしを知ってるかもしれない。『外』の人間は珍しいから。そしてあなたもこの国では有名人かもしれない。でも、わたしたちの間にはなにもない」

顔と名前を了解している、それだけの関係では抱き合ったり食事をともにしたり、そういうことをしてはいけないとヤヨイの常識は訴える。

もし友人の少ないヤヨイに手を差し伸べているつもりなら、もう少しだけゆっくり、歩調を合わせてほしかった。
彼が女嫌いを克服したいように、ヤヨイだって人づきあいが上手になりたいのだ。

ヤヨイは王子の瞳に理解の光が宿るのを待った。耳が痛いほどの静寂の中、朝と同じように見つめあう。だが今回は、ヤヨイの緊張が王子に伝染していた。

ほどなく、王子はほつと息をついて身を引いた。

「なるほど……………」

場を取り繕うようにワイングラスを取り上げた指は、かすかにふるえている。それを見た途端、後悔の念が湧き上がった。

ヤヨイたち『外』の人を庇護してくれるのは国王だが、彼はその息子だ。絶対に害してはならないという法律があるわけでなし、不敬罪はヤヨイたちにも無論のこと適用される。

首筋がひやりと冷えた。前にも味わった感覚。いまにも刃物を持

ち出されるのではという恐怖が、遅ればせながらつま先から這い上がった。

カタン、という音に、ヤヨイはびくつと肩を揺らした。立ち上がった王子の影が背後の壁に映り、青ざめる。

だがテーブルを回り込み、ヤヨイの傍らに立った王子は、おもむろに片膝をついてかがんだ。

「俺の名はグレイヴ・サブロウ・オージェルム。二十歳、騎士団に属しロアード・タロウ王子の近衛騎士隊を率いている」

ヤヨイはその姿にあっけにとられた。理不尽な命令を突きつけるばかりだった傲慢な空気はそこになく、ただ真摯な瞳がまっすぐにヤヨイを見つめている。

「俺はおまえのことを知りたいし、おまえにも俺のことを知ってほしい」

返答を促すように首をかしげた王子の肩から、チョコレートブラウンの長い髪が一房落ち、そのとき初めて彼が髪を結っていないことに気がついた。

「あ……あの、佐々木弥生、です……。あ、ヤヨイ、です。十七歳で、書記室に所属してます。『外』から来ました。……あんまり甘いものが、得意じゃありません。あと、ほんとには普通の騎士と近衛騎士のちがいが、よくわかってません」

くす、と、王子が笑った。屈託のない、子どものような笑顔。

さらりと髪を流して立ち上がった王子は、てれたように顔をそむけた。

「俺に膝をつかせた人間は、両陛下と兄上をおいて他にない。光栄に思えよ」

「そんな、勝手にやったくせに——すみません、ありがとうございます」

ます光荣です」

一転高圧的な視線を向けた王子は、すっかり元の調子を取り戻しているように見えた。

ただそこに安堵と親近感を滲ませているように感じるのは、ヤヨイの希望的観測だろうか。

肩の力を抜いてババロアに向き直ると、おいしそうに見えてくるから現金だと自分でもおかしくなる。スプーンを持つヤヨイの横で、王子はテーブルに腰かけて身体をひねり、自分の席からワイングラスを引き寄せた。

（そこで飲むのね……）

口元を引きつらせるヤヨイの目線で、意外と傷みのない毛先がチラチラと揺れる。スプーンに掬い取ったババロアを口に運びながら、なんとなく髪を指でつまんだ。

「今日は、しばってないんですね」

すると王子は大袈裟なほど驚き、素っ頓狂な声を上げ、

「えっ！？ あ、そ——」

絶句した。

蠟燭の灯りにも見る見るうちに顔が赤らむのがわかる。王子はヤヨイを見下ろしたまま拳を口にあて、ヤヨイはスプーンをくわえたまま一緒に固まってしまふ。

（またこの展開か——）

さすがに冷静に受け止めながら、ヤヨイはこうして見つめ合ってしまう原因を分析した。

ヤヨイが日本人のくせに人の目をじっと見る癖があるのも問題か。そして三郎王子がテンパリやすい人であるという不幸な偶然が重な

って、結果微妙なことになってしまっただ。

相性が悪いのだろう。

焦点をはずしてぼんやりと紺色の瞳を見ていたヤヨイは、すでに長期戦の構えだ。が、今回王子は立ち直るのが早かった。免疫がついたのだろうか。

ぎこちなく視線をはずし、こほんと咳払いを一つして、

「ま、また結いたいならそうしてもいい」

などと嘯く頬は緩んでいる。

「はあ……」

ヤヨイはつまんでいた髪を指先でくるりとよじり、ぱっとはなした。

「べつにいいです」

「は？」

意味がわからないといった風に聞き返す王子を、ヤヨイはもはや視界に入れてはいなかった。

「それだけバラけてたら櫛がないと束ねられないし、三つ編は嫌いみたいだから」

「い、いや嫌いなわけじゃ——そう、身体を動かすにはちょうどよかった、邪魔じゃなくて。だから」

「これから訓練でもあるんですか？」

果物を咀嚼しながら、王子の手にあるグラスを見やった。普段どれだけ飲むのか知らないが、晩酌の後でもサボらないなんて剛毅なことだ。あえて心臓に負荷をかける訓練か。

ヤヨイが見ているものに気づいた王子は、ヤヨイの顔とそれを交互に見やり——うなだれた。

「……髪を、結ってくれ」

「へ？」

デザートを食べ終えたヤヨイは、ナフキンで口をぬぐったところだった。

「櫛もないし訓練もしないが髪を結ってくれ！」
テーブルから飛び降りて叫んだ王子は、なぜかワインのグラスを
ヤヨイに突き出していた。

（濃い一日だ……いま何時だろう）

おなかもいっぱいだし、規則正しい生活をしているヤヨイは軽い眠気を感じていた。午後九時を回ったくらいだろうか。日の入りとともに一日を終えるこの国では、すでに深夜といってよい時間帯だ。

傍目には非常に奇妙な光景だろう、と鈍い痛みを訴える頭で思った。

ヤヨイも王子も椅子の背もたれを左にして、「進行方向はあちら！」とばかりに前後になって座っている。王子は妙にびしっと背筋を伸ばしているし、ヤヨイは逆に完全な猫背だ。

いささかならず乱暴な手つきでチョコレートブラウンの髪を梳いていると、幾筋かが指の股にくんと引っかかった。小さく声が上がったのを聞き、肩越しに顔を覗き込んで、

「すみません、痛かったですか？」

と尋ねてみるも、痛いに決まってるのに王子は無言で首を振った。

いつまでも食堂に陣取っていたのでは使用人が帰れない、と王子は自分の部屋へヤヨイを招こうとしてくれたのだが、まったくもって申し訳ないが居残っていたきます、と言い張った。ガルム室長の言いつけは、既にヤヨイの中で絶対だ。

帰れない使用人はここにもいるぞと声を大にして主張したいところではあるものの、せつかく改善された関係に配慮した。

王子は直接の保護者ではなくとも、そこに連なる人の機嫌を損ね

るのは得策ではない。いまヤヨイの生活基盤を支えているのは、日本国憲法に保障された権利ではないし、ヤヨイのために闘ってくれる弁護士も人権委員会も存在しないのである。

しかし夜更けの書庫。見ようによつてはムーディな部屋の中で、年頃の男女が二人きり。多少の警戒心を持つて臨むのは乙女の常識であつて、決して王子様を軽んじているわけではない。

なによりあらためて髪に触れるという行為が親密なものに思えてきて、どうにもヤヨイを気まづくさせた。

だからあえてそういうことは考えないようにしているのに、時折こちらを振り向く王子の視線が、いまワタシタチは妙な関係になりつつあるのですヨと言っているようで落ち着かない。

黙っているとそれこそ妙な空気が充満しそうで、ヤヨイはわざと素っ気ない言葉を吐いた。

「動かないで下さい、せっかく梳いたのにまたからんじゃうじゃないですか」

「あ、ああ……すまない」

戸惑う返事になぜか激しく動揺し、しかし平静を装つて長い髪に手を入れる。今日もつるつるとした手触りは健在で、「シャンプーはなにを使つてますか」とベタなことを聞きたくなった。

「……髪、綺麗ですね」

かわりにあたりさわりのない感想など述べる。少しうつむいていた王子が大きく振り返ろうとするので、いつぞやのように頬をはさんで前を向かせた。

「……焦げた木材みたいだろ」

ヤヨイは思わずぶはつと噴き出した。すごい表現だ、チョコレート色よりよほどいい。

「おまえが笑うのも無理はない。王家の直系男子の髪はみんな金色だ」

すねた声音に、ヤヨイは自分の推察が的外れではなかったと確信を強めた。

容姿のコンプレックスというのはおそろしい。これだけのイケメンに女嫌いを偽装させるのだから。ここは一発、多少のフォローをしてやるに吝かでない。

どうしたものかとしばし考え、ヤヨイは三つ編を結いながらそばそと言った。

「わたしのいたところではみんな、わざわざこういう色に染めてました。いいじゃないですか、金髪は老けて見えるしこのほうが天使の輪が映えますよ。天然とは思えないほどストレートだし、つやつやツルツルのキューティクルばっちりで」

言いながら惨めになってきた。さすがに慰めてほしいのは自分のほうじゃないかと思う。嫌いだって言うのなら、なんでこんなに長く伸ばしているのだろう。

ヤヨイのフォローをどう受け取ったのか——もしかしたら単語の数々が理解不能だったかもしれないけれど——、王子は黙り込んでいた。やがて毛先まで編んだヤヨイが、そういえばリボンは、と尋ねようとしたとき、小さな問いを向けられる。

「……おまえは、この髪が好きか」

その響きは一般論を求めているいなかった。

三つ編がほどけないように毛先を握り、

「好きか嫌いかなら、好きです」

そう答えた。もし自分が染めるなら茶色だ、金髪は日本人に合わないから、という根拠に基づいて。

「そうか」

つぶやく語尾が笑っていた。喜んでいる。

多少なりとも人の役に立ったならよかった。

ヤヨイもほんのり胸があっただまる心地を味わいながら、ところで

リボンを、と口を開きかけたとき、消え入りそうな声で王子が問うてきた。

「ガラムよりも……？」

瞬間、手の中の髪をぎゅーっと引つ張ってしまった。

「いたたたっ！」

悲鳴を上げる王子は腕を前に伸ばしてバランスをとろうとしていたが、急に身体のを抜いてそのまま仰向けにヤヨイの膝に倒れこんできた。思いがけない重みにまた驚いて、ヤヨイは手を放した。掌に汗が滲んだ。

「おまえなあ……」

じとつと睨むように眇められた目は、だがどこか切なげで。

「だ、だつて」

滅茶苦茶に跳ねる心臓の音はうるさかったが、ヤヨイは下からまっすぐに向けられる視線に気圧されて沈黙した。人生初の膝枕にうるたえる気持ちも消え去った。

人の目を見る癖があるのは、自分だけじゃない。

とくん、と鳴ったのを最後に、心臓は暴れるのをやめた。

蠟燭の火でオレンジ色に深みを増した紺色が、水面のように揺れている。ヤヨイは無意識のまま、操られたように乱れた前髪がかかる額に触れた。縛めを失ったチヨコレート色の髪はぱらりとほどけ、重力に導かれて座面の縁から力なく垂れ下がった。

見つめ合っても互いに硬直していたこれまでと、なにがちがうのだろう。

ヤヨイは陽に焼けた顔の輪郭をたどるように、そつと指をすべらせた。王子の目は強い意思を持って、けれどなにも語らずになにか

を訴えている。

人差し指に指輪をはめた王子の手が、ヤヨイの手をつかまえる。ゴツゴツした大きな手に隠されて、自分の手が子どものように小さく見えた。

掌に頬ずりして愛おしげに唇を寄せられ、吐息の熱さとやわらかな感触に爪の先からささやかな痺れが広がった。

王子は目を閉じ、掌に口づけたまま、ヤヨイ、と音もなくつぶやいた。

息をするのも忘れて見入っていると、羽扇子みたいな睫毛がふるえて、深い黒に染まった紺色の瞳が、ヤヨイを、つかまえようと――

「帰ります」

前触れもなく腰を浮かせたヤヨイの膝から、三郎王子の頭が落ちた。

「わっ！」

「あ、ごめんなさいっ！」

謝ったときにはもう、ヤヨイは部屋の真ん中まで走っていた。身体を起こした王子の顔を見ず、あたふたと頭を下げる。

「今日はごちそうさまでした、ではごきげんよう！」

「ちよ、ちよと待て！ 急にどう――家まで送るから！」

追いつがる声を背中で受けて、飛びついたドアを開けながら首を振った。

「けっこうです、走って帰ります、来ないで下さいい！」

「ヤヨ――」

思い切り開けたドアを力いっぱい閉め、廊下を全力で駆け出した。ランタンを持って壁に寄りかかっていた給仕の少年が、目と口をまん丸にしていた。

（なんか、まずかった気がするっていまの……っ！！）

頭の中でわあわあ騒ぐ自分をどうにかなだめすかして、闇雲に走り回った拳句警備隊に捕まって職務質問をされてから、ヤヨイはようやく通用門から外へ出た。

ほてった顔は夜風に晒してもまだ熱く、掌に残った感触を思い出すたび叫びたくなって、近所迷惑だから叫ぶかわりに下り坂を全力疾走した。

街灯もなく静まり返った暗い道を爆走する自分の足音はどこか遠く、ずっとずっと後ろから追いかけてくるようだった。

この人はなにがしたいのだろう、意味わからん、ヘンな人。思ってた。

オージェルム人のスキンシップは過剰でついていかれん、とも思ってた。

もっと近づいたこともある。広い胸のあたたかさや、ほのかな香水の香りも知ってる。

でもあのとき——空気が、

「——はあああああっ！！」

こらえきれずについには叫ぶと、近くで犬がギャンギャン吠えた。

頭の中で目を閉じた王子の姿がチラチラする。本棚に揺れるオレンジ色の光、縁のぼやけた影。忘れられる気がしなかった。だってそこは、よりもよって自分の職場で。

——ああもうどうしよう、平気な顔して仕事なんかできない！！

ヤヨイは自分が世界一小心者に思えて自己嫌悪に陥ったが、そんな心配はする必要がなかった。

翌朝寝不足のまま出勤したヤヨイにガルド室長が差し出したのは、

ジェイル王子付の雑用係を申し付ける、と記された異動命令書だった。

書記室の入り口近くに立ち尽くし、大きく浮かび上がる単語を声に出す。

「異動——？」

安っぽい画用紙のように厚く粗末な紙に書きつけられた流麗な文字を見つめたまま、ヤヨイは呆然とつぶやいた。

うつすらと透ける文字に気づいて裏返せば、馬を三頭追加するの
で馬房の準備を、という文言が書きかけで終わっていた。よく見たら「三頭」の下に「四頭」と訂正がしてある。

これは……書き損じ？ 屑籠行きの紙をリユースしている？

（王族からの辞令が反故紙で来た、なんというエコ、そして雑用係を命じる文書にぴったりのセレクト！）

感心している場合ではない。

ヤヨイは腕組みしている室長を見上げ、自分から馬房側が見える形で辞令を示した。

「もしかして異動って書いてあります？ わたしに、ジェイル殿下の雑用係になるように、って？」

うつかり他人宛の書類を渡したようだ、という言葉が聞きたい。殿下は宛名もお間違えだな、と。だがガルム室長はヤヨイの言葉を首肯した。

「ジェイル殿下はつかみにくい方だが、おまえには便宜を図って下さるだろう。ご苦労だった。書記室から持ち出している筆記具は持つていったいいい」

いやに素っ気ない口調で引導を渡し、金緑色の瞳を隠すように目を伏せる。ちらとも感情の揺らぎをうかがわせない深い声色で、それでもヤヨイを見限り突き離しているとは感じなかった。

そんなつれない言葉を吐いてさえ、室長の声はカッコいい。

「……わかり、ました。いままで、ありがとうございました」

頭を下げた視界の端で、ガラム室長が履いた靴のつま先が向きをかえた。なぜか置いていかれたような気がして、ヤヨイもそのまま顔を上げずに書記室を出た。他の書記官がこちらを見ているのかわかるから、余計惨めだ。説明もないなんて。

初出勤から六日目の朝。まだ実働五日。なぜだろう。

書庫の前で立ち止まり、ガラスのない窓から外を眺める。木立の向こうにオレンジ色の低い屋根、周囲は無人。ちよっぴり冷たい秋風がひゅつと吹きつけ、ヤヨイの前髪をなでていった。

自分の道は自分で決めたい、なんてヒロに言ったくせに、現実はいんなものだ。紙切れ一枚で自分の居場所はコロつとかわる。

だがまあ、長い人生において十七歳のいま見知らぬ土地で仕事をする、という決定だけは自分でできたのだから、大筋でいうなら間違っていないのかもしれない。そうだ、日曜日の本屋のアルバイトは遅番のシフトで始めたのに、結局早番にされた。店長の娘さんが遅番でバイトしたいって言い出して。雇われるってそういうことなのだ、きっと。

それに別に書庫で働きたいって言ったわけじゃないし。

ただちよつと、やりかけた仕事をそのままにするのが、心残りなだけだ。仲間はずれにされたような気がするなんて、思ってない。

（別に悔しくないもん）

ふーんだ、と心の中でつぶやいて、ヤヨイは鍵のない書庫のドアを開けた。と、室内の見慣れぬ様子に戸惑う。机と椅子の配置がちがうのだ。燭台の場所もかわってる。

ああ、昨夜移動したんだっけ。使用人が。王子の。三郎。

「——ッ！」

たちまち鉄砲水のごとく落胆を押し流して脳裏に浮かび上がるのは、蝋燭の灯りに照る髪の手触り、少し冷たい指先、墨を落としたように濃い紺色の——。

——人の頭って、けっこう重い。

「ちっ、ちがうちがうちがうッ！」

生々しい感触まで思い出しそうになって、ヤヨイは両手で太腿をこすった。膝枕って膝でしないじゃん腿じゃん腿枕じゃん！

「……………」

頭がぶしゅう、と音を立てて湯気を噴きそうだ。一度思い出したら、せつかくギューギューに押し込めて蓋をした記憶の箱が、まるで破裂したクラッカーのように中身をぶちまける。それは瞬く間にヤヨイの世界を埋め尽くし、身体中を心臓にかえてしまった。胸どころか膝の裏や手首まで、甘い疼きで痛かった。

熱くなった頬を手の甲でおさえ、その拍子に自分の唇が触れた感触がひどくもどかしい。

こんなじゃない、こんな、触れたのか触れられたのかかわかんない感じじゃなかった。

——キスって、掌にするのも、アリなんだ。

そう思ったとき、ヤヨイのささやかな胸が引き絞られて声を上げそうになった。ぎゅっと目を閉じて唇をかみしめても、幅の広い銀の指輪をはめた手が、何度でもヤヨイの手をつかまえにくる。

だってあんな眼で見られたら、意識せずにいられるはずがないのだ。あんな切なそうな顔で、宝物にするみたいにヤヨイの手に頼ずりして――。

必死に閉め出そうとしているのに、心には彼が居座っている。認めたくないけれど、多分けっこうどっかりと。そこに生まれた底なし沼の真ん中で、あの紫がかった紺色の目で、まっすぐになにか語りかけてくる。引きずり込まれそうな気持ちに抵抗する力も、失ってしまいそうだった。

ヤヨイは開け放しになっていたドアを後ろ手に閉め、寄りかかった。そのままズルズルと座り込み、膝を抱えて顔を伏せる。小さな声で、ダメ、ダメ、ダメ、とつぶやき続けた。

――ダメ、考えちゃいけない。

王子は女嫌い克服作戦を実行していて、ちょっとドキドキしたのは、そう仕向けられたからに過ぎなくて。きつとあれくらいオージエルム人には社交辞令で、でなければ王族のマナーで、よくわからないけど女の子と食事をしたらああいう演出でサービスするのだ。初めての経験だったから、雰囲気にも呑まれたただけだ。こんな目眩を感じるほど動揺するなんて、勘違いも甚だしくて恥ずかしいことなのだ。それで彼を好きになったりしたら安直すぎる。浅はかだし単純だ。大体、好きになったからってどうする。

彼は王子様で、自分は、立場も微妙な――異邦人なのに。

どうせ手に入らないのなら、最初から欲しがらない。
可愛い服もアクセサリーも、靴もゲームも携帯電話も。

——だからこの気持ちの名前も、知らないままでいい。

「……王族なんて、正直、めんどくさそうで、お近づきに……なりたく、ないもん……」

だから、もう、彼とキスしてる自分を想像するのは、これきりなのだ。

ジェイル王子の部屋は、書記室のある西棟の三階から中央の建物へ渡り、やたらと狭い螺旋階段を上り、暗い廊下を抜け、さらに階段を上った先にあった。

中央棟はあちこちに、近衛と同じ型で薄い青の制服を着た騎士が歩いている。案内してくれる若い警備隊士が敬礼するとうなずくに、ヤヨイと目を合わせようとはしない。空気のように扱われている、と気づいたら、猛烈な疎外感でいたたまれなくなった。

警備隊士が去ってしまうと、無人の廊下は静まり返って不気味だ。他にも部屋はいくつかあるけれど、人がいるようには思えない。

心細い。

地面から遠く離れただけで、別の世界に来てしまったような気がした。石壁にくりぬかれた窓も細長くて小さく、遠くに街と城壁と平原が見えるだけ。上層ではこれが、あたりまえの景色なのだろう。

ヤヨイはため息をつき、筆記用具を抱えなおした。

親指くらい太い万年筆、紐で紙を束ねたノート。目録の下書きに使っていたから、最初の数ページはへたくそな字で埋まっている。さやさやとしたおしゃべりも笑い声も、ジャキーンという金属音も野太い掛け声も聞こえない静かな空間で、それは命綱のように大切なものと思った。

だがいつまでもただ立っているわけにはいかない。ヤヨイは覚悟を決めて、目の前のドアをノックしようと軽く握った拳を振り上げた。

そのとき。

「ちよつと。そんな処刑台に上がるみたいな悲愴な顔で、僕の部屋に來ないでくれる？」

急に高く澄んだ声が横から響いて、ヤヨイは突き飛ばされたようによろめいた。あわてて顔を向けると、内側から輝くような淡い金髪、細身の男性が立っていた。

白いシャツとズボンに膝丈の黒いベストを併せた服、青緑色の瞳、長い髪。

謁見の日に「よろしくお願いします」と一言だけ言葉を交わしたきりの、ジェイル王子だった。

(……わあ)

ヤヨイはぽかんと口を開けた。

薄暗い石の廊下に、そのマネキンのように整った顔とスタイルは驚くほどミスマッチ。いやむしろベストマッチ？ ヤヨイは軽く混乱して、拳を下ろすのも忘れて彼を見つめた。

ランドボルグに来るまでは、自分はきつと一生独身だろうと思っていた。

なぜなら『落下地点』で暮らした四ヶ月の間、集落の住人にも研究所の学者たちにも、親しみは覚えてもときめきを感じることはなかったから。やっぱり外国人と恋愛はできない体質なんだと。

けれどこの城で多くの男性に出会ってわかった。好みの問題だったのだ。

たとえばガルム室長には、初めて会ったときから異様なほどドキドキと胸が高鳴った。いまや忘れたい人ナンバー1になりつつある王子の顔だって、目が離せなかった。

限りなく信憑性の低いサンプル数とはいえ、過去の例から推測するに、目の前に立っているこの人はすごく綺麗だけど好みではない。一度見たら忘れないけど、あえて思い出すこともない。いま見入ってしまうのは惹かれるからというよりも、怖いもの見たさに近い感覚ゆえだった。

つかつかと歩み寄ってきたジェイル王子の顔が、立ち止まったところからさらにぐっと近づけられる。その距離約二十センチ。謁見の日で大体二メートル離れていたから、大幅な記録更新だ。

近くで見ると、漂白したように白い頬にそばかすがあった。うっすらと、本当にかすかにだけれど、この人も人間なんだとあたりまえのことを実感する。

なんとなく親近感を感じてそれを凝視していると、整えたように形のいい眉がぎゅっと寄った。

「あのさ、自慢じゃないけど、女の子からそんなふうに見られたことないんだよね。まあ僕のほうもこれほど間の抜けた顔を見たことはないから、おあいこ？」

すつと離れた顔が意地悪く笑い、ヤヨイはむつと口を閉じて手を下ろした。そこで自分の立場を思い出し、ついでにジェイル王子の立場も思い出す。

文官の一番エライ人で、ヤヨイの住宅手当や援助金の額を決めたり支払いの決裁をする人だ。そして今日からは直接仕えるご主人さまだ。

——別に、仲良くなりに来たわけではない。

「……おひさしぶりです、お世話になります、よろしく願いします」

筆記用具を胸に抱きしめ、深々と頭を下げる。あの気さくで豪快な王様と本当に血が繋がっているか疑わしい、と失礼なことを考えながら顔を上げると、ジェイル王子は値踏みするような目でヤヨイを見ていた。

兄弟がいたらよかったのに、いつも思っていた。

兄弟がいなくてよかったな、いつも思っていた。

台所の手元灯だけつけて、靴箱に寄りかかって両親の帰りを待っているとき。

みんなヤヨイが食べていいのよ、と小さなケーキで誕生日を祝ってもらうとき。

兄弟がいたら、寂しさも苦しさも分け合えただろうに。

兄弟がいたら、両親の愛情も幸福な気持ちも、分け合わなきゃいけないのかな。

まるで知らない風景を思い描くように、その想像は薄っぺらで、色もおいも、あたたかみもなかった。

でもいまは思う。

兄弟は多分、たくさんいるほうがいい。

寂しや苦しさだけじゃなく、両親の愛情や幸福な気持ちもちやんと分け合える。兄弟の数だけ誕生日がやってきて、そのたびにみんなで心からおめでとうと祝うのだ。

生まれてきてくれて、ありがとう、と。

手をつなぐよりも確かな、そういうのを絆と呼ぶのだろう。

両親とのそれは千切れてしまって、けれどいつかきつと、その先に新しい糸が結ばれる。

その人は、ヤヨイを胸に抱き込もうとするかのようにそば近く、並べた椅子にゆったりと腰を下ろして机に頬杖をつき、線の細い中性的な美貌に気だるげな表情を浮かべている。

窓からの陽射しに透ける淡い金色の髪は、さらりと流れるたびに花のような香りをふりまいた。神秘的な青緑色の瞳は重たげな睫毛に縁取られ、白い頬は絹糸のごとき髪と相まってハレーションを起こす。やんわりとすばめられた唇はつややかな桜色。

空気に溶け出してしまいそうな儂い印象なのに、彼のまとう鮮やかな黒が室内をぴんと張り詰めさせて。

「ねえ……ヤヨイ？」

楽園を渡る風に舞う妖精のような指先が、ヤヨイの切りそろえた前髪をそつともてあそんだ。

「初めて会ったときからずっと思ってたんだけど」

耳に吐息を吹きかけるような囁きにのる声は透きとおり、どんな言葉を紡いでも美しい歌へとかえてしまうような気がした。

「その頭、本当にちゃんと中身が入ってるの？」

ど、どんな言葉を、紡いで、も……。

「何度同じ失敗をしたら気がすむのかな、綴りがちがうってば。字も汚いし、絵でも描いてるの？ 絞め殺すよ？」

前言撤回。

張り詰めてるのはヤヨイの神経だし、いくら綺麗な話し声でも、

罵り言葉は絶対に歌になんぞなりやしない。

ジェイルはぷるぷると拳をふるわせるやヨイの椅子の背に腕をかけ、耳たぶを人差し指で掬うようにして口を寄せる。

「ちよつとヤヨイ、聞いているの？ 耳までお馬鹿さんなの？」

「わかつてますよ、いま真剣なんですから話しかけないで下さい！」
怒りにまかせてぐつと万年筆を握った瞬間、インクがドバつと噴き出して、机に広げた紙いっぱい青い池が広がった。

「ああもうほらーッ！ ジェイル殿下のせいですからね！！」

口では強気なことを言いつつも、恐ろしくて顔を上げることができない。

さつきから真横に陣取ってヤヨイの手元をじつと見ている王子様――まさにキラキラ王子様、性悪だけど――は、きつと釣り上げたばかりのマグロも瞬間冷凍にできそうな眼でヤヨイを見ているにちがいないのだ。

「えー、僕のせい？ 君がドジでトンマで間抜けだからでしょー？」

平たい調子で幼稚な悪口を並べ立てた後、ジェイルは腕組みをしてふんと鼻で笑った。

（がまん……がまんややよい。がまんってこういうときつかうことだよ。しんとうめつきやくすればひもまたすずしいよ）

精一杯怒りを抑えて自分に言い聞かせるが、問題は無心になれるほど修行を積んでいないというこの事実。

「あーあ、紙きれ一枚だってタダじゃないんだよねー。あ、一枚じゃないか、君がダメにしたのって。なにに、山羊の餌にでもするつもり？ 肥らせて食べようって魂胆？」

これだけあれば豚より肥えるね、なんて天使のように清らかな笑顔で言われた日には、いかに雇われ人根性が本能まで染みついたヤ

ヨイだつてキレるのだ。

「だからうるさいんですよジェル殿下ッ！！ 朝っぱらから耳元でチクチクチクチク、雑巾縫つてんじゃないんですよ！！ シントーメツキヤクしそなつて焼死しそうですよ！！」

しかし両の拳を机に打ちつけて怒鳴つても、書類の山が崩れたただけで天使の顔から笑みは消えたりしなかった。

「なあにそれ、言つてることが意味不明だよ。アホの子みたいにわめいてないで少し冷静になったら？ 無駄に元気が余つてゐるなら、陛下のところに書類持つてつてよ」

それくらいしか能がないんだからさ、と言つて、ジェルは目を細める。それでもまだ慈悲深いお坊さんみたいに見えるのだから、これほどひどい話はない。詐欺だ。顔面詐欺だ。

ヤヨイは顎まで吸い込みそうなほど唇をかみしめ、咽喉の奥に力を込めてうなつた。

「——ッ、——っ！！」

「ん？ なに？ 言いたいことは、しつかりはつきり。君いくつだっけ、六つくらい？」

と、耳に手をあてて聞き返す素振りの憎らしいことといったらない。

ヤヨイは先ほどの「アホの子みたい」な騒ぎが、ほんのちょいギレの産物だったことを知った。

『うるっさいつて言つてんのがわかんないのかこの姑王子っ！ 綺麗な顔してりやあなに言つても許されると思つたら大間違いなんだから！ あんたに赤い血は流れてない、絶対毒！ フグ並の猛毒が詰まつてんのよその頭ン中まで！！ ふざけんじゃないっつの、やつてられるかっ！ 大体ヤギに紙なんかやつたら腸閉塞で死んじやうわよ、って天然成分百パーセントならいいんだっけ！？ とに

かく、あんななんかからビター文だつて受け取らないからいますぐわたしを書記室に戻してよ！ ガルム室長に会いたいわよ、あんなにかいくら美人だつて室長には絶対かなわないんだから、そこんとこ覚えておきなさいよッ！！」

背後で椅子がガターンと倒れた。

左手を腰にあて、右手をびしつとジェイルの鼻っ面に突きつけて、ヤヨイは言った。人生初の超怒声を発し、積もり積もった不満をついにぶちまけてやった。

日本語で。

見たかこれがブチギレだ！ とばかりに、はーはーと肩で息をつきながら毗を吊り上げるヤヨイを、ジェイルはぼかんと見上げている。青緑色の目はまん丸、桜色の唇は半開き、上向いたせいで前髪が流れて額が丸出しになって、でもやっぱり綺麗だから腹が立つ。

ジェイルは夢から覚めたように瞬きし、突き出された指をそつと握った。

「ヤヨイ……」

戸惑ったように眉を下げ、悲しげに首を振る。

その心細そうな顔を見て、ヤヨイは我に返った。いくら相手が毒吐き王子でも、さすがに失礼だった。

だがもうやらかしたことは仕方がないし、どうせ日本語だからわかるはずもない。クビは覚悟せざるをえないが、仮にも王子に向かって言いたい放題言ったことはバレないだろう。

「ごめん……僕には理解できないよ」

案の定、ジェイルはか細い声でそう言った。

内心冷や汗ダクダクになりながらも、ほっと一安心したヤヨイは、だが次の瞬間凍りつく。

『君の男の趣味、最悪すぎて』

あ、チヨウチヨが飛んでる。

夢の世界に逃避しかけたヤヨイを、ジェイルは無理やり現実につ張り戻した。そこで彼が弟より上手なのは、凶悪な声音も視線の圧力も必要としないところ。

麗しの王子はただ黙って優雅に、つかまえたヤヨイの指先に舌を這わせた。

——あつたかい。やわらかい。そして濡れてる。

「な——ななな、な、な」

「あれ、読み書きだけじゃなくてしゃべるほうもダメになっちゃった？ 君ってほんと、ランドボルグー書記室に向かない人材だね」

「に、にほにほ、にほほ」

「あはは、おもしろい響き！ どんなどきの笑い方？ ああ、わかった。綺麗で美人でうるさい姑王子の毒に痺れてメロメロです——って、うつとりなときかな」

そしてジェイルは、にい、と猫のように目を細めて笑った。

「なん、なんで——」

ジェイルの真珠のような歯が、ヤヨイの爪をかり、とかんだ。それでもヤヨイは、呆然と見つめるばかりで動けなかった。

「愛すべき親父殿の『外』趣味が、他者の追隨を許さない域だって知らない？」

「き、キヨシ——？」

混乱するあまり恐れ多くも国王陛下の御名を呼び捨てる。くはつと笑ったジェイルが、指先にキスをしてから手をはなした。

「そう、キヨシ。あの方は昔、アサヌマから『外』の言葉を習って

ね。会話がしたくて、僕と兄上に習得を厳命されたんだよ。残念だったね、本人の前で堂々と悪口が言えなくて」

ああ神様、あなたの御使いは素晴らしく綺麗でそして笑顔が黒すぎます。あとアサヌマさん、嫌いになっただいいいですか。

「そ……そう……」

ヤヨイはもうなんだかぐったりと疲れきって、のろのろと脚を動かした。スーシューする指先はなにも考えずにスカートで拭いた。

激昂した反動なのか、ヤヨイの中はからっぽだ。振りまくって栓を開けた炭酸飲料はおもしろいように噴き出すけれど、その分だけ中身は減っているのだ。

腹を立てると怒鳴りなくなり、怒鳴りつけるとやり返される。学習した。うん、収穫はあった。

足元に倒れている、ジェイルのものに比べて格段に粗末な椅子を起こして鼻をすすする。

「……陛下のところに、行ってきます……」

うつむいたままぼそつと告げ、もう一度鼻をすすってから、滲む涙を拳でぬぐった。これが最後の仕事かもしれない、せめてきつちりやり遂げよう、王様に会うのもこれきりか。などと思ったら卒業式の日の朝のように悲しくなった。

ジェイルの執務室付に異動になって早三日。いや、まだ三日。いやいや、やっぱりもう三日。

性悪王子の繊細な唇からあふれる罵倒は留まるところを知らず、馬に書かせたぼうがまだマシだと書類を突き返され、中途半端な敬語は耳障りだと口をふさがれ、「ヤヨイと書いてお馬鹿さんと読む」とまで言われ。書庫に戻りたいです、紙に書名を記す作業くらいしかできないんです、と訴えたら一瞥もくれず無視された。

それでも泣かずに耐えたのは、実際馬のほうが優秀な気がしたからだ。そしてパワハラも給料のうちだと割り切っていたからだ。でも、もう無理。どっちみちクビ。……本当に首を斬られたらどうしよう、とおなじみのひんやり感がうなじを襲う。

ヤヨイはジェイルの顔を見ないようにしながら、王様の部屋行きの書類を手にとった。そつと視線だけ巡らせて、窓辺で自己主張する赤いあんちくしょうを盗み見る。

せめて一度、あのふかふかそうな絨毯に寝そべってみたかった。そして部屋の主がそうするように、身体を丸めて惰眠を貪ってみたかった。

総重量を考えたら上を見ずには歩けないこの巨大な石造りの王宮の中で、あの絨毯だけがヤヨイを優しく受け止めてくれそうだったのに。そう、きつと畳と同じくらい。

——さようなら、ふかふか絨毯。さようなら、夢の床でゴロゴロ生活。

紙の束を抱えてとぼとぼと歩き出すヤヨイの背が、ぽんと軽く叩かれた。

鎖骨に顎を埋めるようにして顔を向けると、ジェイルが困ったように眉尻を下げている。目が合うとそのまま小さく微笑み、そつと伸ばした手でヤヨイの頬を——。

ぶにい、とつねった。

「そんな顔を人様に晒すつもり？」

ぷつと嘲笑ったジェイルのおかげで、消滅しかけた闘争本能に火がついた。

「はいはいはいはい、そんな顔ですーいーまーせーんーッ！ 生憎と本日は殿下みたいな麗しの顔を切らしておりますてー！！」

「あはは、まるで普段は在庫があるみたいない方だね」

ヤヨイは手の中の紙を思い切り床に叩きつけた。ヤヨイの頭に、学習機能はついていなかった。

「もうやだッ！！ もーおイヤだ！！ これが給料のうちなら安すぎる！ 言いたいことがあるならはつきり言つてよ、姑王子！ ネチネチネチネチ水飴練ってんじゃないんだか——」

「……」

「へ？」

目の前が赤くなるほど興奮するあまり、平然と遮られたヤヨイは間の抜けた声を上げた。ジェイルは涼しい顔で自分の下瞼を指差している。

「目のとこ。インクがべったりついてるよ？」

「あ、さつき手でこすったから」

と、すっかり毒気を抜かれて握り拳に目を落としかけ、ヤヨイは気絶しそうになった。

——もしかしてそんな顔って。

「あ、あら……？」

おそろおそろ、上目でジェイルを見やる。弟王子よりわずかに背の低いジェイルだが、それでもそうして見上げるのはたいへんだっ

た。
ヤヨイの怯えと気まずさを察したように、ジェイルはくすつと笑う。ヤヨイが初めて見る、子どもに向けるようななんの裏もない笑みだった。

「目、閉じて？」

片方だけ閉じていられるほど顔面を鍛えていないヤヨイは、戸惑いつつもおとなしく両目を閉じた。

かすかな衣擦れが聞こえ、やわらかな布が右の下瞼にあてられる。

ジェイルの髪と同じ香りがした。

ふっ、と吐息が頬をかすめて、心臓がとんと跳ねた。見えないけれどすぐそばに、妖精みたいに綺麗な顔がある。この三日で慣れたはずなのに、距離感がつかめないだけでひどく緊張した。

こうして感じてみると、触れる指先は少し硬くてかさついている。グレイヴとはちがう女性的な顔立ちで、でもやはり男の人なのだ。ジェイルは最初から意地悪で嫌味な奴だったから意識したことすらなかった。急にニキビの後が気になり始めて仕方ない。

目の下を少し強くこすられて顔を動かすと、大きな手が首筋をつかむように添えられた。

「こら、動いちゃダメでしょ」

甘く咎める声とともに、さらりとした髪が耳に落ちかかる。きゅっと心臓をつねられたように息苦しくなり、背中がぞくぞくした。顔が熱くて咽喉の奥がかゆくなったような気がする。みっともなくふるえるのを気づかれたくなくて、ぎゅっと唇に力を入れた。

「あれ——」

不意にジェイルが不審げな声を上げ、ヤヨイはあわてて目を開けた。

覆いかぶさるように覗き込む顔が、想像以上の近距離にあつてぎよつとする。それから彼が浮かべる真剣な表情に息を飲んだ。ヤヨイの目元を見つめる眼差しはレントゲンに影を見つけたお医者さんのように深刻で、ヤヨイは急に不安になった。

「これインクかと思ったら隈だった。ちょっと、寝不足はお肌の敵って知らないの？ それとも気にしないほどおばさんなの？」

ヤヨイは偉業を成し遂げた。天使の顎にグーパンチ。

そして気づいたら部屋を飛び出していた。

（辞めてやる、ええ辞めてやりますとも！　王様のところに書類を運んで、ハイサヨウナラ、だっ！！）

本物の首が飛ぶ可能性はきれいに忘れて、ヤヨイは頭から湯気を噴いた。

あの作り物めいた顔面を形成するためのDNAは、AGTCじゃなくてAKUMAで構成されてるにちがいない！　疲れる。本当に疲れる。おばあちゃんにドライフルーツたっぷりのケーキを焼いてもらおう、それに蜂蜜をかけて丸かじりだ！

と豪快に大口を開けるところまで想像して、気持ち悪くなった。

……やっぱりプリンにしてもらおう。甘さ控えめで。

プリンといえば――舌の上によみがえった味に、沸騰した頭が瞬時に冷える。

昨日のおやつは美味しかった。書庫から異動になって唯一よかったことが、あのプリンを食べられたことだ。正直、ここであんなに美味しいプリンが食べられるとは思っていなかった。つるつとなめらかでほんのり甘くて、謎のハーブのにおいがする。

また食べたいな、厨房の人に聞けば作り方を教えてくれるだろうか。と場所もわからない厨房の様子を思い浮かべる。作るのはもちろんおばあちゃんだけど、お願いすれば大丈夫。多分。

もうすっかり絶品プリンを食べる気になって浮かれていると、廊下の先に見知った姿を発見してドキッとする。

紺色の膝丈の上着。腰に下げた剣。グレイヴだ。観音開きのドアの前で、小さな窓から外を見ている。

どうやら脚は王様の部屋までの道のりを覚えていたらしい。一日に百回も往復させられるのだから、当然か。

少し端正な立ち姿を見ていたくて、歩く速度を緩めて足音を忍ばせた。

もう二度と会いたくない、とも思うし、こうして顔を見るとドキドキして落ち着かないのに、決して嫌な気分ではないから不思議だ。ジェイルの毒が脳みそまで回っているのかもしれない。

さっきまで拝んでいたのと正反対、シャープで凛々しい横顔。グレイヴは背中を手を組んで、背筋を伸ばして立っている。中に入るのは王様の近衛だけだから、ロード王子が出てくるまではずっとそうしているのだろう。

番犬だ。犬っぽいとは思ったけれど、本物だ。

ぷつと笑ったら、こちらを向いた。さっきより強く、ドキつとした。

「ヤヨイ」

目を細めてはにかんだ笑みを浮かべるグレイヴの声は明るい。場所が場所なので音量は抑えめだが、ヤヨイの元までちゃんと聞こえた。

オセロの駒みたいに白と黒を行ったり来たりする姑にいびり倒され、ボロボロになったヤヨイは、普通の笑顔にほっとして彼に駆け寄った。

「おはようございます、王子。王様——じゃなかった、陛下に配達です」

するとグレイヴはヤヨイの手元に目を向け、それから眉を上げて首をかしげた。

そのときようやく、ヤヨイは書類を床に叩きつけたことを思い出した。

からつぽの自分の両手を見下ろし、ヤヨイは自分のドジっぷりに驚いたり羞恥を覚える前に感心した。こんな、絵に描いたような間抜けな失敗を実際にするなんて！

よほど頭に血が上っていたのだ、こんな自分は初めて見た。

今日の運勢は大凶。きつと『外』で放送されるどの局の星占いも、うお座のA型は最下位だったにちがいない。

はぁ、と息をついて、うつむいたままグレイヴに頭を下げる。顔を見る勇氣も見せる元氣ない。消沈して踵を返そうとしたとき、グレイヴが小さく声を上げた。

「ジェイル」

天敵の名を聞いたヤヨイは、電光石火で振り返った。そこにはいまにも階段を上りきろうとする、ジェイルの姿があった。ヤヨイが床に叩きつけた書類を眺めながらスタスタと歩いている。正直うらやましい。ヤヨイは足元を見ずに歩いたり階段を上り下りするのが、苦手だった。絶対に段を踏み外す。

王の間の前で立ち尽くすヤヨイに気づいてジェイルが顔を上げ、ヤヨイは背筋を伸ばした。自らのろくでもない偉業のせいで、書類の陰になったあの細い顎が歪んでいたらどうしよう。

だがジェイルの視線は、迫り来る怒涛の嫌味に備えて緊張を高めるヤヨイの上を素通りし、グレイヴの前でとまった。

「あれ、兄上が来てるの？」

軽く目を睨り、大きくて立派なドアを見やる。王の間ではいま、ジェイルの知らない会見がもたれているようだ、とヤヨイは察した。

腕を組んで片脚に体重をのせるグレイヴも、訝しげな顔に見えた。

「そう……兄上、が……」

そしてジェイルはしばし、おそらくは数分、とても難しい顔で黙り込んだ。細い眉を寄せ、唇を一文字に引き結び、長い睫毛で瞳を半ば覆い隠して。いままで見た中で、その顔が一番綺麗だと思った。

ヤヨイは朝から仕出かした一連の粗相を忘れ、ジェイルの顔に見入ったまま美術の教科書を思い出していた。

なんとやらという画家が描いた、なんとか夫人というタイトルの絵。青い薄闇を背景に、果物籠の載ったテーブルに頬杖をつく女性の横顔は、静かで無表情なのにとっても物憂げだった。いまのジェイルは見るからに険しい顔つきだけれど、その女性と共通するなにかを感じた。

作者とタイトルがするつと出てこないあたりカッコ悪い、などと漠然とした自己批判をする。

淡い金髪で飾られたジェイルの白い横顔は、外界のすべてを遮断していた。騎士たちに無視されるのとはちがういたたまれなさ、咳払い一つできない空気がただよっている。

なんとなくグレイヴを見やると、厳しい目元を緩めて微笑んでくれた。あの夜以来、心なしか視線が優しい。ヤヨイはぱつと目をそらし、熱くなつた顔に手をぱたぱたさせて風を送った。

だからイヤなのに——場所柄もわきまえず舞い上がる心臓をひつつかんで、往復ビンタしてやりたくなつた。

それで本体が死んだって知るもんか、毒食らわば皿までだ！　つてそれは意味がちがう。とにかくちょっと笑いかけてくれたくらいでドキドキするとか、急にカッコよく見えてくるとか、そういうことは幻想なのだからして断固たる態度で己を律していかなばならな

いのだ！ 自分の脳内底なし沼で溺死とか、想像するだにバカバカしくって泣けてくる。

——本当に、泣けてくる。

悶々と愚にもつかないことを考えるあまり、周囲に注意が向いていなかった。急に二の腕をつかんで引つ張られ、一瞬空中に放り出されたような浮遊感を覚える。落ちる、とありえない悲鳴を上げる前に、黒い文官服がヤヨイの頬に押しつけられていた。

むせかえるような花の香り。ヤヨイを胸に抱きとめてきつく背中に腕を回したのは、ジェイルだ。男同士で肩でも組んでいるように、だが肩甲骨の上を通って肩口をおさえる手は、やけに力強い。ヤヨイは首をすくめたような格好になっていた。

「僕、中に入れないから。これグレイヴから渡しておいて、陛下に」上半身を動かせないヤヨイの目の前で、紙束が右から左へ通過する。しかし胸に書類を押しつけられたグレイヴは、それを受け取らずに鋭く舌打ちした。

「……離れる」

近い、と吐き捨てるように言って、グレイヴはジェイルの顔面に手を伸ばす。それをボクサーのような動きでよけながら、ジェイルはふふんと鼻で笑った。

「仕事中はいつもこれくらいくつついてるよ。ね、ヤヨイ？」

そんなわけではない。こんなにぎゅうぎゅうに腕を固められたらペンを握るのも一苦労だ。下校中のバカップルだってもう少しパーソナルスペースをとっている。

だが最初で最後の反転攻撃が締まらない結果に終わったヤヨイは、ジェイルを押しのかたり、言い返すことがためらわれた。小さな窓から空を見やりつつ、曖昧にうなずく。

「はあ、まあ……そうですねえ……」

突然、グレイヴがジェイルの手を跳ねのけた。王様宛の書類はまたしても床に舞い落ちる。

「なぜそんなに密着する必要がある！　まともに仕事ができるようには見えないぞ！」

「いいんだよ、ヤヨイの仕事は僕の疲れを癒してくれることだものねー？　などと頭の上で言われても、そんな話は初耳だ。雑用係の概念が自分と異なるのか、はたまたヤヨイが雑用係を誤し間違えているのか。それにしたって精神的サンドバッグになるのが本業だったという衝撃的な事実にも声も出ない。」

「手をはなせジェイル、冗談が過ぎるぞ！」

踏み出すグレイヴのブーツが書類を踏み躪る。あ、と思ったヤヨイがそれを知らせる前に、ジェイルが弟に応戦した。

「冗談じゃないよ、兄上も多少のことには目をつぶるって言うてたし。それにね、グレイヴ。ヤヨイは特定の部署に所属してるわけじゃない、いまは僕の個人的な召使なの。僕がどうしよう——」

言葉を切ったジェイルは、包帯でグルグルにされたミイラのように動けないヤヨイの顎を、くつと指先で上向けた。

「僕の自由、なんだよ」

青緑色の瞳が、輝きを増す。桜色の唇が三日月のように弧を描き、すつと上から降りてきて——頬に触れた。

「……ッ!？」

「ジェイル——！」

膝枕などものともしない驚愕に浸る間もなく、ものすごい力で肘をつかんで引っ張られ、ヤヨイはグレイヴの胸に鼻から突っ込んだ。足の下でグシャッと哀しげな音を立てたもののことは考えたくない。厚地の上着は見た目よりゴワゴワして鼻の頭が痛かったし、前髪

に銀ボタンがからんでグレイヴが動くたびに束で引っこ抜かれそうな恐怖を感じた。

窓辺で風にさらされていた上着からは秋の匂いがして、背中と肩に巻きついた腕はあたたかい。ヤヨイは溶岩が流れたように熱くなる身体に慄きながら、ぎゅっと目を閉じた。

グレイヴがヤヨイをジェルから隠すように立ち位置をかえ、胸に触れた耳からじかに彼の声が響く。

「ヤヨイの異動にどんな事情があったにせよ、おまえがすることに間違いはないと思っていた。だがそういう思惑だったなら話は別だ！」

「そついうつて？ 僕がヤヨイに手をつけるとか？ ああ、『外』の女性にはオージェルムの男を虜にするなにかがあるみたいだし、試してみるのも悪くなかったね」

「おまえッ！」

ヤヨイをおいて交わされる言葉は、どこか他人事のようだった。この体勢に気絶しそうなほどドキドキしても不安がないのは、代わりに怒ってくれるグレイヴの手が、大切なものを護るように頭を抱えてくれているからかもしれない。

ヤヨイはふるえる両手を持ち上げて、グレイヴの上着をつかんだ。右手がちょうど腰の剣に触れ、硬い革の感触になぜかひどく安心した。

庖丁より巨大な刃物がそこにあり、グレイヴがちょっと気まぐれを起こしたら簡単に殺されてしまう。けれどヤヨイは、きつとそんなことにはならないと信じていた。

呼吸を整えるグレイヴの胸が、大きく上下した。心を決めたように、グレイヴは静かに話し出す。

「……この件に関して、おまえを見損なっていた。『外』がどうこうってことじゃなく、これ以上ヤヨイをおまえの元には置いておけない。やはり俺が——」

「自分で面倒を見る？」

遮るジェイルの声は、感心している風にも、嘲笑っている風にも聞こえた。ヤヨイは最大限前髪に配慮しつつ頭を動かし、ジェイルのほうに顔を向けた。

ジェイルは胸元にこぼれ落ちる淡い金髪を背に払い、顎を上げて見下すような目でグレイヴを見ていた。

「へえ、できるの？ 騎士団が怖くてこそ隠れないと会えないくせに？ ガルムはミツエを愛するのに仲間の白い眼なんておかまいなしだったけどね」

ヤヨイは息を飲んだ。

ミツエ——それはオージェルム女性の意識改革をし、布ナプキンを世に広め、アサヌマ式もんぺを改良したナガヤマさんの名まえだ。なぜいまナガヤマさん、そしてガルム室長の名が出るのだろう。

ヤヨイは眼差しに疑問をのせて送ったが、ジェイルは目が合ったにも関わらず受け取り拒否した。

「ああそうか、君がヤヨイにそこまでしてあげる義理はなかったんだっけ。精々書庫に押しかけたり食事を運ばせるくらいのことしかできないんだ。立派だね、バレバレの『外』趣味を隠して王族の義務を果たす君も、君の気持ちを知っててないものにする騎士団も。頭が下がる、僕にはできない」

「……ジェイル？」

どこか焦燥のような苛立ちを含む兄の言葉に、グレイヴは探るような声を上げた。だがジェイルは、両手を広げ、目を閉じ、舞台俳優のような仕草で演説を続ける。

「わかる、君が寂しい人間を放っておけない、篤志あるデキた奴だつてこと僕はわかつてる。けどね、だからこそこのごろ思うんだ。君、本当は『外』なんかどうでもいいんじゃない？ 騎士団の手前があるからつてわけじゃなく、別に『外』のことになんか興味ないんだよ。もちろん、ヤヨイについてもね」

思わずグレイブを見上げた。前髪のせいで中途半端に顔を傾け、それでも表情を確かめずにはいらなかった。

虚を衝かれたのも一瞬、グレイヴの紺色の瞳はたちまち怒気に染まり、剣呑に眦められる。相当に心外だったらしい、と察して、ヤヨイは安堵した。

兄弟の顔を交互に見れば、二人とも凶悪なムードにぴったりの凶悪な目つきで睨み合っている。一人っ子のヤヨイは兄弟ゲンカなど見たことがないし、事なかれ主義者にトラブル回避のスキルは必須だ。

ヤヨイはなす術もなくおろおろと、にわかに発生した緊張が膨れ上がっていく様を見守った。

「……おまえ、さっきからなにが言いたい」

「君はすごいねってこと。ただ王家の方針だから仕方なく彼らを厚遇してさ、テキトーに好意がある振りしてたんでしょ？ 僕もうっかり君が『外』趣味なんだと信じてた」

「ジェイル、なにを言い出す！？ 俺は昔からずっと『外』について学んできたし、ヒロもアサヌマも尊敬してる！ おまえはそれを知ってるはずじゃないか！」

「じゃあどうして堂々と『外』が好きだって言わないの？ 騎士団の石頭が怖くて、一体どれだけの人間が『外』の人々を遠巻きにしてると思うのさ。王族で太子の近衛騎士で、無茶の利く若い君が率先して橋渡しをしなくて他のだれにできるって？ もういいよ、だ

からヤヨイを僕にちょうだい」

「それとこれとは話が別だ！ 第一、おまえこそ『外』に関心などないだろうがッ！」

「失敬だな、僕はヤヨイと『外』の言葉で会話ができるよ？ 余計なお世話、騎士団と向き合う覚悟もない、ましてヤヨイのことなんか好きでもない、そんな君に——」

その瞬間、グレイヴがヤヨイを抱く腕に力を込めた。後頭部を碎かれそうなほどつかまれ、背骨が折れそうなほどきしみ、ヤヨイは小さく悲鳴を上げた。お相撲さんの抱き枕だってもう少しソフトに抱かれてるはずだ、内臓破裂で死んじゃう！ と本気で花畑の幻が見えかけた、そのとき。

「それ以上の侮辱は赦さん！ 俺はヤヨイが好きだッ！！」

「やっと出たよ」

ぱん、と掌を打ち合わせたジェイルの顔からは、つい一拍前まで浮かべていた凶悪な表情が消えている。きれいさっぱり、まるでお面を脱いだように——じゃあ、いままではかぶってた？ いつから、なんのために？

ヤヨイは呆気にとられ、ぽかんと口を開けた。

完全においてきぼりになっていた。

「まったくもう、怒鳴らないでよねー。君みたいに年中大声出したり聞いたりしてないんだから」

ジェイルは耳たぶを引っ張りながら恨めしげに言った。

言われてみれば、キーンと耳鳴りがしている。応援団長の全力エールをアリーナ席で拝聴したくらいのダメージだ。大太鼓もドンドンと鳴っている。と思ったらそれは自分の心臓の音だった。

「つくづく単純な弟を持って幸せだよ、僕。どうでもいいところに食いついたときは、どうしようかと思っちゃったけど」

と肩に頬がつくほど首をかしげるジェイルは、グレイヴの反応をうかがっているようだった。ふっ、と力が抜けたグレイヴの腕がわずかに下がり、ヤヨイの髪がツンと引っ張られた。指輪に引っかかった、とすぐに気づく。

「お、まえ、わざと——」

喘ぐようにうめいたグレイヴに、ジェイルは「はあ？」と裏返った声を上げた。

「あたりまえでしょー？ 君がどれだけ『外』がー『外』がー、ヤヨイがーヤヨイがーってうるさかったと思うのさ」

「うわっ、ジェイル——」

グレイヴの手があわただしくヤヨイの頭をつかみ、耳の位置を探してさまよう。だがジェイルのほうが早かった。

「ヤヨイ、グレイヴはずっと君のことが好きだったんだよ。不器用

で顔が怖いからわかりにくいかもしれないけど、君が可愛くて仕方がないんだ」

どうだ、と言わんばかりに胸を張るジェイル、ぱき、と凍りつくグレイヴ。

ヤヨイはただ、「はあ……」と答えた。

「……………」

「……………」

「……え？」

不自然な沈黙に声を低めると、グレイヴの腕がぱたりと落ちた。数拍の後、あらためて身体に巻きつく。

「……まあ君がランドボルグに来てまだ十日やそこらだから、唐突に聞こえるかもしれないけどさ。ここから先はグレイヴに聞いてよね、僕そこまで親切じゃないから」

口をすぼめて眉を上げ、ジェイルはヤヨイが物申す前に視線を天井に向けた。

「いいじゃない、『外』の人間が王族と結婚した例はないよ。こういうの、君たちは『玉の輿』っていうんでしょ？ 興味ない？ それとも、興味ないのはグレイヴのこと？」

ん？ と重ねて問われ、ヤヨイは息を吸い込んだ。そして吸い込んだまま飲み込んだ。

追いつかない。なんだろう、なにかもが追いつかない。なにがなにに追いつかないかもわからない。

「ちょっとー、君ってほんとにお馬鹿さんだったのね。質問にはさっさと答えなよ。まあいいけど、僕は僕なりに解釈するから。だんまりさんに拒否権はないからね」

なにか渋いものでも食べたような顔で、ジェイルは鼻に皺を寄せ

た。

「もういい？　あとは親父殿の許可とるだけ？　じゃあ聞いてみよう、その扉を開けたらきつと転がり出てくるよ。ねえ、親父殿？」

と言いながら扉に大股で歩み寄ったジェイルは、礼儀も遠慮もない素早さで観音開きのドアを開け放った。たじろいだように息を飲むグレイヴの腕が緩み、その隙に振り返ると、横に飛びのいたジェイルの陰から数人の男性がよろめきながら出てくるところだった。

「お、王様——」

目を丸くしたヤヨイに向かって、ジョージ・クルーニー似の王様はぴつと片手を上げた。

「おお、ヤヨイ。今日の愛らしさもまるで荒野に咲く野菊だな」

エメラルドグリーンの瞳を輝かせ、背中に張りつく何人かのおじさんで肘を押しつけながら微笑む。本当にドアに耳をつけて盗み聞きをしていたようだ。しかも団体で。

「陛下はともかく、兄上までなにをなさってるんですか」

あきれ返ったグレイヴの声。王様の左肩から覗いているのは、ロアード王子の揺ぎない無表情だ。だが青い瞳にかすかな動揺がうかがえるのは気のせいかな。ロアード王子は無言のままおじさん団子から抜け出し、乱れた着衣をなおし始めた。

「ご機嫌うるわしゅう、陛下。お聞きのとおりですが、いかがですか？」

何事もなかったような表情で、ジェイルは早口に言った。そうしながらも伸び上がって室内を覗き込み、顔をしかめる。ヤヨイからおじさん団子と身長差のためになにも見えなかったが、吹き出てくる風に少し生臭さを感じた。

……オージェルムのおじさんが十人も一室にこもっていると、生

臭くなるのだろうか。嫌な新発見だ。

「いかがもなにも」

むんと胸を張った王様は、添えられたグレイヴの腕ごとヤヨイの頭をつかんでぐらぐら揺すった。

「いまその話をしていたところだ。俺も孫ができる年だからな、そろそろ不肖の倅どもにも身を固めさせねばならん。——ふむ。らぶらぶダナ？」

ふと王様は自分の手の下を覗くように屈み込み、ヤヨイとグレイヴを交互に見やった。

「はあ、らぶらぶ……」

困った。完全に意味不明だ、そんな単語知らない。ヒロからもらった辞書にそんなの載ってたっけ？ ヤヨイは首をひねった。そして次の瞬間、くわっと目を見開いた。

——ラブラブっ!?

ヤヨイは自分が、本当はいまのいままで気絶していたのではないかと思った。

だってついさっきまで、タイプのまったくちがう綺麗系長髪兄弟のケンカをおろおろしながら見守っていたはずなのだ。なのに気づいたら突然目の前に王様がエライ人たちと転がり出てきて、ヤヨイの母国語で「ラブラブだな」なんて言っているのだから。夢、夢だとは思えない。ジェイルに真性おバカ認定されたのも夢にちがいない。

だが団扇のように大きな手で頬をつままれ、「長男の嫁は臺^とが立っていていかん、娘にするなら十代に限る」と満足げに微笑まれるに至り、ヤヨイは受け入れざるを得ない現実に目の前が暗くなった。

下瞼がひくりとふるえ、そつと視線を巡らせば、思案げに遠くを見つめるジェイル、無表情ながらも目元をやわらげるロード、お地蔵さん、温水洋一、教頭先生、係長などなどヤヨイが勝手にあだ名をつけていたエライ人たちの、ゆるうい笑顔。

そしてあまりに自然にそこにあつて意識すらしていなかった、眼球から約五センチ先に見える、紺色の上着。

「……ついああああっ!!」

思い切り悲鳴を上げたはずなのに、まるで寝言で叫ぶように咽喉が詰まってか細い声になっていた。

いつそ夢ならよかったのにと性懲りもなく考えながら跳んで離れようとしたが、ボタンに引つかかった前髪のせいではかなわない。それに気づいたグレイヴが、ぎこちなく腕をとり髪をはずしてくれた。だがその手は間髪入れずに、逃げようとするヤヨイの肩をがしつとつかんだ。

後ろからおじさんたちの生ぬるい視線を背中に浴びて、ヤヨイは窓から飛び降りたくなった。目測でも横幅が狭すぎて、お尻がつかえそうだったのでやめた。あのときはあんなに周到に準備して決行したけど、身投げってほんとに発作的にやるものなんだ! と笑えないことを考える。

「なかなかの出来だったでしょ? おじさん好みで」

心底嫌そうな口調に涙の滲む目を上げると、ジェイルが辟易とした顔でこちらを見ていた。間違いない、あれは臆面もなく教室でイチヤつくカップルに同級生たちが向けていた眼差し。反してやけにハイテンションな王様は、歌のような抑揚をつけた嫌味を次男坊に放る。

「三文芝居だな。鼻をほじる程度には暇がつぶせた。かなり危なかったが、寸前で間に合ったぞ」

「それは重畳。できれば事前通達してほしかったですけど」

ジェイルは軽く肩をすくめ、グレイヴはヤヨイの肩をぐっと握った。ヤヨイは廊下に突っ立って、理解不能な会話を右から左へ聞き流し、うつむいたまま呆然としていた。偉い人であるはずのおじさんたちは、口々に同意の言葉を述べている。

(……なんなの！？)

パニックだった。なにが起きたのかよくわからないけど、ヤヨイの意見などだれも聞いてくれていないことだけはわかる。

ドン、とドアを叩く音に顔を振り上げると、王様が分厚いドアに肘をついてもたれていた。濁りのない輝く瞳は、ヤヨイでなくグレイヴの姿を映している。

「幸いロアードが娘を産ませた女は、将来王妃になってやってもかまわんと言っている。近衛の編成もしなおさねばならんし、この際だからおまえはアルガンダワの領主にでも落ち着くがいい」

「しかし父上――」

グレイヴが反論しようとして声を上げるのを、王様は顎先を上げただけで制した。

「近々、おまえたちを王族籍からはずし、正式に臣籍を与える。慣例どおり一代大公を名乗り、地方の政に精を出せ。といってもまだ数ヶ月は先だがな」

嬉しかろうと、と唇の端を吊り上げる王様の言葉にグレイヴは無言だったが、肩をつかむ手は緩まなかった。

王様は不意にエメラルドグリーンの目をいっぱいに睜り、ヤヨイに豪快な笑みを見せた。

「ヤヨイ、本当の父と娘になれるな。産むなら女だ、男はいらんぞ！」

返事どころかうなずくことすらできなかった。

よくないことが起きている。とてつもなくよくないことが、またしても自分の与り知らぬところで、いや目の前で起きている。ヤヨイはこれまでとちがう、不吉で大音量の動悸に心臓発作で死ぬのではないかと思った。どうしよう、AEDの使い方わからないッ！と我ながらつつこみどころ満載なことを考える。

腕組みして立つジエイルは身じろぎもせず、部屋の奥に引つ込む王様に向かって声をかけた。

「親父殿、僕はまだもう少しランドボルグで厄介になりたいんですけど？」

「好きにしる。グレイヴ、入れ！」

大声で呼ばわれ、グレイヴはびしつと背筋を伸ばして踵を打ち合わせ、短く答える。

「はっ！」

そしてヤヨイの肩は重石を失い、戸惑いの勝った紺色の瞳が一瞬だけヤヨイをとらえた。

グレイヴは口元に拳をあて、頼りなく眉尻を下げた顔を真っ赤にしていた。

グレイヴが腰に下げた剣まで室内に消える寸前、四十代と思しき騎士がドアの陰からヤヨイに目礼をした。王様の近衛で顔見知りの、ちよつとイーサン・ホークっぱいと思っていた人だ。つられて会釈を返すヤヨイの前で、分厚いドアはパタンと閉じた。

そして廊下は、静けさを取り戻した。

「——つでで殿下！ ジェイル殿下ッ！！ わたしなんか、ものすごい勢いで放置されてる感じなんですけど！！」

さすがに大声を出す気になれなくて、ヤヨイはジェイルに足早に歩み寄った。説明を求める！ と見上げたジェイルは、気の抜けた顔でヤヨイを見ていた。

「君には本当に振り回されるよ、ヤヨイ」

「そ、それはわたしのセリフでしょッ！？ なんなんですかいまの、王様はなにを——」

「まあ落ち着きなつて。思ったよりずっと早かったけど、来るべきものが来たってことだよ。とにかく戻ろう……話はそれから」

重苦しい息をつき、ジェイルは寄りかかっていた壁から身を起す。さらつと流れる髪の陰になった顔色の悪さに、ヤヨイはぎくつとした。

彼が楽しそうにヤヨイをいびり倒していたのは、ほんの二十分ばかり前のことだ。くるくると表情をかえる王子。いまはどこかくた

びれてぼんやりとして、全然冴えないのに綺麗で、きつとこれが素顔だと思った。それ以上、話しかけることはできなかった。

背を向けて歩み去ろうとするジェイルの足元で、ぐしゃつと嫌な音がする。ジェイルは見向きもしなかったけれど、ヤヨイはかがんでそれを拾った。

リユースすることすら不可能な状態の、哀れな紙束。たくさんの靴底に踏まれ、くしゃくしゃになって、それはなんだか自分の姿みたいで。

「……………」

ヤヨイはいままでに感じたことのない、切ないのでも寂しいのではない感情にとらわれた。

ジェイルの執務室は広い。日常使われる家具らしきものは机と椅子だけだが、窓辺には三畳ほどのサイズがある赤い絨毯が敷かれていて、それでも足元は邪魔にならない。壁一面に据えつけられた本棚には、紙の山が無造作に詰め込まれている。ところどころに地名か家名を書きつけたものが挟まって、ペラペラと揺れていた。

ヤヨイは促されるまま、絨毯の上に靴を脱いで座り込んだ。ジェイルは硬い革靴のまま、窓の下に壁に背をつけて座っている。なんとなく持ち帰った書類の皺を伸ばしていると、ジェイルがふうつと軽く息をついた。

「朝っぱらから疲れたよ。君とつきあうと寿命が縮む。グレイヴが早死にしたら間違いなく君のせいだね」

「ちょ、意味がわかりません！　こんなにおとなしく真面目に働い

てるのに、わたしのほうこそ死にそうなんですけど!？」

ここぞとばかりに反論を試みるが、ジェイルがじとつと半目で見ているのと目が合ってあっさりあきらめた。わきまえろ、思い出せ、と地に足のつかない自分を叱咤する。

この人はご主人サマでわたしは下僕——そのままでの意味で。無念なことに——、お給料をいただくからには、言いたいことを言うてはいけない時もある。ヤヨイはぎゅつと唇に力を入れ、カピカピの梅干のようにすばめた。

だが頭で理解していても、できないことはあるのだ。いや、たとえ己を滅して雇い主の命令に諾々と従うばかりの人生でも、言わねばならない時もある。

そしてそれは、いまだ。

「あのっ!」

勢いよく口を開いたら、ンパツと間の抜けた音がした。ジェイルは妙な顔をしたが、ヤヨイはめげずに言葉を続けた。

「これ、書き直したほうがいいですか? あんまり汚れてはいないけど、グシャグシャだし破れてるところもあるし、このまま王様に渡したら失礼ですよね?」

ジェイルはヤヨイが突き出した書類を見て、もつと妙な顔をした。驚くのと怒るのともちがう。だれかに「ツチノコ捕まえたからお鍋で食べよう!」と言われたら、ヤヨイもこんな顔になるかもしれない。

しばしの沈黙をはさんで、ジェイルは絨毯と毛先を絡めあう金髪を揺らして首を振った。

「……ちよつと君さ、もつと他に言うことがあるんじゃないの? 盛大な愛の告白を受けた感想は?」

「え、あい——？」

「あれ、もしかしたら下層まで響き渡ったかもよ？ 騎士団って発声の訓練もするんだ、不審者はまず怒鳴りつけて竦ませる、っていう原始的な作戦のために」

確かに竦み上がった。あんな大声を頭の上から浴びせられて、確実に一回は脈が跳んだ。グレイヴの声が残響になって、ヤヨイが好きだとリフレイン——。

「——ッ！！」

ドム、と音がしたかと思った。心臓が三倍くらいに膨れ上がって、三倍速で三倍の血液を景気よく送り出す。ヤヨイは自分が真っ赤になった瞬間を見た。書類を持つ手の指の先が太陽にかざしたように赤くなっている。血が身体の上のほうに集まったからか、急に足が痺れたような気がした。

——好き！？ 好きって——好きッ！？

カタカタと手がふるえ、ついに目の前まで絨毯と同じ色になった。ちがう、紙束を放り投げて床に突っ伏していた。酸素は肺から出て行くばかりで、咽喉から先に入っていない。

グレイヴ王子が、ヤヨイを好きだと叫んだ。あれが夢でないのなら、グレイヴ王子はヤヨイを好きだということ——そんなわけない、と否定しきれない自分に自分で驚いた。心あたりがないわけでもないからだ。

けれど頭をブンブン振って、ヤヨイは摩擦で熱くなった額を絨毯にこすりつけたまま言った。

「で、でもあれは人としてッ！ きっと人として嫌いじゃないって意味で——！」

「はあ？ ちょっと、君のどこに人として好きになれる余地がある

って言うのさ。君の取り柄はね、ちっちゃくて珍しい女の子ってことだよ」

随分な言われようである。しかし反論もできないところが切ない。ヤヨイは力みまくっていた肩をがっくり落とした。ヨガでもやっていけるような格好だ。便秘に効きそうなポーズだ。顔を見られなくてすむから悪くないが、いい加減呼吸困難になりそうだ。

「……けど、あの状況じゃ……ああでも言わなきゃ、イヤな奴じゃないですか……」

のろのろと手を着いて起き上がると、ボサボサになった髪が顔にかかった。それを直しもせずにつむいていたら、伸びてきた手が丁寧に梳いてくれた。ぎこちなく前髪を扱う手を思い出し、秋の匂いが鼻の奥で香った。

クリアになつていく視界の中に青緑色の瞳があつて、そこにヤヨイが映っている。きつとよく見たらその顔には、ヤヨイが大好きな魔法の呪文が書かれているのだ。

ふと、涙が出てきた。しばんで青ざめた胸の奥から滲むように、冷たい涙が湧いてくる。

慣れた痛みだった。心の中に小さな箱を用意して、そこに全部詰めてしまう。キラキラしたものやふわふわしたもの、明るい未来や――甘い夢も。

その蓋を閉じるときは、いつもちよつとだけ痛いのだ。でもちゃんと自分で鍵をして、魔法の呪文で封印できる。「こんなの、最初から欲しくなかったもん」。

あとは埃をかぶった頃に取り出して、そんなこともあったなあと懐かしむだけ。

もしかしたらいつだって、ほんのちよつと手を伸ばすだけでよかったのかもしれない。

けれど五年もの間あきらめ続けてきたヤヨイには、もうそれを試してみるだけの勇気が残っていなかった。ヤヨイは欲張りだから、くれるなら全部ほしい。一つだけ、一度だけ、一瞬だけ——それじゃ我慢ができないから。手に入れた途端に取り上げられたら、きつと悲しくて死んでしまうから。

——でも、うれしかった。

涙は穏やかに湧き続け、やがて心に還元しきれなかった分だけこぼれた。小鼻の脇を流れたそれが唇を少し濡らして、そこからヤヨイの中に還りたがった。その想いの名まえを知っているけど、言葉にするのが怖かった。

ヤヨイはただじっと、ジェイルの瞳を見つめた。そこに浮かぶ表情は読み取れず、瞬きすると、もう一筋だけ涙が流れた。

「……あの子が嫌いだって言うならそれでも仕方ないけど。なかったことにするのは、可哀想だよ？」

恋は独りじゃできないんだ。あたためるにも、壊してしまうにも。

高く澄んだ声が、静かに言った。

「っていうのはまあ、僕の個人的な意見で」

突如ヒトがかわったように明るく言い放つジェイルに、ヤヨイはワンテンポ遅れて反応した。

ぎこちなく涙をぬぐいながら、金色の髪がかしげた首に添って流れる様を見つめる。

ジェイルはあぐらをかいた膝に肘を置き、頬杖をついた。

「残念だけど、この際君たちの気持ちを斟酌している時間はないんだ。コトが済んでから、ゆっくり二人で解決してよ。見たでしょ？ 転がり出てきたおじさんたちの顔ぶれ」

そう言われても、ヤヨイにとってはほんのり顔を覚えているだけの人たちだ。温水洋一なんかは印象的だけど、他の人たちは少し似ている別人がいたら間違えるだろう。

しかしヤヨイの戸惑いなど最初から気にかける様子もなく、ジェイルはクッションを抱えてあぐらをかいた。

「あれみんな、この国を実質的に動かしてる重臣だよ。なに話し合ってたんだか兄上もいらっしやったし、あそこで陛下がああおっしやった以上、君はもうグレイヴのお嫁さん確定ってことだね」

「え……？」

「君の国では年齢的に少し早いみたいだけど、悪い話じゃないはずだよ。まず完璧な居場所ができる。それから生涯を通して寄り添ってくれる相手ができる。面倒なことは全部グレイヴに押しつけちゃえばいい。アルガンダワは辺境だけど実入りのいい土地だから、ランドボルグにいるより豪勢な暮らしができるよ」

豪勢な暮らし、というのがどういうものか咄嗟に想像がつかず、ヤヨイはビラビラドレスと骨付き肉を思い浮かべた。いやいやちがう、と次に出てきたのは飴玉のようなダイヤがついた指輪やネックレス。我ながらいかんともしがたい貧困な発想に、状況も忘れてうんざりした。

落ち着け、と念じながら額をおさえて考える。頭に浮かんだのは、安心感のあるモンゴロイド系の顔立ちだった。

そう、ヒロだ。

とにかくまずヒロに相談しなくてはならない。

どう甘く見積もっても、ヤヨイの処理能力を超えたなにかが起きている。できることなら休みをもらって、『落下地点』に彼を訪ねたい。

王様や偉い人がなにをしたいかなど知る由もないが、これくらいの希望はきつと叶えてくれるだろう。もしかしたら、話によつてはヒロが抗議してくれるかもしれない。

飽和した思考を棚上げする方向で結論づけようとしたとき、不意にジェイルが口を開いた。

「僕ね、君のそういうところが嫌い」

「……え？」

自分のことで手一杯だったヤヨイは、ジェイルがなにを言ったのかよくわからなかった。瞳も声も、さっきと同じトーンを保っている。だが目で意味を問うても応えず、ジェイルはヤヨイの頬に残った涙を掌でぬぐい、囁くように続けた。

「だから君はお馬鹿さんだって言うの。僕はだれ？ 文官の長がなにをする人かわかってる？ 僕、君からなにも質問されたことがないんだけど。なんで書庫に配置されたか、なんで急に異動になったか、

なんでグレイヴを挑発してまで告白させたか。知りたくないの？
時を逸したらなにも知ることができなくなっちゃうんだよ？ なあ
んにも言わないから、勝手に話を進められちゃうんだ。君の意
思はどこにあるの？」

ヤヨイは言葉に詰まった。質問の全部が理解できなかったからだ。
オージェルムで仕事をするのに必要なこと、十分な知識や能力は
もちろん、働き口を見つけるツテだって持っていない。だからヒロ
に言われるまま書庫で働き始めたし、上からの指示だと納得して雑
用係への異動も受け入れた。グレイヴのことに關しては——完全
に言っていることが意味不明だ。挑発して？ 告白させた？

いずれにせよ、どれもヤヨイの意思が介在する余地も主張する必
要もない。だからヤヨイは、ジェイルが話を続けるのを待った。し
かし彼は頬から手をはなし、忌々しげなため息をついた。

「君っていつもそうだよな」

平坦な声に、ヤヨイは周囲の空気が冷えたように感じた。ジェイ
ルは青緑色の瞳を冷たく光らせ、ゆつくりと腕組みをして顎を上げ
た。

「君のそういうところが、嫌いな」

ヤヨイは目を瞠った。いつものようなお遊びの意地悪ではなく、
汚いものを見るような眼差し。なぜそんな眼で見られ、そんなこと
を言われなくてはならないのか、ヤヨイはわからなかった。

（そういうところってなに？ 一生懸命、真面目に考えて、頑張っ
ているのに！）

ヤヨイはこれまで、人に好かれる努力もしてこなかったが、嫌わ
れるようなこともした覚えがない。淡々と学業に勤しみ、仕事をこ

なしていく毎日の中で、そのスタンスが人間関係に支障をきたしたこともない。

こんなふうに、責めるような眼で見られなきゃならないいわれはないはずだ。

理不尽な宣告に対する憤りで、緩んでいた涙腺から涙が浮かぶ。唇をかねて深呼吸を繰り返して、平静を装って顔をそむけた。

だがジエイルは、声を大きくしてなおも言い募った。

「ほら、それ。あのさあ、ヤヨイ。僕はいまなにしてる？ 君の前に座って、君の顔を見て、君に話してるんだけど、知ってた？ 知ってたらこつち向いてなんか言いなよね。君がひとの顔色うかがってなんか考えるのは自由だけどさ、勝手に結論出さないでくれる？ それとも君の憶測はすべて正解だとも思ってるの？」

「そ、そんなこと思っていない！」

「じゃあどうして黙ってるの？ ここの常識もろくにない君に、おまえの考えてることはこのあたりか、って顔される僕がどれだけ不愉快かわかる？ なにをどう解釈してどう感じたかも言ってくれない君と、どうやってわかりあえって言うのさ！」

最後は怒声だった。ヤヨイは目を見開いたまま凍りつき、ただジエイルの、怒りと興奮で上気した顔を見つめる。

余計なことを言わないよう心がけていた、ただそれだけなのに。自分で考えて、できる範囲のことを精一杯こなしていく、それが従順で使える使用人だと思っていたから。

でも確かに、本当にそれが正しかったかどうかなんて——相手がどう受け取るかなんて、考えたこともない。

とにかく誤解を解かなくてはと、ヤヨイは冷たくなった指先を握りしめ、うつむきながらも口を開いた。

「あ……あの、わたし——」

「それやめて。あの、ってやつ。すごい迷惑って言われてるみたいで腹が立つ」

「あ……め、迷惑だなんて、言ってない……ッ」

言い返した拍子に目尻からぼろぼろと涙が落ち、あっという間に顎先から滴った。手の甲でそれをぬぐうヤヨイに、ジェイルは厳しい口調で続ける。

「なんで泣いてるの？ 君を理解しようとして失敗してる僕が、泣くほどおかしい？」

「ち、ちが……ッ！」

「じゃあ、どうして、泣いてるの？」

一語一語切るような問いが迫ってきて、知らないと怒鳴りたくなつた。ヤヨイのほうこそ、どうして突然そんなことを言われなきゃならないのか聞きたいくらいだ。

なにか言わなくては、でもなにを言えばいいかわからない。

いたたまれなくなつて、ヤヨイの涙は堰を切つたようにあふれ続け、鼻の奥が腫れ上った。顎のふるえがとまらない。服の袖で目元をおさえ涙をすすするヤヨイの耳に、ジェイルの短いため息が聞こえた。

「……ねえ。僕、君になんて言つた？」

「き、きらい、って——」

「うん、なにが？」

残酷な質問だった。ヤヨイはこらえきれず、くしゃつと顔を歪めてしゃくり上げた。

「わたし、が……っ」

抑えていた嗚咽がもれる。勝手に咽喉が開いて、声が流れ出していくようだった。呼吸のたびに気管が痙攣して、頭が痛くなってくる。

膝を抱えて顔を伏せるヤヨイの頭を、ジェイルは掌でぽんと叩いた。

「ほらごらんよ、間違ってる。そういうところが嫌い、って言ったんだよ」

ぽんぽんと手を弾ませながら、「なんか怒鳴っちゃった。ごめんね」と照れくさそうに言う声は、いつものジェイルのものだった。

「あのねえ、ヤヨイ。僕は君がなあんにもわかってないってこと知ってるよ。でもそれで不都合だったら、自分でそう言ってよこすだろうって思ってる。命令するほうはね、される側の気持ちなんかいちいち考えないんだ。嫌だったらそう言わなきゃ。だけど君は一度だって自分の考えや不満を口にしなかった、だからこんなことになったんでしょ？」

耳が痛かった。きっとそのとおりなのだろう。

ふと、ジェイルがヤヨイをからかって怒らせるのは、自分の言葉でなにかを語らせようとしていたからかもしれない、と思った。

それを裏付けるように、ジェイルはゆっくりと続ける。

「君たちは自分のことを話すのが苦手だよ。それもわかるけど……不満も、感謝も愛情も、差し出すことを覚えなきゃ、受け取ることもできないんだよ。価値観がちがう、常識がちがう、って最初から壁を作ってたら始まらない。意思の疎通って、話し合ったりケンカしたりして図っていくものじゃないのかな」

促すように顎先にかかった指が頤をなで、ヤヨイは氣力を振り絞って言葉を紡いだ。

「だ、って……うまく言えない……わかってもらえないのも、まち

がうのも、拒んで嫌われるのも、怖い——！」

「確かに流されてれば嫌われないけど、だれも君のことを大事にはしてくれないよ？　言葉が足りないならさあ、手で触れて目を見てごらん。きつというんなことが、それだけでわかりあえるんだよ」

ジェイルは広げた腕でヤヨイを優しく抱きしめて、切りそろえた前髪に顎をすり寄せた。甘い香りを胸に吸い込みながら、ほのかに同じ香りをさせた人を思い出す。

以前にもこうされたことがある。書庫で、母を想って気づかぬうちに泣いていたヤヨイを、グレイヴが同じように慰めてくれた。確かにあのとき、彼の優しさを過たずに受け取っていた。

——君が好きなんだよ。可愛くて仕方がないんだ。

ジェイルの言葉が、乾いた布に水をこぼしたように染み込んでいく。グレイヴは不器用で口下手だけれど、ちゃんと愛情の示し方を知っていたのだ。

いつもまっすぐにヤヨイを見つめ、頬に触れ、掌に口づけたのは、言葉にできないものを差し出してくれていたからなのだ。

大切なものを与えてくれようとしていたのに、見ない振りをしようとした。自分が傷つくのが嫌で、彼を傷つけるところだった。

あの崖の向こうを思い出す。

ipodをくれたバイト仲間の女子大生は、ヤヨイを哀れむことで優越感を味わっているのだと思っていた。

ビール券を握らせて逃げるように走り去った同級生は、貧しいヤヨイに施しをしたのだと思っていた。

本当にそうだったのだろうか？

ヤヨイは自分が二人に向けた表情を、思い出すことすらできない。

なぜそうしてくれたのか、問いただしてみればよかった。そうすることができていたなら、あの場所でヤヨイはひとりぼっちではなかったのかもしれない。不安だとかうらやましいとか、もっと素直に弱音を吐いていたら、自分の場所を受け入れることができていたのかもしれない。

グレイヴはヤヨイが築いた壁を、越えようとしてくれた。
ジェイルはその壁を、築くべきではないと言った。

「……………」

激しい波を立てた心が、緩やかに落ち着いていく。涙もとまり、乱れていた呼吸が正常に戻っていった。

それを見計らったように、ジェイルが腕をといた。

「さて」

いつもと同じ明るい声で言って、ジェイルがそつと身体を離す。

赤くなった鼻を手で隠して顔を上げると、ジェイルは笑顔を浮かべていた。

「感想は？」

「……恥ずかしい。殿下ひどい」

「うん」

「びつくりした。殿下こわい。でも……色々わかった、気がする」

「うん。よかったね、ヤヨイ。とりあえず、グレイヴに会える？」

ヤヨイは一つ深呼吸をして、大きくうなずいた。蓋の閉まりきらなかつた箱は、もう手を取る必要がない。

そして心からの感謝と親愛を込めて、もう一度ジェイルの胸に頬をうずめた。

ジェイルは拒むことなくヤヨイを抱きしめ、前髪をかきわけて額にひとつキスをした。

5（後書き）

どうにか続きを、と思って勢いで書き上げました。

なんかもう、なんか・・・とにかく明るい展開に持って行きたかったんデス。

拍手小話、三話上げました。

展開的にお気に召さない場合がありますので、初回ページをお読みになって、

閲覧するかどうかご判断下さい。

なにかもう、色々といっぱいいっぱいでした。

おじいちゃんとおばあちゃんには、自分で手紙を書いた。

『今日はお城に泊まります、明日の終業時間には帰ります。殿下のお世話になるので、心配しないで下さい』

それだけの文を書くのにひどく手こずったのは、鎮まらない鼓動が指先をふるえさせ、何度も紙の上にインクの水たまりを作ったからだ。

でもちゃんと書き上げて、『ヤヨイより』と署名して、ジェルに預けた。警備隊士に託されたそれは、古強者の大先輩の家に間違いないく配達されることだろう。

ヤヨイは広い机に肘をつき、組んだ手で顎を支えた。高熱を出したようにぼうつとする反面、自分のどこかが凍りついていく気がした。それがいいことなのかそうでないのか、判断できない。

じゃあちよつと待っててね、とだけ言って上司が部屋を後にしてから、どれだけの時間がたっただろう。

カラン、カランと軽い鐘の音がかすかに聞こえ、昼休みの始まりを告げる。じくじくと膿んだような疼きが全身をつつみ、考えすぎるあまりヤヨイの頭は次第に真っ白になっていった。そして散漫だった思考が徐々に収斂し、ひとつひとつ浮かび上がっていく。

生まれ育った場所。

不思議な湖。

ヒロ、ジェナ、ガラムやルーヴェン、ゼロン、ここで知り合った大勢の人たち。

しかしなにを思い浮かべても、最後にはあのチョコレートブラウンのつややかな髪をした人に行き着いてしまう。そうするとこめかみが痛むほど赤面してしまい、目を回しながらそれをかき消すのだ。そんなことを繰り返しているのだから、短時間で神経が擦り切れるのも無理はなかった。

「……………」

組んだ手に額を押し当てると、うつすらと汗ばんでいた。

じき、ここへ来る。どんな顔で迎えればいいのだろう。

気づけばまた、懲りずに彼のことを考えていた。

出会いから今朝ほどまでに見た表情が、パラパラと脳裏をよぎっていく。音も匂いもない記憶の断片。笑ったり怒ったり赤くなったり、ぶっくらぼうなくせに感情の豊かな人だった。

あれだけ間近でつぶさに観察したというのに、よくわからないという印象が一番強い。けれど、それだけでもなかった。

（そうか……わたしが王子の顔を見てたってことは、王子もわたしを見てたんだ）

粗末な椅子の上で放心していたヤヨイは、その事実思い至った瞬間唐突に決意した。

——よし。逃げよう。

悪魔のような上司にこき使われたおかげで、たった数日の内にヤヨイはランドブルグ城に随分と詳しくなっていた。

それはなにも、いわゆる間取り上の単純な事情だけではない。こ

の時間はどこに近衛騎士が出没するか、上層警備にあたる騎士の巡回ルートはどうなっているか、警備隊士はどうか。そして彼らが放浪する自分を見つけたら、どういう行動をとるか。

ヒロが言ったように、確かに下層は子どもが棒投げをしに来ていたり、裸馬がホールを闊歩していたり、老人が日向ぼっこをしたり、あまつさえ石の床に薪を組んで干し果物を炙っていたりと、仮にも国王の居城とは思えないほど混沌としている。

しかしその分、さりげなくかなりの人数が警戒にあたっていると、いまならわかる。そして彼らの目を盗んで城下へ出るのは難しい。

ヤヨイはすったもんだでヨレヨレになった衣服をきちんと伸ばし、髪を手櫛で整え、深呼吸してからそつと廊下へ出た。コソコソするほうがよほど怪しいからだ。

事実、勤務中ですから、という顔で堂々と下層まで下りることに成功した。一度近衛騎士とすれちがったときは色々な意味で緊張したが、少なくとも彼はヤヨイが「逃走中」であるとは思わないだろうし、思ったところで即座に注進には及ばないはず。

警備のポイントを知っていれば、そこを避けて通るまで。

どこかふわふわと現実感のない心地のまま、本館をやや大回りして裏口へ向かう。警備隊の詰所が見え始めたところで、通用門が危険かもしれないとようやく気がついた。

(……でも正門には騎士が立ってる……警備隊士は上層に来ないし、わたしを探せて命令されてないかもしれないか)

ぼやっとした頭で想像する。敵前逃亡を図ったヤヨイを捕獲せんと指揮を執るのはジェルだ。彼は自分の指示を無視されたり、完璧に遂行されないことをひどく嫌う。待っていると言いおいたはずのヤヨイが消えていたら、それはもう鬼のように――。

「——っ」

ぶる、と背筋をふるわせて、ヤヨイはせかされるように歩き出した。

大丈夫、いつもどおりに振る舞えばいい。おじいちゃんたちに、手紙を出したのに帰宅が早いと訝られたら、早引けだとなっこりするべし。頑張れわたし。

だが明後日の方向に前向きなヤヨイは、表面上冷静に見えてもやはりかなり混乱していたのだ。

まずなぜ逃げ出すのか。逃げ出してどうするのか。一体なにから逃げ出したのか。それら根本的な一切を思考から排除して疑問を抱かないなど、平素のヤヨイにはありえない。その証拠に、背後から叩きつけられたかと思うほどの怒声が聞こえた瞬間、考えるより先に脚が勝手に駆け出していた。

「待てッ!!」

空気がふるえるような大声だった。

詰所から何事かと泡を食った様子で——実際食べかけの菜っ葉を口の端からはみ出させて——警備隊士がまろび出る。その横をひゅんっと走り抜け、通用口の扉を体当たりの勢いで押し開いた。

追跡者がだれかなど、振り向いて確認するまでもない。

不審者はまず怒鳴りつけて萎縮させる、その原始的で荒々しい作戦は近衛騎士というどこか雅やかな職種に不似合いだ、でもちよつと落差に萌える、などと普段なら絶対考えないようなことを脳の表層が過ぎていく。

いまならちよつとした記録が出せるだろう速度での猛ダッシュだった。剥き出しの土の地面は走りにくいし、昼休みだったためそこら中に人がいる。

衆目の集まる中、服の裾をからげて走る『外』の娘、それを追う近衛騎士の制服をまとった王子。

（スキヤンダルだ、ゴシップ紙の一面だ！ あ、そんなものないか）他人事のように思考が乖離し始めて、脳が酸欠になりつつあると悟った。気道がふさがり、頭痛がしてきた。それでも的確に木立を、啞然とする人々を避けていたが、逃走劇は通用門の手前であっけなく幕を閉じた。

「ヤヨイツ！」

「うはあつ！？」

背後から伸びた腕が腰をさらい、勢いで両足が浮く。ただならぬ気配に反射的に槍を構えたのである。う警備隊士が、門柱の前で目を丸くしていた。顔見知りの隊士の「何事？」と問う視線に返す言葉を、随分と長いこと考えていたような気がした。

だがそれは一瞬だったのだろう。

たくましい腕に抱き取られてバランスを崩し、そのまま地面に引き倒された。したたか打ちつけた尻に悲鳴を上げ、舌をかまなくてよかったと心底安堵する。

束の間とまった心臓が再度激動を始めるとともに、肺胞を浚い尽くして吐き出された空気を求めて咽喉が開いた。

「待てというのに！」

頭上から降ってくる声は理性的とはいいがたいものの、呼吸は平常だ。さすがは日がな一日鉄の塊を腰に下げ、直立不動を貫く職業。加えて警護の時間外は、あのオレンジ色の屋根の向こうで鍛錬を惜しまないのだから、彼が見かけ以上に頑健なことも納得だ。

「っ……も、はしれな……」

くやしきまぎれに言い返すが、情けないほど目の前がチカチカしている。せわしなく呼吸を繰り返して、乾いた咽喉が引き攣れて大きくむせ返った。

ぐったりと広い胸に寄りかかったまま、目を閉じる。瞼を焼く陽光や食事を作る竈の匂いなどがやけにリアルで、ヤヨイはやっと、現在の状況を飲み込み始めた。

いつの間にか警備隊士は姿を消し、門の向こうで野次馬を追い払う声が聞こえた。

「え……つと……？」

ちようどよい高さの肘掛けにおいた腕の肩口で、額に浮いた汗をぬぐう。

「うわっ！」

こんな青空の下、地べたに座って肘掛けがあると思った自分はバカだ。それはヤヨイの身体に巻きついたグレイヴの腕だった。

あわてて手についてそこから這い出し、はっと周囲を見回した。遠巻きながらも、たくさんの目がこちらを注視しているのがわかったからだ。

（ちよつとこれ、どうしよう……！）

中途半端な四つんばいで固まったヤヨイの腕が、力強くぐいと引き上げられる。よろけながらも萎えそうになる脚をどうにか踏ん張って立ち上がり、顎が鎖骨にめり込む勢いでうつむいた。

視界には地面と自分が履いたスカート、それから紺色の上着と白いズボン、焦げ茶色のブーツ。そのつま先が来た方向に向くのを見て、鳩尾が冷えた。

腕をとられて引かれるまま脚を動かして、なんて考えなしなことをしたのだろう、と苦い悔恨がこみ上げる。

逃げたところでどうなることでもなかったのだ。なにか政治とか、

そういう大事な問題が関わっていたのだろうに。きつといるんな人に迷惑をかけてあきれられたにちがいない。

唐突な過度の運動で跳ね回っていた心臓は、重苦しい沈黙で不安と緊張を訴えていた。

1（後書き）

お久しぶりでございます。

どうにかこうにか更新にこぎつけました。

なんとか上げた、というだけなので、後でなおさなくちゃ・・・。

足元ばかり見つめたままひたすら歩かされ、着いたところはオレンジ色の屋根をかぶったあの建物だった。

中庭越しに眺めるばかりではわからなかったが、平屋でどっしりした構えの建物だ。柱や扉に無駄な装飾は一切なく、土に接する部分から苔むして、古いお寺のようだとヤヨイは思った。

正面玄関らしい扉の前には、一塊の石を削り出した階段が数段あり、大きく庇が張り出している。その下は色がくすんだ木の板が敷かれ、ウッドデッキのポーチ、といえはいえるだろうか。屋内に窓が少ないのか建具の影が濃く、そこに立つと目が慣れるまで少し時間がかった。

裏庭のほうからは、馴染みのある金属音が不協和音を奏で響いている。そつと王子の横顔を盗み見ると、厳しい表情のままだった。

「近衛の宿舎だ」

やっぱり、とヤヨイは重いため息をついた。

ヒロにあれほど近寄ってはいけない、と言いつけられた人々の巢窟に足を踏み入れている。けれどその言いつけ自体、いまだに有効なのかもちよつと不明だ。

促されるまま、日曜大工の手作り品みたいな木のベンチに腰を下ろし、寒くもないのに二の腕をさする。気まずいのもそうだが、やはり抑えきれない苛立ちが、小さな仕草に滲み出してしまう。

ふと王子に気取られたかな、と端正な立ち姿に目を向ける。グレイヴはポーチの手すりにもたれ、腕組みをして城館のほうを睨んでいた。

あたりまえだが朝と同じ紺色の制服。その胸元の銀のボタンに髪

をとられたのは、つい数時間前のことなのだ。

さわさわと秋風にそよぐその腰まで届く長い髪を見ていたら、性懲りもなく胸が高鳴るのと同時に、彼の兄を思い出して急に腹が立ってきた。

よく考えたら、ジェイルは随分と好き勝手言ってくれたように思う。

確かに不満も不平も口にしなかった。ろくに質問や抗議もしなかった。

けれど、なにも言わないならそれでいいだろう、というのもあんまりではないのか。唯々諸々と流されるおまえが悪い、ときっぱり言い切られてしまったわけだが、これだけコロコロと環境も状況もかわる中でいちいち主張を通していくのは、相当の胆力と自我の強さが必要だ。

（そうだよ……主張するって、ほんと疲れる）

ヤヨイはそんな風に、たったいま置かれている状況に対して言い訳を試みた。

実際にはただ目の前に迫った問題を放り投げただけで——あまつさえ、その核となる人に追っかけられた拳句捕獲されて、気まずい思いを味わっているわけだが。

冷静に振り返れば言い返したいことも多々ある。ただ、ジェイルの言いたかったことだけは忘れないようにしようと思った。ヤヨイが内側に向かって閉じていたのは本場で、彼に指摘されなければ自覚のしようもなかったのだから。

自分の内面にずけずけと踏み込んでこられるのは、正直不快感のほうに勝る。それでも、彼はとても大切なことを教えてくれたのだ。

ようやく地に足がついた、とヤヨイが肩の力を抜いた瞬間、見計

らったようなタイミングで王子の硬い声が降ってきた。

「どこへ、行くつもりだった」

なぜ逃げた、とは言わなかった。頼りなく揺れた語尾に、それを口にすることができなかったのだと悟る。

誤解させてしまっただろうか。いや、確実にさせただろう。悲しませるつもりはなかったのに。

途端に沈鬱な心地に叩き落され、ヤヨイは懸命に言葉を探す。探しながら、ああ、本当にどこへ行くつもりだったのだろうか少しだけ途方に暮れた。なんの利害もしがらみもなく、ただ逃げるために逃げたヤヨイを受け入れてくれるところなんて、ただのひとつもありはしなかったのに。

元いた世界にあつたもの、永遠に失ってしまった人たちの面影が去来しそうになり、あわてて意識をそらす。いまだけは、思い出しではいけないとわかっていたから。

「べ、別に、どこでも……ただ……」

しどろもどろになりながら、膝の上で手を握りしめた。指先が青く染まっていて、それがなんだか未熟で取るに足らない存在の証みたいで、ひどく惨めだった。

そんな自分の姿を曝しているのが、よりもよってグレイヴ王子だということも切ない。いや、彼だからこそその気鬱なのだろうか。堂々巡りになりそうだった。

「ジルの——陛下のおっしゃったことは、ひとまず忘れてくれ」
「え？」

かわらず硬い声に、ヤヨイは意味を図りかねて顔を上げた。マネキンのように同じ姿勢でいる王子からは、声と同じくらい硬質の気配が放たれている。

この人に会ったらどんな恥ずかしい思いをするものか、と恐れて

ただけに、どうやら難しい話になりそうだと拍子抜けした。その分だけ気が楽になり、ヤヨイは縮こまっていた気持ちを緩めた。

チャリ、と腰から吊った剣を支える鎖が鳴り、王子が手すりにもたれたまま、長い脚を交差させて組む。こちらに向き直った王子の強い視線を、試練のように正面から受け止めた。

「過去、『外』の人間が王族と縁を結んだことはない。俺は、おまえたちが自由意志で自分の相手から王族を除外していたと思いたいし、そうあるべきだと思う」

「……意味が、よく……」

無意識に首を振りながらおそろのおそろ口になると、王子は痛みをこらえるように目を眇め、苦しげに唇をかねて黙した。

王様の部屋の前での別れ際、真っ赤に染まったあの無防備な顔とあまりにちがう表情に、ヤヨイは衝撃を受けて言葉をなくした。同時に、王様が彼になにか、とても背負いきれないほど大きななにかを持たせたのだと察した。

王子はヤヨイを好きだと言ってくれた。

王様は、王子にヤヨイと結婚しろと言った。

なのになぜ、これほど苦渋に満ちた表情をするのだろう。

ちり、と、深いところがかすかに音を立てた。なにかとても大切なもののすべてが違いすぎて、永遠にわかりあえない予感のようなものが、ぷくりぷくりと浮かび上がってくる。

——やはりダメだ。このままでは、絶対にダメだ。

なにかをどうにかしなくては、不幸になる。暗い確信が、ヤヨイの中に生まれたばかりの甘い痺れを払拭した。

せつかくジェイルが開いてくれた扉が、閉じていくのが見える。そしてまた、ここではないどこかへ、なにも悩まなくてすむところへ行きたいという漠然とした欲求に支配されていった。

不規則に周囲の空気をふるわせていた金属音が、不意にやんだ。それを待っていたように、グレイヴがもたれていた手すりをはなれて、ヤヨイの隣に腰を下ろす。ひと一人分のスペースを空けた王子が遠くて、もう胸いっぱい吸い込んだ香りも思い出せない。

「……期限はある。陛下のご下命に背くことはできないからだ。だが俺は、おまえを追いつめたくない」

ぽつりぽつりと、膝に肘をつけて軽く手を組み、足元を見つめて王子は言った。

「陛下の命令で、国の思惑に左右された結婚なんかには、おまえを利用したくない。そんな風にして、おまえを手に入れたわけじゃない」

ああ夢じゃなかったんだな、と、冷えていく心を持て余しながら、ヤヨイは淡々とその言葉を聞いた。少なくとも、好きだと叫んでくれたあのと、王子はただ自分の気持ちに忠実でいたのだ。

「俺は、おまえが好きだ。そこから……始めたいんだ」

ヤヨイは中庭をぼんやりと眺めて王子の顔を見なかった。王子も、ヤヨイに目を向けはしなかった。

確かにぴつたりと合わさったはずのものが、大きくずれていくのがわかる。

いまはやめて。もう言わないで。受け取り方のわからないものを、それ以上押しつけないで。

息をつめ、強張った頬に流れた涙を王子は見えていなかった。

「次の春まで、猶予を得た。俺に、おまえを口説く機会を与えてくれないか」

それは、そんな風に、すぐるように口にしていい言葉だろうか。

王子の声は苦悩と困惑に彩られて、とても愛を訴えているように
は聞こえない。春にはだれかの都合どおり、辺境の領地へ夫婦とし
て赴くことになる。その事実だけを突きつけられたような気がした。

ただ、ヤヨイだけを求めてほしかった。それがゆるされなかった
から苦しんでいるというのなら、せめて情熱だけを捧げてほしかっ
た。

ぼろ、ぼろ、と涙がこぼれる。

感情の昂ぶりも嗚咽もともなわないそれに、王子は気づいてくれ
ない。ヤヨイも、気づいてほしいとは思えなかった。

だが沈黙が雄弁に語る。王子は視線を下げたまま、広い肩に緊張
を漲らせた。

「……俺と結婚するのは、嫌か？」

低く甘い声が、やわらかい場所にそっと刃物を突き立てる。

ヤヨイは悩むふりして両手で顔を覆い、名まえのない涙を拭った。

「一つだけ、教えてほしい」

唇をこじ開けることすらできないヤヨイをどう思ったのか、王子
は大きく顔をそむけて声をふるわせる。もう離れていかないでと、
理不尽な慟哭が咽喉元までせり上がって、消えた。

「一番大きな気持ちはなんだ？ 王への反発か、怒りか——俺への、
嫌悪か？」

膝に置いた手を、ぎゅっと握りしめる。真っ先に胸を染めたのは、
そのどれでもない想いだったから。

黙ったまま、こちらに向けられた紺色のリボンの結び目を見つめ
る。

視線に感づいたか、リボンがぎこちなく動いて見えなくなる。

ヤヨイを斜めに見上げた緊張で淡く翳っていた紺色の瞳が、みるみるうちに色を増してとろけていった。

面映そくに唇の端を上げ、グレイヴは目を伏せる。そしてぽんとヤヨイの頭に手を置いて、髪に指をからめながらそっと引いた。

「……それなら、いい」

そのまま目をそらし、立ち上がって姿勢のいい後ろ姿をヤヨイに見せた。雑事を片づけてくる、と笑みを含んだ声で告げ、長い脚を踏み出してポーチを下りていく。

迷いのない足取りを見送りながら、ヤヨイは静かに混乱し続けた。
いた。

自分は一体、どんな顔を見せたのだろう。いまここに鏡があつたなら――。

(……絶対、見ないよ……)

そんな複雑で理解不能なものなんて、見たくなかった。

2（後書き）

拍手小話、追加してます。

以前からあるものの後ろなので面倒ですが、お時間があれば是非。

午後の進行を部下に任せてきた、と告げてポーチの下から手を差し伸べる王子は、笑顔だった。晴れやかとは言いがたいものの、先ほどまで滲ませていた悲壮感はどこにもない。

ベンチから腰を上げて歩み寄りつつ、ヤヨイは彼の手をとらなかつた。好奇心丸出しのギャラリーに横目で見られながら、初めて心を明け渡そうと——少なくとも、そうできるかもと淡い期待をした人と手をつなぐのは抵抗がある。

なにより遠く離れてしまった彼に、触れてはいけない気がした。それでも失礼にならない程度、友人よりはやや親密な距離に並んだ。

「……昼、食いはぐれたろう。ジルがなにか用意しているはずだから」

思うところはあるだろうに、王子はさりげなく手を引っ込める。ヤヨイの内側で起きたことを知らないから、恥ずかしがっていると思ったのかもしれない。

緩めた歩調で規則正しく脚を運ぶ王子は、時折様子をうかがうようにしてヤヨイを見つめる。視線を合わせるのが怖くて、ずっと下を向いていた。

——王子は、殿下のことをジルって呼ぶんだ。

そんなどうでもいい発見にささやかな喜びを覚える自分もまた、遠く感じる。まるでスカートの裾、ふくらはぎのあたりにくつついた、鳥の羽のように頼りない感覚。

間違いないそこにある。けれどふとした瞬間、そよ風に吹かれても飛んでいってしまいそうなくらい、弱々しかった。

「ちょっと待ってて、って僕、君に言わなかったっけ？」

部屋に戻るなり、腕組みしたジェルに上から睨み下ろされた。

綺麗なカーブを描く眉を跳ね上げる顔は、心安らぐ観賞物ではなかったが、覚悟したほどの冷やかさは見当たらない。どれだけひどく怒られるかとびくびくしていたヤヨイは、いつそ拍子抜けする。

「いままで僕が君に出した指示の中で、一番簡単だったと思うんだけど。なに？　僕を試してるの？　どこまで簡潔かつ理解可能な指示を出せるか？　悪いけどあとは『立て』とか『座れ』とか、犬の仔に出す程度の命令しか残ってないよ？　しかもなんだか君には遂行不可能なように思えてきたし」

「ちょ、ひどっ！」

そのまま、気色ばむヤヨイの襟首をひつつかんでズルズルと引きずり出すのだから、まさに犬の仔扱いだ。

「かみつく前に、ご飯食べれば？」

ぼいっと放り出された赤い絨毯の上には、白い布が敷かれている。そこに並ぶものを見て、ヤヨイは声を上げた。

「うわ、すごい！　——ってこれ、ご飯、ですか？」

眉を寄せて訝るヤヨイの横から絨毯に上がったジェルは、さつさと白い陶器の皿に自分の食べたいものを取り分け始める。

「食べられるもので、ちゃんと活力源になればご飯でしょ？」

それが『外』でいうところの栄養補助食品や、ハイカロリーのプロテインバーなどに相当するなら、推奨はできないまでもそう言えないこともない。

しかしこれはどうだろう、とヤヨイは戸惑いが勝ちすぎて固まってしまった。

なにしろジェイルが嬉々として口に運ぶ、あるいは運ぼうとしているもののすべてが、いわゆるお菓子だったからだ。

ロマおばあちゃんもびっくり。砂糖に蜂蜜、果物の風味を移したシロップ、練乳などなど。タルトにケーキ、パイもあるが、そのどれもがぱつと見て正体不明なほど、この城でそろそろ限りのありとあらゆる甘味料をかぶっていた。

「殿下、これ、これって——全部でいくらですか」

口について出たのは、言おうとしていたこととは別の質問だった。

きょとんと青緑色の目を睜ったジェイルは、そのまま床の上へ視線を落として右から左へ動かした。

「……君の給料で換算するなら、一月分？」

「ぶはっ」

胃袋を直撃する事実、ヤヨイは目を回した。調味料や香辛料が高価なことは知っていたが、砂糖やその親戚の値段は想像以上に破格だったらしい。

自分の給料が日本円でいくらにあたるか知らないし、こちらのものの相場にも詳しいわけではない。だが仮にも成人とみなされたヤヨイが、要職につく彼の下で稼ぐ給金は決して安くはないはずだ。よしんばコンビニのアルバイト程度だったとしても、一度の食事に費やしてよい金額ではない。ましてお菓子で。

なんとという浪費。そして価値観の相違。

驚きを通り越してあきれ返るヤヨイをよそに、ジェイルは大喜びで美味しそうに食べている。大口を開けても崩れない美貌に、口元を汚す砂糖が妙に似合っていた。

自分で肩掛けに改造した布袋には弁当が入っているが、とにかくはお相伴に預かるべきと判断する。

しかし、最も困窮したときには、一週間納豆と白米だけを食べ続けたこともあるヤヨイだ。布袋の中の手作り弁当、納豆ご飯、そして名も知らぬお菓子を並列に論じることには複雑な感慨を抱いた。

「……いただきます」

ため息も出ないと思いつつ、自分の皿にカステラのようなスポンジを一切れ載せる。てっぺんにはザラメではなく、砕いたピスタチオに似たなにかが張りついていていた。

「殿下、もしかしてお昼はいつもお菓子を食べてたんですか？」

細く優雅な曲線を描くフォークでケーキを細切れにしつつ、頬にまとわりつくおくれ毛を指先で払うジェイルに皮肉を見舞う。おばあちゃん特性弁当を持参するヤヨイと異なり、ジェイルは上層のどこだかにある食堂で昼食をとるのが常だ。

だが唇のクリームをなめとりながら、ジェイルは悪びれもせずうなずいた。

「僕、主食がこれだもん」

「は？」

「別に普通の食事が嫌いなわけじゃないから、出されればなんでも食べるけど、特に理由がなければ大体こんな感じ」

あっけらかんとした声に啞然とし、ヤヨイは軋む首を巡らせて、大量のお菓子を見下ろした。ヤヨイなど見ていただけで胸焼けがするというのに、毎日毎食饗されとしたら、それは紛れもない拷問だ。ゴージャスで贅沢で、緩慢な処刑だ。

ふと頭の隅に浮かんだ、銀盆に載った小さな粒は、無理やり記憶の彼方に押し流す。あんなものの比ではない。

「……………」

多くは言うまい、とあきらめにも似た心地でスポンジケーキを口に運ぶ。なにから採るのか知らないが、こちらの砂糖は茶色っぽくてグラニュー糖より甘くない。そのかわり樹液を煮詰めたシロップや蜂蜜は咽喉が焼けるほどなのだが、このケーキはシンプルな割りにやや「お高い」代物だったようだ。

行儀悪く細い脚で胡坐をかくジェイルを横目に、ヤヨイは平気、大丈夫、と自分に言い聞かせていた。

ヤヨイとジェイルの間に厳然と横たわる溝は、重苦しい背景を伴わない個人的な問題だ。なんにでもマヨネーズをかける人や、ポテトチップスを白米にかけて食べる人に感じるのと同じ距離感。目玉焼きの調味料はなにが好きかという質問で、軽い論争を招いた経験はだれしもあるだろう。

生活レベルや文化、常識を共有していてさえ、容易に起こりうること。

だとすればやはり、近衛騎士の宿舎で感じたあの果てしなく冷やかな隔たりは、詰めるのが困難な距離を示していたのだ。

ずん、と重くなった胃がヤヨイに存在を主張する。精神にかかったストレスの度合いを如実に示す痛みに、ヤヨイはフォークを伏せて皿を置いた。

ヤヨイが一体なにを考えて打ち沈んだか、その原因を知っているくせに、ジェイルはことさらに明るく尋ねる。

「ところでグレイヴは？　一緒に食べれると思ってた」

言いつけに背いたお仕置きか、とむくれる気力も湧かないままに、ヤヨイはぼつりと答えた。

「なんか……行くところがある、って言ってました。午後のお仕事は部下の人に任せたいですけど」

部屋の前まで送ってくれた後、王子はチョコレートブラウンの髪をひるがえして下層へと降りていった。まともに目も見られなかったけれど、あのときはどうしていいかわからなかったのだ。

食べ物を切り刻んだ末に大方を残すというマナー違反を犯した皿を、見るともなしにぼんやり見つめる。全体的に白と茶色でまとめられたそれが、ふと、随分と『外』のものに似ていると気づいた。

もともとどんな味や形状の伝統があったか知らないが、現にヤヨイがとったものはカステラに見た目も味もよく似ている。ジェイルが頬ばっているのはどう見てもシュークリームだし、その皿にはアップルパイが載っている。

一度だけ食べたチョコレートもおばあちゃんのパンケーキも、粉っぽかったりやけにどっしりと重かったりしたけれど、お菓子作り初心者の作品みたいに素朴だった。それは単に素材が——たとえば砂糖ひとつとってもそうだし、ベーキングパウダーとかイーストとか、そもそもあるのかわからないけど、そういうものが——きつと『外』の基準に満たなかったからだ。いや、似て非なるものを工夫した結果か。

これも『外』趣味の一環かな、と見ているだけで胸焼けを起こすヤヨイに、ジェイルが首をかしげて言った。

「ねえ、グレイヴに怒られたの？」

唐突な質問に、それはもちろん、と即答しようとして思いとどまる。

あれは、怒っていたのだろうか。

上機嫌と対極にあったことは確かだが、一概に怒りのカテゴリーにくくれる雰囲気でもなく——。

（あれ……？ 怒ってる人って、どんな風だっけ……）

無意識に指先のインク汚れをこすりながら、ヤヨイはうつむいた。

怒る。怒る。怒る。

単語だけがふわふわと頭の中いつぱいに浮かんで、肝心の情景が出てこない。

多少もやもやと歯がゆくはなつたが、まあいいか、と無駄な努力をあきらめる。

トラブルを避けて何事にも我関せずを貫いた日常が近すぎて、真つ向から浴びせられる怒気を思い出せないのだろう。そう思った。なにかおかしいな、とは感じるが、違和感というにはあまりに輪郭のぼやけた感覚だ。卵の薄皮越しに、カメラのファインダーを覗いたような気分。

それよりも、インクの汚れがちつとも落ちないことのほうが気がかりだった。

不意に、こんな汚れた手を出していいものか、と、決して庶民の口には入らない食べ物に畏怖を覚える。

『外』ではコンビニで一切れいくらで買えてしまふありふれたそれも、こちらでは大層高級な贅沢品だ。それこそ給料をつぎ込まなくては食べられないほど。いかにヤヨイの常識とそぐわなくとも、もつと感動して驚喜して、ありがたくいただくべきではなかったか。

それにこれはきつと、『外』から来た同胞が頑張った証だ。

思えばお城で出される料理やお菓子が、『外』のものにあまりにも似ている、それも当然のことだった。

ここに来るひとたちは、別に特殊技能を備えた選ばれしその道のプロではない。なにか知恵を授けてくれ、と突然言われても、応えることは難しい。ヤヨイ自身がそうだったように。

アサヌマヤやヒロばかりが話題になるのは、彼らがトクベツだからだ。

そうでなかった人たちは、生きるために——あるいは喜んでもらう、

重宝がってもらったために、こちらと異なりつつ自分にできる精一杯を提供したにちがいない。

おそらく衣食住に関わるごく身近なことなら、あまり悩まずに教授することができたのだろう。特にはつきりちがいのわかる和食には、味噌や醤油が必須だがここでは手に入らない。となれば、潤沢な資金を活かして知る限りの菓子類を伝える、というのは想像以上に有効な手段だったことだろう。

現代人の知識と記憶で再現したお菓子は、きつともとあつたそれを駆逐したのだ。

（ちよつと尋常じゃないよね、『外』趣味って）

そんなことをつらつらと考えていると、そつと手首をつかまれて我に返った。

ぼんやりしていたヤヨイはいつの間にか指先をかんできて、身を乗り出したジェイルにそれを制されていた。手の先をたどって視線を動かすと、咎めるような目で見つめられている。

ジェイルの背後、どっしりと暗い石壁に開いた窓からは薄い青の空、大きな鳥がゆったりと翼をひらめかせるのが見えた。

「……ヤヨイ？」

「ヒロってどういう人ですか」

思考回路を経由せず、唐突な言葉が口をついた。数秒たって、どうしてそんなことを言ったのだろうと首をひねった。ジェイルも眉を跳ね上げ、ぱちぱちと目をしばたかせている。

しかしどうせ訊いたのだからと、ヤヨイは続けた。

「アサヌマさんは？ オージェルムの人たちから見て、どんな存在なんでしょうか」

「ヤヨイ——」

言ったきり口を閉ざしたジェイルは、いままで見せたことがない表情を浮かべていた。それが見覚えのある、同情に似ている気がして、ヤヨイは自分の手を取り返して胸に抱えた。きつくかんで歯型のついた指が、じくじくと痛い。

「わたしがなにも知ろうとしなくて言ったの、殿下じゃないですか」

責めるつもりはなかったが、不快感が口調ににじんだ。一瞬ひやりとしてジェイルの顔色をうかがうも、気分を害した様子はなかった。

わずかに眇めた目でヤヨイを見つめた後、ジェイルは息をついて

壁に寄りかかった。

「ヒロとアサヌマ、ね。悪いけど、僕は一般論を語れないよ」

立場、と肩をすくめ、立てた片膝を胸に引き寄せる。

「ヒロは頭のいい男だね。舞台上上がった役者の立ち位置を見極めるのが、とても上手い。時々、僕らのすることすべてが彼に先読みされているんじゃないか、と思うことがあるよ。それこそ脚本のある芝居のように」

ヤヨイは目を瞠った。頭のいい男、という表現が、ヤヨイの知っているヒロ——田中幸弘という人物にまったく結びつかなかったからだ。それをまた、ジェイルのように絵に描いたような伶俐な王子が言ったのだから、呆気にもとられる。

決してヒロが愚かだとか、おバカだとかいうわけではないが、親切で陽気で人あたりのいい好青年という印象しかない。

啞然とするヤヨイにおもしろそうな笑みを見せ、ジェイルは抱えた膝に頬を寄せた。

「『外』の人たちが、僕の知らない常識で生きてきたというのは、こういうことかなって——昔、思ったよ。親父殿が執心するのもむべなるかな。……彼にはなにか、確固たる信念のようなものがある。大怪我を負って発見されたとき彼は二十歳だったけれど、自分の置かれた状況を分析するのも、その結果を受け入れるのも早かった。最初から自分の価値を高く見積もることに臆さない、どこか図々しいところもあった」

自分はいま二十二歳だが、当時の彼と同じだけの胆力は持ち得ないだろう。そう続けて、ジェイルは片眉を上げる。

「……………」

なんともいえない沈黙がただよい、ヤヨイの中でヒロのプロフィールが高速で書き換えられていく。備考がついた、というべきか。

まったく横顔とはよくいったものの、こちらに見えないあちら側は、まったく別の顔だったのだ。

黙り込んだヤヨイから異論も質問もないことを見てとり、ジェイルは皮肉げに続ける。

「もちろん、彼でも読み違えることはあるよ。アサヌマは経験不足だと言っていたけど、ヒロはものすごい自信家の上に独断専行も甚だしいからね、性格の問題もあるんじゃないかな」

「自信家——ヒロが？」

「そう。だから他人の気持ちに鈍い。そして読み違い、最後には周りで巻き込んで全員が大火傷をする」

なにか思い出すことでもあるのか、くすくすと咽喉を鳴らすジェイルは、どこか自嘲的にも見える。

ヤヨイはますます困惑が深まって、本当に同じ人を念頭に置いて話をしているのか、怪しみ始めていた。

ヒロが他人の気持ちに鈍いだなんて、ひとつ屋根の下に暮らした四ヶ月の間一度も感じたことがない。いつだってヤヨイの心情を思い遣り、ジェナや研究所の学者にも細やかな気遣いを見せていた。集落の住人にも同様だ。

ごく自然に周囲にとけ込みながら、決して国王の寵を笠に着るような態度をとることもない。だからヤヨイも、このでたらめな状況にあつて、必要以上に萎縮せずにすんだのだ。ヤヨイにとってヒロは、この世界の先輩として、これ上ない手本となっていた。

「その点、アサヌマはさすがだよね」

新しい情報を処理しきれず今にもフリーズしそうなヤヨイを置き去りに、ジェイルは一転心から楽しげに目元を細めた。

「相手が満足するまで存分にしゃべらせて、いちいちお説ごもつとも、ってうなずいてるんだよ。こっちはろくな反論もないから、や

つつけたと思つて安心するじゃない。でも世間話なんかしてるうちにさ、気がついたら、いつの間にか、アサヌマが最初に決めたとおりになってるんだ。どこで形勢が逆転したのかもわからない」
顔を上げたジェイルは大仰に肩をすくめ、唇をとがらせた。

ヤヨイのまだ見ぬアサヌマに、この王子は勝てたためしがないのだろう。また些細なことで勝負を挑み、返り討ちにあうのを楽しんでもいたにちがいない。

青緑色の瞳は、昔を懐かしむ人に特有の、とろりとした色を浮かべていた。

（そっか……うん。そう、なんだ……）

ヤヨイは意図せず口にした質問で、思いのほか大きな収穫を得た。ことあるごとにジェイルの言う「居場所」の意味が、ほんの少しわかったように思う。

長所も短所もさらけ出し、決しておもねることなく受け入れてもらう努力をして。駆け引きもあるだろう、計算高くなければ乗り越えられない局面もあつていい。けれど誠実であることを忘れなかつたから、ヒロもアサヌマも、地に足のついた人生を手に入れたのだ。

穏やかな沈黙に身をゆだねるジェイルを前に、ヤヨイの胸はざわざわと波立ち始めている。だが表面上変化のないヤヨイは彼にそれを悟らせず、静かに話を聞いていた。

「ここで幸せをつかんだ『外』の人は、たくさんいるよ。ヒロもジェナと結婚して少し落ち着いたし、独身でもアサヌマはちゃんと自分の居場所を確保してる。……ミツエは、命を終わらせる道を選んできましたけど」

白皙の頬に、かすかに苦いものが刻まれる。ヤヨイはぴくりと反応し、前髪の間から探るようにしてジェイルの横顔を見つめた。

「思えば短い時間だった。でも……ガルムとは、心から愛し合ってた。彼と一緒に、日に日に明るさを取り戻していくミツエは本当に綺麗で、いやらしい思惑なんかなくなたって、もっと喜ばせて、もっと幸せにしてあげたいと――」

ジェイルの声は不自然に途切れ、顔を上げるヤヨイに、彼はゆるゆると首を振ってみせた。いまさらだと、飲み込んだ言葉が聞こえた。

やはり、ガルム室長とナガヤマさんは恋人関係にあったのだ。朝の会話で聞きかじったことを確認できて、ヤヨイはほっと小さく息をつく。

憧れの人の過去を耳にすれば動揺も一入^{ひっしゅ}だが、それよりも、亡くなったことだけしか知らなかったナガヤマさんが、ちゃんと生きて幸福で、恋愛もしていたことが嬉しかった。

あんなふうに優しい顔で、思い出を語ってもらえるのがうらやましかった。

知らず口元に浮かべていた微笑に、ジェイルは同じに見えてまったく異なる笑みを見せてうなずいた。

「……アサヌマに会うといいよ。いまはスウェンバックの叔父上のところにいるけど、君とグレイヴのことを聞いたら飛んでくるだろう。君の聞きたいことを話してくれるだろうし、力になってくれる」

心臓がずくと疼いた。

アサヌマに会う。会って話をする。

なぜかそうすることが、ひどく大切なことのように感じた。「スウェンバックって、遠いんですか」

自分の鼓動が、隣の人のもののように切れ切れに響く。内心では頭痛すら伴う動悸に狼狽しているのに、口からすると出ていく

声は妙に平坦だった。

「叔父上つていうのは、殿下の」

「そうだよ。親父殿の弟で、スウェンバックの城主。あそこはねえ……遠くもないけど、時期が悪い。いま城の大改装中で、アサヌマがつきつきりで監督してるんだ。ま、君たちの話は特別だから、呼ばすぐにでも来てくれるよ」

首をかしげるジェイルは、どこか取り繕うような、誤魔化すような物言いをした。そしてややわざとらしく、身を乗り出してヤヨイにおねだりをした。

「ね、ヤヨイ。髪を結つてよ、これ食べるのに邪魔だから」
細く長い指が、目の前に並ぶ皿を指す。

確かに開け放した窓からは絶え間なくゆるい風が吹き込んで、金色の髪を巻き上げている。ジェイルは口の端にまわりつくそれを、ひっきりなしにのけていた。

ヤヨイは食事のとき、髪が落ちかかるのが嫌いだ。だらしないし、汚らしくも見える。だから軽くうなずいて、壁から離れるジェイルの背後に座りなおした。

「引つ張っちゃったら、すみません」
「いいよ、別に」

耳の後ろにふれられ、ジェイルがくすぐったそうに小さな笑い声を上げる。脇腹をさわったら爆笑するんじゃないかな、とうずうずしつつも、ヤヨイはおとなしく手櫛で髪を梳いた。

書記室をお払い箱にされたときには、こんなにしみじみと、この王子と話し込む羽目になるとは思わなかった。しかも同じ日に二度も。どちらかというと、立て板に水のお説教を拝聴するばかりなのだが、不思議とうんざりもしなかった。

軽い反発を覚えたことは、まあ、なかったことにしてもいいだろう。

そんなことをつらつらと考え、ほつれのなくなった髪に指を入れる。

いつかの夜そうしたように、髪を三つの束に分けていてささやかな違和感を覚えた。なんだろう、と確かめるように掌でそつと表面をなでる。

（……ああ、髪が細いんだ。あと、意外とばさついている……）

比較対象のことは考えないまま、やっぱり美人は得だと拙速に結論づけた。色味が淡くて本人の顔が派手だから、髪の毛も麗しく見えていたらしい。

実際、多少髪が傷んでいようと、ジェイルの美しさは損なわれな。彼の内面が強く気高いことを、その瞳がはっきりと映し出しているからだ。

ただ、彼の頬に散った薄いそばかすを発見したときと同じくらい、ほつとした。それがひどく後ろ向きの安堵であることを、ヤヨイは自覚していなかった。

金色の髪を指先で弄びながら、つるつるとすべらかな感触の強い髪に、もう一度無心でふれたいと思う。

（でも、その前に――）

アサヌマに、会わなくては。

一度くつきりと胸に浮かびあがったそれは、怖ろしい勢いでヤヨイの中を満たしていく。

アサヌマさん。

会いたい。

会わなくちゃ、いけない。

——いますぐに。

「——っ」

ぞくり、と背筋に悪寒のようなものが走った。
それはきつと武者震いだと、自分に言い聞かせた。

終業の鐘が鳴るよりはるかに早い時刻、ヤヨイは家に向かって坂の大路を下っていた。

時計を見たわけではないから正確ではないが、多分三時ごろだろう。おやつの習慣はないが、夕食の仕度にかかる直前でもあり、玄関先や店の軒先で一息入れる主婦の姿をちらほら見かけた。屋根をかけたため池のそばで野菜を洗ったり、大鍋に水を汲んでいる人もいる。

甘味を思ふ様口にできない代わりに、甘みのある煙草を喫むのは、男女に関係がない。細く薄い煙があちこちに立ち上り、ほどなく消えていく。

ヤヨイがこの街に来て一番驚いたことは、実は城の威容でもその有様でもない。ランドボルグは配排水事情にこそ、目を見張るものがあつた。

奥様方が井戸端会議をする傍らには、井戸ではなく給水のための池がある。銅のパイプを伝って、城の外を流れる川から水をくみ上げて水車をいくつも経由させて運び、溜めているのだ。

各家庭から出る生活排水は、トイレの汚水を押し流しながら別のラインを通って、城外の畑へと流される。現代っ子であるヤヨイにはちょっと微妙だが、良質の肥料になるのだという。

そのため農作に向かない工業排水を出すところ、たとえば革製品や鍛冶屋などの工房は一つの区域に集められており、専用の系統を使って水进行处理している。

ここで重要なことは、そう、ランドボルグ城が総水洗トイレ完備

であるということだ。

『落下地点』ではいわゆるぼつとん便所に甘んじていたヤヨイだが、イゼおじいちゃんが居を構える住宅街でさえ、トイレに困ったことがない。これは感動モノだった。

これも人呼んで「インフラの鬼」、アサヌマ氏の仕事だ。

聞けばオージェルム国内の主だった城——ランドボルグは言うに及ばず、ドラングヴァイル、ファルジートなど、いわゆる大公領の城も、この二十年ほどでほぼ同じだけの配排水系統を整備しているという。

その中でスウェンバック城だけが遅れをとっており、ようやく先年から工事に着手しているのだそうだ。アサヌマ現場監督が詰めているというのは、そういう事情からだった。

「それひとつとっても、功績は後世まで語り継がれるだろう……」
背中に回した手を組んで、ヤヨイはふらふらと脚を動かす。我がことのように誇らしげだったジェイルの瞳が、その言葉とともに何度も頭の中に甦る。

ヤヨイにとっては水洗トイレ万歳、くらいの喜びだが、実は排水設備の敷設には公衆衛生の観点からこそ評価すべきなのだとジェイルは言った。

伝染病を予防できる可能性が、飛躍的に上がったからだ。

二十一世紀の日本人は、思いのほか伝染病への耐性が低い。先人が持ち前の勤勉さと情熱でもってそれらを駆逐し、厚生も充実していたから予防接種の恩恵にも与れた。世界的に見ても異常なほど除菌や滅菌に固執し、清潔を心がける日本人は、かえって他愛のない雑菌にも弱く重症化しやすくなっているのだ。

つまりいまのヤヨイは風邪だのインフルエンザだけではなく、結核や赤痢、天然痘に狂犬病、それから謎の風土病に罹患する危険に

常に曝されているのである。

あらためて色々なことに落ち込んでしまう。

自分が思いもつかぬ危険と隣り合わせだったこと。

それをあらかじめ防ぐ策をとった人がいること。

その策は普段、人々を暮らしやすくすることで決して自己主張しない方法であったこと。

そうした人が、同じ国の出身であったこと。

その人が、常識の通じないこの場所でそんな大工事を認めさせるほど、大きな力を持っていること。

「……はあ……っ」

朝持ち出したままの弁当箱のせいか、肩から斜めにかけてた布袋がずっしりと重い。

ジェイルには具合が悪くなったと嘘をついて早退させてもらったが、あながち嘘ともいえなくなってきた。

実際胃はきりきり痛むし重いし、高熱を出したように頭がぼわんとしている。それでいてじりじりと焦げるような衝動が間断なく襲いかかり、ゆっくり座っていることもできない。

いてもたってもいられず、とにかくなにか行動を起こしたかった。ジェイルは、明日にはヒロが登城するからね、と言ったが、ヤヨイはそれを歓迎でなくなっていた。

自信家で、独断専行の甚だしい、頭のいい男。

ヒロに会ったら終わってしまう。なぜか強く、そう思った。

玄関ではなく庭口から家に帰ったヤヨイの姿を見て、ロマおばあちゃんは「あら」と声を上げて目を丸くした。

「まあまあ、おかえりなさい、ヤヨイ。どうしたの？ 明日の夕方に帰るって手紙をもらったばかりよ」

勝手口に椅子を出して芋の皮を剥いていたおばあちゃんは、前掛けで手を拭きながら腰を上げた。

「ただいま、おばあちゃん。……なんか、具合が悪くなっちゃって、それで、休ませてもらおうと思ってたんだけど、少しよくなったから、帰ってきたんだ」

まるっきりの嘘でもないが、本当のことでもない。

アウトラインのはっきりしない話をしながら、ヤヨイは自分がほとんど卑小な人間になっていくのを悲しく思った。

シワシワですべすべした手をヤヨイの頬にあて、眉を下げて顔を覗き込むおばあちゃんは本当に心配そうだ。チェスをしに広場に出かけているおじいちゃんを呼び戻す、と言い張る声は、どこか緊迫している。

「いいの、大丈夫。横になれば治っちゃうよ」

申し訳ない気持ちで顔が悪くなり、おばあちゃんはヤヨイの仮病を信じた。

「そう？ じゃあ少し眠って。なにか食べやすいものを作っておくわ」

言いながらも、おばあちゃんは手を休めない。居間の揺り椅子にヤヨイを座らせると、果物を漬けた蜂蜜をお湯割りにするために、鉄のヤカンを調理用ストーブにかけた。

目をつぶっても必要な調理器具を探り当てられそうなほど、おばあちゃんの動きはよどみない。小さな背中で前掛けのリボンが揺れていて、それを見ていたら、ここが自分の家ではないことを痛切に

感じた。

ヤヨイは猛烈にいたたまれなくなり、布袋から弁当箱を取り出しながら立ち上がった。

「おばあちゃん、飲み物もいいよ、おなかすいてないし……ごめんね、お弁当食べられなくて」

起きたら食べるから、と言い添えて差し出したそれを、おばあちゃんは慈愛に満ちた笑顔で受け取った。

「気にしないでいいの。おじいさんもよく、お弁当をそのまま持って帰ってきたものよ。お仕事してれば、食べられないようなこともあるわ。さあ、あたたかいスープを用意しておくから、ゆっくり眠って」

「……ごめんね」

ヤヨイはおばあちゃんの手元から目をそらし、居間の奥にある階段を覗んだ。

早くそこへ行きたい。それを駆け上がって自分の部屋に――。

――自分の、なんて、どこにもなにもありはしないじゃないか。

揺り椅子の足元に投げ出していた布袋を引つつかみ、ヤヨイは足早に階段へ向かった。

おばあちゃんが着ているワンピースは、ヤヨイにくれたものと同じ花柄の布だった。

一睡もできないまま夜を過ごしたヤヨイは、日の出前の薄暗い部屋で書き物机に向かっていた。

ふるえる手で手紙を書くのは二度目だ、そう思うと罪悪感に襲われる。

おじいちゃんたちに結婚の話をできないまま、これから自分がいようとすることを理解してもらうことは難しいだろう。わかっていてなお、身のうちを灼く焦燥に抗うことができなかった。

『浅沼さんに会いに行きます。必ず元氣に戻ります。心配しないで下さい。少しだけ待って下さい』

たどたどしい文章だが、ヤヨイはそれを日本語で書いた。置手紙があれば、まず読んでから対策を講じるはず。追うにせよ追わないにせよ。だがこの手紙を最初に読むのはおそらくジェイルで、それまでは時間稼ぎができるだろう。

母国語だというのに、木の枝で硬い地面に書いたよりまだ汚い線がのたうつ紙に、ヤヨイは真冬のアパートを思い出す。暖房器具のない部屋で勉強をしていると、かじかんだ手で書く文字はこんなふうに無様だった。

それでもセーターやコートを着込み、息を吹きかけていれば指先は温まった。いまは、どうやってひっきりなしに襲う寒さを追い払えばいいのか、わからない。

ヒロを介して給付されたお金を、ブーツの中に押し込んだ。その上から足を入れ、違和感に眉をひそめる。

まだ本格的な冬までは遠いこともあり、防寒着の類は持っていないけれど——なんとかなるだろう。

褐色はごくありきたりでも、やはりヤヨイほど黒い髪の人はいない。そばで見れば顔立ちでそれと知れても、遠目には誤魔化せるだろうと髪を結って帽子の中に押し込んだ。

乱れたベッドを綺麗に整え、布袋を肩からかけ、ドアの近くで室内を見渡す。

そうだ、手紙は枕元に置こう。思いついて机に歩み寄り、それからちよつと悩んで、一文を書き加えた。だれと宛てなくても、わかってほしいと願いながら。

『 ありがとう 』

古代ローマ人は、軍隊が行進するために街道を整備した。何万にも膨れ上がったというその主役は重装歩兵。兜に鎧、大きな盾で完全武装した彼らのために、石畳を敷きながらの行軍だったという。ローマを出発して道路整備をしながら目的地を目指すのだ。

そして「すべての道はローマへ通ず」という、有名な言葉が生まれた。

『つていうことはさあ、未舗装の道は道って呼んじゃいけないんじゃないの……』

どう見ても森の縁、雨よけしながら歩いてラッキー、程度の場所に蛇行して伸びる道の先を眺めて嘆息し、ヤヨイは故郷の言葉でつぶやいた。

雑草の一本も生えぬほど人と馬と馬車に踏み固められ、轍を刻んだ土の道。冬になれば雨も降るというが、秋も入り口のこの季節はまだ空気も乾いて、一歩踏み出すごとに細かな埃を舞い上げた。それが降り積もっているために、硬い革の靴底が滑ってしまつて歩きにくい。

悲壮な覚悟を固めて家を飛び出した最初の日、ランドボルグと主要な街を結ぶ道、商人や旅人が行き交う街道がこれだと聞いて、ヤヨイは目眩を覚えた。しかしよく考えれば、ランドボルグもすべてが石畳だったわけではない。城の周辺と大路だけが舗装され、あとは似たような道だった。

アスファルトで育ったヤヨイも『落下地点』でいい加減鍛えられたと思っていたが、こんなデコボコの悪路をあと十日も歩くと言われれば、足の裏のママがことさらに痛む気がした。

がつくりと肩を落としてうなだれるヤヨイの尻が、不意にぱしつと叩かれる。失礼な手は叩いたついでに、むぎゅつつつかむ動きをしていった。

「ほら、きりきり歩け！ 野宿はごめんだと言ったのはおまえだろうが」

はるか頭上から降る擲掬を含んだ低い声に、ヤヨイは顔を上げてキッと眦を決した。

「ちよつとゲラン！ どさくさまぎれにお尻さわらないでって言うてるでしょ！？」

声を裏返して怒鳴りつけても、ゲランはうつすらと無精髭の浮いた顎をなでながらニヤニヤと笑って取り合わない。

「働かねえ牛は尻をぶてつつうだろ？ 女も同じだ。心配すんな、いいケツしてる」

「してない！！」

くらくらするほど頭に血を上らせて殴りかかるヤヨイの手は、あっさり大きな手につかまれていなされる。勢い余ってよろけたヤヨイの襟首をつかみ上げ、ゲランは薄いグレーの瞳を楽しげに細めた。

「バカおまえ、いい女の条件はいいケツだぞ？ 数多のケツを検分してきたこの俺が言うんだ、自信持て」

「だーかーらーッ！ そういうことを言ってるんじゃないってば！ もうどうにかしてよこのセクハラ男！」

身をよじって無遠慮な手から自分を取り戻し、ヤヨイは涙目になつて天を仰いだ。

ランドボルグの城門をくぐって三日。空は青く、野は緑。ヤヨイの抱えた問題はなにひとつ解決しておらず、それどころか刻一刻と悪化しているにちががなく——それなのに、心はそれと知らず背負っていた荷を下ろしたように軽かった。

窮屈な場所を出たというのも理由だろう、だがそればかりではないと、腹を立ててかつかときているいまでさえもわかつている。

ヤヨイは顔を空に向けたまま、隣で調子はずれの鼻歌なぞ歌いながらのんびりと歩む大男を盗み見た。

不ぞろいに短くした濃い蜂蜜色の金髪、いつも笑っている銀にも見える淡い灰色の瞳。大ざっぱな作りに見えて目を惹く容貌。多分百九十センチを超える長身、それに見合う逞しく長い手足。着込んだ風合いの生成りのシャツに、茶色のズボンとブーツがよく似合う肩に引っかけた、大剣が半分も覗くりュックも使い込まれて、彼が旅慣れた人間であることをうかがわせた。

（頼りになる……のは間違いない、んだけど……）

ヤヨイはゲランの横顔から目をそらし、もう一度空を仰ぐ。

軽佻浮薄なエロ親父、と評したら、彼は怒るだろうか。いやきつと大爆笑した後、涙をぬぐって大いにうなずくのだろう。そしてその評に恥じぬ不埒な行いに及ぶのだ。

そんな男に、多少なりとも救われていると感じる自分が、なんだか本当に情けなかった。

「なんだどうした、腹でも減ったか？」

何十回目とも知れぬため息をこぼす気配を察したゲランは、いかにも気遣っている風に声をかけてくる。だがヤヨイはもう、簡単にほだされたりはしない。

「お昼ご飯食べたばかりでしょ！　すぐそうやって休もうとするんだから」

「人聞きの悪い。日暮れまでに旅籠に辿りつきやあいんだろっが」「とかいって、間に合わなかったらどうするのよ。もう道端で寝るのはイヤだからね！」

なだめるように頭をつかんでくる手を払いのけ、ヤヨイは昨夜の

記憶に身をふるわせた。

昨日は宿場に着く前に夜になってしまったため、やむなく森に分け入った場所で野宿をした。やわらかな草の上に腰を落ち着け、ゲランの焚いた火を見た瞬間こそ初の野宿に感動はしたが、とんでもない。

横になった顔の上を虫が這うわ、夜が更けるにつれ身体が芯から冷えてくるわ、獣や鳥が不気味に鳴くわ、結局一睡もできなかったのだ。

それもみんな、ゲランが悪い。

街道沿いに町があれば酒場で休憩、水場を見つければ補給で休憩、ご婦人を連れた一行とかちあえば情報収集と称して休憩。

よく初日と二日目は宿場まで着けたものと、艤をかくゲランの横で膝を抱え、ヤヨイはその安らかな寝顔を睨んでぎりぎりと歯噛みした。もう二度と同じ轍は踏むまいと、今日は朝からゲランの尻を蹴飛ばす勢いで進んできたのだ。おかげで寝不足の頭は痛いし視界は黄色いが、昨日に比べればかなり距離を稼げている。

しかしその分、足の裏にツケが回ってきていることも確かだった。一步ごとに地面を踏みしめて歩かねばならないから、指のつけ根にできたマメが破れて悲惨なことになっている。だがそれを口実にされてしまうわけにはいかないと、ヤヨイは必死で痛みをこらえてきた。

背の高いゲランから死角になるようわずかに顔をそらして唇をかんでいると、ゆるゆるとした足取りで行く彼が――歩幅のちがいからヤヨイは結構な早足なのだが――、鼻歌をやめて言った。

「なあ、故郷の歌でも歌えよ。なんか簡単そうなの教えてくれ」

「ええ？ 教えてもいいけど、ちゃんと歌えるのお？」

なにしろヤヨイの知らない曲を口ずさんでさえ、ヘタクそだとわかるのだ。

胡乱げな顔をしたヤヨイに目を剥き、ゲランはむっと口をへの字に曲げた。

「失礼な。俺が耳元で歌ってやりやあ、どんな女もイチコロだつうのに」

「黙らせたくて、そういうフリしてくれたんでしょ」

「ンだと、このやろっ」

伸びてきた手をかいくぐり、ヤヨイは声を上げて笑った。後ろから首に巻きつく太い腕に絞められ、ばんばん叩いてギブアップを表明する。

「ごめんってば！ わかった、簡単なのね！」

「おおよ。ちゃんと『外』の言葉まんまで教えるよ」

そのほうがモテるから、とつけ加え、ゲランはヤヨイの首から肩に腕を滑らせた。そのままぐっと抱き寄せられ、ヤヨイも逞しい腰に腕を回してつかまる。軽く持ち上げられるようにして歩くのが楽なことを、初日の日暮れに覚えたからだ。

「うーん、そうだなあ……ゲランでも歌える簡単な曲ねえ」

「こら、でもってなんだ、でもって」

冗談めかした非難を鼻先で受け流し、ヤヨイは数ある童謡の中から「チューリップ」を選んでゆつくりと歌った。どの花見ても綺麗だな、とは、まさにゲランのためにある歌詞だと思ったから。

埃を吸って野のにおいに染まったシャツを頬に感じながら、ヤヨイはいつしか足の痛みを忘れていた。

それはいまを遡ること、三日前。夜も明けやらぬうちに家を出たヤヨイが向かったのは、城内の東、常設市場だった。

おばあちゃんのお使いで何度か行ったことがあったし、目立つヤヨイは露天商にも可愛がられ、その日も歩いているだけで両手いっぱい品を押しつけられるほどだった。

庶民の台所である市場は、特に商売をするための規制などがあるわけでもない。日の出の開門を待って入城した近隣の農家が、収穫物を地べたに広げて売っていたりもする。ヤヨイの目的は買い物ではなく、そうした中からスウェンバックに至る道に詳しい人を探すことだった。

あまり派手に聞いて回るわけにもいかず、さりとして顔なじみの店主や露天商はそもそもが皆ランドボルグ出身だ。悪意ある人間に騙されることも怖いし、ヤヨイの計画は初手から頓挫しそうになっていた。

明らかに城外からやって来たと見てとれ、悪い人ではなさそうだが、という希薄な根拠で幾人かに声をかけたが、目的地が遠すぎて参考にはならない。

次第に市場が人出で混み合い、次々と渡される品物で視界をふさがれそうになった頃、不意に背後からにゅっと伸びた手が一番上に積まれた果物をさらっていった。

はっとして振り返ったヤヨイが見たものは、よれよれになった生成りのシャツ。そこから少しずつ目線を上げて、上げ続けて、三センチほど上に淡いグレーの瞳を見つけた。

ひどく大柄で、威圧感すら伴う気配を放つ男。肘までまくった袖

から覗く腕は、警備隊士のように太く筋張っている。

だれ、と不審の声を上げる前に、彼はふと人懐こい笑みを浮かべた。

「おまえ、イゼ爺ンちの子だろ？ たしか——アヨエ？」

その間の抜けた響きに、ヤヨイは状況を忘れてガクつとなった。

「や、ヤヨイ、です。あの、おじいちゃんを……」

知ってるんですか、と言い終える前に、男はぶはつと噴き出して肩を揺らした。

「はっはあ！ 歴戦の勇者も、おまえにかかればおじいちゃんか！ 知ってるとも、ロマ婆の蜂蜜が、実は果物の煮汁でちつとだけ味付けしてあることなんかもな」

その言葉に、ヤヨイはぱつと顔を輝かせた。それは確かにお婆あちゃんの蜂蜜だ、ほんのわずかにジヤムを入れて風味をつけたオリジナル。

「あれ、大好き！ なんだそっか、お婆あちゃんも知ってるんだあ」
ヤヨイは肩の力を抜き、あらためて男に向き直った。

目も口も大きく、子どもっぽい全開の笑顔を見せる彼は、多分二十代半ばくらい。ジェイルよりは年上で、ロードよりは年下だろう。一見して和やかで朗らかな雰囲気のせいかな、初対面で感じる外国人への違和感もない。

イゼおじいちゃんたちと知り合いだというのが、どういう関係なのだろう。もしかして見つけたら連れ戻せと、頼まれているのだろうか。いや、それにはまだ時間が……。

じつと見つめていた男らしい眉がおもしろそうに跳ね上がるのを見て、ヤヨイはやつと自分が人の顔を凝視していたことに気づいた。
「あ、ご、ごめんなさ——」

「ところで、話が聞こえたんだけどよ、スウェンバックに行くつも

りか？ 一人で？」

謝罪を遮る低い声は、かわらず明るく楽しげだ。咎められなかったことに安堵した気持ちを隠して、ヤヨイは探るように上目で彼を見ながらうなずいた。

「う、うん……。アサマさんに、会いたくて」

深く事情を聞かれたくはない。警戒しつつうかがうと、彼はあっさりうなずいた。

「なるほどな。おまえなら事前に通達しなくたってそりゃあ、会ってもらえるだろうさ。……そうか、スウェンバックに……」

急に声を落とした彼は考えるようにがっしりとした顎をなで、しばし泳がせた視線をぴたりとヤヨイの目に合わせてきた。

「なあ、それ俺も一緒に行つていいか」

「は？」

「いや、アサママっていったら、おいそれと会える人じゃないだろうよ。ご本人は気さくな爺様だつて聞くが、なにしろひと所に落ち着いてない。姿を見かけても警護の壁は厚いし、とにかく忙しいらしいし、声をかける隙すらないつつうだろ。便乗させてくれよ」

（そ、そうなんだ……）

そこに行きさえすればいいと頭から信じていたヤヨイは、思わぬ言葉に絶句する。すごい人だとは思っていたが、それほどの要人扱いを受けているとは。

気後れで早くもぐらつく決心と、置手紙までしていまさら家に帰れないという意地とが胸中で葛藤する。

黙り込んで迷うヤヨイに、男は思考を奪うように畳み掛けてきた。

「スウェンバックなら何度も行ったことがあるから案内できるぜ。街道沿いの宿場には常宿もあるから、一見でばったくらわれることも

ない。つつかまず、小娘一人であんなところまで行けるわけがない。そこそ旅支度はできてるみたいだが、おまえが最初にやることは腕のいい護衛を雇うことだ」

そして立てた親指で示すものは、背負ったリュックから突き出る幅広で長い剣。おじいちゃんが引退するまで愛用していたという剣が居間の壁にかけてあるが、幅も長さも比ではない。

「雇うって……いくらですか？」

ことの成り行きに頭がついていかず、ヤヨイは頓珍漢な質問をしていた。だがしてしまえば、かえって腹が据わった。

やはり、いまさら戻ることはいできない。なにがなんでもアサヌマに会うと決めだし、そうしなければ前にも後ろにも進めないと、こうしているいまも強く感じているからだ。

「うーん、一応は相場もあるがなあ……」

急に顔つきをあらためたヤヨイに、男は心持ち気圧された風だった。ふむ、とうなり、それから剣を指した指でさらに背後を指し示す。

「なあんか事情もありそうだし、とりあえずツケといてやるよ。帰りの分も合わせてな。世にも珍しい『外』から来た娘だ、請求先ははっきりしてる」

思わず伸び上がって男の背後を見やり、ヤヨイは息を飲んだ。灰色の城の壁が勢いを増し続ける朝日を受け、鈍いオレンジ色に光っている。

その頂上付近にいるはずの王様の顔を不意に思い出し、怖くなった。

——ちがう、逃げるんじゃない。

真っ先に浮かんだ思いがそれだった。

そうだ、逃げるんじゃない。前向きになるために、とにかくひとつでも自分で決めて歩きたいのだ。

ヤヨイは頭を振って、心にまとわりつくすべてを振るい落とした。返事を待つ男に向き直り、正面から挑むように睨み上げる。

彼が事情をわかってるなら話は早い、きつと無体な真似をされることもないだろう。要は自分がしっかりしていればいいことだ。必要ならば、利用できるものはそうするべきだ。

厚めの唇をうつすら笑ませ、楽しげに目を細める男にヤヨイは言った。

「ありがとうございます。えっと、名まえ……」

男は、よし、とばかりに大きくうなずいた。

「俺はゲラン。ドランヴァイル出身の、まあ放浪剣士ってところかね」

耳慣れぬ単語を苦勞して変換し、それって職業なのかと訝りつつもぎこちない笑みを返した。

「ヤヨイ、です。アサヌマさんに会えるまで、よろしく」

「まかせろ」

短い頼もしい言葉を聞き、強張っていた頬が緩んだ。

安心した。そして同時に、安心したがつていた自分を思い知る。

ひとりで見知らぬ土地へ行くのがひどく困難だと、本当はわかっていて。でもどうしても行きたい。だからここで出会ったこの青年が、心からの善人であると信じたがつていた。

そして多分、彼は悪い人ではない。

こうしてヤヨイは、人生初の旅仲間を得たのだった。

とにかく今夜の宿を確保したい、それだけを目標に歩き続けた甲斐あって、太陽が地平線に触れるより早い時間に次の宿場へとたどり着いた。ゲランによれば、ここがランドボルグを核とした国王の直轄領内における、スウェンバック方面最後の宿場だという。

森の縁に沿って歩いていたら、カーブを曲がったところで突然視界が開けた。鬱蒼と茂る木々で見晴らしも悪く、立ち上る煙も見えなかったから、ヤヨイにはまるで忽然とそこに町が表れたように見えた。

距離にしておよそ五百メートルほど先に、不規則に建ち並ぶ家々が望める。白い壁に焦げ茶色の屋根、窓枠。『落下地点』の集落と同じ様式だった。緑の野原の中に一筋の道が走り、こんもりとした森を背負った町に向かって伸びているという風景は、ここに暮らし始めて五ヶ月近くが経つヤヨイでも感動を覚えた。

これまでの宿場や集落より格段に戸数が多く、ランドボルグのように整然としていない。電線も街灯も、アスファルトに白く書かれた「止まれ」の字もない景色を、いま初めて懐かしいと感じる。

「はあ……なんか、思ったより大きい町だね」

近づくにつれ、円形の広場やその真ん中に建つ教会のような建物まではつきりと見えてくる。もちろん、行き交う人々の様子も。

「直轄領と他では、なにを納めるにも税率がちがうからな。ランドボルグは年中どっかしら工事してるせいで、賦役が多い。強制的に男手を徴収する代わりに、ってところか」

地方領でももちろん土木工事はあるのだが、そこは国王陛下のご温情らしい。いずれにせよ、そういう事情で直轄領外周にあたる町

は、流れ込んできて住みつく人が後を断たないとゲランは言った。
「ふうん……。引越してそんな簡単にできるんだ」

徐々に大きくなる町並みに目を丸くしながら何気なくつぶやくと、ゲランはリュックを背負いなおしてくすつと笑った。

「いや、ンなわけない。どんな小さい村だって、戸籍は村長ががちり管理してるし、領主の許可がなければ移動はできないぜ。生まれたての赤ん坊にだって人頭税がかかるからな、勝手に移動されちゃあ困るだろうよ」

「人頭……？」

「そうだ。結婚にも離婚にも税がかかるし、家一軒に六人以上で住めばまた税がかかる。どんな事情があつたって、二十一を過ぎて独身でいても、子どもを持たなくても税がかかる。だから人買いや人攫いも商売が成り立つし、逃げ出した村人を連れ戻して領主に引き渡すのを生業とする奴らもいる。実際、堂々とそれを仕切ってる連中もいた」

ヤヨイは思わず足をとめ、まじまじとゲランの横顔を見上げた。
気づいて立ち止まるゲランの薄いグレーの瞳は、どこかやりきれない色を浮かべてヤヨイを見ていた。

「……どうした？」

「どう、って——」

このとき受けた衝撃を、どう表現すればいいのだろう。

ヤヨイにとって税金は、せいぜいが買い物をするときに払う数パーセントの消費税くらいしか身近なものではない。常識として住民税だの車税だのを知ってはいるが――。

（一人でいる自由も、ないの……）

ぎこちなくゲランから目をそらし、重くなつた足を踏み出す。
元いた場所でも、人買いや人攫いといったら、食い詰めた親が娘

を売るとか、そういう話は聞いたことがある。「花いちもんめ」は人買いの歌だと聞いたこともあった。

「あの、どうして……人を、買ったり……」

子どもを売ったり、とは言えず、嫌な鼓動を刻み始める心臓を服の上からおさえた。

「そもそも家一軒に五人まで、つうのは、家の傷みが増すからだ。家は村の財産だから、ガキに荒らされちゃ困るって法なんだろうな。四人目の子どもが生まれた家は、一人を選んで出さなきゃならないだろ。年かさの息子は働き手として残すが、娘なら嫁の来手のない男に売る。赤ん坊に買い手がつけば、子どものない夫婦に売れるだろう。人買いが必要な数の商品を仕入れられなければ、そこから盗んでくる。とにかく連れて行けば売れるまで預かる場所、つうのがあったからな」

ゲランは淡々と語ったが、それだけに、子どもの売り買いが日常的なものなのだと響く。

ヤヨイはゲランが、あえて娘の売られる先を限定して口にしたことに気づいていた。

ランドボルグはいわゆる「都会」だし、ヤヨイだって年端もいかぬ子どもではない。おじいちゃんの家で居候を始めた最初の日、ゼロンは城内のある区域には近づかないように、とよくよくヤヨイに言い聞かせた。「若い娘のいくところじゃない」という理由で。

貧しい家の娘がたどる末路は――。

想像の限界を超えた世界はぼんやりと、だが確実にヤヨイの胸を押しつぶした。一度は身を投じることも考えたことがある世界だったからだ。

うつむいたヤヨイの頭に、ぼんと大きな手が載った。

「村長や町長だって、鬼じゃない。徴税官が巡回してくるまでにど

うにかできれば、四人目が生まれたことには目をつぶってくれる。でなくたって、かみさんの腹が膨れてくりゃあわかるからな。その間に、旦那は我が子の引き取り先を探すのさ」

できるだけいい家に、苦勞のない、幸せになれそうな家にと願いを込めて。

ゲランは氣遣わしげな声で言ったが、なんの慰めにもならない。そしてヤヨイに、できることもすべきことも、なにもなかった。

サッカー場ほどの広さに開けた町の広場には、いかにも旅人といったファッシヨンの人々が七割。あとは彼らを相手に商売をする露店商や、旅宿の呼び込みが目立った。特に広場の中心に建つ、珍しい煉瓦造りの建物の周りにはその姿が多く見られた。

それが一見してなんらかの宗教施設とわかったのは、外壁を飾る大小の印象的な彫刻のためだ。簡略化された太陽の中に、逆さの星を描いた模様。店の看板ならもっと、職種をはっきりと表すマークであるはずだし、大きいばかりで使い勝手の悪そうな建物は、いかにも商売には不向きだった。

広場に面した家々の窓からは、小ぶりのハンギングボールが下がっている。寄せ植えにされているのはパンジーに似た赤い花が多く、その中に紫色のアジサイのような花が混ざっていた。玄関先には大きな素焼きの壺が置かれ、なぜかススキがもっさりとしけられている。

足元にまわりつく野良猫を気にしながら、ヤヨイはきよるきよるとあたりを見回した。なにかもがめずらしく、おもしろい。

『落下地点』の集落には店などなかったし、ランドボルクでは城と家を往復するだけだった。朝早く市場に顔を出すことはあっても、こんなふうに昼日中、特別急ぎでもなく露店を冷やかしたのは初めてだ。

店舗を構えているのは、仕立て屋や靴屋など、じつくりと商売をする業種。対して露店は食べ物屋が多く、干し果物をのせた小さな焼き菓子、炙ったハムをはさんだパンなどが香ばしい匂いで客の足をとめている。

食料品そのものを商う人も多く、中でも枝で編んだ籠に兔をみっちり詰めた上にまな板を置き、ナイフを突き立てている店を見かけたときには絶句した。通りに背を向けて作業していた主人が振り返り、その前掛けが凄惨な色に染まっただけ——これ以上新鮮な食材はない、とヤヨイは青ざめて顔をそむけた。

生々しいばかりでもない。

色とりどりのリボンだけを並べている店、女性用の下着をどーんと広げて商う店、大小様々な金属の輪ばかりを箱に入れて売っている店など、見ているだけで楽しいところもあった。

興味深く数歩進んでは立ち止まることを繰り返すヤヨイの横で、しばらく黙ってつきあってくれたゲランがのんびりと言った。

「この先で森が途切れるから、そっからしばらくは平野のただ中を進むしかない。数日分の食料とか……おまえはもうちつと分厚い外套を仕入れたほうがいいな」

宿場がなければ、せいぜい農家の納屋でも借りるしかない。旅の初めに聞かされていたことが、ついに現実になるのだ。野宿は既に経験済みだが、納屋で眠るといえるのはどんな感じだろう。

臭かったりかゆかったりしそうだ、と憂鬱になりつつ、ヤヨイは

客寄せの声に引き寄せられてふらふらと露店に歩み寄る。ちょうど古着が竿にかけられていたので、早速その中から赤土で染めた羊毛のコートを一着買った。

「さて、夕飯にもまだ早いな。宿をとったら、湯でも買うか？」

コートを着込みながら、小間物屋の店先で木製のアクセサリーを見つめていたヤヨイは、その言葉で振り返った。

「湯を買う？ お風呂！？」

「あ、ああ」

あまりの勢いに気圧されたゲランがのけぞるのもかまわず、ヤヨイは顔を輝かせる。

「買う！ いっぱい買って！ お風呂入りたい！」

「いっぱいっておまえ、泳ぐつもりかよ」

ぶつと噴き出しながらも、ゲランは軽くうなずいて顎をしゃくる。

「じゃあ、湯殿のデカイ宿をとらなきゃな。神殿前で探してみよう」
ゲランが示すほうには、太陽と星の紋章が刻まれた建物があった。確かに宿の呼び込みも多く見受けられたが、神殿というのは――あの神殿だろうか。

そういえば、いままで一度もこの国で宗教に触れたことがない。自分が無宗教だから気にならなかったが、クラシカルな世界に神様の支配下、というイメージもある。朝な夕なに祈りを捧げ、誰も彼もが敬虔な信徒であるべし、というような。

ヤヨイは素直に歩き出しながら、その建物を輪郭から細部まで観察した。神殿といわれて真っ先に思い浮かぶのは、かの有名なパルテノン神殿だろう。だがそこにあるのは、どちらかといえばヨーロッパの田舎町にひっそりと佇んでいそうな、素朴な風情の教会に見える。

「あそこには、どんな神様がいるの？」

祀る、という単語がわからず幼稚な言葉を使って尋ねると、ゲラ

ンは片眉を上げ、せせら笑うように鼻を鳴らした。

「いまはもういない。随分前に、アサヌマが追い払ったからな」
「え？」

ヤヨイは足を止め、ゲランを振り仰いだ。アサヌマと神様、それに追い払うという言葉がつかない。だが歩みを止めないゲランの背中が、それ以上の詮索を許さなかった。

「えっと……じゃあ、お風呂の大きい宿、探してみる」
釈然としないながらも、ひとり言のようにつぶやいて、ヤヨイは呼び込みがたむろするあたりへ向かった。

比較的安全であると判断した町では、ゲランはヤヨイに自分で宿を見つけてみると言った。ランドボルグとスウェンバックを結ぶルートに常宿はいくつもあるが、大抵が大部屋のみだったり、屋根があるだけマシという程度で、とてもヤヨイが安眠できるものではないからだという。

いい経験だと、ヤヨイはその指示にうなずいた。

男女二人連れであること、ベッドが二つある個室を希望すること、夕食と朝食をしっかりと出してほしいことなどの条件を提示し、料金の折衝をする。これで二度目になるが最初は相当足元を見られたらしく、ゲランの一声で半額以下に値切れたときは落ち込んだ。

（あつちに悪気があるわけじゃないし……『外』の人は王様のポケットを共有してると思われる節があつたし……わたしが慣れてなかったからいけないんだ）

今度こそ、と気合を入れ、ヤヨイは広場の真ん中へ突撃を開始した。

「はー、気持ちよかった……」

ホカホカと湯気を立てる身体をベッドに投げ出して、ヤヨイはうつとりと目を閉じた。

調理用ストーブの灰と廃油で作った石けんの使い心地は、ぬるつきが残るようでいまひとつ——いや、いまみつつくらいだったが、とにかくも頭のとっぺんから足の先まで汚れを落とし、浅いながらも湯船に浸かれて満足だ。

ランドボルグですら、一般家庭に湯殿などない。大抵は下着を替えるだけか、身体を拭いて済ませる程度。数日から週に一度、湯屋で汚れを落とせばいいほうだろう。

本当なら毎日でもお風呂には入りたいところだが、贅沢なことであるという以上に、おじいちゃんの家からは湯屋が遠い。終業後、帰宅しておばあちゃんの手伝いをし、就寝前に風呂を使おうと思えば深夜になってしまう。当然、ヤヨイをあずかるおじいちゃんが許可などするはずもない。おばあちゃんに付き添ってもらい、散歩がてら数日に一度が精一杯だった。

旅をしていると汗と埃で普段よりずっと汚れるが、大きな旅籠は必ず湯殿があるし、こうして湯を使う機会も増えてまたよし。

洗濯と兼用の石けんは借り物だったので、明日は携帯用に香料を入れた石けんを買おう、と心に決めたあたりで、うつ伏せたヤヨイの臉が下りてくる。鉛のように重い身体を受け止めるマットレスは、藁ではなく羊毛を詰めた豪華品だ。やや埃っぽく羊のにおいがとりきれないくらいはあるものの、チクチクしないし硬くない。

（足……マッサージして、薬塗っておかなきゃ……）

今日の疲れを少しでも取り除いておかなければ、明日以降に差し

支える。無残につぶれたマメの手当てもしておきたいし、髪もまだ乾いていない。

気力だけでなんとか眠り込まずにはいるが、身体を起こすには至らない。睫毛でかすむほど狭くなつた視界に、ゆらゆらと揺れる蠟燭の明かりに浮かぶ無人のベッドがあつた。

ゲランはまだ、階下で酒を飲んでいるのだろう。もしかしたら、給仕にあたっていた女性のだれかとどこかに行ったのかもしれない。女性たちがもんぺではなくスカートで、しかもこちらの常識にあるまじき丈の裾から、白い脚を覗かせていた理由はもうわかる。

ふつくらとした可愛らしいあの人か、それとも背が高く美人系のあの人かもしれない。頭の中で、偶然を装ってゲランの身体に触れていく女性たちの顔を思い浮かべる。

上背があつて逞しく、がっしりとした男らしい容貌のゲランは意外なほどよくモテた。人懐こい笑みも、もの慣れた仕草も、鼻の利く女性を引き寄せるに十分らしい。こんなふうにはヤヨイが一人で眠りにつくのも、森で休んだ夜を除けば毎度のことだ。

確かに、どこか書記室のガラム室長と似通う雰囲気を漂わせるゲランは、ヤヨイから見ても魅力的だと思う。携えた大剣を見ただけでも臂力のほどはうかがえるし、長い脚をゆったりと組んで酒盃を傾ける姿は、大型の獣のようでそばにいただけで胸がざわつく。普段ろくでもないことばかり言つてヤヨイの鉄拳制裁を食らう彼を知つていてさえ、蠟燭のか細い光に照らされる横顔にはどきりとするのだ。

早く早くとなにかに急かされながら、朝のヤヨイは張り切つて最初の一步を踏み出す。ゲランに遅いと文句を言つていられるのも精々が昼まで。次第に薄いグレーの瞳が肩越しに距離を測るようにな

り、夕方にはさりげなく手を差し伸べてくれるようになる。その頃にはもう気づかぬ間に蓄積した疲労が全身を苛んで、なんだかいろんな感情が胸に渦巻いていっぱいいっぱい——罪悪感や恐怖や後悔、自分がこの世で一番情けない人間にちがいないとか、生きててごめんなさいとか、負の意識に取り込まれるヤヨイは涙をこらえて重くだるい足を引きずっているのだ。

軽い冗談や他愛のない世間話でヤヨイの気をうまくそらして、広い背におぶってくれたり、軽々と抱えて歩いてくれるゲラン。夕日に朱色を帯びて煌く濃い蜂蜜色の髪を頬に感じる視点は怖いほど高く、束のような筋肉がしなやかに動くのを薄いシャツ越しに何度も確かめた。

思えばこれほど他人に、しかも男性に身を預けきることなどいままでなかった。グレイヴ王子は発作的にヤヨイを抱きしめることがあったけれど、ヤヨイから抱きしめ返したことはない。

ヤヨイはベッドにめり込みそうな身体をひねって仰向けになり、腕を上げて輪をつくった。目を閉じ、硬い布地の感触を思い出しながら、その紺色の制服に腕を添わせたときのことを振り返る。

（やっぱり……ゲランより、腰が細かった、かな）

ちゃんと腕を回したわけではなかったが、剣を吊った太い革のベルトがウエストマークになって、実際の寸法にかなり近い見た目だったはずだ。

ゲランの身体は、触れて不自然でないところは、もうほとんど触れてしまった。おぶわれれば首にしがみつくし、水場で足元の悪いところは抱き上げられた。二関節分は大きな手を握って歩いたり、ふざけて腕にぶら下がったこともある。よく考えたら、肩を支えられて腰につかまっている後ろ姿は恋人同士のように見えたかもしれない。

なにもかも上書きされてしまったみたい、こうして抱きしめられたときのことを再現してみようとしても、もう王子の体格を思い出すことすら難しくなっていた。

（これって——どうなんだろう）

ぱたりと力なく腕を下ろし、壁を向いて寝返りをうつ。

なにがちがうのだろう。どうして無遠慮なゲランの手を不快に感じないどころか、気が抜けたような安心感まで覚えてしまうのか。

同じ部屋で眠っても危機感を抱かないのは、ゲランが国王に熱烈な忠誠を誓っていると言った、その言葉を信じているだけなのだろうか。それとも――。

「……………」

ヤヨイは横を向いたまま膝を引き寄せ、丸くなってぐりぐりとシートにこめかみを押し当てた。

眠ろう。疲れているから、どうしようもないことを考えるのだ。

アサヌマさんのもとまであと十日ほどは歩くのだから、いずれまた正常な頭で気持ちを整理する時間も持てる。

遠のきかけた睡魔の尻尾をなんとかつかまえ、ヤヨイはかき混ぜたゼリーのようにとろりとした眠りに落ちていった。

翌朝、宿の木戸が開閉する大きな音に夢から醒めた。

うすら寒い、と上掛けを引き上げると、脚が膝まで露になっっていることに気づく。どうした加減か、上掛けの縦と横を入れ違えていたらしく、自分の寝相の悪さにひっそりと腹が立った。

仕方なく起きることにしたヤヨイは、もそもそと身体を起こして

ぎよつとした。

露になっていたのは膝どころか太腿まで、そしてほったらかしで寝てしまったはずの足には布が巻かれ、手当てをした跡があった。

咄嗟に隣のベッドを見やると、固く閉ざした鎧戸の隙間から差し込む光の中で、ゲランは仰向けで静かに眠っていた。その枕元には鞘から抜いた剣が立てかけてあり、膏藥の残った木の椀が転がっている。

「……起こせばいいのに」

意識のない状態で足にさわられたことも、気づかずに寝こけていたことも恥ずかしい。理不尽なことをつぶやきながらも、足の裏が随分と楽になっているのはわかった。

表からは人の話し声が大らかに聞こえてくる。そう朝も早いというわけではなさそうだ。鎧戸を開けてゲランの起床を促すべきか、と一瞬だけ迷って、やめた。

ベッドに腰かけて、手を伸ばせば届くところにある寝顔に見入った。

薄いグレーの瞳が隠れ、厚めの唇がうつすらと開いていて。ヤヨイの後に湯を使った折にあたったのだらう、いつもの無精髭は姿を消している。

こうして見ると、面差しでいうならガラム室長よりもロード殿下に似ている。似ているといえば、人の都合におかまいなしなところは、ジェイル殿下にも。

ふと、恋しい、と思った。だれがということではなく、目まぐるしかったランドボルクでの日々そのものが。十日足らずのことだったなんて、いまでも信じられない。そう考えれば、『落下地点』でヒ口と別れてから、まだ二週間ほどしか経っていないのだ。

ここが職場だ、と書庫の扉を開かれたときは、こんな状況に――

こんな気持ちになるなんて、想像もしなかったのに。人生は本当に、本当にわからない。

ヤヨイは運命、という言葉が嫌いだ。いかに自分の意志や力でどうにもならない事態に陥ったとしても、それは偶然や他のだれかの思惑や、行動の結果が巡り巡って降りかかっただけのこと。なんでもかんでも運命のせいにして、あるいはありがたがっていたのでは、自らの足で歩くことがバカらしくなってしまう。

恋愛だってそうだ。運命の出会い、なんていうけれど、出会わない人とは恋などできない。畢竟、顔見知りの中から好みのタイプを、有体にいえば「好きになれそう」な人を無意識に選別しているに過ぎないのだ。

我ながら夢もロマンもありやしない、と思いながら、ゲランの顔に手を伸ばした。高い鼻梁を超えて頬に落ちた蜂蜜色の髪の一筋を、そっと払う。くすぐったかったのか、開いていた唇がむっと閉じられ、瞼がふるえてから上がり、鈍い銀色の瞳が焦点を結んでいつもの色にかわった。

「……おはよう」

顔を覗き込んでいたというのにうろたえた様子もなく、ゲランはかすれた声でうめいた。

「おはよ。窓、開けるよ？」

一応トーンを落として断ると、両手で顔をこすったゲランが首を振った。

「もうちつと……眩しい」

要領を得ないそれは、目が慣れるまで待つてくれという意味だろう。立ち上がりかけたヤヨイは、うなずいて座りなおした。

「昨夜……遅かったの？」

さりげなさを装って問いかけると、おもむろにゲランが起き上がった。腹筋でもするような動きは、少しも力が入っているようには見えない。折りたたんだ肘を伸ばして欠伸をし、ふるふると頭を振る。

「風呂上がり一杯飲んで、すぐ戻った。やっぱり宿のほうがいいだろ、納屋より。今日は昨日より歩かなきゃなんないぞ」

多少強行軍にはなるが、行って行けない距離ではないところに小さな村があるのを思い出した。そう眠気を含んでぼんやりとした声で発する響きを聞きながら、ヤヨイは笑った。

「じゃあしつかりご飯食べて、早く出なくちゃ。窓開けるからね！」
手当てされた足の裏で木の床を踏み、窓辺に歩み寄る。

昨夜ゲランは、どこにも行かなかった。だれにも触れずに戻ってきて、ヤヨイの足に薬を塗ってくれた。その事実は思いのほか、ヤヨイの心を軽くした。

だが重い鎧戸をいっばいに押し開いて朝日を浴びながら、ヤヨイは自分が自分に嘘をついていることを思い知る。それはいつも忘れた頃に、こうして何気ない日常の隙間から冷たい手を伸ばして、ヤヨイの足首をつかむのだ。

窓の外、小さなドングリを鈴生りにした大樹の根元には、刃物の研ぎ屋が店開きの準備をしていた。早いうちの出立を考えているのであるう旅人が、一言二言かわして道具を預けていく。研ぎ屋が受け取ったそれは地面に広げた布の上に、大切に横たえられた。

——剣。飾り気のない柄、長方形の無骨な鍔、頑丈そうな革の鞘。

「……っ」

不意に、笑いがこみ上げてきた。

なにあれ。なんなの、これ。

同じものがゲランの枕元にもあったというのに。不意に襲った暗い情動には、嫌というほど覚えがあった。

『落下地点』で、ランドボルグで、馴染みのないものや習慣に触れたとき、知らない単語に戸惑うとき、おまえは『外』の者だからと、なんの他意もなく言われたとき。

「どうした。なんかおもしろいもんでもあったか」

背後で衣擦れの音を立てていたゲランが、訝しげな声を上げる。ヤヨイは窓のほうを向いたまま、片手を振って誤魔化した。

運命という言葉に、一番すぐりたいたいののはヤヨイだ。説明のつかない現実を考えることに疲れて、流されてしまいたくなって。

ヒロはそれを口にしなかった。

アサヌマさんは、他のひとたちは、どうやって心を鎮める方法を見つけたのだろう。

どうしたら、いつになったら、この薄氷を踏んでいるような――気を抜いたら引きずり込まれる闇に立っているような恐怖から、逃れることができるのだろうか。

ここで生きてもいいと、それはちつとも不自然なことではないのだと、言っただけ。主張しても、我がままを言っても、恋をしても、かまわないのだとだれかに――。

「……着替え、終わった？ わたしおなかすいちゃたよ」

とん、と窓枠に手をつき、言った声に違和感はない。

ゲランがのんびりと返事をするのを聞きながら、ヤヨイは唇をかみしめていた。

3（後書き）

拍手に簡単アンケートをつけてみました。

「今日はさ、寝るところ、農家の納屋でも民家の軒下でもかまわな
いから」

宿を引き払い、町の広場を抜けて街道に一步踏み出したところで、
ヤヨイはおもむろに切り出した。

「少し、話をしながら歩いてもいい？」

ぴたりと足をとめて振り返ったゲランは、大きく目を睜った後、
一瞬だけすつと眇めた。警戒されたと悟ったのは、ほとんど本能の
仕業だったかもしれない。

「なんだ、あらたまつて。話ならいつだってしてるだろうよ」

ゲランはすぐにいつもの表情を取り戻したが、かえって取り繕つ
たようにヤヨイには見えた。リュックを背負いなおすその動作さえ
も、なにかを誤魔化すためだとわかる。

——ゲランには隠し事がある。それもヤヨイに知られたくない、
類の。

だがそうと知れても、意外なほどヤヨイの気は軽かった。だれに
でも秘密はあるし、自分のことを話さないかわりにゲランの素性さ
え問いたださずにここまで来たヤヨイが、突然こんなことを言い出
せば何事かと思うだろう。

ヤヨイは小さく笑い、ブーツの踵を地面に打ちつけるようにして
先を歩く。

「ゲランの女性遍歴とか、別にそういうのを聞き出そうとしてるわ
けじゃないです。お尻が好きなこともわかってます。残念ながらゲ

ランは私の好みじゃないので、心配ご無用」

肩越しに精一杯小生意気な視線を投げると、ゲランの厚めの唇が面食らったように引き結ばれる。心の中で「よし、一本！」とガッツポーズをとったヤヨイの首にゲランの腕が巻きつき、かぶった帽子ごとがしがしと頭を揺さぶられた。

「言うじゃないの！」

「うわわわ、やめてよっ」

キヤスケットに似た形の帽子の中で髪が乱れ、ぼろぼろとこぼれ落ちてくる。そば屋の暖簾のように顔にかかったそれに頬をくすぐられながら、ヤヨイはゲランの腕をおさえた。

「で？　なんか聞きたいことでもあるのか？」

ヤヨイの肩を肘掛けに、ゲランがいつもの調子で瞳を笑ませる。

ヤヨイは帽子をかぶりなおし、道の先を見つめた。

「聞きたいことっていうか……うん。あのね、わたしの知識っていうか常識は、実はすごく偏ってるんじゃないかと思うんだ」

「実はっっておまえ、そんだけ極端に偏った常識のあるヤツもいないぞ？」

「あ、やつぱり？」

掛け値なしのあきれを含んだ声に、ヤヨイはあっさりうなずいた。

『落下地点』でヒロから教わったことといえば、オージェルム公用語の読み書きと、この国の大まかな歴史と地理だけだ。それも日常に不要な部分は大半が海馬によって引き出しの奥にしまわれた。実際の要するものは、毎日新しく目にし手に取り、自分の生活に触れた事柄しか覚えていない。

そんなヤヨイが昨日、庶民の税金や家族の事情についてゲランが語った内容を大まかでも理解できたのは、たったの三日をしごき抜いてくれたジェイルのおかげに他ならない。

回された書類の中身がなんであろうと、清書したほうが読解不能の大惨事になると、ジェイルはかまわずどんどんヤヨイに押しつけた。九割以上が初めて見る単語と言い回しで構成されていたのだから、当然読めないところはジェイルに訊いた。

それでわかった気になっていたのだが、所詮は字面だけのこと。

「昨日さ、独身でいたら税金払わなきゃいけない、って言うてたでしょ？　ゲランはどう見ても二十一歳よりはるか上だから——」

「はるかとはなんだ、俺はまだ二十五だ」

「——はるかよりちよつとだけ下みたいだけど、結婚してるの？」

二回りは身体の大きなゲランに遠慮なく寄りかかれて少しよろめき、やっぱり王子より重たい、などと考えつつヤヨイは身近な男性たちの顔を思い浮かべる。ガルム室長、ロード太子殿下、ゼロンやその他独身の面々。

「そうそう、ジェイル殿下も二十二歳だけど、独身だよ。殿下も独身税、払ってるのかな」

「かなって、殿下の下で働いてたんじゃないのかよ？」

訝しげな声に顎を上げ、ヤヨイは口の端を曲げた。

「三日間だけだよ？　朝から晩までひたすら書類を写し取って、それを届けるためにあっちこっち走り回って、そんなこと尋ねるヒマもなかったよ。ていうか、文章を理解する隙もなかったくらいさ」唇をアヒルのようにとがらせてみせると、ゲランは咽喉の奥でくつくつと笑った。

「やさぐれんなよ。……ふうん、なるほどねえ」

「なに、なるほどって」

したり顔で顎をさするゲランを振り上げば、目元を緩めて見下ろされた。

「いいや？ 質問にお答えしましょう、お嬢さん。まず俺は一人の女に縛られたくない、いやさ縛りきれない罪な男で」

『つまり不実で浮気なナンパ野郎だと』

「若干の悪意を感じた。いまなんて？」

「いいえ？ 質問にお答えください、おにいさん」

「……当然、地元の領主、つまりドランヴァイルの大公閣下に税を払ってる。普通は収入によって率が変わるが、俺はドランヴァイルにいないことのほうが多いし、ハデに儲かるときもあればまったくの文無しつつう期間もあるからな。年齢で決められた額を納めてるよ」

その分だけ割高だ、と思いのほか真面目に語るゲランも、まっすぐに前を向いていた。

「結婚に離婚、子どものあるなしに税がかかるのは、そもそも一定の人口と税収を確保するためだ。オージェルムが長く戦をしていたつつう話は？」

「知ってる。いまの王様が若い頃でしょう？」

ヒロがヤヨイの教育に本腰を入れたのは、『落下』から一月ほど後のことだ。その前は記憶がひどく曖昧で、よほど混乱していたのだと今さらながらに思う。

ヒロはオージェルムについて、まず「王様が治める王国だ」と言った。そしていまの王様が王位に就く以前から、二十五年ほどにわたって大きな戦争が続いていたのだと。王様は自ら剣をとって戦場に立ち、小さな敗北と大きな勝利をつないで戦争を乗り切ったのだ。

まだ国境の一部は安定していないから、油断はできないんだよ——そう言っただけ顔をしたヒロを思い出しながら、ふと王様のお父さん、つまり前の国王は、戦場ではなくランドボルグで命を落としたと聞いたかな、と眉を寄せる。

それって病氣かなにかだろうか。お父さんが亡くなってショック

を受けているときに、王様になって戦場へ赴くのは、どんな気持ちだったのだろう。なにがなんでも勝とうと、思ったかな。

ずくと重く痛んだ胸をおさえたヤヨイの耳に、考えながらしゃべるゲランの声が流れ込む。

「健全な夫婦が増えなけりやあ、順調に子どもも増えない。まあ離婚税と子どもを持たない税、つつのは要するに罰金で、戦に明け暮れる前は結婚税しかなかった。……戦といやあ、長髪令もその頃発布された法だったかな。その後だったか」

「え、長髪がなに？」

場違いな単語に首をかしげると、ゲランは眉を上げて苦笑した。

「男児髪を伸ばすべからず、ってやつだ」

「そんな法律があるの？」

「厳密にはそういう名称じゃないんだが——まあ要するに、長髪は特定の立場にある人間にのみ許すことを明文化したもんだ。そういうといかにも特別扱いに聞こえるが、次男以下の王子は髪を切ることで罷りならん、つつうことよ。城にいたならジェイル殿下だけじゃなくて、ロアード殿下やグレイヴ殿下もお見かけしただろが」

「う、うん」

若干の後ろめたさに咽喉を詰まらせながら、ヤヨイはうなずいた。ゲランには、グレイヴと親しかったことを話してない。当然、彼との間に起きたことも。ヤヨイなりに言うべきではないと判断したからだ。色々な事情を知ったら、きっとゲランは旅などやめるときつくとめたに違いなかった。

三人の王子たちなら、お見かけしたところの話ではない。じっくり話す機会こそなかったが、ロアード王子にも王様の部屋や城の廊下でちよくちよく顔を合わせていたのだ。

確かにそう言われてみれば、そろそろ髪を伸ばしているのは下の二人だけだった。そうだ、兄弟だからというならロアードは短髪だし、他に一人も見なかったことがない。

ジェイルはいつも、胸元に落ちかかる髪を邪魔くさそうにはねのけていた。グレイヴは結つてもいいかとたずねたとき、とても訝しげな顔をしていた。

「理由が、あったんだ」

ぼつりと落ちたつぶやきに、ゲランが大きくうなずいた。

「髪のもつつのは、切るのは一瞬だが伸ばすとなると時間がかかるだろ？ 鬱陶しいし手入れも面倒だし、その分、王への忠誠と法の遵守を意識し続けることになる。しかも国中に何人も長髪はいないから、相当目立つよな。時期がきて臣籍に下り所領を賜った後も、だれが見たってそれが次男以下、つまり太子でない王子で、王位に色気がないつつうことが一発でわかる」

目に見えてわかりやすい枷だな、とゲランは素っ気なく言った。

ヤヨイはその話を飲み込むために、必死で頭を働かせた。国王の地位を巡る骨肉の争いを避けるために、わかりやすく長男とそれ以下を区別している、ということか。

「え、でも……髪を伸ばしながらでも、なんだろう、色々と企むことはできるんじゃないの？」

「そこが俺らとおまえらの常識のちがいだな」

ゲランの大きな手が、肘掛けにしていたヤヨイの肩をぐぐつとつかんだ。

「陛下が『髪を切れば不忠と看做す』とおっしゃるならば、忠誠の証に伸ばし続ける。そして証と立てるからには、忪から本気でそれを誓う。陰で舌出すような真似する卑怯者がなに企んだところで、追従するヤツはいないぜ」

一瞬、個人的な主義や思想の問題では、と思ったが、口にはしなかった。見上げた横顔がなんだかとても誇らしげで、薄いグレーの瞳までキラキラと輝いていたから。

国王陛下に熱烈な忠誠を誓っている、という彼の言葉は嘘ではないのだろう。自分が心からそれを信じているから、他人もそうだしそうあるべきだと、本気で思っているのだ。

ゲランの胸までしか身長のないヤヨイからは、おとがい頤に剃り残した髭を数本見つけることができる。ゲランがあんまり眩しくて、そしてそんなふうに信じるものを持たない自分が卑小に思えて、ゲランの顔ではなく大ざっぱさの象徴のような髭を見つめた。

「あれ、なんの話だ？ 王族の税金か？」

ヤヨイの視線が刺さったようなタイミングで、ゲランは指先で頤をかいた。さりげなく視線をはずし、ヤヨイも前を向きなおした。

「殿下も独身税を払ってるのか、って話」

何事もなかったような調子で言えた。そのことが、少しだけ気を軽くしてくれた。

「国王は直轄領から上がりが出るが、所領を持たない王子には収入を得る手段がない。だから国王は税金を払うが、王子は基本的に全額免除らしいぜ」

「え、じゃあ殿下はタダ働きってこと？ すごく忙しそうだったよ？」

驚きのあまり、ワントーン高い声が出た。

ジェイルのもとにはひっきりなしに書類が届いて机に山を築いていたし、グレイヴはロアードに付き従って常に神経を使っていた。警護につけば立ちっぱなし、それ以外も鍛錬や事務仕事があったはず。

労働に対する正当な報酬がない。ヤヨイには信じられない話だった。

「そりゃ——まあ、ほんとのところは知らないが、建前ではな」
ひょいと肩をすくめ、輿がのつたらしいゲランは「国王といえば」と続けた。

「王家に嫁ぎたがる女は少ないから、国王陛下はいつの時代も嫁の確保に必死だつつう話だぜ」

「は？」

ヤヨイは目を丸くした。ヒロの声で「だって玉の輿よ？」と幻聴が聞こえた。

目玉だけ回して空を見上げながら、ゲランはその理由を話した。

「他の国はともかく、オージェルム王は代々しまり屋で有名だ。立派な人手として農作の繁忙期には畑仕事もさせられるし、派手な夜会も年に数度で身を飾る機会も少ない。おまけに政敵が虎視眈々と首を狙っていたからな。巻き添えつつたらおかしいが、過去、悲惨な目に遭わされた王妃の話には事欠かないぜ」

「えー……」

ゲランとは逆に足元に目をやり、ヤヨイはむむと考え込んだ。

随分と印象が覆される。王妃や王子妃といったら、綺麗に着飾って優雅に過ごすのが仕事だと思っていた。故郷にも王室外交なる言葉があるし、外国に行ったりお客を迎えてもてなすことがあっても、基本的に友好関係を構築・維持するのが目的だろう。

しかしゲランの言うことが本当なら、ちよつとした商人に嫁入りするほうがマシに聞こえる。ヤヨイの通勤途上にあったランドボルの大きな商館では、たびたびパーティが開かれていたものだ。ジエイルの元へも一度、真っ白に漂白された厚紙でできた招待状が届いたことがある。

思えばあのとき、王様は「王妃になってやってもいい」という言

い方をした。ロード王子の恋人のことだ。聞き間違いで片づけていたが――。

「うーん……」

胃がかゆくなるような焦りに、ヤヨイは知らずうなっていた。

王妃ではなくとも、いや王妃でそれなら王子の嫁はもつとたいへんそうだ。アルガンダワという地名も耳慣れないし、ということはランドボルグの外周にあたる大公三領よりさらに外側の領地だろう。農作業やその他の雑用も多いにちがいない。……やっていけるだろうか。

「ほ、他になにか、知っておくべきことってある？ 王――家の決まり、とかで……」

王子のお嫁さんとして、と口がすべりそうなところをギリギリで留まり、ヤヨイはゲランを振り仰いだ。

必死の思いで問うたのにゲランはあっさりと首を振り、だがすぐに顎を上げた。

「細々したことは知らん。庶民には関係ない話だ。――ああ、有名なやつが一つ」

「な、なに！？」

勢い込んだヤヨイは、次の言葉で固まった。

「男色の禁止」

「……なに？」

「男同士で肉体関係を持つことだ。『外』にもそういう趣味があるんだろ？」

生々しい響きに、ヤヨイの顔に血が上った。

「あ――あるかもしれないけどそれはツ、なんだろうなんていうかわたしの周りにはいなかったよ！」

「そうか？ このあたりの国では昔からよくある」

あわてまくるヤヨイをおもしろそうに見下ろして、ゲランは笑っ

た。

「戦続きで動乱の時代が長かったから、傭兵だけじゃ足りずに地方からも男たちが徴兵されたし、兵役も必然的に長期化だ。軍娼を抱えても数が足りないし、下っ端まで順番が回らないのが常識。つつう事情で最初は仕方なしにやってみて、味を占めるんだろ。うな。だが、ただでさえ戦で大量に死んでるつつうのに、いっくら悦きたつて男同士じゃ——」

「ももももういい！」

肩に載っていた腕を叩き落とし、ヤヨイは首をすくめて両手で頬をおさえた。

それってBL？　そういうやつ？　頭の中に、本屋の棚が思い浮かぶ。

男性向けの成人雑誌や書籍は男性社員やパートのおばさんが担当してくれたが、いわゆるライトノベルのコーナーはヤヨイも普通に扱った。女性向けのコーナーも同様だ。やけに露出の高い男性が並ぶ華やかな色使いの表紙や、あからさまなタイトルを思い出せば目眩がした。

仕事、仕事と言い聞かせて頑張ったが、こんなところで無防備に聞かされると狼狽がとまらない。

しかしふつと、ジェイルやグレイヴではなく、なぜかゼロンやガラムで想像して——想像力の限界地点までだが——、うつと息が詰まった。

「……………」

現実はあるなりに美しいものではない。

赤くなったり青くなったりしていると、ゲランは明らかに笑いを噛み殺した様子で咳払いをした。そしてわざとらしく硬い調子で続ける。

「終戦当時は初婚の平均年齢が十五歳くらいだった。若くて子どもをたくさん産めそうな女を確保できるっていうのが男の甲斐性だったし、王族は率先してそれを示さなきゃならないから必ず若い花嫁を迎えたんだ。で、減った人口を増やすためにも、男に耽溺してはならないつつ法律ができた。まあ、いまは表向き戦もないし平和だから、ちよつと遊ぶくらいなら罰せられることもないけどな」

庶民ならな、と、ゲランは締めくくった。

4（後書き）

妙なところで切ってしまいました。

along更新済みです。（7月21日）

そのときジェイルがなにを思っていたか。

知らなくても問題なしですが、お時間のあるときにもご一読いただければ。

それまでくだらないバカ話に費やしていた時間を、ヤヨイは「勉強」にあてることにした。

その地に生きる人にとってはごくあたりまえの風習や慣習でも、だからこそあえて口の端に上ることのない話題はとても多い。故郷でたとえるなら、お盆やお墓参りの作法、七五三や成人式、結納に女性からは時計を贈り男性からは指輪を贈ることなど、そのときでなければ意識せずとも特に支障のない話だ。

そついうことを思いつくまま尋ねるうち、なぜかナンパの常套句から馬房の建て方まで教わっていた。

たらたらと歩みながらの旅程は出発当初より遅れ、やはり野宿や納屋泊まりを余儀なくされることもある。ゲランは屋根があるなら入り口からより近いほうに、ないなら自分の膝に抱えて眠りヤヨイを護った。

その朝ばち、と目を開けたときも、ヤヨイはゲランの胸に左の頬をあずけていた。太い木の根はよけたものの、小さく隆起するそれの上に一晩載せた尻が痺れている。

ぎゅつと目を瞑ってからもう一度開ける。

右肩からヤヨイを包むのは、ゲランのマント。つむじのあたりに落ちかかる吐息が安らかなリズムを刻んでいたため、ヤヨイはすぐに動き出すことをあきらめた。

（今日で……十六日目？）

時計もカレンダーもない生活で、一体いまがいつであるかを忘れないのは骨が折れる。それでもランドボルグにいればふとしたタイ

ミングでそれを知ることができたが、旅の空ではそうもいかない。ヤヨイは毎朝、脳内の日めくりを一枚めくることを日課にしている。そうして気づけば、いつの間にかランドボルグで過ごした日数を超えていた。

ゲランとの旅は、拍子抜けするほど平穏なものだった。追いはぎに遭うことも、ひどいぼったくり宿で有り金を巻き上げられることもない。旅慣れたゲランの選んだルートがよかったのか、はたまた運が味方しただけなのか。

見るべきものもない小さな村を経由しながら、ヤヨイの知識は幅広く増えていく。あんなふうに、なにかもを投げ出して家出てきたというのに、まるで一ころ流行った「自分探し」でもしているかのごとき収穫である。

慣れればどうということもない、野宿の手順はこうだ。

まず適当な木の根元に手ごろな石を積み上げて竈を作り、集めた粗朶そだにゲランが火打ち石で手早く火をつける。やってみたこともあるけれど、ちつともうまくいかないあれだ。それから麦の粉を取り出し、皮袋の水で練る。リュックから細い鉄の棒を取り出して先端に巻きつけて炙ればパンが焼ける。

その間に寝床の仕度を整えるのだが、横になって眠るほど安全が確保できることは稀で、ほとんどゲランの腕と抜き身の大剣に抱えられることになった。

「なんだってそんなこと知れたがるんだ？ ランドボルグにいりゃあ、喜んで教えてくれる御方がいらっしやっただろうに」

途切れることなく質問をするヤヨイに、時折ゲランはそう言って笑った。その言い回しが示す人は、限られる。ゲランの敬愛するジョージ・クルーニーが思い浮かんだ。

もとよりそば近くで過ごした期間が短く、聞くチャンスがなかった。そんなことを知らなければ、と思うきっかけもなかった。

いまは遠慮なく尋ねられる相手がいて、少しでも知っておきたいと思うから、そうする。

様々な話を聞いた。王家のことに重点をおくそれにゲランが気づいたかわからないが、特に訝る様子もなく教えてくれた。

俗に大公三領と呼ばれる土地の特殊性についても学んだ。

現在、王様の上の弟が治めるファルジート、姉が女大公として立つドランヴァイル、そして末の弟のいるスウェンバック。

元々は王の名代として役人を派遣をして治める土地だが、国王に兄弟がいる場合は、彼らが一代大公を名乗ってその地に住まう。ただし当人が既に王族籍を失っていることから、呼称は大公であつても実質的には終身であるだけで役人とかわりない。つまり、その子どもは王の甥や姪であつても、まったくの平民扱いとなる。大公が亡くなれば、またランドボルグから新しい役人が派遣されてくるだけだ。

「……………」

すうつと眠りに引き込まれそうになって、ヤヨイはあわてて目を開けた。

ヤヨイを抱えるゲランはまだ木陰の中だが、ヤヨイ自身は曙光の片鱗を浴びる位置に顔がある。といっても、西の空は闇色で星が瞬き、太陽はまだ平原の彼方に指をかけた程度だ。いまが初秋であることを考えれば、そう早い時間でもない。

ヤヨイは細心の注意を払って、腰を抱くゲランの腕をそとはずした。さりげなくずっと神経を張っていた彼も、スウェンバックが近づいたせいか、ぐっすりと眠り込んでいるようだ。

自分の代わりに荷物を抱かせ、ヤヨイは静かに立ち上がって夜明

けの光に身を曝す。
閉じた瞼に赤く透ける光は弱くとも眩く、魂から清められていきそうな気がした。

ゲランとドつき漫才をしながら旅路は、初日から全工程徒歩の予定だった。

ランドボルグの市場でもらったものを仕分けしつつ、ゲランはヤヨイの持ち金の額を聞き、それだけあれば馬車を拾うこともできると言った。同時に、こつも勧めた。

「俺は歩いて旅するのが嫌いじゃない。ゆつくりと見渡してこそわかるものつつのが、絶対にあるからな。スウェンバックまでなんざ、どんだけのんびり歩いたってせいぜい二十日。……歩けよ。歩いて、自分の目線でいろんなもの見てみる」

最初は、それどころじゃないと反発を覚えた。とにかく一刻も早くアサヌマに会わなければいけないのに、なにを悠長な、と。

けれど薄いグレーの瞳が思いのほか真摯な色を浮かべているのを見て、それを口にすることができなくなった。

それで確かにわかったこともある。

たとえば野宿は心身にとって悲惨であること。そこらに生えている果物は食べ放題だけれど、やたらと酸っぱいこと。足の疲れを軽減させるため、旅人は脛に布を巻くこと。飲用に適さない水のそばには、ある種の植物が生えていること。薄暮を過ぎる頃、森から生まれた靄が街道へ這い出して、とても幽玄に景色をかえること。朝焼けに染まった黄金色の畑が、息を飲むほど美しいこと。

歩き疲れて泣きそうになったとき、さりげなく手を差し伸べてくれる人の存在が、やっぱり泣きそうなほどありがたいこと。

自分で次の足を踏み出さなければ、決して進むことができない。けれどももう歩けないと思ったら、座り込んで休めばいい。靴を脱ぎ、寝転んで、昼寝をし、あるいは甘いものを食べて他愛もない話で笑って。活力を取り戻したら、また立ち上げればそれでいいのだ。そんなあたりまえのことが、いまのヤヨイにはひどく新鮮なもののように感じられた。

「まあ、結果オーライ？」

「あ？ なんつった？」

いまにも宿の扉を開けようとしていたゲランが肩越しに振り返り、片眉を派手に跳ね上げる。器用な顔面だなあ、などと感心しつつ、首を振った。

訝りつつも、スウエンバックはもうすぐそこ、このあたりでの常宿だという旅籠「天狗の宿」へと入っていくゲランに続き、ヤヨイは頭上の色褪せた看板を見上げて嘆息する。

——天狗だ。真っ赤な顔でながあい鼻の。

どこかのお土産品のような天狗のお面が貼りつけられた、一抱えもありそうな看板。しかしその顔立ちは、塗りがハゲ、そこそこがひび割れてもわかる西洋風だ。

ゲランに促されて足を踏み入れた宿は、これまでに泊まったところと代わり映えのない、寂れた木造の二階建て。入ってすぐが食堂と酒場を兼ね、奥の階段を上がった先が客室だ。案内されなくても見当がつく。

「おや、ゲランじゃないか」

獣脂の蠟燭を灯した室内は薄暗く、まだ時間が早いこともあって

客の姿もない。食堂と間仕切りさえない丸見えの厨房から声を上げたのは痩せぎすの女性で、ヤヨイは即座にメリル・ストリープとあだ名をつけた。

「よう、女将。世話ンなるぜ」

気安く片手を上げたゲランは、そのまま真っすぐに階段へ向かうとした。あわてて後を追うヤヨイは会釈だけしたが、女将はつかつかと歩み寄ってヤヨイの二の腕をがしっとつかんだ。その目はきつく眇められ、肉がえぐれたようなとがった顎も傲然と上向いている。

「お待ちよ。あんたがどこへ行つてなにをしようとかまやしないけどね、若い娘をたぶらかして連れ込むような宿じゃないんだよ、うち」

やけに陰のある声でつつかかる先で、ゲランは困ったように苦笑いを見せている。

むっと口を歪めて睨む女将がなぜ怒っているのか、まったくわからない。

「勘弁してくれ。こいつはそんなんじゃない、俺の雇い主だ。よく見ろよ」

言いながら、ゲランの手がヤヨイの帽子のつばをさらう。

うなじの上で結んだ髪がぼろりと転がり出て、女将の凍てついた視線がさつと緩んだ。

「あら、あんた……おやまあ……」

おやおやまあまあ、とつぶやきながら、女将はヤヨイの顎をつかんで上げたり下げたりと検分する。

「驚いた、あんた『外』の娘じゃないか！ いや、落っこちてきたって噂は聞いているがね、そんなに前の話じゃないだろう？ ランドボルグにいないのかい？ なんだってこんな田舎に」

最後にパン、と軽く両頬を叩かれてから、ヤヨイの顔は解放され

た。

痛くはなかったが、若干の痺れを感じて頬をさするヤヨイの頭に、ゲランの大きな手が載った。

「スウエンバックに向かってんだよ。アサヌマに目通り願うためにな」

「ああ……」

小さくとも街道沿いに宿を構えているのだ、女将は旅人を情報源にしているいろんな事情に接しているのだろう。一応は納得した様子だが、ゲランを胡乱げに眺めてからヤヨイに顔を寄せて声をひそめる。

「お嬢ちゃん、連れはこの男だけかい？ 普通『外』の人間ってえのは、そろそろと行列して馬車で動くもんだよ。もしうまいこと言いくるめられてんなら——」

ヤヨイに尋ねる形ではあるが、明らかにゲランに対する牽制だ。きよんとするヤヨイよりも、牽制されたゲランがいち早く口を開いた。

「おいおい、女将。俺の商売は人買いじゃないし、あんたの店をいかがわしい目的で使うこともない」

「……じゃあ、部屋は二つとるんだね？」

「冗談はよしてくれ、もつたいない。天に誓ってもいいが、俺はこいつに手を出したりしないぜ」

両の掌を上げて見せ、ゲランは神妙な眼差しを女将にそそぐ。

そのまま睨み合いに突入する気配を察し、ヤヨイも宿に足を踏み入れてからようやく最初の一言をはさんだ。

「あの、大丈夫です。ゲランはほんとに、ちゃんと護衛です。ここまで二人で歩いてきたけど、その、身の危険とか……感じたこと、ないです」

自分の言っていることが妙に恥ずかしくて、ヤヨイはいたたまれずにうつむいた。意味もなく指先をいじっていると、「歩いてつてあんた――」とあきれ返った声が降ってくる。

「……わかったよ。お嬢ちゃんの顔を立てて、二人部屋を使わせてやるよ。すぐ食事の仕度をするから、荷物を置いたら下りといで」そして視界の中に差し出された古い鍵を受け取り、ヤヨイはようやくその日のベッドにありついたのであった。

時計のない田舎町では、陽が落ちれば夜になる。

やたらハーブの匂いがキツイ割りに塩気の少ないスープとパン、それにオムレツが添えられた夕食を済ませた後、ヤヨイはすぐに部屋へと引き取った。

メルル・ストリープに似た女将はなにか話したげだったけれど、村に一軒きりの酒場でもある宿の食堂は繁盛していたし、あまり長居して『外』の人間だと知られなくなかった。

ゲランは今夜も、他のお客さんと酒を酌み交わしてくるのだろう。女将とのやり取りから察するに、村の住人とも馴染みのはずだ。そこに綺麗なおねえさんが一人も見当たらなかったことに、なんとなく救われる。

昨日は野宿だったから、お風呂には入れなかった。この宿に湯殿はないので、女将に頼めば湯を部屋まで運んでくれるはずだ。でも盥に一杯でいくらと計算するそれを値切り交渉する気力は、いまのヤヨイにはなかった。

手燭の炎を吹き消してベッドに上がると、毛布をはいでざらりとした手触りのシーツに埃で汚れた服のまま寝転ぶ。目的地はもう目の前だ、と思うほど、喜びや達成感よりも、後悔や罪悪感で気がふさいだ。

何気なく目を向けた窓に鎧戸ではなくガラスがはまっていることに気づいて、いまさらながらに驚いた。ガラス、特に板状のものはとても高価な品で、ランドボルグ城でも数えるほどしか見たことがないのに。

厚みがあつて表面がデコボコしていて、無数の気泡を抱いたガラス。それでもちゃんと、星の光で青く染まつた夜空が透けて見えている。

ふと、この世界でも星は丸いのかな、と思つた。もしかしたら、地球が歩むはずだつた別の世界なのかも、とか、それなら日本もあるのかもしれないな、と。

機会があつたら、できるだけ大きな地図を見せてもらおう。きっとジェイルならそれを持っている――。

「……………」

あの衝撃の朝から、まだたつたの十六日。随分長いこと放浪したような気でいたけれど、よく考えたら道に詳しく旅慣れた連れに従つて、目的地へとまっしぐらだ。

いささかならず白けた意識を持て余し、どうしてこんなところにいるのだろう、と、氷の粒を吹きつけた暗幕のような空を見上げる。ベッドに横たわつて星を眺めていると、身体がドロドロに溶けてしまふ錯覚にとらわれた。ちらちらと歪んで瞬く光に惑わされて、催眠術にかかったみたいだ。

ヤヨイはそつと息をつき、目を閉じた。

おじいちゃんもおばあちゃんも、心配しているにちがいない。

ジェイルは今度こそ、烈火の如く怒る狂っているだろう。――案外、あつさり見放されたかもしれない。

だってここに至るまでに、ヤヨイを追ってくる人はいなかったのだから。

「……………」

これってどうなんだろう、と、自分を俯瞰で観察するヤヨイが疑問を呈する。追っ手がかからないということは、本当に見捨てられ

てしまったのか。それとも、もっと別のルートを探しているのか。
あるいは――。

「……だまされるのは仕方ない、けど……ゲランが、わたしをだましてるとは……」

思いたくない。

ヤヨイは目を開き、ぼんやりと歪むガラスの向こうの空を見つめた。

いまさらゲランを疑ったところで遅すぎる。それにジェイルのアドバイスに従って、ケンカしたり話し合ったり、好き嫌いをぶつけあつてここまで来たのだ。明日スウェンバックに着きさえすれば、ゲランへの疑いがすっきりと晴れば、彼とは本当に親しい友だちになれると思う。

だからいまは、もっと別のことを考えなければ。

そう、たとえば――スベスベした手触りの、長くて綺麗な髪をした人のこと、とか。

ごろんと横向きに身をよじり、ふかふかした綿入り枕の感触を味わう。

(……いいも悪いも、返事、しなかったな……)

それならいい、と最後に王子は言ったが、アプローチを拒まないでほしい、という申し出を黙殺してしまった。

いや、もうそんなことを気に病む段階ではないのかもしれない。

あのときは確かにヤヨイに対して好意を持っていてくれたかもしれないが、きつと愛想を尽かされた。

追いはぎも出ず、ランドボルグからの追っ手もなく、ヤヨイの行く手を阻むものはなかった。だれひとり、なにひとつ、障害にはならなかった。グレイヴ王子も、追ってきたくれなかったのだ。

捕まる前に、少しでも早く遠くへ。自由に、自分の力で。そう望んでいたはずなのに、実際ほうっておかれたら寂しいだなんて矛盾している。

自分がひどくわがままで、ちっぽけな人間に思えてきた。もともとの存在意義からして薄っぺらである自覚はあったが、あんまりだ。さすがにこんな己を直視するのは惨め過ぎる。

しかし、いつものように思考を放棄して殻に閉じこもろうとしかけ、ヤヨイは踏みとどまった。かなりギリギリで、本能みたいなものが抵抗するのを、おさえつけて。

だって決めたのだ。だれかの勝手な思惑や無理強いに反発をすることはあっても、せめて自分の心から目を背けることはやめようと。

疲れたら休み、楽しければ笑い、つらければ弱音を吐く。それがあたりまえのことだと思い出したのだから、いま自分の心がどういう状態にあるのかは把握しておかなければいけない。

それはまるで、一晩中泣き喚いた朝、わざわざ鏡を覗くような恐怖を伴う。ひどい顔なのはわかつている。見なくてすむならそうしたい。

けれど腫れた瞼は冷やせば治るし、蒸しタオルで温めれば顔色はよくなるものだ。

色々なことから目を背けて今日まで来たが、明日はいよいよスウエンバックに入る。ゲランと二人の気楽な時間は終わりを告げ、どいう結果になるせよ、多くの意見や感情をぶつけられるにちがいない。

自分の問題とゆっくり向き合うのは、今夜が最後のチャンスになるだろう。堂々巡りになろうと憶測だらけだろうと、あの人のことを考えるべきだし——考えたい。

ヤヨイは再び目を閉じ、出発点を探った。

王子の好意は嬉しかったし、ヤヨイ自身も同じ種類の気持ちを抱き始めていたことは間違いない。ジェイルの部屋を飛び出すまで、確かにこの手に握った絵筆は明るい未来を描いていた。

——それが急に色を失ったのは、なぜだったの。

詰所のポーチで聞いた王子の言葉は、字面だけ見れば情熱的だった。もしもそれにふさわしい熱をもって迫られていたら、こんな気持ちにはならなかったかもしれない。口説くチャンスをくれ、などといわれなくても、あの瞬間、口説かれてると素直に思えただろう。

そしてそれは、きつとふわふわと甘やかな心地だったにちがいない。

あのとき感じた喪失感の正体は、なんなのか。

王様への反発？ —— ないわけじゃないけれど、庇護を受ける立場にあつては、それだけで片づけられないと理解もできる。勝手を言うなど憤るほど、まだ事態を消化できてもない。

王様への、怒り？ —— 人権を踏み躪る行為といえはそのとおりだ。いまだき政略結婚なんて時代錯誤だし、けれどこのいまどきと『外』のいまどきでは、それこそ時代がちがう。

ヒロに聞かなきゃわかんない、といまだにどこかで考えていることも確かだ。実際、ヒロに相談しないことには始まらない。アサヌマに会わなくてはと、ひたすら思いつめたのは明らかに逃避だった。

しかし緊急かつ異常な状況にあつて、あの瞬間まで決してマイナスの意味で狼狽しなかった理由もわかっている。

グレイヴが差し出し、ヤヨイが受け取った気持ちが確かにそこにあったからだ。

（王族、とか……国、とか……政治？　とか……ほんとそういうの、わたし気にしてなかったんだ——）
鈍く頭痛がする。

ヤヨイに難題を突きつけないゲランと過ごして、自分がいかに特異な環境にいたかが身に染みてわかった。

本当はずっと、もしかしたら元の世界にいた頃から、ヤヨイの神経は参っていたのかもしれない。参っていたことにも気づかないくらい。だからちよつとした感情の揺れで絶望などしたのだ。

「ん？」

絶望……？　なぜ？　なにに？

王子はヤヨイを好きだと言い、ヤヨイも彼に惹かれていた。王様は二人に寄り添って生きろと言い、多少の温度差はあれど二人ともそれを受け入れようとしていた。絶望する必要などどこにもない。ないけれど——でも。

遠くを睨む瞳。

気遣わしげにおいた空間。

苦しげに紡がれた愛を乞う言葉。

胸の奥がひどく痛んだけれど、ヤヨイはひとつひとつ、丁寧に思いついた。そうしているうちに、ようやく自分のどこが傷ついていたのかが見えてきた。

ヤヨイがぼんやりと思い描いた恋。初めてヤヨイの掌の中に目覚め、優しく育んでいけると思ったそれが、不安と苦痛で染められたことが悲しかったのだ。

そのたったひとつを守ってくればそれでよかったのに、甘くてふわふわした心地ではいられないと、現実を突きつけた王子に落胆

したのだ。ヤヨイの心情を思い遣ってくれたからこそだと思えば、さらに距離が感じられたのだ。

この恋に示された道筋がどうであろうと、ヤヨイにとっては二人が過ごした短い時間と、味わった面映いようなくすぐったさが基点だ。王子も同じであると口では言いながら、彼自身が一番それを信じていなかった。

王様の命令だから従わざるを得ない、とヤヨイが言い出すことを、ひどく恐れていた。

当然だ。

だってヤヨイは、彼が信じられるだけのものを、まだひとつも返したことがなかったのだから。そうする前に、大きななにかに呑み込まれて、あっさりと自分を見失った。

それくらい、始まったばかりの恋だったのだ。

（そっか、わたしはあるとき……）

——失恋、したんだ。

ヤヨイの未熟な感性が期待するもの——闇雲な情熱や、恋愛映画みたいな甘ったるいムードを演出してくれなかった王子に、生々しく泥臭い現実を見据えなければならぬ状況に、幻滅して恋心を放棄して。

「……あ、はは」

乾いた小さな笑いが唇の端からこぼれ出た。

わざと毛布を蹴立てて大きな仕草で仰向けになおり、頭の下に腕を組んだ。本も読めそうな星明かりに照らされ、つんと上向けた自分の鼻先が青白い。

ヤヨイが失恋したとしたら、ありもしない幻想にだ。

ゲランと旅をしていると、他人と触れ合うことがどれだけ予想外の顛末を引き起こすかしみじみと思い知る。まして『外』とちがい、まず安全に食べて眠ることすら難しい状況もある日常の中で、恋愛感情を最優先にする余裕はない。そういう習慣も考え方も、ないのだろう。

王子もあのとき、なにか重要なことを王に告げられていたにちがいない。それこそヤヨイが「気にしない」と鷹揚に、そして傲慢に切って捨てていたこと——国益とか、よくわからないけどそういうことを。

だって彼は、カメラの前で手を振るだけが仕事ではなく、もっとリアルに大きなものを背負って生きる、王の子なのだから。

「や……だなあ……」

自嘲のつぶやきをぽつりともらし、ヤヨイは熱くなった臉を下ろした。涙をこらえれば唇がわななき、息をつめてもやっぱりだめだった。拳に握った手を目元に押し当てても、一度堰を切った涙は、蜘蛛の巣に伝う雨粒のように次々とこぼれていった。

真っ暗闇に、紺色のリボンで束ねたチョコレート色の髪が舞う。紺色の上着を隙なくまとい、すっきりとした姿勢で窓の向こうを見つめる端正な横顔が像を結ぶ。

記憶の中の王子はこちらに気づき、嬉しそうに目を細めてヤヨイの名まえを小さく呼んだ。ヤヨイも微笑み返したように思う。

もどかしくて気恥ずかしくて、でも平穩だったときに互いが見せ合った、最後の笑顔。

あれしきのことで深く深く傷ついたのは、思うよりずっと王子に惹かれていたからだ。

『俺は、おまえたちが自由意志で自分の相手から王族を除外していたと思いたいし、そうあるべきだと思う』

そう言ったとき、彼は悩んでいるように見えた。それでも、ヤヨイのことを精一杯気遣ってくれたのだ。負うものがどれだけ重くとも、重いからこそ、ヤヨイには持たせたくないのだと。

あのととき不意に思った。このままではダメだと、なにかをどうにかしなくては、不幸になると。

ならばヤヨイは、どうしたら二人で幸せになれるか、一緒に考えるべきではなかったか。王子はちゃんと、最初から始めようと手を差し伸べてくれたのに。

王様から結婚しろと言われる前に、堂々とヤヨイが好きだと言ってくれた。

命令だからではなく、ヤヨイが自由意志で自分を選んだのだと思いたい、と、苦しそうに伝えてくれた。

なのに見当違いに幻滅して、勝手に絶望して、その手をとらずに逃げてしまった。

「……っ」

ごめんなさい、と声にしかけて、奥歯をかんでこらえる。

王子に、とても会いたい。けれどそれはもう、かなわない気がした。

追ってきてはくれなかった。明日にはもうスウェンバックに着いてしまう。

もしかしたらもう、王子の笑顔を脳裏に描くことすら、ゆるされないのかもしれない。

いつの間に寝入ったのか、気がついたら朝だった。

昨夜はガラスの窓に驚き感動したが、カーテンもないそれは朝日を容易に素通りさせ、思いのほか睡眠の妨げになるようだ。ヤヨイは清々しいほどの眩しさに顔をしかめた。

思い悩んだ夜の名残を引きずって、爽やかな目覚めとはいいがたい。それでもしっかりと目を開け、隣のベッドを見やると、ゲランの姿は既になかった。シーツや毛布が乱れているところを見ると、昨夜そこで休んだことには間違いないようだ。

寝過ごしたのか、とあわてて起き上がり、身支度を整える。といっても、もう少し上等な宿なら洗面用の、まさしく洗面器を運んでおいてもらうことも料金のうちだが、ここはそういうところではない。ほつれた髪を櫛で梳き、服の皺を叩いて伸ばす程度のことだ。

スカートをたくし上げて手を入れ、ブラウスの裾を引っ張りながら、ふとおかしくなる。

お金のことでもひどく不自由していても、『外』では朝起きて顔を洗うことに躊躇いはなかった。それなのにいま、たったそれだけのことと一回分の食事代を引き換えるわけにはいかない、となんの疑問も持たずに受け入れている。

価値観の相違を認めた結果か、あるいはいつの間にかヤヨイの気の持ちようがかわったのか。

ヤヨイは、そんな自分はちょっと好きだ、と心の中で言葉にしてつぶやいてみた。大丈夫、怖くない。今日も歩ける。

まだ、歩いていける。

部屋のドアを開けると、廊下の向こうに吹き抜けになった食堂が見下ろせる。

朝とは思えぬ温まった空気が立ち上って充滿していて、首をかしげながら顔を出し、ヤヨイは目を瞠った。

「ああ起きたのかい、ヤヨイ！」

少ししゃがれた声のキツイ口調、女将だ。

彼女の前には、厨房部分に据えられた大きな作業台。その上には籠に積まれた野菜と、羽根をむしられて丸裸の鶏。

ヤヨイは挨拶をしようと口を開いたが、女将の傍らで振り返ったゲランを見つけ、彼が満面の笑みで示すものに絶句した。

すぐ近くのテーブルが、それは見事な料理でいっぱいになっている。

「下りて来いよ、ヤヨイ。朝飯だ」

朝飯だ、で済む内容ではない。

ふらふらと階段を下り、ヤヨイは女将のそばに寄った。

「おはよう、ございます……」

「ああ、おはよう。ほら、座って座って！」

顎でテーブルをしゃくってみせる女将の意を汲んで、ゲランがヤヨイの背を押した。

たたらを踏みながら席に座らされたヤヨイの前には、朝とは思えぬ豪華な料理がずらりと並んでいた。

小鳥の丸焼き、兎のワイン煮込み、豚腿の燻製、川魚のハーブ焼

きといったメインの他、この時季に採れるだけのあらゆる野菜を盛りつけたサラダ、顔ほどもあるカリカリのパンに拳大のビスケット。数種の木の実を砕いて炒ってシロップをからめたお菓子、甘い香りのミルク粥と蜂蜜にひたったブレッツェル。飲み物も、煮沸したばかりのホットミルクから強い花の匂いがするハーブティ、もちろん小樽に入った酒もある。

「……すごい」

咽喉の奥でうめいて横目で見やると、隣に座ったゲランは肩をすくめた。

「とにかく食べよ」

「って、言われても」

この地で目覚めて以来——いや、十七年の人生で記憶にある限り、こんなにあたつぷりのご馳走を前にしたことはない。

戸惑いながら椅子の上で小さくなっているところへ、女将が前掛けで手を拭きながらやって来た。小脇に挟んでいるのは、薄汚れた小ぶりのノートだ。

「ちよつとちよつと！ あつたのよ、見てこれ！」

向かい側の席に腰を下ろすなり、女将は満面の笑みを見せる。興奮に上気した顔は若々しく、どこか愛しげにノートを見る瞳は優しく緩んでいた。

「あのさ、ヤヨイ。あ、食べなさいよ熱いうちに！ これ読んでほしいのよ」

せつかちに言って差し出されたノートを、ヤヨイはおずおずと受け取った。まだ事態が飲み込めず狼狽するヤヨイに、ゲランは「飯代は女将持ちだとさ」と的外れなことを言う。

「あたしもさ、べつにはしゃいでるわけじゃないんだよ？ ただ昨夜、うちの亭主と昔の話なんかしてたらこう……ねえ？ あ、亭主

は森に入っちまったけど」

はにかみつつ舌打ちなどする女将に、ヤヨイは要領を得ないまま
燻製肉の切れ端をフォークに刺す。

「今朝になって、そうだと思って物置を探したらさ、あつたのよ！
これ！」

「はあ……」

「食べなさいったら。ちよつとそれ、読んでちょうだいよ」

ヤヨイは女将が促すまま、香木の風味のする肉を口に押し込んで
から古いノートをテーブルに広げた。粗末な紙を紐で綴じ、端切れ
で補強した簡素なものだ。

しかしそこに書かれていたものは、ヤヨイを驚かせるのに十分だ
った。

漢字だ。

万年筆ではなく筆の文字で、漢字が書かれている。

「こ、これ——」

思わず顔を上げると、女将はわくわくした表情でうなずく。

「昔、ここに泊まった『外』の男が書いてくれたんだ。名まえがあ
るはずなんだよ」

ヤヨイは急いで肉を飲み下し、久しぶりに目にする他人の日本語
に見入った。

「読める？　ね、なんて？」

興奮を抑えて問う声に、小さく応える。

「……モリシタ、マサル……」

「あー、そうよ！　そうそうそう、モリシタ！　マサル！」

女将が甲高い声を上げて手を叩く。この、異様な盛り上がりはな
んだらう。

「ああそうだ、モル―シアじゃなかった……メッサーリでも、なか

つたねえ」

しみじみとした女将の言葉を聞きながら、ヤヨイはもう一度、生
成りの紙に視線を落とした。

森下勝、日本、東京、天皇陛下——。故郷のことを、文字で綴り
ながら話して聞かせたのだろうか。

ページをめくれば、上手とは言いがたい絵が描かれている。への
へのもへじ、日の丸、それから鉄腕アトム、だろうか。そして天狗
も。

「おおすつきりした！　ありがとう、ヤヨイ」

「あ——いえ……」

「悪かったね、朝から驚かせて。なにしろ古い話だからさ、懐かし
くて」

ヤヨイの手元を見つめる女将の目は満足げだ。

「あの……モリシタさんと、交流が……？」

「交流なんてお上品なもんじゃなかったけどね、あたしらは子ども
だったからさ。だけどまあ、言葉もろくに通じやしなかったけど、
遊んでもらったよ。ほら『外』の人間なんて初めて見たる？　顔立
ちなんかは別だけど、どこもあたしらとかわらなくてさ。……
楽しかったねえ」

そのとき初めて、ヤヨイは意識して女将の目を見た。こちらを向
いてはいなかったけれど、そこに過去を懐かしむ以外の色を見つけ
ることはできなかった。

それから女将は、気恥ずかしげに鼻を鳴らして席を立った。

ヤヨイはフォークを置き、両手で大切にノートを持った。

このノートを残したモリシタは、女将と同年代の——当時の子ど
もたちと親しくなったのだ。言葉は通じなかったと女将は言った。
オージェルムのない世界から来た人間だということを、彼らはどう

受け止めたのだろう。

「その、モリシタ？ がさ、ここの名づけ親なんだと」

横から手が伸び、パンをつかんで豪快にぱつくりと割る。そこに肉とサラダを挟み、サンドイッチにした。味付けは燻製の塩気だけかな、でも美味しそう、と思った。

早朝から女将のアシスタントをしていたというゲランに聞けば、四十年前、モリシタがこの宿に投宿した折、新しい屋号を贈ってほしいと当時の主人にせがまれたのだそうだ。女将の父親である。

合点がいった。「天狗の宿」だなんてこの土地に異質で愛嬌のある名前はそのせいか、と。モリシタの故郷はきつと、天狗の伝説がある土地だったのだろう。

あつという間にサンドイッチを食べ終え、ゲランは小鳥の丸焼きを無造作につかみ、背中あたりにかぶりついた。

「おとなしい男だったらしいぜ。右だか左だか、腕を悪くして痛そうだったって」

それはきつと、『落下』の際に負った怪我の後遺症にちがいない。ヒロもいまだに、歪んでくつついた脛の骨のせいで苦しんでいる。

「モリシタさんは……スウェンバックに向かったのかな」

もしかしたら会えるのでは、と漠然とした期待は、だがゲランによつてあっさりと退けられた。

「いいや？ 昔はいまほど街道が整備されてなかったから、ドラングヴァイルに抜けるにも、もっと西へ行くにもこの道を通ったんだ。俺が知る限り、スウェンバックに『外』の人間が住み着いたって話は聞かない」

見る見るうちに、鳥はきれいに骨だけになって皿の上に放り出された。

ヤヨイは目を上げ、女将の姿を視界に映した。こちらに背を向け

て作業台の前に立ち、ナイフを叩きつけるようにして丸裸の鶏をさばいている。照れ隠しにちがいなかるう。

ただモリシタの名まえを教えてもらうためだけに、こんなご馳走を振る舞ってくれるはずもない。もっと話したかっただろうに——ヤヨイの話を聞きたかっただろうに、あまり社交的でないヤヨイを氣遣って、これ以上立ち入ってこないのだ。

そう思うと、途端に申し訳ない気持ちでいっぱいになる。せつかくモリシタがこの地に築いたささやかなものを、ヤヨイがぶち壊しにしてしまったように感じた。

それでも思い出の中のモリシタのために、女将はヤヨイにご馳走とはにかんだ笑顔をくれた。

そつと、ごわつく粗い紙に残された四十年前の痕跡に触れてみる。筆で刻まれ、通り過ぎた人々から記憶を引き出すだけの記号に成り果てたモリシタ。ヒロからもジェイルからも、その名を聞いたことはない。彼はどこに安住の地を見つけたのだろう。どうやって、そこがそうだと、わかったのだろう。

知らず疑問は口から流れ出ていた。蜂蜜漬けのプレッツェルをハーブティに突っ込んでいるゲランは、ただ黙って憐れみの表情を浮かべた。

豪勢な朝食を終え——ほとんどゲランの胃袋に消えたのだが——、相場より少し多い代金を置いて宿を引き払うと、女将は表まで見送りに出てくれた。

会釈にもならない程度にぺこぺこ頭を下げながら立ち去ろうとして、ヤヨイは立ち止まった。場にふさわしい言葉を知っているわ

けでも、なにかの期待に応えられるだけの力もない。

でもなにか言わずにいられないから——自分のために、胸の中に湧き上がった気持ちを口にした。

「あ、の……ご飯、美味しかったです。ありがとうございました。……また、来ます。必ず。今度はゆっくり、もっとゆっくりお話したいと思います」

モリシタの思い出を聞いてやるだの、『外』に関する知識を与えてやるだの、そんな驕った気持ちはひとつもない。いまのヤヨイには『外』から来た事実は重圧でしかなかった。いいことも悪いことも、ヤヨイの個性や意思と無関係に全部そこに起因している。

ジェイルの語るナガヤマさんのように、女将の記憶に残るモリシタさんのように、離れても大切にしてもらえる存在に自分になれるとは、到底思えなかった。だからいま、女将に再訪を約束しているのは純粹にヤヨイ自身のためだ。モリシタさんの同胞である、その一点だけでも価値を認めてもらえるのなら、と。

後ろめたさからうつむくヤヨイの顎が、不意に下から伸びた手にすくいあげられる。視界がぶれるほどの勢いで上向かされ、女将が遠慮ない動作で昨日と同じく右に左に揺さぶった。

「なんて顔してんだい、まったく。あんたスウェンバックを目指してんだろ？ そりやもうすぐ目の前じゃないか！ 長旅が終わるんだ、普通はもつと清々してるもんだよ」

そして今日もやっぱり、ぱん、と両頬を張られて解放される。己の無力さと気構えの甘さに打ちひしがれ、そしてそれが原因で大切なものを失ったと信じ込むヤヨイの耳に、女将の励ましはひどく新鮮に響いた。

じんと熱くなる頬をおさえ、ヤヨイは思わずゲランを見上げた。三十センチも高いところで、灰色の瞳は微笑んでいる。

すりすりと頬をさすり、ヤヨイは呆然と女将の言葉を反芻した。
旅の終わりは、清々するもの。

まだ歩ける、と思った。だがそれは決して建設的な意味合いではなく、むしろ断頭台へ我が身を運ぶような覚悟ではなかったか。

そのとき、なんのためにスウェンバックを目指していたのかを思い出した。

きっかけがどうであれ、これは前向きになるための旅だったはずだ。広い世界に目を向け、自分で作った殻に守られるばかりの日々をかえようと。アサヌマに会うことは口実で、実際には旅そのものが目的だったのだ。

足の裏にマメを作り、筋肉痛で重い身体を引きずって歩む道のりで、様々なものを見聞きしてきた。楽しいことばかりではなかったし、厳しい現実を知って臆さなかったわけでもない。だが反面、ヤヨイのどこかは静かに未来を見つめていたはずだ。

すべてを投げ出すことが案外簡単であることを、ヤヨイは知っている。本当になにもかもいらぬのなら、なにも欲しくないと切り切るのなら、境界の向こう側に行く術はいくらでもあるのだ。

そうしないのは、もう手放したくないものを持っているから。ヤヨイがそれを手放すことを、悲しむ人がいるとわかつているからだ。

冷たい手が、ヤヨイの頬に触れた。目の前に焦点を合わせると、「しょうがない子だ」とため息混じりにメリル・ストリープが笑った。

「さあ、お行き。ここまで来たんだ、あと少しさ」

またおいで、と素っ気なく言って踵を返し、女将はそのまま振り返りもせず宿の扉をくぐっていった。

色褪せた天狗の顔の真下で、乱暴に閉ざされた扉は、開こうと思

えばいつでも開いてヤヨイを受け入れる。ただし次にそうするとき
は、自分の手で、自分の力で。

スウェンバックに着いたらおしまい、そんなわけはなかった。そ
こからまた始めるのだ。ならばこの旅の終わりは、無知と煩悶に訣
別するときでもある。

——なるほど、それは清々しそうだ。

「……あーあ」

意味もなく声を吐き、帽子をかぶりなおす振りをした。

くっ、と咽喉の奥から笑いがもれる。そんな気分でもないのに首
を曲げて空を見上げたら、鼻がつんと痛んで涙が湧いた。目に染み
る青空は遠く、緩く吹きつける風は肌に冷たい。赤茶色のコートは
重たくて、暖かい。薄く一筋こぼれた涙が、耳の下に流れ落ちる。
秋だな、と思った。

凜とした横顔の向こうに広がる空も、こんな色をしていたような
気がする。

（会いたいなあ……）

落ちそうになった帽子を、背後に立って顔を覗き込むゲランの手
がおさえた。逆さまに映る彼は穏やかな無表情のままで、かすれた
雫をぬぐってくれた。

7（後書き）

まだまだ迷走中。ウザいといわないでやって下さい。

感想、拍手、ありがとうございます。

ご指摘で初めてヤヨイが天然ボケであることに気づきました。

あとアサヌマさんの登場を楽しみにして下さってる方がいらして、驚くとともに緊張しています。ヨーダですよ・・・？

うつむいたゲランの瞳は、淡い影の中で磨き上げたステンレスのような銀色に見える。

ステンレスといえば、憧れのシステムキッチンが憧れのままで終わってしまった。ビルトインでラストップで三口のガスコンロ、混合栓でシャワーヘッドのついた蛇口、人口大理石の作業スペースはシンクに向かって絶妙に傾斜しているような。「お勝手」ではなく「キッチン」で作ればただの炒り卵だってスクランブルエッグだ、朝食に添えられたゆで卵は味が濃くておいしかった——などとぼんやり思いながら、ヤヨイは顎を引いた。

宿は街道へ続く村の入り口近くにあり、住民が丹精する畑は村の奥を抜けた方向だ。しかしあまりぐずぐずしては、見咎められるかもしれない。ヤヨイはゆっくりと肺を清い空気で満たし、ぐつとおなかに力を入れて吐き出した。

「よし！ アサヌマさんまでもう少し、張り切って行きましょうー！」

道の先を指差して振り返るヤヨイに、ゲランは肩をすくめた。

わざわざ言葉にして口から吐き出さなければ、張り切る元氣も湧いてこない。逆に口に出してしまえば、気持ちも上向きになる気がした。

（言霊って本当だ、自分の声が自分の耳で聞こえるって威力抜群）
ヤヨイは機嫌よくスカートの裾を蹴飛ばし、歩き出した。

ランドボルグで通勤途中よく口ずさんだ散歩の定番曲を小さく歌い、ゆつくりとあたりを見回す。おじいちゃんの家を飛び出したとき、樹木はもう少し豊かに茂り、もっと深い緑色をしていた気がす

る。蛇行する街道をたどって北上するうちに、森の縁を彩る木々は黄色く色づき、畑も野原も混じり気のない黄金色に染まりつつあった。移ろう季節を物語るのは、なにも空だけではないのだ。

たった十七日。でも『外』の世界で、十七日間歩き続けた経験を持つ十七歳が、一体どれほどいることが。

自分はやり遂げようとしている。こうと決めたことを、泥水を掻き分けて泳ぐようなつらさを飲み込みながら。それでも。

強張っていた心が緩み、逆に足元は固まったように感じた。ローマ軍が行進できるほどではないけれど、振り返れば確かにたどってきた道がある。

歩け、と言ってくれた連れを見やれば、薄手のシャツの下ではつきりと膨らんだ胃袋を押すようにして腹をさすっていた。

そりやあれだけ食べればね、と苦笑しつつ、ヤヨイはワイン煮込みの味を脳内で反芻する。元々、トリの胸肉と豚こま肉以外を食べつけない舌ではあったが、ほどよい弾力を残してやわらかく煮込まれたウサギに苦手意識は持たなかった。昨夜から火にかけていたのだろうか。

「女将のお料理、おいしかったね。あんなご馳走見たの、生まれて初めてだよ」

「そりやなによりだ」

おざなりに返してきたゲランは、下唇を突き出して腹を叩いた。ぼん、と間の抜けた音がする。これぞ腹鼓。思わずぷつと嘔き出し、ヤヨイも遠慮なくそれを叩いてみた。

「ちよつとゲラン、おじさんぽーい！　すごい音！　すごいおなか！」

「こらやめろ、出る！　しょうがないだろうが、おまえがもつと食べばよかったんだ」

それを言われると黙るほかない。しかしヤヨイの胃袋が乏しい食料に慣れていたのは、もう数ヶ月も前のことだ。いまは決して小食と呼べない量を食べる。

あれは一体何人前の料理だったのだろう、とゲランの腹をなでながら考えれば、あきれたように眉を上げて制覇されていくテーブルを眺めていた女将の顔を思い出す。

「そついやあ、あの小鳥の丸焼きはおまえに食わしてやればよかったな」

「ああ、ゲランが高速で骨にしちゃったヤツ？」

「美味いんだもんよ。肉としちゃあ食いではないが、炊いた穀物と腹から出した卵を茹でたのが詰めてあつて、このへんの名物だったわ」

ゲランはさらつと軽く悔いてみせたが、召し上がっていただけでまったく問題ない。ウサギをクリアしたからといって、産卵前の茹で卵など次のハードルには高すぎる。たとえ卵的に十分食べごろであつたとしても、だ。

「この時季に繁殖する鳥つつたら、かなり数が限られる。森番の亭主がいるからこそその贅沢だ。普通、冬に育雛する鳥は捕らないつつうのが森の掟だからな」

「そうなの？ どうして？」

「そりや他の獣の餌になるからだろうよ。冬眠しない獣にとつちやあ、鳥の卵も雛も大事な食糧だ。ただでさえ減る雛の素を人が食っちまっっちゃあ、まずいだろ」

生々しい話にさらに青ざめながら、ヤヨイは深く納得した。

人と獣による鳥の解体ショーを頭の中から追い出して、ヤヨイは必死で別のことを考えようとした。

そついうことは得意だ。深く息を吐いて目を閉じ、額の裏側あた

りを真つ白な雑巾が左から右へ力強く滑る様を思えばいい。そこへすかさず別のものを想像すれば、考えたくないことは簡単に棚上げできる。

このとき思い浮かんだのは、女将の穏やかな微笑みだった。

「……どこもかわらなくなつてさ、か……」

感慨深げにこぼされた女将の述懐が、ヤヨイの胸をあたたかくする。

人種や民族、顔立ちや体格、文化や生活習慣ばかりか生まれ落ちた世界すらちがっても、女将はモリシタさんを拒絶しなかった。それが我がことのようにうれしかった。『外』から来ることの、本当の意味を理解していないからこそであつても、かまわない。

ところがヤヨイが独り言をつぶやいた瞬間、ゲランの足がぴたりととまった。

訝しく見上げた先にあるのは、苦いものを口にしたような表情だ。

「……多分、あの女将は知ってたんだ」

「なにを？」

らしからぬ沈んだ様子に、反射的に問い返したヤヨイはすぐに後悔した。だがゲランの瞳は正面に向けられたまま、なにか、どこかを睨むばかりだ。

彼のまとう殺伐とした空気と、リュックから覗く大きな剣。初めて見るほど厳しい横顔に、ヤヨイはどきりと心臓が揺れるのを感じた。

清冽な朝の空気の中に、重苦しい沈黙がただよう。乾いた土を踏みしめる足音が遠い。

「……夕暮れの閉門には、間に合うな」

乱暴にヤヨイの頭をなで、手を握ったゲランの声はいつも通りに戻っていて、ほっとした。同時に、最後までよくわからない人で終

わりそうな彼が寂しかった。

いろんなことであまりにも余裕がなくて棚上げしてきたが、ゲランはあくまでお金で雇ったボディガードだ。スウェンバックに着けば、そこで任務は完了ということ。

いざ別れが近づくと、後悔ばかりが胸に湧く。もっと一緒にいたい、もっといろんなことを話したい。でもヤヨイに、ゲランを雇い続けるほどの収入はない。詳しい金額は聞かなかったけれど、大人の男性を長時間拘束するのだから、それなりになるはず。『外』でいうなら……月あたり三十万円とか？ 危険手当みたいなものがついて、五十万円くらい？ もっと？ わからない、見当もつかない。それ以前にヤヨイは元々、ボディガードが必要な状況にもない。

つないだ手を胸の前に引き寄せ、ごつごつと骨ばった拳に視線を落とす。甲にはうつすらとした白い傷跡がいくつかあって、かさかさ乾いていた。あんなに大きな鉄の棒を振り回すのだから、たとえ刃がなくてもかすただけで怪我をするかもしれない。

何日か前、ゲランは「俺の剣はイゼ爺直伝だ」と誇らしげに話していた。二十五歳のゲランが、七十歳を超えているだろうおじいちゃんの弟子というのは、なんだか不思議だ。体力も体格もはるかに及ばないゲランに、おじいちゃんとはどんな稽古をつけたのだろう。

微笑ましい気分で山脈のように出っ張った骨の形をたどっていて不意に、あれ、と引っかかりを覚える。

——王子の手って、どんなだったかな。

知らない。覚えてない。

初めて会った湖の畔。掌に口づけられたあの夜。確かに手と手を重ねていたのに、すぐ間近で見ていたはずなのに、まったく思い出せなかった。

「——っ」

突然ひどい焦燥に襲われ、ヤヨイは混乱した。あわててゲランを見つめるが、灰色の瞳は訝しげにこちらを見るばかりで、当然助けしてくれるはずもなかった。

「あ、あのねゲラン、あの——」

バカみたいに「あの」を繰り返すヤヨイに、ゲランはあきれたように目を瞠った。ああジェイル王子にその癖はやめるところでくびどく叱られたのに、と思い出して余計に焦りが募り——思わず、口走っていた。

「わ、わたしを好きだって言ってる人がいて、あの、事情があつてその人と結婚することになりそうで、でもまだそこまで全然考えてなくて、っていうか自分の気持ちも全然よくわからなくて、びつくりして、アサヌマさんに会おうと思っただけ、全然わからないの！」

文法が壊滅している。ヒロが聞いたならショックで寝込みそうなくらい、ひどいオージェルム公用語だった。

気がつけば立ち止まり、痕がつくほど爪を立ててゲランの拳を握りしめていた。あまりにも目の前に立ちすぎて、ゲランはほぼ直角にヤヨイを見下ろしている。

ゲランは最初驚いたような、それから考えるような、最後は微妙に気まずそうな顔をした。そしてその表情の変遷にどんな意味があるのかヤヨイが考える間もなく、あっさりとうなずいた。

「そうか。よかったな」

ヤヨイはぎよつとした。

よかったな？ よかったな、って——よかったな？

「な——なに、が……？」

自分の唐突な発言は遠くのお空に放り投げ、まったく理解不能な感想らしきものを述べたゲランをおそろおそろ見つめる。

くつと笑ったゲランは、ヤヨイの肩をぎゅっと抱いてそのまま道を進んだ。

「おまえの悩みが、色恋に関する話でよかったな、つつことだよ。道中おまえが聞いたがることつつたら、こちらの風習だの税だのなんだの、まるっきり色気がなかったから、俺はてっきり」

そして、わかるだろ、とでも言いたげにたくましい眉を跳ね上げた。これまでずっと、モテない娘とバカにされていたのかと思い、ヤヨイは顔を真っ赤にして声を上げた。

「そ、そんな暢気な話じゃ——」

「ああ、そりゃそうだよな。おまえなんぞに惚れたりしたら、男は一生苦労していかなきゃならないもん」

力の限り言い返そうと目いっぱい息を吸い込んでいたヤヨイは、それを吐き出すタイミングを失って固まった。

睨みつけた灰色の瞳から目がそらせない。顔をそむけたいのに、はるか高みに向く首の角度が戻せない。

「……どういう、意味……」

静かに見下ろしてくるゲランに気圧され、途切れる言葉に同級生の言葉を思い出す。住んでいる町の姉妹都市事業で、交換留学生としてカナダへホームステイに行った彼女が一番嫌いだった英語のフレーズ。それが「どういう意味？」と「彼女いまなんて言った？」だったという。日本の英語教育がまったく実践的でないことと通じなかったなら周囲でなく当人に聞きやがれ、という鬱憤が積もり積もってうんざりしたと。

思えばヤヨイはゲランに、同じような言葉を何度も浴びせた。そのたびに、それからいまでも、もしかしたら彼も苛立ちを募らせていたかもしれない。

まるで熱のない視線にとらわれ、凍りつくヤヨイに、ゲランの灰色の瞳は一片の慈悲も浮かべていないように見えた。

「なんでヒロやアサヌマ以外の『外』の奴らが、ランドボルグじゃなく辺鄙な田舎に引っ込んでると思う？　なんで大きな町では生きられない？」

そう問われてもそんなことに理由があると考える以前に、ヤヨイはまだ自分とヒロ以外の仲間がこの地にいると、実感すらできていない。

だが考えた。都会でなく地方を選んで暮らす理由。

仕事がないから。物価が高いから。咄嗟に思いつくのはこれくらいだ。あとはその土地の特産品に関係があるとか、その場所が気に入っているから、とか――。

「ヒロに、早い結婚を勧められたことはないか」

「……ある」

ゲランはふつと息をつき、いつの間にかとまっていた足を動かす。

「あいつは、利己的な男だから」

その口調にはなんの変化もなかったのに、ざく、となにかが胸に刺さった。『ものすごい自信家の上に独断専行も甚だしいからね』

……ジエイルの声が響いた気がした。

心臓が嫌な鼓動を打ち、血液が指先まで下がったように感じた。

「『外』の人間に惚れるつつのは、まして一生添い遂げるつつのは互いにとって楽なことじゃない」

「え……」

「一から十まで全部ちがうことを認めて、生涯わかりあえない可能性も受け入れて、それから世の中にあ『外』を嫌う――つつか頭っから信じてない輩もいるから、それとやりあうことも覚悟して。『外』の者に限らず、生まれも人柄も努力も、過去の功績だって王の

鼻息ひとつで吹っ飛ばされるんだぜ。いまは王家の庇護下にあったとしても、どこにも拠り所のないおまえらを抱え込むことに、怯まない奴なんざいないさ」

その瞬間、ジェナの笑顔が脳裏をよぎった。いつも明るくて陽気で、心からヒロが好きでたまらないと全身で示していた彼女。

「『外』の人間を隣人と認め、優しく知らん振りしてくれるのはランドボルグの住人だが、そこから離れるほどに『外』の人間への興味と好意は高まる傾向にある」

聞き覚えのある言葉に、ヤヨイはよろよと顔を上げた。それは道中の四方山話で教えられたことだ。ゲランは詳しく語らなかったが、田舎町は長いこと司法制度に問題を抱えていて、それをかつてアサヌマが解決したという経緯があるらしい。

先達の栄光のおこぼれに与るようで恐縮だが、冷たい視線や悪口を投げつけられるよりずっといい。そのときはただ、そう思った。

「王都は無論、これだけ離れた大公領ですら王の影を踏まずには歩けない。功績の挙げられない人間は、せめて失敗を見つけられないよう息を殺しているしかない。だからおまえらを迫害しない、心優しい田舎モンの懷に逃げ込んで生きる。王の目にとまるつつうことは諸刃の剣だ、寵愛が深まるほどに危険も増す。——それがくたねえ謀の手駒みてえに扱われたつつうなら……そりゃ悔しかっただろうなあ」

衝撃の大きさに、遠い目をするゲランの話の半分は耳に入らなかった。

ぐるぐると、優しい人たちの笑顔だけが頭の中を回っていた。

8（後書き）

次で旅は終わる予定です。（用心棒が余計な話題を振らなければ・・。

あと少し、もうちょっとだけめんどくさいヒトにおつきあい下さい。

王の末弟が治めるスウェンバック地方は、良質の銅鉱石を産出する銅山と豊富な樹木から収入を得る、富裕な土地だった。

オージェルム北部に横たわる山脈から流れる大型河川に沿っていくつもの町が点在し、枝を掃った大木が筏になって川を流れてくる。そのままランドボルグとの境界近くの市場町まで運ばれ、売られていくのだという。銅鉱石もほとんどが山の麓で精錬され、船に積載されての出荷だ。必然的に、川の上は人と船と丸太で意外なほどの混雑を見せている。

ランドボルグを挟んだ東に位置するファルジートは広大な平野がほとんどで、主に売り物の軍馬や農耕馬と、毛をとるための羊を育てているらしい。起伏に富んだオージェルム王国、特に王都の衛星都市である大公領は、国の財政を語る上で決してはずせない重要な土地だ。

その中でドランヴァイルだけが、特筆すべき売りが無いのだとゲランは言った。

領地の七割が峻険な山で占められ、平らな部分の土壌も農作には向いていない。けれど長年国境線を争ってきた敵国と接する場所だけに、軽視することもできない。

「だから若い男は、死ぬほど勉強してどっかで役人になるか、俺みたいな傭兵になるかしかないつつうわけよ」

からりと笑ってゲランは言うが、ヤヨイは返す言葉に困ってしまった。「雇われて戦う人」という言い回しをすんなりと「傭兵」に訳せたことが、少しだけ苦しかった。

ヒロに一般常識を教わっていたとき、国境はまだ不安定で油断はできないと聞かされた。かといって戦争に備え、職業的な兵隊を抱えるほどの危機的状況でもない。いざそのときがきたら、ゲランのような人が大勢戦場へ向かうのだ。それまでは、各地の領主が催すトーナメントに参加して賞金を稼いだり、用心棒の仕事をこなして糊口をしのいでいくのだという。それが「放浪剣士」の実情だった。

お金のために戦う、命を懸ける。それは別に気にならない。『外』にだって、呼び名がちがい、優先順位がちがっても同じことをしている人はたくさんいるし、必要なことなのだろうと思う。

ただなんとなく――暴力や死といったものの生々しさにいまさら気づいて、ヤヨイは久しぶりにひどい閉塞感にとらわれていた。

『外』にいたころは考えもしなかったこと。避けていれば一生触れずにすんだこと。トラブルや争いや、マイナスの感情を剥き出しにして対立すること。そういうものが自分という存在にぴつたりと、素肌の上に張りついたもう一枚の皮膚のようにそこにある。洗ってもこすっても消えることなく。

「……………」

ぼわんと脳が膨れたような現実感のなさを味わいながら、ヤヨイはきりきりと痛み続ける胸をそつと押さえた。『おまえなんぞに惚れたりしたら』――ゲランの言葉が繰り返し繰り返し耳の奥から聞こえてきて、ただでさえ重い足はいまにもとまってしまいそうだ。

自分と一緒にいることが、それほどの大ごとだとは思ってもみなかった。

どうして王子なのに近衛騎士がついていないんですか、と尋ねたとき、ジェイルはけろりとした顔で「僕なんか死んじゃえばいいからじゃない？」と言った。だれがそんなことを、と思ったけれど、重苦しい話になりそうで面倒くさくてそれ以上は詮索しなかった。

本当は少しだけ、グレイヴは王子様なのになぜ兄王子の護衛なのか問いたい気持ちがあつたのに。

ジェイルにあんなことを言わせるくらいなのだから、グレイヴの立場だつてきつと磐石なものではない。

「……わたし、王子と結婚、しないほうがいいのかな……」

だれにともなくつぶやいた。自分で言っておいて、胸を軋ませるその言葉に強く抵抗を覚える。

でも、ヤヨイをそばに置くことが彼の不利益になるなんて嫌だ。もしもそれが理由で怪我をしたり、命を落とすようなことは絶対にあつてはならないと思う。誇りや心を傷つけられることだつて。ヤヨイと一緒にたにされて理不尽な憎悪や嫌悪に王子が曝されるなんてことも、考えたくはなかった。

けれども悪いも、その縁談を決めたのは、そもそも王子の父親である王様自身なのである。

ほう、と溜め込んだ憂鬱を吐き出して、土手の上から左手に広がる川を眺める。ゴムボートみたいに幅広で縁の低い舟が、ロープで束ねられた木材を曳いてゆつたりと流れに乗っている。数十本の塊になると、その上に人が立って長い棒で川底を突きながら舵取りをしているようだった。

ゲランの背中から生える剣の持ち手も木製だ。あの中のいくらかは、剣とか槍とか、矢とか、そういう武器に生まれ変わるのかもしれない。

（王子の剣は、どんなだったかな……）

頭の中で写真のように、王様の部屋の前に立つ王子の姿が甦る。左腰に下げたものをクローズアップしてみるけれど、うまく思いつけなかった。多分木じゃなくて、もっと長さも短くて……。

散漫になっていく。焦点がぼやけて、具体的なものはなにひとつ

としてヤヨイのものにはならない。パーツの一つがわからないなんてどうでもいいことで、これほどまで不安になれる自分がもはや滑稽ですらある。

いや、胸に刻みつけるために見つめたことがなかったから、漫然と受け流してばかりいたから覚えていないのだ。なににもかも。

「……………」

ジェイルは、恋は独りではできないと言った。あたためるにも、壊してしまうにも。

ヤヨイの想いは、このまま箱に詰めて閉じ込めておけばいつか凍えて死んでいく。そうなくても仕方ない、とどこかで思っていた。でもグレイヴは、ヤヨイが『外』から来たことなど初めからわかっていた。騎士団との板ばさみになっても、ヤヨイを好きだと言ってくれた。ヤヨイを排斥しようとする人の存在も、知らないわけがなかった。

胸の下のほうが熱くなって、涙が出そうになった。ヤヨイの考えを見通したように、ずっと黙っていたゲランがぽつりとこぼした。

「………… おまえを、悩ませようと思ったわけじゃない。ただ、半端な覚悟じゃないつつうことくらいは知っててやれよ」

風に首を振る赤べこのようにうなずきながら、ずんと重くなった胃をおさえる。それを知ったから余計に、自分のしでかしたことの重大さがのしかかってくるのだ。

——もしも今回のことで王様がとても怒って、やっぱり王子のお嫁さんにこんな娘はふさわしくない、と言われたら？

ありうることだ。というかむしろ、まったく正しい意見だ。そうになったら逆に、寄り添った二人の気持ちが邪魔になる。わざわざ電気ショックと人工呼吸で息を吹き返させた心を、今度は完全

に殺さなくてはならない。自分の気持ちを受け入れたからには、それはヤヨイが自らなさねばならない仕事になるのだ。最初から手の届かない人だったと切り捨てるには、もう彼のことを深く考えすぎている。

いま名まえを呼んでも会いたいと叫んでも、泣いて手を振り回してもそばに来てはくれないのに、ヤヨイの中に勝手に居座っている。

もういやだ。苦しい。

なんであの人は王子なんだろう、なんでもっと簡単な人を好きにならなかったんだろう。

相手がだれだって、うまくいくばかりでないのはわかっている。でも、少なくとも絶対に逆らえない存在に脅えることはなかったはずだ。

王と王家への畏怖や感謝だけで、この事態を乗り切れるものだろうか。一生を左右する問題なのに、まだ恋人がいたこともないヤヨイが、「王様の命令」というどうにも非現実的な理由に諾々と従わなければならないのか。

「……行きたくない」

さっきより大きな声でつぶやいてみた。絶対に聞こえていたはずなのに、ゲランは聞こえない振りをした。なぜとも、どこへとも、問い返してはこなかった。

くすんだ白い壁でできたスウェンバック城は、川にせり出すような絶壁の崖の上に建っている。土手の斜面は足場が悪く急で波打ち際まで下りていくことはできず、大きな橋をかけることが難しいら

しい。ところどころにいる渡し守に小舟を出してもらって、対岸へ――城下町の中心地へ向かうことになる。

スウェンバック――領地全体でなく都市そのものとして――はランドボルグに次いで古く、拠点となる城は大昔の国境を守っていた砦だ。幾度も改修と増築を重ねた王城と異なり規模は小さく、城内に住んでいるのは役人と警備隊くらいで、一般市民は外の町に居を構えているとゲランは教えてくれた。

「その先の渡し場がいいだろう、ちょうど城の真下に舟をつけてくれる。普段は身分検めが厳しいが、ま、おまえがいれば問題ないだろうな」

緩くカーブを描きながら、森を断ち切って流れる大河。それに沿って踏み固められた街道を行くので、途中からはヤヨイたちも深い森の中を歩いていた。ゲランの指差すほうを見やっても赤い夕日が枝の間から落ちるばかりで、とても土手の下に下りられる道があるようには見えないが、すぐ真横をどうとうと音を立てて水が流れていることはわかる。

もう少し。もうすぐそこでお別れ。

きり、と胸を刺した痛みが、ヤヨイに口を開かせた。

「ゲラン、あの……」

だが、言葉が続かなかった。事情のすべてを打ち明けようにも、なにをどう説明すればいいのか皆目見当もつかない。

「……アルガンダワ、って、行ったことある？」

ヤヨイは誤魔化すように、無理に笑ってみせた。

「おお、あるぜ。去年の春は、あそこの領主が競技会の主催番だったからな」

抑え込んだ葛藤をさらりと流してくれたことに感謝しながら、ヤヨイは首を傾げた。

「主催番？」

「流しの剣士や傭兵団は、競技会で自分らの名を売って歩かなきゃならないだろ。俺たちを召し抱えることはできないが、食い詰めて辞められても困るつつうんで、陛下は各地の領主に定期的な競技会の開催を義務づけて下さってるんだ。中でも年に一度、陛下主催と銘打った大競技会は出場者も観客も桁外れに多い。人が動けば金も動く。ランドボルグばかりが潤っても仕方ないから、名代として領主が持ち回りでそれを仕切って催すわけよ」

「はー……なるほど」

「アルガンダワはここから北西に——そうだな、歩くと三十日つてところか。ドランヴァイルからならなお近い」

故郷の名が出たためか口が滑らかになったゲランは、右を向いても左を向いても延々と畑ばかりだぜ、とおかしげに笑った。

アルガンダワというとランドボルグからは田舎の代表みたいに言われることもあるが、実際にはそれほど辺鄙な場所でもないという。ただ戦乱末期に併呑した小国の王城を領主の居館としているため、あえて辺境と蔑称しているらしい。

いまはアルガンダワ方面の国境付近も落ち着いているし、なだらかな丘と緑の絨毯が美しい風光明媚な土地だそうだ。もっと昔は、その小国が異民族の襲撃に備えた砦でもある。

「俺も大概あちこち行っただけ、住むならここだつつうのはアルガンダワだ」

どこかうつとりと語っていたゲランの口元が、だらしく緩んだ。それほど魅力的なところなのか、と感心したのに、女性に目がないゲランの話を真に受けてはいけなかった。

「飯も酒も美味しいし、なにより異民族の血が混じってるせいか、女がいい」

「は？」

「顔立ちも独特で色気があるが、なんつつか、腰が張って尻が豊かで……」

思い出し笑いを浮かべながら曲線を再現しようとする大きな手を、ヤヨイは思い切り叩いた。

「ばかつ！ ゲランのばかつ！ スケベ親父！」

腹を立てて早足で歩き、追ってくるゲランが笑いをこらえる気配を背中を感じる。ここ数日忘れていた、それはヤヨイとゲランが飽きもせず繰り返した戯れの匂いだ。

ここまで、楽しい旅だった。

少しエッチなゲランとの会話は時に言葉に詰まらされ、それをネタにまたからかわれたりするけれど、どこか空気が抜けたように軽かった。女好きを公言してはばからないのに、触れてくる手はまったく色を匂わせず、上手にヤヨイから人恋しさを取り除いてくれた。

ゲランのおちゃらけた性格がなににも増してありがたかったのは、もよおしたとき「ちよつと待ってて」といえばそれですむことだ。彼自身があっけらかんとしているので、森へ分け入るのを見送られても恥ずかしくなかった。

当然のことではあるが、ここにトイレトペーパーなど存在しない。町ではまだトイレの作法もあるが、旅路では構っていられるはずもなかった。大きくてやわらかい葉っぱって、偉大だと思う。あまり詳しくは語りたくない暗部である。

こんな状況でトイレのことなんか考えたせいか、急に肩の力が抜けてしまった。

ずんずん進むヤヨイの背を、そこを下りるぞとゲランの笑った声が追いかける。立ち止まって彼を待ち、うやうやしく差し出された手を取った。

土手から二の腕のほどの太さの横木で簡単に作られた階段を下り

て、渡し場へ向かう。櫂を肩に担いでいた若い渡し守は、ゲランの陰から顔を出したヤヨイを見て目を見開いた。だが興味津々なことを隠し、多くは尋ねずにただ小銭を受け取って舟を出した。

川幅は、ヤヨイの目測でおよそ五十メートルほどか。濃い緑色の水は、ゆったりと操られる櫂の半ばでふつとりと透明度を失う。指先をつけると、透き通った部分の水は思ったよりも温かった。きつと底のほうと水面近くでは、かなり温度がちがうのだろう。落ちたら即座に体温を奪われ、泳ぐのは難しそうだ。

確か、服を着ていると溺れる確率は高くなるはずだった。体育の授業で習った以上のことはできないから、ヤヨイはぞつとして舟の縁をつかんだ。

上流から流れてくる筏や大きな船を巧みにかわし、小舟はゆつくりと川を横切る。徐々に近づく崖の城を見上げていたら、不意にかさつく指が頬をさすった。振り返ると、川風に煽られて乱れた髪を、ゲランが整えてくれているところだった。

「ちゃんと目が開いてるな」

穏やかな笑みの意味がわからず、ヤヨイはきよとんとした。

「若い娘が物思いに沈んでる図つつうのも悪くないが、好奇心いっぱいにきよろきよろしてるほうが、おまえには似合ってるよ」

まっすぐに見つめてくる目と低い声に、ヤヨイはどぎまぎした。

「そ、そっかな」

「なんだか惜しくなってきたな……。大事大事に護ってきたのに、ただで譲り渡すのもおもしろくない」

よくわからないことを言つてにやりと笑い、ゲランはおもむろに立ち上がった。何事かと目を丸くした瞬間、舟がゴンと音を立てて大きく揺れ、ゲランの長身が目の前を横切つて跳んだ。対岸へ着いたのだ。

「まあ、契約はランドボルグに帰るまで続くわけだからな。ゆつくりと楽しむことにしよう、色々」と

「え、それって——」

小さな棧橋から手を伸ばして腕をつかまれ、ヤヨイの身体は易々と引き上げられた。

渡し守にありがとよ、などと気楽な挨拶を放るゲランに背中を押されながら、ヤヨイは声を上げた。

「帰るまでって、どういうこと？　ここでお別れじゃないの？」

「どうということって、最初に言っただろうが。帰りの分までツケにしてやるって」

思わず呆然としてその場に立ち尽くした。

一番最初、ランドボルグの朝の市場で、城を指差して——そうだ、確かにゲランはそう言った。

「忘れてたのか？」

あきれたように苦笑して、ゲランはヤヨイを縦抱きに抱え上げた。軽々と急斜面の簡素な階段を上っていく彼のたくましい首筋にしがみついて、じわじわと喜びが胸を満たすのを感じる。

自分は大勢に迷惑をかけ、悪いことをしたのだからきちんと謝らなくては、というプレッシャーは増していくばかりだが、いまはその重たい気持ちの扱い方がわかる。スカートの陰に隠して見ないフリするのではなく、そのまま差し出して潔く審判を仰ぐほかないのだ。かけっこは嫌いだけど、合図が鳴って走り出したならゴールしなければ終わらない。

だれにどんな言葉をぶつけられても受け止めよう、という覚悟はしたつもりだが、心細さは消せるものではなかった。ゲランが一緒に、そばにいてくれるというのは心強いし、単純に嬉しかった。

（そうだった……帰るまでって約束だった。うん、そうだ）

なんだか涙が出そう。嬉し泣きするほど俺が好きか、などとかかわれてはたまらないので、唇をかでこらえた。

平坦な場所で道に下ろされそうになっても、ヤヨイはぐずる子どものように抵抗した。ゲランは小さく笑い、ヤヨイを抱えたままりユックを背負いなおして歩き出す。

ゲランの肩を肘掛にして振り返り、もうその威容をすぐそこに晒す、夕焼けを背負ったスウェンバック城を見上げた。紫色に暮れゆく空が、ものすごく遠く見えた。

せつかくここまで来たのだから、アサヌマにはちゃんと会おう。自分が混乱し、愚かな行動で周囲に迷惑をかけたことを、全部話してしまおう。伝え聞いた限りでも、アサヌマはそれを受け止めてくれる人だ。聴罪は職務のうちではなかるうが、甘えさせてもらうのだ。

「こっちは城の裏手で、町は反対側だ。ここからじゃあ無理だが、この坂を上りきれば見えてくるぜ」

ゲランが示したのは、白い城壁の向こうに望む丘。ぱつと見た感じが軽石に似た、ぼこぼこした石を積んだ壁には、ヤヨイの掌より大きな鋏の打たれた木の扉が取り付けられていた。内側に向かって開け放たれているが、そこにはちゃんと門番がいる。

まばらに木の生えた小山の上に、お城がどんと載っている感じだ。なるほど、これは城内に住む人も少なからうとヤヨイは納得した。あまりの急勾配に、家を建てるのがひどく難しそうだったからだ。

ランドボルグの兵隊さんより軽装の門番が、瞳の色まで判別できるくらい近づいたとき、坂の上から転がるようにして数人の男性が駆け下りてくるのが見えた。

革鎧で武装した人や、ランドボルグでは見ない色だけれど、文官

とおぼしき服装の人。下り坂でついた勢いそのまま脚を回すようにして城門を飛び出し、ヤヨイたちの前を走り去っていく。通行人をよける余裕もない様子に、ゲランは道の端まで退いた。

「なんだ……？」

訝しげに落とされた眩きは、平素よりさらに低い。ただ事でない気配を察して、ヤヨイはゲランの腕から下りた。

一団から遅れて城門を抜けてきた農夫風のおじさんをつかまえて、ゲランがなにがあったと問いただした。

口の端から泡を飛ばし、おじさんは叫んだ。

「なにつてあんた大変だよあんた！ ご、ご領主様が、ご領主様があんた、お亡くなりになったんだよ！」

ヤヨイは大きく目を睜り、咄嗟に口を手で覆った。

領主とはすなわちスウェンバック大公を指し、それは現国王の末弟、グレイヴら三王子の叔父だ。確かヒロやロアード王子と同じ、三十二歳。突然の死を迎えるには早すぎる。

無言のままおじさんの腕を放したゲランは、厳しい顔つきで城門を睨むばかりで、ヤヨイのほうを見ようとはしなかった。

9（後書き）

終わりました、第六章！　かなり駆け足になってしまいましたが、とにかく終わりました！

次から少しalongの更新になると思います。

ヤヨイの知らないところで起きた事件の顛末になります。あくまでヤヨイから見た物語だけを知りたい、という方は、第七章までしばしお待ち下さい。あの人と再会します。

拍手小話を更新しました。

去年の6月から放置されていて、さすがにマズいと思っていたので・・。

とりあえず五話完結の第一話を。またしてもお題サイト様からネタをいただいて参りました。完全脇役視点になっていく予定です。

城館へと続く坂道を上り始めると、見上げるほど急な坂にヤヨイは眩暈を起こしそうになった。距離にして三百メートルばかりだろうが、これをもしスキーで下りると言われたら断固拒否する斜度なのだ。

数歩先に行くゲランは、つい先ほどまで厚い肩に漲らせていた緊張も消し、ちらりと見る限りもう普段通りの顔つきに戻っている。

（領主様が亡くなった、っていうことは……どういうこと？）

鳥も休む枝に困るほどスカスカとした木立の中、咽喉をカラカラにして足を出す。

ヤヨイの頭で思いつくことといったら、まずお葬式をどうするのだろうかという程度のことだ。

王様の弟なのだからランドボルグで生まれ育ったのだろうし、そうするとやはり、遺体を運んで執り行うのだろうか。それとも領地を賜ったのだから、もうこの土地の人として扱われる？ ゲランに教授された習慣は一般庶民のもので、王侯貴族に当てはまるものはなかった。

のそのそと進むヤヨイの背後から話し声が聞こえてきて、通行の邪魔にならぬように道の端へよけつつ、さりげなく休憩をとる。地元民には慣れた坂道だろうけれど、大分体力はついているが、登山かと思うほどの坂にヤヨイは辟易とした。

「ご領主様がご病気だったなんて、おまえ知ってたかよ」

「馬鹿、そんな話、下々に洩らされるわけなかるうが」

深刻そうに顔を青ざめさせて目の前を通り過ぎるのは、着込んだ

風合いの上下に分厚い革靴を履いた二人連れのおじさんだ。おそろく町の店主かなにかだろう。シャツのボタンも全部ついているし、飾り気がないだけで清潔な服を着ている。

「しかしじゃあ、やっぱり城で王都の騎士様方をお見かけしたっていうのは……」

「ああ、ご領主様のお見舞いだったならそりゃコソコソもするさ。なんたつてご領主様はほら、陛下の——」

聞くともしに聞いていたヤヨイは、おじさんたちに急に振り返られてぎよつとした。反射的に深く帽子をかぶったが、おじさんたちはそのまま無言で歩み去る。

不自然に会話を断ち切ったことが気にかかって立ちすくんでいると、同じように足を止めていたゲランが少し坂を下りてきた。

「どうした？」

「あ、いま……なんか、ご領主様の話をした人が——」

「ああ、こういう状況じゃな」

沈んだ表情に苦笑を浮かべ、ゲランは顎をしゃくって先を促す。

なにか引つ掛かりを感じたまま、ヤヨイはそれに従った。

どうにかこうにか坂を上り切り、平らな道にたどり着いたヤヨイが最初に見たものは、広場にたむろするむさくろしい男の集団だった。

どこことなく郷愁を誘われたのは、彼らが履いているズボンに見覚えがあったからだ。

建設現場で働く人たちの正装、飛び散る汗によく似合う——ニツカポツカ。

「……アサヌマさんのもんぺ、みたいなものかな」

そうだ、そうにちがいない。状況も忘れてのほんとその集団を遠巻きに眺めていたら、不意にむくつけき男たちの塊の中から自分を呼ぶ声がした。

「あ、いた！ ヤヨイ！」

「はえ？」

思わずあたりを見回し、背後まで振り返ってみたが、この国でヤヨイといったらここにいるヤヨイ以外にない。しかしランドボルクにさえ知己の少ないヤヨイが、このスウェンバックで、しかも建設作業員に知り合いがいようはずもない。

ゲランを見上げれば、眉を下げ、男っぽい顔に戸惑いを浮かべていた。

「お出迎えか」

「つて、わたしの？ …… あっ！」

そのとき、人垣を押しつけて姿を見せたのは、臙脂色の腰丈のベストにズボン、紅茶色の髪を振り乱した——ルーヴェンだった。

なぜここに。なぜルーヴェン。

思考停止に陥りばかんと口を開けたヤヨイは、風のように駆け寄ったルーヴェンの胸に、あっという間に抱きしめられていた。

「やっと会えたッ！」

「ぐえっ」

ぎゅうぎゅう抱きつかれて上からのしかかれ、背骨は反り返るし肩を脱臼しそうになる。のけぞった首に不自然な力が入り、自分の頭の重みにびっくりした。

「ヤヨイってばもう、お転婆さんだね！」

後ろ向きに倒れそうで怖くなり、ヤヨイはルーヴェンの背にしがみついた。それから周囲にたくさんの人がいたことを思い出して抗議しようとしたが、自分を抱きしめたままグルグル回り出したルーヴェンに振り回され、それもままならない。

「大丈夫？ 元気？ 怪我はない？ 怖い思いはしなかった？」

ジェイルばりの早口で矢継ぎ早に質問されても、不安定な体勢で

いまにも転んでしまいそうな恐怖でなにも考えられない。

「ちょ、あの、とにかく放してえっ！」

腹から絞り出すようにして細い悲鳴を上げると、首元に頼ずりしていたルーヴェンの重みがふっと消えた。目を回しながらバランスをとるため伸ばした手の先が、硬い掌の感触を覚える。

「悪いな、小僧。こいつに触れたかったら俺の許可をとってくれ、でないと次は頭からバツサリいくぜ」

ソシアルダンス上級者もびつくりのターンでくるとたくましい腕の中に巻き取られたヤヨイは、鼻先にゲランのにおいを嗅ぎ取って、考えるよりも先に安堵した。

「あんた、だれだよ？ あ、いや、見覚えがある！ そのうすらデカイ背に灰色の目——」

腕の隙間から見やったルーヴェンの表情は、見間違いかと思うほど険しい。短い付き合いだった、書記室勤務の数日では一番親しく穏やかに接してくれた人なのに。

「あ、あのね、ルーヴェン、この人は——」

「俺はヤヨイの護衛だ。ランドボルグに送り届けるまでは、何人たりともこいつに触れてもらっちゃ困るんでね」

ヤヨイの後を強引に引き取ったゲランの声には、余裕がない。首を曲げて顔を見上げると、厳しい眼であたりを見回してる。

ふと、その目元が緩むのと同時に腕の拘束が解かれた。その場にめくらされた目に見えない緊張の糸が切れたのを察し、ヤヨイはこっそりと息をついた。

「そう、そうなの。ルーヴェン、なんでここにいるの？」

領主である大公が亡くなったことは無関係だと、さすがにわかる。いくら早馬を飛ばしたとしても、ランドボルグに第一報が届いて折り返したら三日はかかる。

とすると、アサヌマが現場監督をしているスウェンバック城の改造工事の件か、と予測しつつ訊ねたのだが、ルーヴェンの返答はまったく予想外だった。

「なんでって、ひどいなあ！ 君が来るのを待ってたんじゃないか」「え、うそ！」

眉を上げて心外そうに目を丸くするルーヴェンに、ヤヨイのほうも心外だった。

アサヌマに会ったらかうしよう、大公閣下にはこう挨拶しよう、というシミュレーションこそしてきたが、まさかルーヴェンに熱烈歓迎された挙句に「ひどい」と言われることなどだれが想像できようか。

「嘘じゃないよ。まあ、もちろん仕事もあるにはあるんだけど……あ、室長」

ルーヴェンがヤヨイの頭越し、嫌そうな声で放った呼びかけに、ヤヨイはマツハの勢いで振り返った。

果たしてそこに、またもランドボルグにいるはずの人がいた。数メートル向こう、ゆつくりと閉まる城館の扉を背にしてこちらに歩み寄ってくる。

「ガラム、室長……」

ぼやんとしたつぶやきを無意識にもらしながら、ヤヨイは血圧と脈拍に異常が生じるのを感じていた。

ゲランいわくの「こんな状況」だからか、金茶色の髪は相変わらずライオンのたてがみみたいだし、金緑色の瞳も輝きを失ってはいないのに、ヤヨイに向ける室長の笑みはどこか力ない。

だがヤヨイが一番違和感を覚えたのは、精彩を欠いた表情ではなかった。

ルーヴェンが書記官の制服ともいえるべき臙脂色のベストを着てい

るのに、室長は見覚えのある上着を袖を抜いて羽織っていたのだ。膝丈で紺色、大ぶりの銀ボタン。袖の折り返しに銀系の縁取り。これではまるで――。

「小僧、言いつけた用事は済ませたのか。二度は聞かんぞ」

厚めの唇がほだけて響いた重低音に、ヤヨイの膝から力が抜けそうになった。ゲランもいい声だけれど、やっぱり室長にはかなわない！ などと場違いなことを考えて頬を赤らめるヤヨイの前で、ルーヴェンが増量した不機嫌オーラを室長に向けている。

「いまやつてるところだったんです！ でもヤヨイが到着したんだから、出迎えのほうが重要でしょう？」

「ならもう用済みだな」

木で鼻をくくったような室長の態度に敵意をむき出しにしつつ、ルーヴェンは引き下がった。なにか捨て台詞じみたことを言ったようだが、聞き取れない。

「ヤヨイ、またあとでね！」

振り返りながら手を振られ、咄嗟に振り返す。

いろいろなことが把握できずに茫然としていると、苦笑の滲む重低音が降ってきた。

「久しぶりだな、ヤヨイ。道中、かわりはなかったか」

見上げた先には、目を細めてヤヨイを見つめる室長の、どこか寂しそくに緩んだ笑み。

「は、はい！ あの、ついて来てくれた人に、よくしてもらって……」

そうだゲランを紹介せねば、とすっかり存在を忘れていた旅の相棒を振り返るが、そこにあるべき長身の姿がない。

「あ、あれ？ ゲラン？」

途端に心細くなって周囲を見回すけれど、ゲランどころかニツカポツカの集団も、領主の訃報を聞きつけて集まりつつあった町の人

たちの姿もない。いつの間にか狭い城館前の広場には、ヤヨイとガ
ルム室長だけが取り残されていた。

どうしたんだろう、どこに行っただろうとおろおろするヤヨイ
の肩を、不意に伸びてきた腕が抱く。ふわっと漂う辛いタバコのに
おいに、それがだれでどういうことかと考える前に心臓がドーンと
飛び跳ねた。

「中に入るには手続きが必要だ。そちらへ回っただろう」
肩口をつかむ手に促されるヤヨイの足は、ふわふわとおぼつか
ない。

「ダナンの――」
言いかけて止まった声に、ヤヨイはぎこちなく顔を上げた。これ
までで最高に近い距離にいる憧れの人の横顔は憂いに満ちていて、
浮ついた心が瞬時に沈む。

「……いや、スウェンバック大公の訃報を？」

ヤヨイの肩を抱くのと逆の手で城館の扉を開けながら、室長は短
くそう言った。

「あ……はい、ちょっとだけ……」

「そうか。そういうわけで少しゴタゴタしているが、夜にはアサヌ
マに会わせる。部屋を用意しているから、まずは休め」

背を押されるようにして踏み入った城館の廊下は狭く、暗い。窓
の数が極端に少ないのと、夕刻であるにも関わらず、灯されるべき
明かりの手配が滞っているせいもあるのだろう。

室長とルーヴェンがなぜここにいるのか、そしてなぜ室長が、ま
るで近衛騎士のような格好でいるのかはわからない。だがあちらの
事情はともかく、ヤヨイの「家出」はバレているようだ。

尋ねたいことは他にも山ほどあったけれど、ヤヨイは黙ってうな
ずいた。とにかくその部屋にいれば、きっとゲランが来てくれると

いう望みもあった。

城館内部の輪郭をたどるようにして廊下を進み、ざわめきの聞こえるあたりを避けて石の階段を上った先で、室長は一枚のドアを鍵を使って開けた。

「簡単な食事と、湯の支度もしてある。中から鍵をかけて、知っている人間以外はだれが来ても絶対に開けるな」

「は、はい……わかりました」

「ああ、知り合いでも小僧はだめだ。そうだな……いつそ俺が殿下が来るまで、寝た振りでしておけ」

はいわかりました、ともう一度答えようとして、声が咽喉に詰まった。

——殿下？

というのは、ジェイル王子のことだろうか。まさかロード王子ではあるまい。他に殿下というともう一人心当たりはあるが、もしやまだまだ知らない「殿下」がいて——そう、王弟も殿下だ。いやいやこの地にいるはずの王弟殿下は亡くなって——。

ガラム室長の顔を見上げたままぐるぐると考えていたら、きりりとした眉が片方だけ上がった。

「どうした。寝た振りが不満なら、延々と湯浴みの振りをしているも構わんぞ」

「あ……いえ、寝た振りは得意なので、します、けど……」

間抜けな返事をしたヤヨイに、室長はふつと笑った。大きな手が帽子ごとヤヨイの頭をつかんで揺らし、そのまま室内に押しやる。

それきり去ってしまおうとする気配にヤヨイはあわてたが、言葉が出てこない。

ルーヴェンが、書記官がいたのだからジェイル王子がいてもおか

しくはないのかもしれない。彼のほうがいい、気もする。

けれど室長が着ている上着が近衛騎士とそっくり同じに見えるから、まさかまさかという思いも消えてくれない。でもいまここで会いたいのか、と言われれば――正直会いたいけれど、まだ様々な覚悟ができていないから会いたくない気もした。

知らず継るように見つめていたヤヨイの視線に気づき、室長はドアを閉めかけた手をとめた。

そして薄暗い廊下から、なにかもわかつている、という顔で一言だけ言った。

「……グレイヴ殿下だ」

閉まるドアのきい、という耳障りな軋みは遠く、ヤヨイは目の前の、門型の錠を睨んで「かけておかなきゃ」と思っばかりで、指一本動かせなかった。

1（後書き）

お久しぶりの更新です。「アノヒト」と再会できました。

前回、alongを更新してから、という後書きを書いたのですが、諸事情により7章が先になりました。

もう少しヤヨイのお話と、それにどうしても絡む部分だけの進行でいきたいなあと。

次回がいつになるかまたしても心もとないのですが、お待ちいただけたら

幸いです。

この部屋は、多分客間というやつだろう。いつまでたつてもだれも来なくて火もないから、月明かりだけを頼りに、ヤヨイはぼんやりと視線を流した。

ベッドに箆筥、テーブルセット、二人掛けのソファ、小さな暖炉。人が過ごすのに必要な家具は一通りあるものの、そこにだれかの趣味や個性はうかがえない。

（室長、遅いなあ……おなかすいた）

赤茶色のコートを毛布がわりに膝からかけて、硬いソファの上につづくまる。

ガルム室長が言つてた食事は本当に簡単で、ワインが一瓶、パンとチーズが一かけらのみ。室内に衝立を置いただけの洗い場には大きめの盥が二つあり、片方には冷めかけてはいたけれどたつぷりとお湯が張つてあつた。それと空の桶を使って汚れを落とした後、食事をしたが五分で済んだ。正直、足りるものではない。

でも、いま城内が混乱していることは想像できる。『外』の人として重用されているらしいアサヌマも。だから我慢するしかないのだ。

暇に飽かせて刻々と変わりゆく空の色を、嵌め殺しになったガラス窓の外にずっと見ていた。完全に日が落ちてから、もう随分経つ。夜が深まるにつれて湯冷めしたヤヨイは寒さに耐えがたくなり、ワインをなめるように飲んでいた。ほんのかすかな甘みを打ち消すほど渋くて苦くて、飲み下すのにいちいち顔をしかめてしまうが、寒気と悪寒がとまらなくて。

おばあちゃんの果実酒が飲みたいな、と温まった手で頬を包み、目を閉じる。身体が内側からぼわんと膨れて、頭がふわふわするようだ。

だれも来ないから寝た振りをする必要もなかったけれど、振りじやなくて本当に眠ってしまいそう。自分の呼吸が深くなるのをぼんやりと感じていた、そのとき。

コンコン、と小さくノックの音が聞こえた。はっとしたヤヨイがあわてて立ち上がり、カチコチに固まるほど痺れたお尻をさする間に、もう一度。

「は、はい、いま開けます！」

お湯を使うためにブーツは脱いでいたので、履きなおさずに裸足でドアに駆け寄った。門型の鍵を開けようとして、訪問者がだれか確かめる必要があるのだ、と思い出した。

「えっと、ごめんなさい、だれですか」

ドアと壁の隙間に向かって問いかけるが、返事がない。ゲランならば、自分から名乗っているはず。

「……室長ですか？ ルーヴェン？」

重ねて問うても沈黙が返るばかりで、ヤヨイはもしや酔っ払って空耳を聞いたのでは、と自分を疑い出した。苦いまずい思いながら大分ワインを飲んでいるし、実際裸足で石の床に立ってもあまり冷たく感じない。

もしかして明日は二日酔い初体験か、と憂鬱になりながらドアから離れようとして、ヤヨイ、とかすかな声を聞いた。

振り返ったヤヨイは、じっとドアを見つめた。

「……………」

耳を澄まして、物音ひとつ聞こえてこない。

ふるえる指で門をはずすヤヨイの頭からは、室長の言葉などきれいに消えていた。

そつとドアを押し開く。暗闇の廊下にいた人は、うつむき、目を伏せ、唇を引き結んで――。

「……王子……」

無意識のつぶやきに、グレイヴ王子はちよつとだけ顎を引いた。

静かに部屋へ入ってきた王子は、後ろ手にドアを閉めたきり、その場から動かなかつた。無口とか無愛想では片づけられない雰囲気、に話しかけられず、自分だけソファに戻るのもためらわれて、ヤヨイもそこに立ち尽くす。

黙り込む王子の横で、ヤヨイはちらちらと彼を盗み見た。

いつもうなじで束ねているチョコレートブラウンの髪は、結わずにすんと背に流されている。シャツとズボンという軽装に、肌身離さず持っていた剣もない。ピリピリしているのはわかる。でも同時に茫然と脱力しているふうにも見えた。

様子がへんだな、と感じたのは、叔父さんが亡くなったせいだと思つた。

坂ですれちがつたおじさんたちが、王都の騎士を見かけたと噂していた。それはきつと、大公の病気を聞いて駆けつけたグレイヴらのことだったのだ。途中で行きあわなかつたのは、ゲランが選んだのとは別な、馬で走るのにいい別のルートかなにかがあるのだろう。そういえばおじさんたちは、そのお見舞いについてヘンなことを言っていた。

『なんたつてご領主様はほら、陛下の――』

陛下の、なんだというのだ。弟なのだから、というのなら、別に声をひそめる必要も話を切り上げる必要もなかつたはず。王子はス

ウェンバック大公の甥だし、別にコソコソしていたわけでもないだろう。

（……胃が痛い……かも……）

自分に関係のないことを考えてやり過ごしていたけれど、沈黙がひどく重い。いたたまれなくなつてうつむくと、王子の手が開いては閉じてを緩慢に繰り返しているのが見えた。

触れたいのに、触れられない、と、迷っているのだとヤヨイは直感した。

手をとつてあげたい。でも顔を合わせてからまだ一度も目を見てくれない王子に、どう声をかけていいかわからない。

旅の途中、再会したらなにを、どう話したらいいのか頭痛がするほど悩んだ。少なくとも開口一番は謝罪だな、と思っていた。王子がゆるしてくれるなら、いまの気持ちを正直に伝えたいとも。

なのになにも言うことができない。ここで会う予定ではなかったからヤヨイが戸惑っている、というだけではない。

想像の中で王子は、ヤヨイのしたことに腹を立てて怒っていたり、無責任な奴だと呆れ果てていたりした。だから謝ることばかり考えたのだ。

なのにいま、決して手の届くところに近寄らない王子からは、怒りも腹立ちも感じられなかった。憔悴しきつて、肩を丸めて、縮こまるように顔をそむけている。まるで、なにかから自分を守るみたいに。

（なにか、つて……？）

それを教えてほしかった。大公の死がそれほど衝撃だったなら、両親を亡くしたヤヨイと、親しい人を喪った苦しみを分かち合うためにここに來たのなら、話してほしい。

「――」

同じ。唐突に、思った。

そうだ、ランドボルグを飛び出す前日。逃げ出したヤヨイを中庭で捕まえたあのときも、王子はなにかにひどく打ちのめされて苦しんでいた。王子がなにを抱えているのか、どうしてあげればいいのかわからなくて、手に負えないそんな姿を見せた彼をヤヨイの心は拒絶した。

ヤヨイが十七日間、歩きながらも悩んでいたように、王子も、あの日のままの苦しみを抱えて過ごしていたのかもしれない。

ヤヨイにはゲランがいた。沈みそうになれば手をつかんで水面まで引き上げてくれる相棒。——もしかしたら王子は、ひとりで。

意を決しておそろおそろ近づくと、ぴくんと肩を揺らした王子の顔が強張った。そばに行くことすら拒まれたかとシヨックを受けたのは一瞬、ヤヨイはその表情を見て、引かれたように足を早めた。王子が、まるでこの世に独りきりみたいな、迎えがこないことを知っている迷子みたいな眼を、していたから。捕まえなければ消えてしまいそうに見えて。

「……っ」

知らず伸ばした手が、シャツの肘をつかむ。吐く息が白くかすむほどの寒さなのに、王子は上着を着ていない。冷たい布地に手を広げ、自分の体温を伝えようと掌を押しあてた。

いきなり身体に触れたヤヨイに驚いたのか、王子は弾かれたように顔を上げて目を睜った。それからくしゃつと顔を歪ませ、不意にヤヨイを腕の中に抱き込んだ。

そうされる予感があった、気がする。つらかったんだな、とも思うから、おとなしく、しがみつくように抱きしめてくる王子の胸に頬を寄せた。

大きな手で頭を抱え込まれていると、王子から花の香りがしない

ことに気づいた。ジェイルと同じその香りは、いつも彼のいる場所にあったのに。

ヤヨイの肩に顔を伏せ、時折首筋に頬をすり寄せる王子は、声を殺して泣いていた。気づかない振りを装いながら、ヤヨイはきゅつと唇をかねて胸の痛みをこらえた。

自分の立場や生き方に自信とプライドを持っているはずの男の人が、こんなに心細そうに、異邦人の娘にすがって泣いている。

王子はなにも話さなかった。心にのしかかるものの正体を、明かしてはくれない。十八日前も、いまも、ただヤヨイに苦しんでいる姿を見せている。でもあのときとちがって、迷う王子の手をとってあげたいと、自然に思えた。

ここでしか泣けなかったのかもしれないし、ただ慰められたかっただけかもしれない。わからないけれど、抱きしめるだけでいいのなら――それをヤヨイに、望むのなら。

ヤヨイは行き場のなかった手を、そっと冷たいシャツの背に回し、サラサラとした美しい髪の下にくぐらせた。一瞬、王子の身体が大きくふるえ、ヤヨイにからみつく腕の力が強まる。同じだけ抱き返してほしいと言われているようで、分け合う体温の高さにたまらなくなつた。

――大丈夫ですか……。

その一言が口をついて出そうになるのを、必死でこらえる。平気だ、とか、なんでもない、とか、どんな返事も王子に嘘をつかせることになる。同時に、大丈夫ですよ、と言ったらヤヨイが嘘をついてしまう。

ヤヨイを抱きしめているのに、ひとりで乗り越えようとする王子が切なくて、涙がこぼれた。それがシャツの胸に沁み込んで、王子

はぎこちなく伏せていた顔を上げる。

心もとない月の光が、窓辺に差し込むだけの暗い部屋。それでも、互いの頬が濡れていることはわかった。

睫毛の端に引っかけた雫をぬぐってあげたくて伸ばした指先が、王子の手につかまれる。そしていつかのように、掌に口づけられ、触れた唇がヤヨイの名まえを綴った。薄闇の中で漆黒に光る瞳がまっすぐにヤヨイを見つめても、臆せずに見つめ返した。

ヤヨイの背から離れた手が、冷えた涙ごと頬を包む。王子がゆっくりと屈みこんできて、ヤヨイはそつと目を閉じた。

まるでそうすることが定められていたように触れ合った唇は、静かな余韻を残してすぐに離れた。こっん、と額を合わせてかすかに息をつく王子が、平静を取り戻したとを感じる。ドキドキと鉄琴のように硬質な鼓動を刻む心臓は痛いほどでも、もっとパニくってしまうものだと思っていたから、取り乱さずにすんでほっとした。

恥ずかしかったけれど、穏やかで、自然なことだった。初めてのキスがこんなふうで、相手が王子で、よかった。

なにより、嫌われていないことを確かめられた気がして、そのことがうれしい。穏やかに話ができそうだと、ヤヨイは肩の力を抜いた。

だが一歩下がって身体を離れたとき、急にヤヨイの指先をつかまえていた王子の手に力がこもり、ヤヨイはぶつかるようにして王子の胸に引き寄せられた。

「わ——」

よろけた足元に氣を取られた隙に、大きくて荒れた手がすくうようにして顎をとり、明確な意思を持ってぐっと上を向かされる。

豹変した気配におののく唇に、王子は咬みつくように口づけてきた。

「……ッ！」

ヤヨイは咄嗟に肘を上げて王子の胸を押しつけようとした。けれど腰に回った王子の腕に抵抗は封じられ、顎をおさえられていて動けない。

上げかけた悲鳴も吸い取られ、押しつけられる唇に口を閉じることもできなかった。濡れた部分がこすれ合い生まれる音が、ヤヨイ

の羞恥と混乱を極限まで煽り立てて頭を真っ白に塗りつぶす。

「ん……！ ふ……っ」

口がふさがれていたから苦しくなっていて鼻で呼吸しようとする、息が詰まって頼りなくぐもった声がもれた。そのたびごとに唇は深く重なり、膝ががくがくとふるえた。突き飛ばししてでも逃げたいのに、どこにも力が入らない。鉄琴の独奏だった鼓動は、ありとあらゆる打楽器の競演と化して乱れ、内臓が全部心臓になったかと思っくらしいの騒音を響かせる。

ちがう、待って、とヤヨイは心の中で闇雲に叫んだ。波打ち際で溺れる子どもみたいに平衡感覚を失って、怖い、たすけてと無言のまま繰り返す。

ヤヨイの唇を味わうように吸ってから、王子は強張る頬に、耳の下にキスをする。そらしたのどに舌が這うのを感じたとき、大袈裟なほどに肩が揺れ——王子はぴたりと、動きをとめた。

「……、……っ」

王子の肩越しに天井を見上げるヤヨイの膝から力が抜け、冷たい石の床にぺたんと座り込んだ。

「だ、大丈夫か、ヤヨイ？」

それはあわてたように上ずっていても、くつきりと輪郭を保った、張りのある声。

ああ、いつもの王子だ。

そう思った途端、涙腺が緩んでぶわっと涙があふれ出た。

「も——もうッ、ひどい！ こわ、こわか……っ」

絞り出した声に非難を込めて訴えれば、ヤヨイの前に膝をついた王子は困ったように眉尻を下げ、夜目にも真っ赤に目元を染めた。

「あ……す、まん……」

謝るくせにその顔は、全然悪いと思っていない。なのに針のように尖って凶暴な気配が失せていたから、安堵してしまった。そして

ヤヨイは、声も出ないほど怖がらせた当の本人が差し伸べた腕につかまり、抱き上げられるがままにソファまで運ばれたのだった。

ソファで膝を抱えているうちに、段々と頭が冷えてきた。

酔っていた。そう、疲れてすきつ腹のところにボトル半分もワインを入れたせいで、ヤヨイは本当に酔っ払っていたのだ。涙とともにアルコールが流れ出て、代わりに理性が湧いて出た。ついでに少し頭が痛い。

ビギナーには衝撃的過ぎたキスと、泣き止んでしまった後の処理に困ったヤヨイは、いまこそ寝た振りをすべき時じやなかるうかと真剣に悩んだ。だって、どんな顔をしたらいいのかわからない。いたたまれなさを誤魔化すために涙をすすると、隣に座って黙っていた王子がついと立ち上がった。そしておもむろにベッドから毛布を引っぺがして、戻ってくる。背中からかぶった毛布ごとヤヨイの肩を抱き、反対の端を、抱えた膝の上に掛けてくれた。

酔いが醒めて寒さを感じていたヤヨイは、ふわふわに織られた羊毛の暖かさにほっとした。それから、同じ空気を吸っている、と思った。

さっきのように抱きしめられているわけでもないのに、両腕と毛布で作った檻の中に閉じ込められて、さっきよりずっと王子を近く感じる。王子の注意や関心が、全力でヤヨイに向かっているせいだ。ヤヨイはじわりとうつむいた。

なぜこんなことになったのだろう。おかしい。ここに至るまでの経緯を必死で思い返してみても、もう顔も見せてもらえないかもと泣くほど悩んだ昨晚と、呼吸もままならないような甘苦しさで満ち

たいまどがつかない。

なにか言ってくればいいのに。困り果てたヤヨイが恨めしく思うたとき、膝に乗せられていた手が頬に触れた。

軋む首を動かして振り向くと、目が合った王子が微笑んだ。いままで見たことがない、寛いで余裕のある笑み。

犬じゃなかった。ずっと王子を犬っぱいと思っていたけれど、これはおなかいっぱいで満足している肉食獣の顔だ。ヤヨイは顔が熱くなるのを感じた。その余裕の原因がああ抱擁とキスにあることがわかったから。

あの瞬間、確かにヤヨイは王子を受け入れた。確かめるように覗き込む目を、はつきりと見つめ返したのだ。

（——お酒、こわい！）

飲んだうえでの失敗談、というのを耳にするたび、なら飲まなければいいのにと冷めた目で考えたものだ。我が身で経験してこそわかる、どこか他人事のように思考と行動がさらさらと勝手に動く感覚。

とてつもなく大胆なことをした記憶に目を回すヤヨイの頬をなでる手がとまる。即座に緊張を強いられたヤヨイは、反射的に王子の唇を見やった。案の定、ふっと端を吊り上げたそれが、近づいてくる。

ドカドカ鳴る心臓の音に怯えて首をすくめ、ギリギリまで見えた。もう焦点が合わない、というところで目を閉じた。

一度目より長く、二度目より優しく。確かめるように触れていた唇が、あえかな音を残して離れていく。

三度目も、ヤヨイは逃げなかった。逃げられたけれど、逃げなかった。

細く細く息を吐いて緊張を逃すヤヨイの耳にもそっと口づけ、王

子が吐息だけで囁く。

「……好きだ」

ぎゅっと、胸の真ん中をつかまれた。熱くて真摯な気持ちの詰まった声。王の間の前で、騎士団の宿舎のポーチで、ヤヨイじゃないだれかに向けたようなものとは全然ちがった。

口説く機会を与えてくれないか、と言われたときのことを思い出して、ふと、もう謝罪は必要ないのかもしれない、と思った。王子が欲しがっているのは、もっとちがう言葉だと。それがわからないならここににいる意味はなくて、でも、ヤヨイはわかってしまったのだ。

あるとき一言も返せなかったことがずっと負い目で、それ以上に悲しかった。窒息して死にかけた恋心が可哀想で、不幸な自分に酔い痴れて、距離を詰めようとしてくれた王子を弾いたことを悔やんだ。

後悔と自己嫌悪をおんぶして、ゲランに手を引いてもらわなければ進めなかった旅が終わった場所に、王子はいた。

追ってきてはくれなかった。けれどヤヨイが目指したところで待っていてくれた。たとえそれが目的ではなくても、遅くなっても、人がかわったみたいにひどい顔をしていても、ちゃんとヤヨイに会いに来てくれたのだ。

——旅の終わりは、清々するもの。

天狗のお面を掲げた宿、女将の言葉が脳裏をよぎって、ヤヨイは心の中でうなずいた。清々しよう、きつちりと。

いつの間にか俯けていた顔を上げると、王子がじっとヤヨイを見ていた。叱られるのを覚悟している子どものような、それでいて逸る気を抑えているような表情で。

口説く前に三度もキスして、告白が最後。

ヤヨイはぷつと笑った。途端にショックを受けた顔をするから、あわてて王子の手を握った。

触れることでなにかを一気に飛び越えた。一緒に。ならばあのときの返事は決まっている。

指先の冷えた手を少しだけ見下ろし、今度は本当にうなずいた。
「はい」

言えた、小さいけれど、はつきり。

軽くなつた気持ちに励まされて振り上げば、だが王子はぱちぱちと目をしばたかせている。

「……え？」

奇妙な空白をはさんで落ちた低い声に、ヤヨイは目を丸くした。

（あ、あれ？　なんか……ダメだった？）

でも王子は宿舎のベンチで、確かにこう言った。好きだ、そこから始めたい、と。ならば告白は始まりで、きつとこれから——具体的にどうするのは知らないけど——口説かれるのだろうと受け止めたのだ。

よいいドンの掛け声が上がってから走り出し、ゴールを目指す。
うん、正しい。はず。

王子が既にゴールテープを切っていることなど、自分の持ったテープが切られたことなど露ほども思わず——そして、じゃあこの期に及んでどこがゴールだと思うのだ、という王子が悲鳴を上げそうな己の矛盾にもまったく気づかずに、経験値ゼロのヤヨイは「？」「でいっぱい頭をひねっていた。

眩しい、と感じたのは、ぽつかりと目が覚めた後だった。

緞帳のように吊り下げただけのカーテンの隙間から、一条の陽光が顔の上に落ちている。ヤヨイは咽喉の奥でぶつぶつと文句を言ってから、勢いをつけてつま先で毛布をはねのけた。そして予想外の寒さに、あわててもぞもぞと毛布の下に潜り込む。

しかし頭はしっかりと覚醒して、身も心もすっきりしていた。

よく寝た。ぐっすり。

心配していた二日酔いもないし、足の裏にじんと熱を持つ痛みもない。ふくらはぎが多少、筋肉痛か。ただ、やたらと咽喉が乾いていて、ヤヨイは部屋の真ん中のテーブルに載った水差しの誘惑に負けてベッドを下りた。

用意されていたコップは、まるで幼稚園児の歯磨きカップだ。小さくて持ちやすそうだけれど、重い水差しを傾けて得られる水の量は推して知るべし。少し悩んで、ヤヨイは水差しから直接水を飲んだ。がぶがぶと。

ぶはつと息をつき、顎まで滴る雫を拳でぬぐう。

なにかが身体の隅々まで満ちていた。溜まっていたなにかが、身体の中から抜けきったというべきか。

部屋の中を見回した。昨夜と同じ調度類は、かわらぬ配置でそこにある。相変わらずしんと静かで火の気はなく、臓腑に染み渡った水の冷たさに、ヤヨイは軽く身震いした。

よそよそしい、見知らぬ城の見知らぬ部屋。でもここでなにが終わり、なにが始まったか、ヤヨイはちゃんとわかっている。

「……うはあああつ!!」

か細い奇声を発し、光速で脳裏に甦った様々なものを頭を振って打ち消した。不思議なことに、深く触れ合った唇の感触よりも、腕の中に緩く抱きとられたときのことのほうが忘れられなかった。

熱くなつた頬を両手でおさえ、かゆくなつた腹に力を込めて、冷静に冷静に、と自分に言い聞かせる。

別に間違つたことをしたわけではない。大丈夫。

室内が薄暗いからいけないのだ、と思い立ち、窓辺に寄つてカーテンをタッセルでまとめた。すると眼下に、小さな町が広がっているのが見えた。ガラスに額をつけて覗けば、ほとんど崖の上にこの部屋が位置することがわかる。

あれがスウェンバックの町。黒い屋根が連なつて、ところどころに大樹が植わっている。朝食の時間にずれているのか、それとも朝は火を使わない習慣なのか、煮炊きの煙を上げているのは数ヶ所のみだ。

今日はアサヌマさんに会って話をしたら、町に行ってみよう。

「王子、一緒に行つてくれるかな……」

知らずつぶやいた声が自分の耳に届いたら、きゅっと胸が絞られるように切なくなった。

これまでと違う距離感で囁かれる、低い声。ヤヨイを見つめていることを隠さない、熱い視線。無遠慮にヤヨイの所有権を主張する、自分勝手な指先。でもその全部が、どうしていいかわからないくらい、うれしかった。

これからはいつでも、あのひとを望んでいいのだ。

「——あああああつ!!」

ヤヨイは頭を抱えて悶えた。

朝の身支度には、もう少し時間がかかりそうだった。

ガラム室長が呼びに来てくれたとき、ヤヨイはワンピースの最後のボタンをとめたところだった。あわてて髪に櫛を入れ、ブーツの紐を結ぶ間は待たせてしまった。

城主の使う小食堂という場所へ案内されながら見上げた室長も、どこか吹っ切れた顔をしていた。相変わらず紺色の上着を羽織っていて、その理由を問いたかったけれど、胸をときめかせつつやめておいた。

「ここだ。すぐ戻るから待っている」

広く廊下の中ほどで室長が一枚の扉を開け、ヤヨイはうなずいてそこへ入った。

仕切りが何段にも入った大きなガラス窓から、いっばいに朝日が差し込む明るい部屋だ。天井が高く、広さは二十畳ほどだろうか。その半分からこちらにテーブルセットがあり、もう半分には絨毯が敷かれソファが鎮座している。

暖炉はないがストーブが焚かれ、室内もほどよい温かさだった。昨日今日でぐつと気温が下がったのは確かなようで、『外』の同じ時季より冷え込むものなのかもしれない。

だれもいない部屋でどこにいればいいかわからず、ヤヨイはなんとなくストーブに歩み寄ってそばにしゃがんだ。おばあちゃんのあるような調理兼用ではなく、もっと大きくて、全体的に丸みのある優美な装飾が施されている。黒いアイアンワークの蔦の葉など、触ってみたくなるようだ。でもきつと熱いだろうから、自重。

鉄の蓋の隙間から、赤々と燃える火が見える。それにじっと見入っていたら、ガチャンとドアの開く音がした。室内外で連動する形

の門錠なので、いちいち大仰に響いてびっくりする。

ダルマのように丸まったまま固まったヤヨイと目が合ったのは、問題の人物だった。今日はシャツの上に短くて深い苔色の上着を着ている。チヨコレート色の髪が朝日にキラキラして、そういえば私服らしいものを見るのが初めてだったことを思い出しながら、姿勢よく凛々しい姿に見惚れた。

「そんなところで、どうした」

目を細めて小さく笑う王子は普段通りで——いや、決してそれが日常的に見せていた表情というわけではないのだが、とにかく昨夜の出来事にうろたえている風ではない。

ヤヨイは急に、自分だけがあたおたしていることが悔しくなった。でも平然としてみせるほどの余裕はなくて、まして笑顔をつくれるほど表情筋も鍛えていない。必然的に、しかめ面しか選べなかった。「……おはようございます、王子」

すくつと立ち上がり、何事もなかったように窓の外に目を向ける。そこは日当たりがいいばかりで殺風景だが、あんなカッコいい人を視界に入れずにすむなら問題ない。見惚れ続けて目がつぶれたりしたら大変だし、それはそれで幸せかも、なんて一瞬でも考えてしまった自分が惨めだ。

石の床を踏む足音が、軽やかに近づいてくる。そのたびごとに心臓の音も高くなり、どうか光のせいで顔が赤いと思われそうですようにとヤヨイはますます顔をしかめた。

「おはよう。よく眠れたか？」

さらりと髪を耳にかけられ、頬をかすめた指は唇の端に触れて、やわらかく爪を立ててから離れた。

おかげでヤヨイの頭の中は思い出してはいけないこといっぱいになり、誤魔化しようがないほど顔が熱くなる。

（なん、なんでそういう……っ！）

狼狽を怒りにすり替えてキッと睨み上げると、王子はじつとこちらを見つめていた。いつも黒に近いほど深い紺色の瞳に、かすかな藤色が溶け混じっている。

綺麗だった。人間の目の色だなんて信じられない、宝石みたいで。「俺は、目が覚めて全部夢だったと言われるのが怖くて、ずっと起きていた。……どうせなら、おまえの寝顔を見ていればよかったな。きつと夜が明けるのを、じりじりと待たずにすんだ」

バカみたいにひとの目玉に見入っていたせいで、ヤヨイはそれを正面からばっちり受け止めてしまった。

内緒話のように囁く声は少しかすれて、照れくさそうな微笑みとひどくアンバランスだった。なぜアンバランスだと感じるのかといえば、それがこんな健全な朝の食堂で聞くべき声音でないことを、既に学習済みだからにほかならない。

これか。これが、口説くということなのか。

泣きそうなほど恥ずかしくてうつむいたヤヨイは、再び響いた門錠のガチャンという音に、またしても驚いて顔を上げた。

「お、いたいた。ちゃんと起きられたか」

「あっ！ ゲラン！」

細く開けた扉の隙間から滑り込んできたのは、ゲランの大きくて逞しい体躯だった。

何日も離れていたみたいに嬉しくなつて、それから心細かったことを思い出したヤヨイは、迷わず足を踏み出して彼に駆け寄った。お日様みたいに笑ったゲランが腕を広げ、その首にかじりついてしがみつき、ぎゅっと抱きしめてくれる腕にほっとした。

「どこにいたの？ 急にいなくなるから心配したじゃない！」

「はは、悪かった」

大して悪いとも思っていないさそうに言って、顎の先をヤヨイの頭にぐりぐりと押しつける。それから軽々とヤヨイを片腕に抱き上げて、目線を合わせた。

「昨夜は冷え込んだから、またおまえが毛布を蹴飛ばして腹出してんじゃないかと気が気じゃなかったぜ」

「ちょ、やめてよ!」

実際、寝相のおとなしいほうでない自覚はあるけれど、なにもいまそんなこと言わなくても。

あわててゲランの口をふさごうとして、はたと彼の着ている服に目を止める。

いつもの着古した生成りのシャツにズボンじゃない。襟のピンとした真つ白なシャツに濃いグレーの上着、同じ色のズボン。それ以上の飾りも派手さもないが、いわゆるきちんとした服装だった。

「……なに、その恰好。そんな服、持ってたっけ?」

「怖いにぃさんがいるんでな、体裁くらい繕っとくつつつか」

「殊勝な振りはやめろ、気色悪い。それより奥へ行け」

重低音の美声に押されたゲランが身じろぎして、ヤヨイはゲランの肩越しに室長の姿を見つけた。少しだけ低いところから金緑色の目がヤヨイを見上げている。

「随分とそいつに懐いたな」

おかしそくに笑って、室長はゲランの脇をすり抜けた。子どもっぽいところを目撃されたヤヨイは、腹いせにゲランの頬をつねった。肩から紺色の上着を羽織っていた室長は、それを脱いでソファに腰を下ろす。

「おまえが気にする相手は、俺じゃないだろう」

ちらりと視線を流した先をつられて見やれば――グレイヴ王子が、愕然とした顔で凍りついていた。

「よっ、久しぶりだな」

いたって軽い調子でゲランは笑いかけ、王子は反射的にむっと口をへの字に曲げて立ち直った。

「その手を離せ」

「顔色もよさそうだ」

「離せと言っている！」

王子はずかしくと早足で歩み寄るなり、ヤヨイの二の腕をつかもうと手を伸ばす。だがゲランに軽くかわされて、端正な面差しに凶悪な色を浮かべた。

「……やる気か、デーンジズ」

「おいおい、俺はその道のぶろだぜ？ 下手なことは言わないほうがいい」

みるみるうちに剣呑な空気が霧のように立ち込めて、間に挟まったヤヨイは啞然とした。

「また起き上がれないほど叩きのめされたいのか？ ヤヨイの前で？」

「黙れ！」

そして王子の右手が左の腰に伸びてヤヨイは青ざめたが、王子はぴたりと動きをとめた。

本気で斬りかかるつもりだったことはヤヨイにもわかった。けれど、そこにあるべきものがなかったのだ。咄嗟に見やった王子の人差し指には、銀の指輪もない。ただずっと嵌めていたことをうかがわせる跡があるだけ。

「——くそっ！」

王子が低く罵声を吐き、ゲランはぶつと噴き出した。

「まったく、恩知らずな奴だな。ここは感謝と労いの言葉を滔々と述べる場面だろ」

「だれがおまえなんかに！」

「そこらへんしておけ。給仕が廊下で竦み上がってるぞ」

ゆつたりとソファから見物していた室長は、紫煙を上げるタバコ

——というより細い葉巻——を挟んだ指で戸口を差した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4615k/>

over again

2011年8月22日09時51分発行